

吾輩は猫である

夏目漱石

【テキスト中に現れる記号について】

：ルビ

（例）吾輩わがはいは猫である

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）一番どうあく癡悪な種族であつた

：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、 J I S X 0 2 1 3 の面区点番

号または U n i c o d e、底本のページと行数）

（例） 謹

□：アクセント分解された欧文をかこむ

（例）〔 Q u i d a l i u d e s t m u l i

ernisiamici tiae & inim  
ica]

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照  
してください

http://www.aozora.gr.jp  
/accent\_separation.html

吾輩<sup>わがはい</sup>は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当<sup>けんとう</sup>がつかぬ。何でも薄暗

いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番<sup>どうあく</sup>寧<sup>どう</sup>悪な種族であつたそうだ。この書生と  
いうのは時々我々を<sup>つかま</sup>捕えて煮<sup>に</sup>て食うという話である。  
しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐  
しいとも思わなかつた。ただ彼の<sup>てのひら</sup>掌に載せられてス

ーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあ  
ったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の  
顔を見たのがいわゆる人間というものの見始みはじめであろ  
う。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つて  
いる。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつる  
つるしてまるで薬缶やかんだ。その後猫こにもだいぶ逢あつた  
がこんな片輪かたわには一度も出で会くわした事がない。のみ

ならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙けむりを吹く。どうも咽むせぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草たばこというものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏うちでしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが



無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底とうてい助からないと

思っている、どさりと音がして眼から火が出た

。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんお

った兄弟が一疋びきも見えぬ。肝心かんじんの母親さえ姿を隠し

てしまった。その上いま今までの所とは違って無暗むやみに明

るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも  
容子ようすがおかしいと、のそのそ這はい出して見ると非常に  
痛い。吾輩は藁わらの上から急に笹原の中へ棄てられ  
たのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな  
池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかる  
うと考えて見た。別にこれという分別ふんべつも出ない。し

ばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと  
考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやって見たが  
誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つ  
て日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きた  
くても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食<sup>く</sup>  
物の<sup>もの</sup>ある所まであるこうと決心をしてそろりそろり  
と池を<sup>ひだ</sup>左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そ

こを我慢して無理やりに這<sup>は</sup>つて行くとようやくの事

で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つたら

、どうにかなると思つて竹垣の崩<sup>くず</sup>れた穴から、とあ

る邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし

この竹垣が破れていなか<sup>ろ</sup>ったなら、吾輩はついに路

傍<sup>ほう</sup>に餓<sup>が</sup>死<sup>し</sup>したかも知れ<sup>ろ</sup>のである。一樹の蔭とはよ

く云<sup>い</sup>つたものだ。この垣根の穴は今日<sup>こんにち</sup>に至<sup>いた</sup>るまで吾

輩が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になっている

。さて邸やしきへは忍び込んだもののこれから先どうして

善いいか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る

、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一

刻の猶予ゆうよが出来なくなつた。仕方がないからとにかく

く明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今

から考えるとその時はすでに家の内に這入っておつ

たのだ。ここで吾輩は彼の書生か以外の人間を再び見

るべき機会に遭遇そうぐうしたのである。第一に逢ったのが

おさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で

吾輩を見るや否やいきなり頸筋くびすじをつかんで表へ抛ほうり

出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶつ

て運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いの

にはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの

すぎ

隙を見て台所へ這はい上あがった。すると間もなくまた投

げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い

上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返

したのを記憶している。その時におさんと云う者は

つくづくいやになった。この間おさんの三馬さんまを偷ぬすん

でこの返報をしてやってから、やっつかえと胸の痞つかえが下り

た。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに

この家の主人が騒々しい何だといいいながら出て来

た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの

宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上

って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を

撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、や

がてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入

ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。



下女は口惜しくやそうに吾輩を台所へ抛ほうり出した。かくして吾輩はついにこの家うちを自分の住家すみかと極きめる事にしたのである。

吾輩の主人は滅多めったに吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であ

るかのごとく見せている。しかし実際はうちのものが  
がというような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に  
彼の書齋を覗のぞいて見るが、彼はよく昼寝ひるねをしている  
事がある。時々読みかけてある本の上に涎よだれをたらし  
ている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色たんこうしよくを帯びて弾力  
のない不活澆ふかつぱつな徴候をあらわしている。その癖に大  
飯を食う。大飯を食った後あとでタカジヤスターゼを飲

む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽らくなものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は

友達が来る度たびに何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳はね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日こんにちに至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから

出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍そばにいる

事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の

膝ひざの上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背せなか中

に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではな

いが別に構い手がなかったからやむを得るのである。

その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃めしびつの上、夜は炬燵こたつ

の上、天氣のよい昼は縁側えんがわへ寝る事とした。しかし

一番心持の好いのは夜よに入いつてここのうちの小供の  
寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この  
小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ  
床へ入はいつて一ひと間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間  
に己おのれを容いるべき余地を見出みいだしてどうにか、こうに  
か割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒さ  
ますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さ

い方が質たちがわるい——猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人はかなら必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指ものさしで尻しりぺたをひどく叩たたかれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等わがままは我儘なものと断言せざるを得ないようにな

った。ことに吾輩が時々同衾どうきんする小供のごときに至

ごんごどうだん

つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さ

にしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛ほうり出したり、へ

つついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で

少しでも手出しをしようものなら家内かない総がかりで追

い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を

磨といだら細君が非常に怒おこってそれから容易に座敷へ



入れない。台所の板の間で他が顫ひとふるえていても一向平いっこう

気なものである。吾輩の尊敬する筋向すじむこうの白君などは

逢あう度毎たびごとに人間ほど不人情なものはないと言つてお

らるる。白君は先日玉のような子猫を四足産うまれた

のである。ところがそこの家うちの書生が三日目にそい

つを裏の池へ持って行つて四足ながら棄てて来たそ

うだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上

どうしても我等猫族ねこぞくが親子の愛を完まったくして美しい

家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅そうめつせね

ばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う

。また隣りの三毛君みけなどは人間が所有権という事を

解おおいしていないといつて大に憤慨おおいしている。元来我々

同族間では目刺めざしの頭でも鰯ぼらの臍へそでも一番先に見付け

たものがこれを食う権利があるものとなっている

。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて

善<sup>よ</sup>いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫<sup>ごう</sup>もこの

觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼

等のために掠奪<sup>りやくだつ</sup>せらるるのである。彼等はその強力

を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪<sup>うば</sup>つてすま

している。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主

人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、

こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である

。ただその日その日がかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

わがまま

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何

といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖

にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所で

こうかせんせい

あだな

後架先生と渾名をつけられているにも関せず一向平

いっこう

気なもので、やはりこれは平たいらの宗盛むねもりにて候そうろうを繰返し

ている。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいであ

る。この主人がどういう考になつたものか吾輩の住

み込んでから一月ばかり後のちのある月の月給日に、大

きな包みを提さげてあわただしく歸つて来た。何を買

つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマン  
という紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心  
と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎  
日毎日書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている

。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたも  
のやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くな  
うま  
いと思つたものか、ある日その友人で美学とかをや

っている人が来た時に下の<sup>しも</sup>ような話をしているのを聞いた。

「どうも甘く<sup>うま</sup>かけないものだね。人を見ると何で

もないようだが自ら筆をとって見ると今更の<sup>いまさら</sup>ように

むずかしく感ずる」これは主人の述懐<sup>じゅっかい</sup>である。なる

ほど<sup>いつわ</sup>詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡<sup>めがね</sup>越に主人

の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけない



さ、第一室内の想像ばかりで画えがかける訳のもので

はない。昔むかし以太利イタリーの大家アンドレア・デル・サル

トが言った事がある。画をかくなら何でも自然その

物を写せ。天に星辰せいしんあり。地に露華ろかあり。飛ぶに禽とり

あり。走るに獣けものあり。池に金魚あり。枯木こぼくに寒鴉かんああ

り。自然はこれ一幅の大活画だいかつがなりと。どうだ君も画

らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗むやみに感心している。金縁の裏には嘲あざけるような笑わらいが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側えんがわに出て心持善く昼ひ寝るねをしていたら、主人が例になく書斎から出て来て

吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覺さめて何をしているかと一分いちぶばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極きめ込んでゐる。吾輩はこの有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲や擻ゆせられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸あくびがしたく

てたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執とっているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛しん棒ぼうしておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩いろどつている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といい毛並と  
いい顔の造作といいあえて他の猫に勝まさるとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今

吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、

どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯ペルシャ

産さんの猫のごとく黄を含める淡灰色に漆うるしのごとき斑入ふい

りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑う

べからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見

ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ

ば褐色とびいろでもない、さればとてこれらを交ぜた色でも

ない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方  
のない色である。その上不思議な事は眼がない。も  
っともこれは寝ているところを写生したのだから無  
理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝  
ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそ  
かにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれでは  
しようがないと思った。しかしその熱心には感服せ

ざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりた  
いと思つたが、さつきから小便が催うしている。身<sup>み</sup>  
内<sup>うち</sup>の筋肉はむずむずする。最早<sup>もはや</sup>一分も猶<sup>ゆうよ</sup>予が出来ぬ  
仕儀<sup>しぎ</sup>となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ  
存分<sup>だい</sup>のして、首を低く押し出してあゝあと大なる欠  
伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしく  
していても仕方がない。どうせ主人の予定は打<sup>ぶ</sup>ち壊<sup>こ</sup>

わしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足<sup>た</sup>そうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを搔<sup>か</sup>き交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴<sup>どな</sup>つた。この主人は人を罵<sup>ののし</sup>るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、無暗<sup>むやみ</sup>に馬鹿野郎呼<sup>よ</sup>わ



りは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の背せ中へ乗

る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵まんばも甘んじ

て受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くし

てくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎

とは酷ひどい。元来人間というものは自己の力量に慢じ

てみんな増長している。少し人間より強いものが出

て来て窘いじめてやらなくてはこの先どこまで増長する

か分らない。

わがまま

我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園ちやえんがある。広くは

ないが瀟洒さつぱりとした心持ち好く日の当あたる所だ。うちの

小供があまり騒いで樂々昼寝の出来ない時や、あま

り退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつで

もここへ出て浩然こうぜんの気を養うのが例である。ある小

春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯ちゅうはん後快

よく一睡した後のち、運動かたがたこの茶園へと歩ほを運

ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の

杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に

大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づく

のも一向心付かざるごとく、また心付くも無頓着な

るごとく、大きな鼾いびきをして長々と体を横よこえて眠つて

いる。他の庭内ひとに忍び入りたるものがかくまで平氣

に睡ねむられるものかと、吾輩は窃ひそかにその大胆なる度

胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。

わずかに午ごを過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の

皮膚の上に抛なげかけて、きらきらする柔毛にこげの間より

眼に見えぬ炎でも燃え出<sup>い</sup>ずるように思われた。彼は

猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有し

ている。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念

と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立<sup>ちよりつ</sup>して余念

もなく眺<sup>なが</sup>めていると、静かなる小春の風が、杉垣の

上から出たる梧桐<sup>ごとう</sup>の枝を軽<sup>かろ</sup>く誘つてばらばらと二三

枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真<sup>まん</sup>

まる

丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人

間の珍重する琥珀こはくというものよりも遥はるかに美しく輝

いていた。彼は身動きもしない。双眸そうぼうの奥から射る

ごとき光を吾輩の矮小わいしょうなる額ひたいの上にあつめて、御め、

えは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑いや

しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫ひしぐべ

き力が籠こもつているので吾輩は少なからず恐れを抱いだい

た。しかし挨拶あいさつをしないと険呑けんどんだと思つたから「吾

輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を

装よそおつて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はた

しかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大におおい

輕蔑けいべつせる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあきら

あ。ぜん全てえどこに住んでるんだ」随分傍若無人ぼうじやくぶじんであ

る。「吾輩はここの教師の家うちにいるのだ」「どうせ

そんな事だろうと思つた。いやに瘠やせてるじゃねえ

か」と大王だけに気焰きえんを吹きかける。言葉付から察

するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその

膏切あぶらぎつて肥満しているところを見ると御馳走を食つ

てるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そ

う云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた

。「己おれあ車屋の黒くろよ」昂然こうぜんたるものだ。車屋の黒



はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車  
屋だけに強いばかりでちつとも教育がないからあま  
り誰も交際しない。同盟敬遠主義の<sup>まと</sup>的になっている  
奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じ  
を起すと同時に、一方では少々<sup>けいぶ</sup>輕侮の念も生じたの  
である。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを  
<sup>ため</sup>試してみようと思つて左<sup>さ</sup>の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極きまっていらあな。御めえのうち

の主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強だいぶそうだ。車屋にいと

御馳走ごちそうが食えろと見えるね」

「何なにおれあなんざ、どこの国へ行つたつて食い物に

不自由はしねえつもりだ。御めえちやばたけなんかも茶畠ちやばたけばか

りぐるぐる廻つていねえで、ちつと己おれの後あとへくつ付  
いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違える  
ように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家うちは教師の方  
が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「笹棒べらぼうめ、うちなんかいくら大きくたって腹たの足し  
になるもんか」

彼は<sup>おおいかんしゃく</sup>大に肝癰に障つた様子で、寒竹<sup>かんちく</sup>をそいだよう

な耳をしきりとぴく付かせてあららかに立ち去った。

吾輩が車屋の黒と知己<sup>ちぎ</sup>になつたのはこれからである。

その後<sup>ご</sup>吾輩は度々<sup>たびたび</sup>黒と邂逅<sup>かいこう</sup>する。邂逅<sup>ご</sup>する毎に彼

は車屋相当の気焰<sup>きえん</sup>を吐く。先に吾輩が耳にしたとい

う不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶壺ちやばたけの中で寝

転ころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつも

の自慢話じまんばなしをさも新しそうに繰り返したあとで、吾

輩に向つて下しものごとく質問した。「御めえは今まで

に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発

達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底とうてい

黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、こ

の問に接したる時は、さすがに極きまりが善よくはなかつ

た。けれども事實は事實で詐いつわる訳には行かないから、

吾輩は「実はとろうとろうと思つてまだ捕とらない

」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つっぱつてい

る長い髭ひげをびりびりと震ふるわせて非常に笑つた。元來

黒は自慢をする丈だけにどこか足りないところがあつて、

彼の気焰きえんを感心したように咽のど喉をころころ鳴らして

謹聴していればはなはだ御しぎよやすい猫である。吾輩

は彼と近付になつてから直すぐにこの呼吸を飲み込んだ

からこの場合にもなまじい己おのれを弁護してますます

形勢をわるくするのも愚ぐである、いつその事彼に自

分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若しくはない

と思案を定さだめた。そこでおとなしく「君などは年が

年であるから大分だいぶんとつたろう」とそそのかして見た。

果然彼は牆壁しょうへきの欠所けつしょに呐喊とっかんして來た。「たんとでも

ねえが三四十はとつたろう」とは得意氣なる彼の答

であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は

一人でいつでも引き受けるがいたちいつてえ奴は手に

合わねえ。一度いいたちちに向つて酷ひどい目に逢あつた」「

へえなるほど」と相槌あいづちを打つ。黒は大きな眼をぱち

つかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主



が石灰いしばいの袋を持って椽えんの下へ這はい込んだら御めえ大

きない、たちの野郎が面喰めんくらって飛び出したと思ひねえ」

「ふん」と感心して見せる。「いたち、つてけども何

鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生ちきしょうつて気で

追っかけてとうとう泥溝どぶの中へ追い込んだと思ひね

え」「うまくやったね」と喝采かつさいしてやる。「ところ

が御めえいざつてえ段になると奴め最後さいごつ屁ぺをこき

やがった。臭えの臭くねえのってそれからってえも

のはいた、ちを見るに胸が悪くならあ」彼はここに至

ってあたかも去年の臭気を今いまなお感ずるごとく前足

を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々

気の毒な感じがする。ちつと景気を付けてやろうと

思つて「しかし鼠なら君に睨にらまれては百年目だろう。

君はあまり鼠を捕とるのが名人で鼠ばかり食うものだ

からそんなに肥って色つやが善いのだろう」黒の御  
機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果  
を呈出した。ていしゆつ彼は喟然きぜんとして大息たいそくしていう。「考かんげ  
えるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとったって――

――てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人  
のとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ持って  
行きやあがる。交番じゃ誰が捕とったか分らねえから

そのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。うちの亭

主なんか己おれの御蔭でもう壺円五十錢くらい儲もうけてい

やがる癖に、碌ろくなものを食わせた事もありやしねえ。

おい人間てものあ体ていの善いい泥棒だぜ」さすが無学の

黒もこのくらいの理窟りくつはわかると見えてすこぶる怒おこ

った容子ようすで背中の毛を逆立さかだてている。吾輩は少々気

味が悪くなつたから善い加減にその場を胡魔ごま化して

うち

家へ歸った。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以外の御馳走を<sup>あさ</sup>獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食うよりも寝ていた方が氣樂でいい。教師の家<sup>うち</sup>にいと猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至つては到底<sup>とうてい</sup>水

彩画において望のぞみのない事を悟ったものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

○○と云う人に今日の会で始めて出逢であった。あの人

は大分放蕩だいぶほうとうをした人だと云うがなるほど通人つうじんらしい

風采ふうさいをしている。こう云う質たちの人は女に好かれるも

のだから○○が放蕩をしたと云うよりも放蕩をする

べく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あ

の人の妻君は芸者だそうだ、羨ましい事である。<sup>うらや</sup>元

来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので

到底卒業する氣づかいはない。しかるにも関せず

、自分だけは通人だと思つて済すましている。料理屋の

酒を飲んだり待合へ這はい入るから通人となり得るとい

う論が立つなら、吾輩も一廉ひとかどの水彩画家になり得る

理窟りくつだ。吾輩の水彩画のごときはかかない方がまし

であると同じように、愚昧ぐまいなる通人よりも山出しの

大野暮おおやぼの方が遙はるかに上等だ。



通人論つうじんろんはちよつと首肯しゅこんしかねる。また芸者の妻君

を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとくじちめい自知の明あるにも関せずその自惚心うぬぼれしんはなかなか抜けなない。なかふつか中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を

書いている。

昨夜は僕が水彩画をかい<sup>ゆうべ</sup>て到底物にならんと思つて、

そこらに抛<sup>ほう</sup>つて置いたのを誰かが立派な額にして欄<sup>らん</sup>

間<sup>んま</sup>に懸<sup>か</sup>けてくれた夢を見た。さて額になつたところ

を見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。

これなら立派なものだと独<sup>ひと</sup>りで眺め暮らしていると、

夜が明けて眼が覚めてやはり元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつてしまつた。

主人は夢の裡うちまで水彩画の未練を背負しよつてあるいていると見える。これでは水彩画家は無論夫子ふうしの所いわ謂ゆる通人にもなれない質たちだ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡めがねの美学

者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈へき

頭とう第一に「画えはどうかね」と口を切った。主人は平

気な顔をして「君の忠告に従って写生を力つとめている

が、なるほど写生をすると今まで気のつかかなかつた

物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ

。西洋では昔むかしから写生を主張した結果今日こんにちのよう

に発達したものと思われる。さすがアンドレア・デ

ル・サルトだ」と日記の事はおく、びにも出さないで、またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれは出鱈目でたらめだよ」と頭を搔かく。「何が」と主人はまだ謊いつわられた事に気がつかない。「何がって君のしきりに感服しているアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕のちよつと捏造ねつぞうした話だ。君がそんなに真面目まじめに信じようとは思わ

なかつたハハハハ」と大喜悦の体である。吾輩は椽

側でこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる

事が記しるさるるであらうかと予め想像せざるを得な

あらかじ

つた。この美学者はこんな好加減いいな事を吹き散らし

て人を担かつぐのを唯一の楽たのしみにしている男である。彼は

アンドレア・デル・サルト事件が主人の情線じょうせんにいか

なる響を伝えたかを毫まじうも顧慮せざるもののごとく得

意になつて下の<sup>しも</sup>のような事を饒舌<sup>しやべ</sup>つた。「いや時々<sup>じよ</sup>冗

談<sup>うだん</sup>

を言う<sup>ま</sup>と人が真に受けるので大に滑稽<sup>おおい</sup>的美感<sup>こっけいてき</sup>を挑<sup>ちよ</sup>

撥<sup>うはつ</sup>

するのは面白い。せんだつてある学生にニコラス

・ニツクルベーがギボンに忠告して彼の一世の大著

述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文  
で出版させたと言つたら、その学生がまた馬鹿に記

憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の

話した通りを繰り返したのは滑稽であつた。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであつたが、皆熱心にそれを傾聴しておつた。それからまだ面白い話がある。せんだつて或る文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファールの話はなしが出たから僕はあれは歴史小説うちの中で白眉はくびである。ことに女主人公が死ぬところきは鬼気き人を襲うようだと評したら、僕の向



うに坐っている知らんと云つた事のない先生が、  
うそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこ  
の男もやはり僕同様この小説を読んでおらないとい  
う事を知つた」神経胃弱性の主人は眼を丸くして問  
いかけた。「そんな出鱈目でたらめをいってもし相手が読ん  
でいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くあざむのは  
さしつかえ  
差支ない、ただ化ばけの皮かわがあらわれた時は困るじやな

いかと感じたもののごとくである。美学者は少しも動じない。「なにその時ときや別の本と間違えたとか何とか云うばかりさ」と云ってけらけら笑っている

。この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから画えをか

いても駄目だという目付で「しかし冗談じょうだんは冗談だが

画というものは実際むずかしいものだよ、レオナル

ド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみしみを写せ

と教えた事があるそうだ。なるほど雪隠せついんなどに這入はい

って雨の漏る壁を余念なく眺めていると、なかなか

うまい模様画が自然に出来ているぜ。君注意して写

生して見給えきつと面白いものが出来るから」「ま

た欺<sup>だま</sup>すのだろう」「いえこれだけはたしかだよ。実

際奇警な語じやないか、ダ・ヴィンチでもいいそう  
な事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」と主  
人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生は  
せぬようだ。

車屋の黒はその後<sup>いびつ</sup>跂<sup>いびつ</sup>になつた。彼の光沢ある毛は  
漸々<sup>だんだん</sup>色が褪<sup>さ</sup>めて抜けて来る。吾輩<sup>こはく</sup>が琥珀よりも美し

いと評した彼の眼には眼脂めやにが一杯たまっている。こ

とに著るしく吾輩の注意を惹ひいたのは彼の元氣の消

沈とその体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶ちや

園えんで彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら

「いたちの最後屁さいごっぺと肴屋さかなやの天秤棒てんびんぼうには懲々こりこりだ」とい

つた。

赤松の間に二三段の紅こうを綴つた紅葉こうようは昔むかしの夢の

ごとく散つてつくばいに近く代る代る花卉をこぼし

こうはく

さざんか

た紅白の山茶花も残りなく落ち尽した。三間半の南

向の椽側に冬の日脚が早く傾いて木枯こがらしの吹かない日

はほとんど稀まれになつてから吾輩の昼寝の時間も狭めせば

られたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠こもる

。人が来ると、教師が厭いやだ厭だという。水彩画も滅

多にかかない。タカジヤスターゼも機能がなないとい  
つてやめてしまった。小供は感心に休まないで幼稚  
園へかよう。帰ると唱歌を歌つて、毬まりをついて、時  
々吾輩を尻尾しっぽでぶら下げる。

吾輩は御馳走ごちそうも食わないから別段肥ふとりもしないが、  
まずまず健康で跛びつゝにもならず、その日その日を暮し  
ている。鼠は決して取らない。おさんは未いまだに嫌きらい

である。名前はまだつけてくれないが、欲をいって  
も際限がないから生涯しょうがいこの教師の家うちで無名の猫で終  
るつもりだ。

二

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらち



よつと鼻が高く感ぜらるるのはありがたい。

元朝早々主人の許もとへ一枚の絵端書えはがきが来た。これは

彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤

下部を深緑ふかみどりりで塗つて、その真中に一の動物が蹲うず

踞くまつているところをパステルで書いてある。主人は

例の書斎でこの絵を、横から見たり、豎たてから眺めた

りして、うまい色だなという。すでに一応感服した

ものだから、もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、  
豎から見たりしている。からだを拗ねじ向  
けたり、手を延ばして年寄が三世相さんぜそうを見るようにし  
たり、または窓の方へむいて鼻の先まで持つて来た  
りして見ている。早くやめてくれないと膝ひざが揺れて  
険呑けんのんでたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇はげ  
しくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をか

いたのだらうと云<sup>い</sup>う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寝ていた眼を上品に半<sup>なか</sup>ば開いて、落ちつき払って見ると紛<sup>まぎ</sup>れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア・デル・サルトを極<sup>き</sup>め込んだものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もち

やんと整つて出来ている。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中うちでも他ほかの猫じやない吾輩である事が判然とわかるように立派に描かいてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしめやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにし

ても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底とうてい吾輩猫属ねこぞくの言語を解し得るくらいに天の恵めぐみに浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断っておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに輕侮の口調をもつて吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間

の糟かすから牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造

されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで  
高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもある  
うが、はたから見てあまり見つともいい者じゃない。  
いくら猫だって、そう粗末簡便には出来ぬ。よそ目  
には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の特  
色などはないようであるが、猫の社会に這はい入って見

るとなかなか複雑なもので十人十色といろという人間界の

ことば

語はそのままここにも応用が出来るのである。目付

でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違う。

髻ひげの張り具合から耳の立ち安排あんばい、尻尾しっぽの垂れ加減に

至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好

き嫌い、粹すいぶすい無粹かずの数を悉つくして千差万別と云つても

差支えないくらいである。そのように判然たる区別

が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいって、空ばかり見ているものだから

、吾輩の性質は無論相貌そうぼうの末を識別する事すら到底

出来ぬのは気の毒だ。同類相求むとは昔むかしからある

ことば  
語だことばそうだがその通り、餅屋もちやは餅屋、猫は猫で、猫

の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間が発達したってこればかりは駄目である。いわんや実



際をいうと彼等が自ら<sup>みずか</sup>信じているごとくえらくも何

ともないのだからなおさらむずかしい。またいわん

や同情に乏しい吾輩の主人のときは、相互を残り

なく解するというのが愛の第一義であるということす

ら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い

牡蠣<sup>かき</sup>のごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向つ

て口を開いた事がない。<sup>ひら</sup>それで自分だけはすこぶる

つらがまえ

達観したような面構をしているのはちよつとおかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた様子もなく今年は征露の第二年目だから大方熊の画えだろうなどと気の知れぬことをいってすましているのでもわかる。

吾輩が主人の膝ひざの上で眼をねむりながらく考え  
ていると、やがて下女が第二の絵端書えはがきを持って来た。

見ると活版で舶来の猫が四五疋ひきずらりと行列してペ

ンを握ったり書物を開いたり勉強をしている。その

内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じや猫じや

を躍おどっている。その上に日本の墨で「吾輩は猫であ

る」と黒々とかいて、右の側わきに書を読むや躍おどるや猫

の春はる一日ひとひという俳句さえ認めしたたられてある。これは主

人の旧門下生より来たので誰が見たって一見して意

味がわかるはずであるのに、迂濶うかつな主人はまだ悟らないと見えて不思議そうに首を捻ひねつて、はてな今年  
は猫の年かなと独言ひとりごとを言つた。吾輩がこれほど有名  
になつたのを未まだ気が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持ってくる。今  
度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍かたわらに乍きよう  
しゆくながら恐縮かの猫へも宜よろしく御伝声奉願上候とある。いか

に迂遠な主人でもこう明らさまに書いてあれば分るものと見えてようやく気が付いたようにフンと言いつながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違つて多少尊敬の意を含んでゐるように思われた。今まで世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目を施しんめんぽくこしたのも、全く吾輩の御蔭だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

おりから門の格子こうしがチリン、チリン、チリリリリ

ンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次

に出る。吾輩は肴屋さかなやの梅公がくる時のほかは出ない

事に極きめているのだから、平気で、もとのごとく主

人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも

飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見

る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭

らしい。人間もこのくらい偏屈へんくつになれば申し分はな

い。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれ

ほどの勇氣も無い。いよいよ牡蠣かきの根性こんじょうをあらわし

ている。しばらくすると下女が来て寒月かんげつさんがい

でになりましたという。この寒月という男はやはり

主人の旧門下生であつたそうだが、今では学校を卒

業して、何でも主人より立派になつていゝという話はな

しである。この男がどういう訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分をおも恋っている女が有りそう  
な、無さそうな、世の中が面白そうな、つまらなそ  
うな、すご凄いやうなつや艶っぽいやうな文句ばかり並べて  
は帰る。主人のようになびかけた人間を求めて  
、わざわざこんな話しをしに来るのからして合点がてんが  
行かぬが、あの牡蠣かき的主人がそんな談話を聞いて時



々相槌あいづちを打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から

大おおいに活動しているものですから、出でよう出ようと思

つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織

の紐ひもをひねくりながら謎なぞ見たような事をいう。「ど

っちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔を

して、黒木綿くろもめんの紋付羽織そでぐちの袖口を引張る。この羽織

は木綿でゆきが短かい、下からべんべら者が左右へ五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違つた方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けている。「君歯をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ実はある所で椎茸しいたけを食いましてね」「何を食つたって?」「その、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘かさを前歯で噛み切ろうとしたら

ぼろりと齒が欠けましたよ」 「椎茸で前齒がかける

なんぞ、何だか爺々臭いね。じじいくさ 俳句にはなるかも知れ

ないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭

を軽く叩く。かろ 「ああその猫が例のですか、なかなか

肥ってるじゃありませんか、それなら車屋の黒にだ

って負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒

月君は大に吾輩を賞める。おおい 「近頃大分大きくなつた

のさ」と自慢そうに頭をぽかぽかなぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺ちようとピヤノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものです

ね。二人は女で私がその中へまじりましたが、自分

でも善く弾ひけたと思いました」 「ふん、そしてその

女というのは何者かね」と主人は羨うらやましそうに問い

かける。元来主人は平常枯木寒巖こぼくかんがんのような顔付はし

ているものの実のところは決して婦人に冷淡な方で

はない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中

にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必

ずちよつと惚ほれる。勘定をして見ると往來を通る婦

人の七割弱には恋着れんちやくするといふ事

ふうしてき

が諷刺的に書いて

あつたのを見て、これは真理だと感心したくらいな

男である。そんな浮気な男が何故なぜ牡蠣かき的生なま涯げを送つ

ているかと云うのは吾輩猫などには到底とうてい分らない

。或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせ

いだとも云うし、また或人は金がなくて臆病たぢな性質

だからだとも云う。どっちにしたって明治の歴史に  
関係するほどの人物でもないのだから構わない。し  
かし寒月君の女連れおんなづを羨ましげ気に尋ねた事だけは事  
実である。寒月君は面白そうに口取くちとりの蒲鉾かまぼこを箸で挟  
んで半分前歯で食い切った。吾輩はまた欠けはせぬ  
かと心配したが今度は大丈夫であつた。「なに二人  
とも去さる所の令嬢ですよ、御存じの方かたじやありません

ん」と余所余所<sup>よそよそ</sup>しい返事をする。「ナール」と主人

は引張ったが「ほど」を略して考えている。寒月君

はもう善<sup>い</sup>い加減な時分だと思ったものか「どうも好

い天気ですな、御閑<sup>おひま</sup>ならごいっしよに散歩でもしま

しょうか、旅順が落ちたので市中は大変な景気です

よ」と促<sup>うな</sup>がして見る。主人は旅順の陥落より女連<sup>おんなづれ</sup>の

身元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでい



たがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出  
るとしよう」と思い切つて立つ。やはり黒木綿の紋  
付羽織に、兄の紀念かたみとかいう二十年来着きふ古るした結ゆう  
城紬きつむぎの綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫  
だって、こう着つづけではたまらない。所々が薄く  
なつて日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の  
目が見える。主人の服装には師走しわすも正月もない。ふ

だん着も余所<sup>よそ</sup>ゆきもない。出るときは懷<sup>ふところ</sup>手をしてぶ

らりと出る。ほかに着る物がないからか、有つても

面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただ

しこれだけは失恋のためとも思われない。

兩人<sup>ふたり</sup>が出て行つたあとで、吾輩はちよつと失敬し

て寒月君の食い切つた蒲鉾<sup>かまぼこ</sup>の残りを頂戴<sup>ちやうだい</sup>した。吾輩

もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川<sup>ももかわ</sup>如燕<sup>じょえん</sup>

以後の猫か、グレーの金魚を偷ぬすんだ猫くらいの資格

は充分あると思う。車屋の黒などは固もとより眼中にな

い。蒲鉾の一切ひときれくらい頂戴したって人からかれこれ

云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間かん

食しょくをするという癖は、何も吾等猫族に限った事では

ない。うちの御三おさんなどはよく細君の留守中に餅菓子

などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。

御三ばかりじやない現に上品な仕付しつけを受けつつある

ふいちよう

と細君から吹聴せられている小児こどもですらこの傾向が

ある。四五日前のことであつたが、二人の小供が馬

鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝てい

むか

る間むかに對い合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の

パン

食う麵麩パンの幾分に、砂糖をつけて食うのが例である

さとうつぼ

たく

が、この日はちようど砂糖壺さとうつぼが卓たくの上に置かれて匙さじ

さえ添えてあつた。いつものように砂糖を分配して

くれるものがないので、大きい方がやがて壺の中か

ひとさじ

ら一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。

すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方

法で自分の皿の上にあけた。

しば

少らくりょうにん兩人は睨み合つ

ていたが、大きいのがまた匙をとって一杯をわが皿

の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとってわが分量

を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくった

。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を

懸ける、妹がまた匙をとる。見ている間に一杯一杯

一杯と重なって、ついには兩人ふたりの皿には山盛の砂糖

が堆うずたかくなつて、壺の中には一匙の砂糖も余つておら

んようになつたとき、主人が寝ぼけ眼まなこを擦こすりながら

寢室を出て来てせつかくしやくい出した砂糖を元の

ごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見ると、人間は利己主義から割り出した公平という念は猫より優まさっているかも知れぬが、智慧ちえはかえって猫より劣っているようだ。そんなに山盛にしないうち早く嘗なめてしまえばいいに思ったが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、氣の毒ながら御櫃おはちの上から黙って見物していた。

寒月君と出掛け、主人はどこをどう歩行あるいたもの

か、その晩遅く歸つて来て、翌日食卓に就ついたのは

九時頃であつた。例の御櫃の上から拝見していると、

主人はだまつて雑煮ぞうにを食っている。代えては食い

、代えては食う。餅の切れは小さいが、何でも六切むきれ

か七切食ななきれつて、最後の一切れを椀の中へ残して、も

うよそうと箸はしを置いた。他人がそんな我儘わがままをすると、



なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振り廻わして得意なる彼は、濁った汁の中に焦こげ爛ただれた餅の死骸を見て平気ですましている。妻君が袋戸ふくろどの奥からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと

主人は「それは利きかないから飲まん」という。「

でもあなたでんぶんしつ澱粉質のものには大變功能があるそうですから、召し上ったらいいでしよう」と飲ませたが

る。「澱粉だろうが何だろうが駄目だよ」と頑固がんこに

出る。「あなたはほんとに厭あきつぽい」と細君ひとが独

言りごとのようにいう。「厭あきつぽいのじゃない薬が利か

んだ」「それだつてせんだつてじゆうは大変によ

く利くよく利くとおつしやつて毎日毎日上つたじや

ありませんか」「こないだうち以利いたのだよ、こ

の頃は利かないのだよ」と対句ついくのような返事をする。

「そんなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能の

ある薬でも利く氣遣きづかいはありません、もう少し辛防しんぼう

がよくななくつちやあ胃弱なんぞはほかの病氣たあ違

って直らないわねえ」とお盆を持って控えた御三おさんを

顧みる。「それは本当のところでございます。もう

少し召し上ってご覧にならないと、とても善よい薬か

悪い薬かわかりますまい」と御三は一も二もなく細

君の肩を持つ。「何でもいい、飲まんのだから飲ま  
んのだ、女なんか何がわかるものか、黙っている」  
「どうせ女ですわ」と細君がタカジヤスターゼを主  
人の前へ突き付けて是非詰腹つめばらを切らせようとする

。主人は何にも云わず立って書齋へ這入るはい。細君と

御三は顔を見合せてにやにやと笑う。こんなときに

後あとからくっついて行いって膝ひざの上へ乗ると、大変な目

に逢あわされるから、そつと庭から廻つて書斎の椽側

へ上あがつて障子すきの隙のぞから覗いて見ると、主人はエピク

テタスとか云う人の本を披ひらいて見ておつた。もしそ

れが平常いつもの通りわかるならちよつとえらいところが

ある。五六分するとその本を叩たたき付けるように机の

上へ抛ほうり出す。大方そんな事だろうと思ひながらな

お注意していると、今度は日記帳を出して下しものよう

な事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池いけの端はた、神田へん辺を散歩。池の

端の待合の前で芸者が裾模様の春着はるぎをきて羽根をつ

いていた。衣装いしょうは美しいが顔はすこぶるまずい。何

となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまずい例に特に吾輩を出さなくつても

よさそうなものだ。吾輩だつて喜多床きたどこへ行つて顔

さえ剃すつて貰もらやあ、そんなに人間と異ちがつたところは

ありやしない。人間はこう自惚うぬぼれているから困る。

宝丹ほうたんの角かどを曲るとまた一人芸者が来た。これは背せいの

すらりとした撫肩なでがたの恰好かつこうよく出来上つた女で、着て

いる薄紫の衣服きものも素直に着こなされて上品に見えた。

白い歯を出して笑いながら「源ちゃんゆうべ昨夕は——つ

い忙がしかつたもんだから」と云った。ただしその

声は旅鴉たびがらすのごとく皴枯しやがれておったので、せつかくの

風采ふうさいも大おおに下落したように感ぜられたから、いわゆ

る源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向い

て見るも面倒になって、ふところ懐手のまま御成道おなりみちへ出た



。寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解<sup>げ</sup>し難いものはない。この主人の

今の心は怒<sup>おこ</sup>っているのだか、浮かれているのだか

、または哲人の遺書に一道<sup>いちどう</sup>の慰安を求めつつあるの

か、ちつとも分らない。世の中を冷笑しているのか、

世の中へ交<sup>まじ</sup>りたいたいのだか、くだらぬ事に肝癢<sup>かんしゃく</sup>を起し

ているのか、物外ぶつがいに超然ちやうぜんとしているのだかさっぱり

けんとう

見当が付かぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ。

食いたければ食い、寝たければ寝る、怒おこるときは一

生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一日

記などという無用のものは決してつけない。つける

必要がないからである。主人のように裏表のある人

間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を

暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等

ねこぞく

ぎょうじゆうざが

こうしそうによう

猫属に至ると行住坐臥、行屎送尿ことごとく真正の

日記であるから、別段そんな面倒な手数てかずをして、己おの

しんめんもく

れの真面目を保存するには及ばぬと思う。日記をつ

けるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事さ。

ばんさん

神田の某亭で晚餐を食う。久し振りで正宗を二三杯

飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩酌が一番だと思う。タカジヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利きかないものは利かないのだ。

無暗むやみにタカジヤスターゼを攻撃する。独りで喧嘩けんかをしているようだ。今朝の肝癰がちよつとここへ尾

を出す。人間の日記の本色はこう云う辺へんに存するの  
かも知れない。

せんだって〇〇は朝飯あさめしを廃すると胃がよくなると云

うたから二三にさんち日朝飯をやめて見たが腹がぐうぐう鳴

るばかりで機能はない。△△は是非香こうの物ものを断たてと

忠告した。彼の説によるとすべて胃病の原因は漬物

にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸<sup>か</sup>らす訳だから  
本復は疑なしという論法であつた。それから一週間  
ばかり香の物に箸<sup>はし</sup>を触れなかつたが別段の験<sup>げん</sup>も見え  
なかつたから近頃はまた食い出した。××に聞くと

それは按腹揉療治<sup>あんぷくもみりようじ</sup>に限る。ただし普通のではゆかぬ。

<sup>みながわりゆう</sup>

皆川流という古流な揉<sup>も</sup>み方で一二度やらせれば大抵

の胃病は根治出来る。安井息軒<sup>やすいそっけん</sup>も大變この按摩術<sup>あんまじゆつ</sup>を

愛していた。さかもとりようま

坂本竜馬のような豪傑でも時々は治療

を受けたと云うから、早速上根岸まで出掛けて揉もま

して見た。ところが骨を揉もまなければ癒なおらぬとか

、臓腑の位置を一度顛倒てんとうしなければ根治がしにくい

とかいって、それはそれは残酷な揉もみ方をやる。後

で身体が綿のようになって昏睡病こんすいびょうにかかったような

心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A

君は是非固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかった。B氏は横膈膜おうかくまくで呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやって御覧という。これも多少やったが何となくふくちゅう腹中が不安で困る。それに時々思い出したよう



に一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横隔膜が気になつて本を読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の迷亭めいていがこの体ていを見て、産気さんけのついた男じやあるまいし止よすがいいと冷かしたからこの頃は廃よしてしまつた。C先生は蕎麦そばを食つたらよかろうと云うから、早速か、け、ともり、を、かわるがわる食つたが、これは腹くだが下る

ばかりで何等の機能もなかった。余は年来の胃弱を直すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべて駄目である。ただ昨夜ゆうべ寒月と傾けた三杯の正宗はたしかに利目ききめがある。これからは毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は

吾輩の眼球めだまのように間断なく変化している。何をや

ながもち

つても永持のしない男である。その上日記の上で胃

病をこんなに心配している癖に、表向はおおい大に瘦我慢

をするからおかしい。せんだってその友人でなにがし某とい

う学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病

気は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならない

と云う議論をした。だいぶ大分研究したものと見えて、条

理が明晰で秩序が整然として立派な説であつた。氣

はんばく

の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほ

どの頭脳も學問もないのである。しかし自分が胃病

で苦しんでゐる際さいだから、何とかか何とか弁解をし

て自己の面目を保とうと思つた者と見えて、「君の

説は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」と

あたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽

であると云つたような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けたので主人は默然<sup>もくねん</sup>としていた。かくのごとく虚栄心に富んでゐるものの実際はやはり胃弱でない方がいいと見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよつと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮を<sup>ぞうに</sup>あんなにたく

さん食つたのも昨夜ゆうべ寒月君と正宗をひっくり返した  
影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食つて見  
たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒  
のように横丁の肴屋さかなやまで遠征をする氣力はないし

、新道しんみちの二絃琴にげんきんの師匠とこの所の三毛みけのように贅沢ぜいたくは無

論云える身分でない。従つて存外きざい嫌は少ない方だ

。小供の食いこぼした麵麩パンも食うし、餅菓子あんの餡あんも

なめる。香こうの物ものはすこぶるまずいが経験のため沢庵たくあん

を二切ばかりやった事がある。食つて見ると妙なも

ので、大抵のものは食える。あれは嫌いやだ、これは嫌

だと云うのは贅沢ぜいたくな我儘で到底教師の家うちにいる猫な

どの口にすべきところでない。主人の話しによると

仏蘭西フランスにバルザックという小説家があつたそうだ

。この男が大の贅ぜいたく沢屋で——もつともこれは口の贅

沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いてゐる小説中の人間の名をつけようと思つていろいろつけて見たが、どうしても気に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしよに散歩に出掛けた。友

人は固もとより何なんも知らずに連れ出されたのであるが



バルザックは兼ねて自分の苦心めつけしている名を目付

ようという考えだから往来へ出ると何もしないで店

先の看板ばかり見て歩行あるしている。ところがやはり

気に入った名がない。友人を連れて無暗むやみにあるく

。友人は訳がわからずにくっ付いて行く。彼等はつ

いに朝から晩まで巴理パリを探険した。その帰りがけに

バルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた

。見るとその看板にマーカスという名がかいてある。  
バルザックは手を拍<sup>う</sup>つて「これだこれだこれに限る。  
マーカスは好い名じゃないか。マーカスの上へZと  
いう頭文字をつける、すると申し分<sup>ぶん</sup>のない名が出来  
る。Zでなくてはいかん。Z . M a r c u s は  
実にうまい。どうも自分で作った名はうまくつけた  
つもりでも何となく故意<sup>わざ</sup>とらしいところがあつて面

白くない。ようやくの事で気に入った名が出来た

」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しがったと

いうが、小説中の人間の名前をつけるにいちんちパリ一日巴理を

探険しなくてはならぬようでは随分手数のてすうのかかる話

だ。贅沢もこのくらい出来れば結構なものだが吾輩

のように牡蠣かき的主人を持つ身の上ではとてもそんな

気は出ない。何でもいい、食えさえすれば、という

気になるのも境遇のしからしむるところであろう

。だから今雑煮が食いたくなつたのも決して贅沢のぞうに

結果ではない、何でも食える時に食つておこうとい

う考から、主人の食い剩した雑煮がもしや台所に残あま

つていはすまいかと思ひ出したからである。……台

所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底

に膠着<sup>こうちやく</sup>している。白状するが餅というものは今まで一辺<sup>ぺん</sup>も口に入れた事がない。見るとうまそうにもあるし、また少しは気味<sup>きび</sup>がわるくもある。前足で上にかかっている菜っ葉を搔<sup>か</sup>き寄せる。爪を見ると餅の上皮<sup>うわかわ</sup>が引き掛けてねばねばする。嗅<sup>か</sup>いで見ると釜の底の飯を御櫃<sup>おはち</sup>へ移す時のような香<sup>におい</sup>がする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か

誰もいない。御三<sup>おさん</sup>は暮も春も同じような顔をして羽

根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしやる  
兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこ  
の機をはずすと来年までは餅というものの味を知ら  
ずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那<sup>せつな</sup>に猫  
ながら一の真理を感得した。「得難き機会はすべて  
の動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は

実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。

否<sup>わんてい</sup>碗底の様子を熟視すればするほど<sup>きび</sup>気味が悪くなつ

て、食うのが厭になつたのである。この時もし御三

でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちら

へ近付くのを聞き得たなら、吾輩は<sup>おしげ</sup>惜気もなく碗を

見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮

ばなかつたろう。ところが誰も来ない、いくら<sup>ちゆうちよ</sup>躊躇

していても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は椀の中を覗き込みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸いっすんばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食いついたのだか



ら、大抵なものなら噛<sup>か</sup>み切れる訳だが、驚いた！

もうよかろうと思つて歯を引こうとすると引けない。

もう一辺<sup>ぺん</sup>噛み直そうとすると動きがとれない。餅は

魔物だなど疳<sup>かん</sup>づいた時はすでに遅かった。沼へでも

落ちた人が足を抜こうと焦<sup>あせ</sup>慮るたびにぶくぶく深く

沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動

かなくなる。歯答えはあるが、歯答えがあるだけで

どうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭

先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、なるほどうまい事をいつ

たものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割

り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごと

く尽未来際方じんみらいざいかたのつく期ごはあるまいと思われた。この

煩悶はんもんの際吾輩は覚えず第二の真理に逢着ほうちやくした。「す

べての動物は直覺的に事物の適不適を予知す」真理  
はすでに二つまで発明したが、餅がくっ付いている  
ので毫ごうも愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、  
抜けるように痛い。早く食い切つて逃げないと御三おさん  
が来る。小供の唱歌もやんだようだ、きつと台所へ  
馳かけ出して来るに相違ない。煩悶きよくしつぽの極尻尾をぐるぐ  
る振つて見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝

かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾しっぽ

は餅と何等の関係もない。要するに振り損の、立て

損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。

ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落  
すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周

囲を撫なで廻す。撫なでたくらいで割り切れる訳のもの

ではない。今度は左ひだりの方を伸のびして口を中心として

急劇に円を劃かくして見る。そんな呪まじないで魔は落ちない。

しんぼう

かんじん

辛防が肝心だと思つて左右交かわる交がわるに動かしたがや

はり依然として齒は餅の中にぶら下っている。ええ

面倒だと両足を一度に使う。すると不思議な事にこ

あとあし

の時だけは後足二本で立つ事が出来た。何だか猫で

ないような感じがする。猫であろうが、あるまいが

こうなつた日にやあ構うものか、何でも餅の魔が落

ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中  
引つ掻き廻す。前足の運動が猛烈なのでややともす  
ると中心を失って倒れかかる。倒れかかるたびに後  
足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる  
訳にも行かんのので、台所中あちら、こちらと飛んで  
廻る。我ながらよくこんなに器用に起つていられた  
ものだと思う。第三の真理が驀地に現前する。『危

きに臨めば平常なし能あたわざるところのものを為なし能

う。これ てんゆう之を天祐という」幸さいわいに天祐を享うけたる吾輩が一

生懸命餅の魔と戦っていると、何だか足音がして奥

より人が来るような気合けわいである。ここで人に来られ

ては大変だと思つて、いよいよ躍起やつきとなつて台所を

かけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念

だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けら

れた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている

」と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣<sup>や</sup>つて勝手から

「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬<sup>ちりめん</sup>の紋付で

「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書斎から

出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白い

と云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し



合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦し  
くはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようや  
く笑いがやみそうになつたら、五つになる女の子が  
「御かあ様、猫も随分ね」といったので狂瀾きやうらんを既倒きとう  
に何とかするという勢でまた大變笑われた。人間の  
同情に乏しい実行も大分見聞だいぶんけんもんしたが、この時ほど恨うら  
めしく感じた事はなかった。ついに天祐もどつかへ

消え失せて、在来の通り四つ這よばいになつて、眼を白黒  
するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺し  
にするのも気の毒と見えて「まあ餅をとつてやれ  
」と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせよう  
じゃありませんかという眼付で細君を見る。細君は  
踊は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまつ  
ている。「取つてやらんと死んでしまふ、早くとつ

てやれ」と主人は再び下女を顧みる。かえり御三は御馳走おさん

を半分食べかけて夢から起された時のように、氣のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君かんげつじや

ないが前歯がみんな折れるかと思った。どうも痛い

の痛くないのって、餅の中へ堅く食い込んでいる歯

を情け容赦なさもなく引張るのだからたまらない。吾輩

が「すべての安樂は困苦を通過せざるべからず」と

云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入はいってしまつておつた。

こんな失敗をした時には内にいて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いつその事氣を易かえて新道の二絃琴にげんきんの御師匠さんの所ところの三毛子みけこでも訪問しようとうと台所から裏へ出た。三毛子はこの近

辺で有名な美貌家びぼうかである。吾輩は猫には相違ないが

なさ

物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦にがい顔

を見たり、御三の険突けんつくを食って気分が勝すぐれん時は必

ほうゆう

もと

ずこの異性の朋友の許もとを訪問していろいな話をす

ま

せいせい

る。すると、いつの間にか心が晴々せいせいして今までの心

配も苦勞も何もかも忘れて、生れ変ったような心持

ばくだい

になる。女性の影響というものは実に莫大ばくだいなものだ。

杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側えんがわに坐っている。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾しっぽの曲がり加減、足の折り具合、物憂ものうげに耳をちよいちよい振けしきる景色なども到底形容とうていが出来ん。ことによく日の当る所に暖かそうに、品ひんよく控ひかえているものだから

身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、天鷲

うど あざむ

毛を欺くほどの滑なめらかな満身の毛は春の光りを反射

して風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。

吾輩はしばらく恍惚こうこつとして眺ながめていたが、やがて我

に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」

といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生

」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちや

らと鳴る。おや正月になつたら鈴までつけたな、ど

うもいい音ねだと感心している間まに、吾輩の傍そばに来て

「あら先生、おめでとう」と尾を左ひだりへ振る。吾等

猫属間ねこぞくで御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく

立てて、それを左りへぐりと廻すのである。町内

で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかり

である。吾輩は前回断わった通りまだ名はないので



あるが、教師の家うちにいるものだから三毛子だけは尊

敬して先生先生といつてくれる。吾輩も先生と云わ

れて満まんざら更悪い心持ちもしないから、はいはいと返事

をしている。「やあおめでとう、大層立派に御化粧

が出来ましたね」「ええ去年の暮御師匠おししやうさんに買っ

て頂いたの、宜いいでしよう」とちやらちやら鳴らし

て見せる。「なるほど善い音ねですな、吾輩などは生

れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」  
「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちや  
らちやら鳴らす。「いい音ねでしょう、あたし嬉しい  
わ」とちやらちやらちやら続け様に鳴らす

。「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛  
がっていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗あん  
に欣きん羨せんの意を洩もらす。三毛子は無邪気なものである

「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だって笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑えるものが無いように思っているのは間違いである。吾輩が笑うのは鼻の孔を三角にあなして咽喉のど仏ぼとけを震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所ところの御主人は何ですか」「あら御主人だって、妙なね。御師匠おししょうさん

だわ。二絃琴にげんきんの御師匠さんよ」「それは吾輩も知っ

ていますがね。その御身分は何なんです。いずれ昔むかしは立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ間まの姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾ひき出す。「宜い

い声でしょう」と三毛子は自慢する。「宜いいようだ

が、吾輩にはよくわからん。全体何というものです

か」「あれ？　あれは何とかつてもものよ。御師匠さ

んはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きていくくらいだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ

」と返事をした。少し間が抜けたようだが別に名答も出て来なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かつたんだって。いつでもそうお

っしやるの」「へえ元は何だったんです」「何でも

てんしょういん

ごゆうひつ

天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御つか

さんの甥おいの娘なんだって」「何ですって?」「あの

天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいった……」「なる

ほど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐筆の

……」「あらそうじゃないの、天璋院様の御祐筆の

妹の……」「よろしい分りました天璋院様のでしよ

う」「ええ」「御祐筆のでしょう」「そうよ」「御

嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「そうそ

う間違つた。妹の御嫁に入つた先きの」「御つかさ

んの甥の娘なんですさ」「御つかさんの甥の娘な

んですか」「ええ。分つたでしょう」「いいえ。何

だか混雑して要領を得ないですよ。詰つまるところ天璋

院様の何になるんですか」「あなたもよっぽど分ら

ないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行  
った先きの御つかさんの甥の娘なんだって、先<sup>さ</sup>つき  
つから言ってるんじゃないか」「それはすつ  
かり分っているんですがね」「それが分りさえすれ  
ばいいんでしょう」「ええ」と仕方がないから降参  
をした。吾々は時とすると理詰の虚<sup>うそ</sup>言を吐<sup>つ</sup>かねばな  
らぬ事がある。



障子の中うちで二絃琴の音ねがぱったりやむと、御師匠

さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛

子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっし

やるから、私あたし帰るわ、よくって？」わるいと云っ

たって仕方がない。「それじゃまた遊びにいらっし

やい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて

行つたが急に戻つて来て「あなた大変色が悪くって

よ。どうかしやしなくって」と心配そうに問いかける。まさか雑煮ぞうにを食って踊りを踊ったとも云われないから「何別段の事ありませんが、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直るだろうと思って実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜なごし気に見えた。これで雑煮の元気もさっぱりと回復

した。いい心持になつた。歸りに例の茶園ちやえんを通り抜

けようと思つて霜柱しもばしらの融けとかかつたのを踏みつけな

がら建仁寺けんにんじの崩れくずから顔を出すとまた車屋の黒が枯

菊の上に背せを山にして欠伸あくびをしている。近頃は黒を

見て恐怖するような吾輩ではないが、話しをされる

と面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした

。黒の性質として他ひとが己おのれを輕侮けいぶしたと認むるや否

や決して黙っていない。「おい、名なしの権兵衛ごんべえ

、近頃じや乙おつう高く留つてゐるじやあねえか。いくら

教師の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面つらあす

るねえ。人ひとつけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名にな

つたのを、まだ知らんと見える。説明してやりたい

が到底とうてい分る奴ではないから、まず一応の挨拶をして

出来得る限り早く御免蒙ごめんこうむるに若しくはないと決心した。

「いや黒君おめでとう。

あいかわらず

不相変元気がいいね」と尻

つぽ

尾を立てて左へくるりと廻わす。黒は尻尾を立てた

ぎり挨拶もしない。「何おめでてえ？　正月でおめ

でたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでてえ方

だろう。気をつけろい、この吹ふい子この向むう面づらめ」吹

い子の向むうづらという句は罵詈ばりの言語であるようだ

が、吾輩には了解が出来なかった。「ちよつと伺うかが

うが吹い子の向うづらと云うのはどう云う意味かね」

「へん、手めえが悪体あくたいをつかれてる癖に、その訳わけを

聞きや世話あねえ、だから正月野郎だって事よ」正

月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の

何とかよりも一層不明瞭な文句である。参考のため

ちよつと聞いておきたいが、聞いたって明瞭な答弁

は得られぬに極きまっているから、面めんと対むかったまま無

言で立っておった。いささか手持無沙汰の体である。

すると突然黒のうちの神さんかみが大きな声を張り揚げ

て「おや棚へ上げて置いた鮭しやけがない。大変だ。また

あの黒の畜生ちきしょうが取ったんだよ。ほんとに憎らしい猫

だっちやありやあしない。今に帰って来たら、どう

するか見ていやがれ」と怒鳴どなる。初春はつはるの長閑のどかな空気

を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代みよを大おお

に俗了してしまふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたいだけ怒鳴っている」と云わぬばかりに横着な顔をして

、四角な顎あごを前へ出しながら、あれを聞いたかと合

図をする。今までは黒との応対で気がつかなかった

が、見ると彼の足の下には一切れ二銭三厘に相当す

る鮭の骨が泥だらけになって転がっている。「君不あい

相変かわらずやっってるな」と今までの行き掛りは忘れて、つ



い感投詞を奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか機嫌を直さない。「何がやってるでえ、この野郎。し、や、け、の一切や二切で相変らずたあ何だ。人を見縊<sup>みく</sup>びつた事をいうねえ。憚<sup>はばか</sup>りながら車屋の黒だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆<sup>さ</sup>かに肩の辺<sup>へん</sup>まで搔<sup>か</sup>き上げた。「君が黒君だと云う事は、始めから知ってるさ」「知ってるのに、相変らずやってるたあ何

だ。何だてえ事よ」しきと熱いのを頻りに吹き懸ける

むなぐら

。人間なら胸倉をとられて小突き廻されるところで

へきえき

ある。少々辟易して内心困った事になったなと思っ

ていると、再び例の神さんの大声が聞える。「ちよ

いと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよ

きん

この人あ。牛肉を一斤すぐ持って来るんだよ。いい

かい、分ったかい、牛肉の堅くないところを一斤だ

よ」と牛肉注文の声が四隣しりんの寂寞せきばくを破る。「へん年

に一遍牛肉を誂あつらえるところで、いやに大きな声を出

しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだか

ら始末に終えねえ阿魔あまだ」と黒は嘲あざけりながら四つ足

を踏張ふんばる。吾輩は挨拶のしようもないから黙って見

ている。「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだ

が、仕方がねえ、いいから取るときや、今に食って

やらあ」と自分のために誂あつらえたもののごとくいう

。「今度は本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はな

るべく彼を帰そうとする。「御めっちの知った事じ

やねえ。黙っている。うるせえや」と云いながら突

然あとあし後足で霜柱しもばしらの崩くずれた奴を吾輩の頭へばさりと浴あび

せ掛ける。吾輩が驚ろいて、からだの泥を払ってい

る間まに黒は垣根くぐを潜くぐって、どこかへ姿を隠した。大

方西川の牛を覘ぎゆうに行つたものであらう。

家うちへ歸ると座敷の中が、いつになく春めいて主人

の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽

側から上あがつて主人の傍そばへ寄つて見ると見馴れぬ客が

来ている。頭を奇麗に分けて、木綿もめんの紋付の羽織に

小倉こくらの袴はかまを着けて至極しごく真面目しよせいでい

る。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗しゆんけいぬりの巻煙草まきたばこ

入れと並んで越智東風君を紹介致候おちとうふうくん水島寒月そろという

名刺があるので、この客の名前も、寒月君の友人で

あるという事も知れた。しゅかく主客の対話は途中からであ

るから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事に関しているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いつしよに來いとおっしゃるので」と客は落ちついて云う。「何で

すか、その西洋料理へ行つて午飯ひるめしを食うのについて趣向があるというのですか」と主人は茶を続つぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも分らなかつたんですが、いずれあの方かたの事ですから、何か面白い種があるのだらうと思

いまして……」「いっしょに行きましたか、なるほど」「ところが驚いたのです」主人はそれ見たかと

云わぬばかりに、膝ひざの上に乗った吾輩の頭をぽかと

叩たたく。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事な

んでしよう。あの男はあれが癖でね」と急にアンド

レア・デル・サルト事件を思い出す。「へへー。君

何か変ったものを食おうじやないかとおっしやるの

で」「何を食いました」「まず献立こんだてを見ながらいろ

いろ料理についての御話しがありました」「誂あつらえ



ない前にですか」「ええ」「それから」「それから

首を捻ひねってボーの方を御覧になつて、どうも變つた

ものもないようだなとおつしやるとボーは負けぬ氣

で鴨かものロースか小牛のチャップなどは如何いですと云

うと、先生は、そんな月並つきなみを食いにわざわざここま

で来やしないとおつしやるんで、ボーは月並という

意味が分らんものですから妙な顔をして黙つていま

したよ」「そうでしょう」「それから私の方を御向

きになつて、君フランス仏蘭西や英吉利へ行くと随分てんめいちよう天明調

や万葉調まんようちようが食えるんだが、日本じやどこへ行つたつ

て版でお圧したようで、どうも西洋料理へ這入はいる気が

しないと云うようなだいきえん大気燄で——全体あの方はかた洋行

なすつた事があるのですかな」「何迷亭が洋行なん

かするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行

こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、過去に見立てた洒落しやれなんでしよう」と主人は自分ながらうまい事を言つたつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですか、私はまたいつの間に洋行なさったかと思つて、つい真面目に拝聴してゐました。それに見て来たようになめくじのソップの御

話や蛙かえるのシチュの形容をなさるものですから」「そ

りや誰かに聞いたんでしよう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花か

瓶びんの水仙を眺める。少しく残念の気色けしきにも取られる。

「じゃ趣向というのは、それなんですネ」と主人が

念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感

投詞を挟む。<sup>はさ</sup>「それから、とてもなめくじや蛙は食

おうつても食えやしないから、まあトチメンボーく  
らいなところで負けとく事にしようじゃないか君と  
御相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、  
それがいいでしょう、といつてしまったので」「へ  
ー、とちめんぼうは妙ですな」「ええ全く妙なので  
すが、先生があまり真面目だものですから、つい気

がつきませんでした」とあたかも主人に向つて麁忽そこつ

を詫わびているように見える。「それからどうしまし

た」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情

を表しておらん。「それからボーにおいトチメンボ

ーを二人前持にんまえつて来いというト、ボーがメンチボ

ですかと聞き直しましたが、先生はますます真面目まじめ

な貌かおでメンチボーじゃないトチメンボーだと訂正さ

れました」 「なある。そのトチメンボーという料理は一体あるんですか」 「さあ私も少しおかしいとは思いましたがいかにも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらっしやるし、ことにその時は洋行なすったものと信じ切っていたものですから、私も口を添えてトチメンボーだトチメンボーだとボイに教えてやりました」 「ボイはどうしました」 「

ボーがね、今考えると実に滑稽こっけいなんですがね、しば

らく思案していきましてね、はなはだ御気の毒様です

が今日はトチメンボおあいにくさまーは御生憎様でメンチボおふたりまえーなら

御二人前おふたりまえすぐに出来ますと云うと、先生は非常に残

念な様子で、それじゃせつかくここまで来た甲斐かいが

ない。どうかトチメンボつづうーを都合して食わせてもら

う訳わけには行くまいかと、ボーに二十銭銀貨をやられ



ると、ボイはそれではともかくも料理番と相談して参りましようとお奥へ行きましたよ」「大変トチメン、ボイが食いたかつたと見えますね」「しばらくしてボイが出て来て真に御生憎で、御誂ならこしらえままことすが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待って食って行こうじやないかと云いなが

らポケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹かし

始められたので、私<sup>わたく</sup>しも仕方がないから、懷<sup>ふところ</sup>から日

本新聞を出して読み出しました、するとボーはまた

奥へ相談に行きましたよ」「いやに手数<sup>てすう</sup>が掛ります

な」と主人は戦争の通信を読むくらいの意気込で席

を前<sup>すす</sup>める。「するとボーがまた出て来て、近頃はト、

チメンボ一の材料が払底で亀屋へ行っても横浜の十

五番へ行つても買われませんから当分の間は御生憎様でと氣の毒そうに云うと、先生はそりや困つたな、せつかく來たのになあと私の方を御覽になつてしきりに繰り返さるるので、私も黙っている訳にも参りませんから、どうも遺憾いかんですな、遺憾極きわまるですなと調子を合せたのです」「ごもつともで」と主人が賛成する。何がごもつともだか吾輩にはわからん。「

するとボーも気の毒だと見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますってんでしよう。先生が材料は何を使うかねと問われるとボーはへへへへと笑って返事をしないんです。材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボーはへえさようで、それだものだから近頃は横浜へ行っても買われませんで、まことにお気の毒様と云いましたよ」「ア

ハハハそれが落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな声で笑う。膝ひざが揺れて吾輩は落ちかかる。主人はそれにも頓着とんじゃくなく笑う。アンド

レア・デル・サルトに罹かったのは自分一人でないと言ふ事を知ったので急に愉快になったものと見える。

「それから二人で表へ出ると、どうだ君うまく行つたろう、とちめんぼう橡面坊を種に使ったところが面白かろうと

大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れし

たようなものの実は午飯ひるめしの時刻が延びたので大變空

腹になつて弱りましたよ」「それは御迷惑でしたろ

う」と主人は始めて同情を表する。これには吾輩も

異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉のどを

鳴らす音が主客しゅかくの耳に入る。

東風君は冷めたくなつた茶をぐつと飲み干して「

実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに済すます。「御承知の通り、文学美術が好きなものですから……」「結構で」と油を注さす。

「同志だけがよりましてせんだってから朗読会と  
いうのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面  
の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回

は去年の暮に開いたくらいであります」「ちよつと

伺っておきますが、朗読会と云うと何か節奏ふしでも附

けて、詩歌しいか文章の類るいを読むように聞えますが、一体

どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作から

はじめて、追々おいおいは同人の創作なんかもやるつもりで

す」「古人の作というと白樂天の琵琶行はくらくてん びわこうのようなも

のでもあるんですか」「いいえ」「蕪村ぶそんの春風馬しゅんふうば



ていきよく  
堤曲の種類ですか

「いいえ」 「それじゃ、どんな

ものをやったんです」 「せんだつては近松の心中物しんじゅうもの

をやりました」 「近松？ あじょうるりの浄瑠璃の近松ですか」

近松に二人はない。近松といえは戯曲家の近松に極きま

っている。それを聞き直す主人はよほど愚ぐだと思つ

ていると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮嚀ていねいに

撫なでている。藪やぶ睨にらみから惚ほれられたと自認している

人間もある世の中だからこのくらいの誤謬ごびゆうは決して

驚くに足らんと撫でらるるがままにすましていた

。「ええ」と答えて東風子とうふうしは主人の顔色を窺うかがう。「

それじゃ一人で朗読するのですか、または役割を極き

めてやるんですか」「役を極めて懸合かけあいでやって見ま

した。その主意はなるべく作中の人物に同情を持っ

てその性格を發揮するのを第一として、それに手真

似や身振りを添えます。白せりふはなるべくその時代の人

を写し出すのが主で、御嬢さんでも丁稚でっちでも、その

人物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝

居見たようなものじゃありませんか」「ええ衣装いしやうと

書割かきわりがないくらいなものですな」「失礼ながらうま

く行きますか」「まあ第一回としては成功した方だ

と思います」「それでこの前やったとおっしゃる心

中物という」と「その、船頭が御客を乗せて芳原へよしわら

行く所ところなんで」「大變な幕をやりましたな」と教師

だけにちよつと首を傾かたむける。鼻から吹き出した日の、

出の煙りが耳を掠かすめて顔の横手へ廻る。「なあに

、そんなに大變な事もないんです。登場の人物は御

客と、船頭と、花魁おいらんと仲居なかいと遣手やりてと見番けんばんだけですか

ら」と東風子は平氣なものである。主人は花魁とい

う名をきいてちよつと苦い顔をしたが、仲居、遣手、

見番という術語について明瞭の智識がなかったと見

えてまず質問を呈出した。「仲居というのは娼家の

下婢かひにあたるものですか」 「まだよく研究はして

見ませんが仲居は茶屋の下女で、遣手おというのが女

部屋んなべやの助役じょやく見たようなものだろうと思います」 東風

子はさつき、その人物が出て来るように仮色こわいろを使う

と云つた癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらん

らしい。「なるほど仲居は茶屋に隷属れいぞくするもので

遣手は娼家に起臥きがする者ですね。次に見番みばんと云う

のは人間ですかまたは一定の場所を指すさのですか

もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何

でも男の人間だと思います」「何を司つかさどっているん

ですかな」「さあそこまではまだ調べが届いており

ません。その内調べて見ましょう」これで懸合をや

った日には頓珍漢とんちんかんなものが出来るだろうと吾輩は主

人の顔をちよつと見上げた。主人は存外真面目であ

る。「それで朗読家は君のほかになんた人が加わっ

たんですか」「いろいろおりました。花魁が法学士

のK君でしたが、口髯くちひげを生やして、女の甘ったるい

せりふを使っかうのですからちよつと妙でした。それ

にその花魁が癪しゃくを起すところがあるので……」　「朗

読でも癪を起さなくっちゃ、いけないんですか」と

主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大

事ですから」と東風子はどこまでも文芸家の気でい

る。「うまく癪が起りましたか」と主人は警句を吐

く。「癪だけは第一回には、ちと無理でした」と東

風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」



と主人が聞く。「私<sup>わたく</sup>しは船頭」「へー、君が船頭

」君にして船頭が務<sup>つと</sup>まるものなら僕にも見番くらい

はやれると云ったような語気を洩<sup>も</sup>らす。やがて「船

頭は無理でしたか」と御世辞のないところを打ち明

ける。東風子は別段癪に障った様子もない。やはり

沈着な口調で「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇<sup>りゅうとう</sup>

尾<sup>だび</sup>に終わりました。実は会場の隣りに女学生が四五人

下宿してしましてね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があるという事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴していたものと見えます

。私<sup>わたく</sup>しが船頭の<sup>こわいろ</sup>仮色を使つて、ようやく調子づいて

これなら大丈夫と思つて得意にやっていると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでしよう、今まで耐<sup>こ</sup>らえていた女学生が一度にわつと笑いだしたもので

すから、驚ろいた事も驚ろいたし、極きまりが悪わるい事

も悪るいし、それで腰を折られてから、どうしても

後あとがつづけられないので、とうとうそれ限ぎりで散会

しました」第一回としては成功だと称する朗読会が

これでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑

わずにはいられない。覚えのどぼとけず咽喉のど仏がごろごろ鳴る。

主人はいよいよ柔かに頭を撫なでてくれる。人を笑っ

て可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞ちようじを述べている。「第二回からは、もっと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのために、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癪なんか起せませんよ」と消極的の主人はすぐに断わりかける

。「いえ、癩などは起していただかんでもよろしいので、ここに賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事そうに小菊版こぎくばんの帳面を出す。「これへ

どうか御署名の上御捺印ごなついんをお願いたいので」と帳面を

主人の膝ひざの前へ開いたまま置く。見ると現今知名な

文学博士、文学士連中の名が行儀よく勢揃せいぞろいをしてい

る。「はあ賛成員にならん事もありますませんが、どん

な義務があるのですか」と牡蠣<sup>かきせんせい</sup>先生は掛念<sup>けねん</sup>の体<sup>てい</sup>に見

える。「義務と申して別段是非願う事もないくらい

で、ただ御名前だけを御記入下さって賛成の意さえ

御表<sup>おひよう</sup>し被<sup>く</sup>下<sup>だ</sup>ればそれで結構です」「そんなら這<sup>はい</sup>入り

ます」と義務のかからぬ事を知るや否や主人は急に

気軽になる。責任さえないと云う事が分つておれば

謀<sup>む</sup>叛<sup>ほん</sup>の連判状へでも名を書き入れますと云う顔付を

のみならず

する。加之つらこう知名の学者が名前を列ねている中に

姓名だけでも入籍させるのは、今までこんな事に出  
合った事のない主人にとっては無上の光栄であるか  
ら返事の勢のあるのも無理はない。「ちよつと失敬」

と主人は書齋へ印をとりに入る。吾輩はぼたりと  
畳の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカス、テラを  
つまんで一口に頬張る。ほおばモゴモゴしばらくは苦しそ

うである。吾輩は今朝の雑煮事件をちよつと思ひ出

す。主人が書齋から印形いんぎようを持って出て来た時は、東

風子の胃の中にカステラが落ちついた時であつた

。主人は菓子皿のカステラが一切ひときれ足りなくなつた事

には気が着かぬらしい。もし気がつくとすれば第一に疑われるものは吾輩であらう。

東風子が歸つてから、主人が書齋に入つて机の上



を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が来ている。

「新年の御慶目<sup>ぎよけいめ</sup>出度<sup>でた</sup>申納候<sup>もうしおさめそろ</sup>……」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生の手紙に真面目なのはほとんどないので、この間な

どは「其後別に恋着せる婦人も無之、いず方より艶

しよ

書も参らず、先ず先ず無事に消光罷り在り候間、乍

りながら

憚御休心可被下候」と云うのが来たくらいである

くださるべくそろ

。それに較べるとこの年始状は例外にも世間的であ

くら

る。

「一寸参堂仕り度候えども、大兄の消極主義に反し

たく

て、出来得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有  
の新年を迎うる計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、  
御推察願上候……」  
そろ

なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙  
がしいに違いないと、主人は腹の中で迷亭君に同意  
する。

「昨日は一刻のひまを偷<sup>ぬす</sup>み、東風子にトチメンボ、  
の御馳走<sup>ごちそう</sup>を致さんと存<sup>ぞろと</sup>じ候処、生憎<sup>あいにく</sup>材料払底の為<sup>た</sup>め  
其意を果さず、遺憾<sup>いかん</sup>千万に存<sup>ぞんじ</sup>候。……」

そろそろ例の通りになつて来たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多<sup>かるたかい</sup>会、明後日は審美学協会の  
新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明日は：  
……」

うるさいなと、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等

、会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致

そろ

し候為め、不得已賀状を以て拝趨はいすうの礼に易かえ候段不

からずゆうじよくだされたくそろ

悪御宥恕被下度候。

……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をす

る。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し度心たき

得に御座候。そろ寒厨何の珍味も無之候えども、せめて

はトチメンボーでもと只今より心掛居候。おりそろ……」

まだトチメンボーを振り廻している。失敬なと主

人はちよつとむつとする。

「然しかしト、チメン、ボ―は近頃材料払底の為め、ことに

依ると間に合い兼かね候も計りがたきにつき、其節は孔くじ

雀やくの舌したでも御風味に入れ可もうすべく申候。……」

りようてんびん

両天秤をかけたなと主人は、あとが読みたくなる。



「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半なかばにも足らぬ程故健けんたん啖なる大兄の胃囊いぶくろを充みたす為には……」

うそをつくと主人は打ち遣やったようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可らずと存ぞん

候しそろ。

然る所孔雀は動物園、浅草花屋敷等には、ちら

ほら見受け候えども、普通の鳥屋など杯には一向見当りいっこう

不申もうさず、

苦心くしんこのこと此事に御座候そろ。

……」

独りで勝手に苦心しているのじやないかと主人は

毫ようも感謝の意を表しない。

おうせきローマ

みぎ

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非

そろ

ごうしや

常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よ

しょくし

おりそろ

ごりようさつくださるべくそろ

りひそかに食指を動かし居候次第御諒察可被下候

……

」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人はすこぶる冷淡であ

る。

「降<sup>くだ</sup>つて十六七世紀の頃迄は全歐を通じて孔雀は宴

席に欠くべからざる好味と相成居候。<sup>あいなりおりそろ</sup>レストー伯が

エリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も<sup>そろせつ</sup>

慥<sup>たし</sup>か孔雀を使用致し候様記憶致候。<sup>そろよう</sup>有名なるレンブ

ラントが画<sup>えが</sup>き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる儘<sup>まま</sup>

卓上に横よこたわり居ゐり候ころ……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成あいなす

るは必定……」  
ひつじょう

大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人ローマじんは日に二度三度も宴会を開き候由。そろよし日に二度も三度も方丈ほうじょうの食饌しょくせんに就き候

えば如何なる健胃の人にてても消化機能に不調を醸す<sup>かも</sup>  
べく、従つて自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

「然<sup>しか</sup>るに贅<sup>ぜい</sup>沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽し  
たる彼等は不相当に多量の滋味を貪<sup>むさぼ</sup>ると同時に胃腸

を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し候……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候。いたしそろ入浴後一種の方法によ

りて浴前よくぜんに嚥下えんかせるものを悉く嘔吐ことごと おうとし、胃内を掃除



致し候。そろ胃内廓清いなかくせいの功を奏したる後のち又食卓に就つき

飽あく迄珍味を風好ふうこうし、風好おわし了れば又湯に入りて

之これを吐出としゆつ致候。いたしそろかくの如くすれば好物は貪むさぼり次第

貪り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙両

得とは此等の事を可申もうすべきかと愚考致候いたしそろ……」

なるほど一挙両得に相違ない。主人は羨うらやましそう

な顔をする。

「廿世紀の今日交通の頻繁ひんぱん、宴会の増加は申す迄も

なく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄そろおりから、吾人

戦勝国の国民は、是非共羅馬人ローマに倣ならつて此入浴嘔吐

の術を研究せざるべからざる機会に到着致し候事そろと

自信致候いたしそろ。左もさなくば切角せっかくの大国民も近き将来に於

ことごと

て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と窃かひそに心痛

まか

罷りあり候そろ……」

また大兄のごとくか、癩しやくに障さわる男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究

し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に

応用致し候わば所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成

いわばわざわい みほう

くどく

り平素逸楽を擅に致し候御恩返も相立ち可申と存候

いっらく ほしいまま

そろ

もうすべく ぞんじそろ

……」

何だか妙だなと首を捻る。

ひね

「依よつて此間中じゅうよりギボン、モンセン、スミス等諸家

の著述しやうりようを涉獵おり致し居候いまえども未だに発見たんしよの端緒たんしよをも

見出みいだし得ざるは残念ぞんじの至そに存候ぞんじ。然し御存じの如く

小生は一度思そい立ち候事そは成功するまでは決して中

絶仕つかまつらざる性質おうとほうに候そえば嘔吐方そを再興致し候も遠か

らぬうちと信じ居そり候次第つかま。右は発見次第御報道可つかま

仕候つるべくそにつき、左様御承知可被下候くださるべくそ。就ついてはさきに申

上候トチメンボー及び孔雀の舌の御馳走も可相成は  
そろ、  
右発見後に致し度、たく左すれば小生の都合は勿論、もちろん既  
に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも御便宜かと存候  
ごべんぎ  
草々不備」  
ぞんじそろ

何だとうとう担かつがれたのか、あまり書き方が真面  
目だものだからつい仕舞しまいまで本氣にして読んでいた。

新年匆々そうそうこんな悪戯いたずらをやる迷亭はよつぽどひま人だ  
なあと主人は笑いながら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。白は

磁くじの水仙がだんだん凋しぼんで、青軸あおじくの梅が瓶びんながらだ

んだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつ

まらんと思つて、一両度三毛子を訪問して見たが逢あ

われない。最初は留守だと思つたが、二返目へんめには病

気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御  
師匠さんと下女が話しをしているのを手水鉢ちょうずばちの葉蘭  
の影に隠れて聞いているところであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ  
何なんにも食べません、あつたかにして御火燵おこたに寝かし  
ておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の  
取扱を受けている。



一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもある  
が、一方では己が愛おのしている猫がかくまで厚遇を受  
けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身体からだが疲れる  
ばかりだからね」 「そうでございますとも、私共で

さえ一日御饗ごぜんをいただかないと、明くる日はとても  
働きませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。実際この家では下女より猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行つたのかい」「ええ、あの御医者はよつぽど妙でございますよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪かぜでも引いたのかって私の脈みやくをとろうとするんでしょう。いえ病人は私ではござ

いません。これですって三毛を膝の上へ直したら

、にやにや笑いながら、猫の病気はわしにも分らん、

抛<sup>ほう</sup>っておいたら今に癒<sup>なお</sup>るだろうってんですもの、あ

んまり苛<sup>ひど</sup>いじゃございませんか。腹が立ったから

、それじゃ見ていただかなくってもようございます

これでも大事の猫なんですって、三毛を懷<sup>ふところ</sup>へ入れて

さっさと帰って参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底とうてい吾輩のうちなどで聞かれる言

葉ではない。やはり天璋院様てんしょういんの何とかの何とかでな

くては使えない、はなはだ雅がである后感心した。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつと

風邪を引いて咽喉のどが痛むんでございますよ。風邪を

引くと、どなたでも御咳おせきが出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿町ていねい寧

な言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだのつて新しい病気ばかり殖ふえた日にや油断も隙もなりやしませんのでございますよ」「旧幕時代に無い者に碌ろくな者はないから御前も気をつけないといかんよ」「そうでございましょうかねえ」

下女は大に感動おおいしている。

「風邪かぜを引くといつてもあまり出あるきもしないよ

うだったに……」 「いえね、あなた、それが近頃は

悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達？」 「ええあの表通りの教師の所とこにいる

薄ぎたない雄猫おねこでございますよ」「教師と云うのは、

あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「ええ顔を洗う

たんびに鵝鳥がちょうが絞しめ殺されるような声を出す人でご

ざんす」

鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。

吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽うがいをやる時、楊枝ようじで咽の

喉どをつつ突いて妙な声が無遠慮に出す癖がある。機

嫌の悪い時はやけにがあがやる、機嫌の好い時は  
元気づいてなおがあがやる。つまり機嫌のいい時  
も悪い時も休みなく勢よくがあがやる。細君の話  
しではここへ引越す前まではこんな癖はなかつたそ  
うだが、ある時ふとやり出してから今日まできょう一日も  
やめた事がないという。ちよつと厄介な癖であるが、  
なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫など



には到底想像もつかん。とうてい それもまず善いとして「薄  
ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとなお耳を  
立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪いまじなになるか知らん。御維ごいつ

新前しんまえは中間ちゅうげんでも草履取りぞうりでも相応の作法は心得たも

ので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするもの  
は一人もおらなかつたよ」「そうでございましょう

ともねえ」

下女は無暗むやみに感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持つている猫だから、どうせ野良猫のらねこ

さ、今度来たら少し叩たたいておやり」 「叩たたいてやりま

すとも、三毛の病気になったのも全くあいつの御蔭

に相違ちがひございませんもの、きつと讐かたきをとってやりま

す」

飛んだ冤罪えんざいを蒙こうむったものだ。こいつは滅多めったに近ちか

寄よれないと三毛子にはとうとう逢わずに歸った。

歸って見ると主人は書齋うちの中で何か沈吟ちんぎんの体ていで筆

を執とっている。二絃琴にげんきんの御師匠とこさんの所で聞いた評

判を話したら、さぞ怒おこるだろうが、知らぬが仏とや

らで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすまし

ている。

ところへ当分多忙で行かれないと云つて、わざわざ年始状をよこした迷亭君が飄然とやっひょうぜんて来る。「

何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちよつとうまい

文章だと思つたから今翻訳して見ようと思つてね

」と主人は重たそうに口を開く。「文章？

誰だれの

文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名

氏の作にも随分善いのがあるからなかなか馬鹿に出  
来ない。全体どこにあつたのか」と問う。「第二読

本」と主人は落ちつきはらって答える。「第二読本

？ 第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している

名文と云うのは第二読本の中うちにあると云う事さ」「

冗談じょうたんじゃない。孔雀の舌の讐かたきを際きわどいところで討と

うと云う寸法なんだろう」 「僕は君のような法螺吹ほらふ

きとは違くちひげうさ」と口髯ひねを捻ひねる。泰然たるものだ。 「

昔むかしある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかと

いったら、山陽が馬子まごの書いた借金まごの催促状を示し

て近来の名文はまずこれでしようと言ったという話

があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん

。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷

亭先生は審美眼の本家ほんけのような事を云う。主人は禅

坊主が大燈国師の遺誠だいてうこくし ゆいかいを読むような声を出して読み

始める。「巨人きょじん いんりよく、引力」 「何だいその巨人引力と云

うのは」 「巨人引力と云う題さ」 「妙な題だな、僕

には意味がわからんね」 「引力と云う名を持ってい

る巨人というつもりさ」 「少し無理なつ、もりだが表

題だからまず負けておくとしよう。それから早々本そうそう

文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」「  
雑まぜかえしてはいかんよ」と予あらかじめ念を押してまた  
読み始める。

ケートは窓から外面そとを眺ながめる。小児しょうにが球たまを投げて遊  
んでいる。彼等は高く球を空中に擲なげうつ。球は上へ上  
へとのぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はま



た球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとのみのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を己<sup>おの</sup>れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たろう。あれは巨人引力が呼ぶのである

る。本を落す事がある。巨人引力が来いというか  
らである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶ  
と落ちてくる」

「それぎりかい」「むむ、甘いうまじやないか」「いや  
これは恐れ入った。飛んだところでト、チ、メン、ボ、ーの

御返礼に預あずかった」「御返礼でもなんでもないさ、実

際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね」  
と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。君  
にしてこの伎倆ぎりょうあらんとは、全く此度こんどという今度は  
担かつがれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で喋し  
舌やべる。主人には一向いっこう通じない。「何も君を降参させ  
る考えはないさ。ただ面白い文章だと思ったから訳  
して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なく

つちや本ものでない。凄<sup>すご</sup>いものだ。恐縮だ」「そん

なに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をやめ

たから、その代りに文章でもやろうと思つてね」「

どうして遠近無差別黒白平等の水彩画の比じゃない。  
えんきんむさべつこくびやびようどう

感服の至りだよ」「そうほめてくれると僕も乗り気

になる」と主人はあくまでも疇<sup>かんちが</sup>違<sup>ちが</sup>いをしている。

ところへ寒月<sup>かんげつ</sup>君が先日<sup>かんげつ</sup>は失礼しましたと這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つて

来る。「いや失敬。今大變な名文を拝聴してトチメ、

ンボーの亡魂を退治<sup>たいじ</sup>られたところで」と迷亭先生は

訳のわからぬ事をほのめかす。「はあ、そうですか」

とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左<sup>さ</sup>のみ

浮かれた気色<sup>けしき</sup>もない。「先日は君の紹介で越智東風

と云う人が来たよ」「ああ上<sup>あが</sup>りましたか、あの越智<sup>おち</sup>

東風<sup>こち</sup>と云う男は至って正直な男ですが少し変ってい

るところがあるので、あるいは御迷惑かと思いましたが、是非紹介してくれというものですから……

「別に迷惑の事もないがね……」 「こちらへ上あがつ

ても自分の姓名のことについて何か弁じて行きやしませんか」 「いいえ、そんな話もなかったようだ

」 「そうですか、どこへ行っても初対面の人には自分の名前の講釈こうしゃくをするのが癖くせでしてね」 「どんな講

釈をするんだい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君

は口を入れる。「あの東風こちと云うのを音おんで読まれる

と大變氣にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐きんから

皮の煙草かわ たばこ入から煙草をつまみ出す。「私わたくしの名は越お

智東風ちとうふうではありません、越智おちこちですと必ず断りま

すよ」「妙だね」と雲井くもいを腹の底まで吞のみ込む。「

それが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近、

と云う成語せいごになる、のみならずその姓名が韻いんを踏ん

でいると云うのが得意なんです。それだから東風こちを

音おんで読むと僕がせつかくの苦心を人が買かつてくれな

いといつて不平を云うのです」「こりやなるほど変

ってる」と迷亭先生は図に乗って腹の底から雲井を

鼻の孔あなまで吐き返す。途中で煙が戸迷とまどいをして咽喉のど

の出口へ引きかかる。先生は煙管きせるを握にぎつてごほんご



ほんと咽むせび返る。「先日来た時は朗読会で船頭にな

って女学生に笑われたといっていたよ」と主人は笑

いながら云う。「うむそれぞれ」と迷亭先生が煙管きせる

で膝頭ひざがしらを叩たたく。吾輩は險吞けんのおんになつたから少し傍そばを離

れる。「その朗読会さ。せんだってトチメンボーを

御馳走した時にね。その話しが出たよ。何でも第二

回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだか

ら、先生にも是非御臨席を願いたいつて。それから

僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、  
いえこの次はずっと新しい者を撰えらんで金色夜叉こんじきやしやにし

ましたと云うから、君にや何の役が当つてるかと聞

いたら私は御宮おみやですといったのさ。東風とうふうの御宮は面

白かっさいかろう。僕は是非出席して喝采かつさいしようと思つてゐる

よ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をす

る。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀くじやくの舌とトチメン、ボーかたきの復讐を一度にとる。迷亭君は氣にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳の俎ぎようとくと云う格だからなあ」と笑う。「まずそんなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎と云う語を主人は解かいさないの

あるが、さすが永年教師をして胡魔化ごまかしつけている

ものだから、こんな時には教場の経験を社交上にも  
応用するのである。「行徳の俎ずというのは何の事で

すか」と寒月が真率しんそつに聞く。主人は床の方を見て「

あの水仙は暮に僕が風呂の歸りがけに買って来て挿さ  
したのだが、よく持つじやないか」と行徳の俎を無  
理にねじ伏せる。「暮といえは、去年の暮に僕は実

に不思議な経験をしたよ」と迷亭が煙管きせるを大神樂だいかぐらの

ごとく指の尖さきで廻わす。「どんな経験か、聞かし玉たま

え」と主人は行徳の俎うしろを遠く後に見捨てた気で、ほ

つと息をつく。迷亭先生の不思議な経験というのを  
聞くと左さのごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東とう

風ふうから参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから

御在宿を願うと云う先きさ触れぶがあつたので、朝から  
心待ちに待っていると先生なかなか来ないやね。昼  
飯を食ってストーブの前でバリ・ペーンの滑稽物こっけいもの  
を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから  
見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思  
ってね。寒中は夜間外出をするなとか、冷水浴もい  
いがストーブを焚たいて室へやを煖あたかにしてやらないと風か

邪ぜを引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど

親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいか

ないと、呑のん気な僕もその時だけは大おおに感動した。そ

れにつけても、こんなのにのらくらしては勿もつ体たいな

い。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。

母の生きているうちに天下をして明治の文壇に迷亭

先生あるを知らしめたいと云う気になった。それか

らなお読んで行くと御前なんぞは実に仕合せ者だ

露西亞<sup>ロシア</sup>と戦争が始まつて若い人達は大変な辛苦<sup>しんく</sup>を

して御国<sup>みくに</sup>のために働らいているのに節季師走<sup>せつきしわす</sup>でもお

正月のように気楽に遊んでいると書いてある。――

僕はこれでも母の思つてるように遊んじやいないや

ね――そのあとへ<sup>もつ</sup>以て来て、僕の小学校時代の朋友<sup>ほうゆう</sup>

で今度の戦争に出て死んだり負傷したものの名前が



列挙してあるのさ。その名前を一々読んだ時には何

だか世の中が味気あじきなくなつて人間もつまらないと云

う気が起つたよ。一番仕舞しまいにね。私わたししも取る年に候

えば初春はつはるの御雑煮おぞうにを祝い候も今度限りかと……何だ

か心細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさ

くさしてしまつて早く東風とうふうが来れば好いと思つたが、

先生どうしても来ない。そのうちとうとう晩飯にな

ったから、母へ返事でも書こうと思つてちよいと十  
二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが僕  
にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内  
外で御免蒙しょうむる事に極きめてあるのさ。すると一日動か  
ずにおつたものだから、胃の具合が妙で苦しい。東  
風が来たら待たせておけと云う氣になつて、郵便を  
入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつになく

富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ

我れ知らず出てしまった。ちようどその晩は少し曇

って、から風が御濠おほりの向うから吹き付ける、非常に

寒い。神楽坂かぐらざかの方から汽車がヒューと鳴って土手下

を通り過ぎる。大変淋さみしい感じがする。暮、戦死

、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる

馳かけ廻めぐる。よく人が首を縊くると云うがこんな時にふ

と誘われて死ぬ気になるのじやないかと思ひ出す

。ちよいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間<sup>ま</sup>

にか例の松の真下<sup>ました</sup>に來ているのさ」

「例の松た、何だい」と主人が断句<sup>だんく</sup>を投げ入れる。

「首懸<sup>くびかけ</sup>の松さ」と迷亭は領<sup>えり</sup>を縮める。

「首懸の松は鴻<sup>こう</sup>の台<sup>だい</sup>でしょう」寒月が波紋<sup>はもん</sup>をひろげ

る。

「鴻こうの台だいのは鐘懸かねかけの松で、土手三番町のは首懸くびかけの松

さ。なぜこう云う名が付いたかと云うと、昔むかしから

の言い伝えで誰でもこの松の下へ来ると首が縊くりた

くなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら

首縊くびくりだと来て見ると必ずこの松へぶら下がって

る。年に二三返べんはきつとぶら下がっている。どうし

ても他ほかの松では死ぬ気にならん。見ると、うまい具

合に枝が往来の方へ横に出ている。ああ好い枝振り

だ。あのままにしておくのは惜しいものだ。どうか

してあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ない

かしらと、あたり四辺を見渡すと生憎あいにく誰も来ない。仕方が

ない、自分で下がろうか知らん。いやいや自分が下

がっては命がない、あぶ危ないからよそう。しかし昔の

ギリシャじん希臘人は宴会の席で首くびくく縊りの真似をして余興を添え

たと云う話しがある。一人が台の上へ登つて縄の結び目へ首を入れる途端に他のものほかが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下りるといふ趣向しゅこうである。果してそれが事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思ふ。手懸けて見ると好い具合に撓しわる。撓り按排あんばいが実に美的である。首がかかつてふわふわするところを想

像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしよ

とうふう

うと思つたが、もし東風が来て待つていると気の毒

とうふう

だと考え出した。それではまず東風に逢あつて約束通

り話しをして、それから出直そうと云う氣になつて

ついにうちへ歸つたのさ」

いち

「それで市が栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。



「うちへ歸つて見ると東風は来ていない。しかし今こん

にち よんどころなきさしつか

日は無抛処差支えがあつて出られぬ、いずれ永日御えいじつご

めんご

面晤を期すという端書はがきがあつたので、やつと安心し

て、これなら心置きなく首が縊くれる嬉しいと思つた。

で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひもひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たった一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考える  
と何でもその時は死神しにがみに取り着かれたんだね。ゼー

ムスなどに云わせると副意識下の幽冥界ゆうめいかいと僕が存在

している現実界が一種の因果法によつて互に感応かんのうしたんだらう。実に不思議な事があるものじゃないか」迷亭はすまし返っている。

主人はまたやられたと思ひながら何も云わずに空く也餅うやもちを頬張ほおばつて口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧ていねいに搔かき馴ならして、俯向うつむいてにやにや笑っていたが、やがて口を開く。極めて静

かな調子である。

「なるほど伺って見ると不思議な事でちよつと有り  
そうにも思われませんが、私などは自分でやはり似  
たような経験をつい近頃したものですから、少しも  
疑がう気になりません」

「おや君も首を縊くりたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちようど明け

れば昨年の暮の事でしかも先生と同日同刻くらいに  
起った出来事ですからなおさら不思議に思われます」  
「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家うちで忘年会兼合奏会けんがあり  
まして、私もそれへヴァイオリンを携たずさえて行きました

た。十五六人令嬢やら令夫人が集ってなかなか盛会

で、近來の快事と思うくらいに万事が整っていました

た。ばんさん晚餐もすみ合奏もすんでよも四方の話しが出て時刻

も大分遅だいぶくなつたから、もう暇いとま乞いをして帰ろうか

と思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来て

あなたは○○子さんの御病氣を御承知ですかと小声

で聞きますので、実はその両三日りようさんにちまえ前に逢つた時は平

常の通りどこも悪いようには見受けませんでしたか

ら、私も驚ろいて精しく様子くわを聞いて見ますと、私わたく

しの逢ったその晩から急に発熱して、いろいろな譫うわ

語ことを絶間なく口走くちばしるそうで、それだけなら宜いいです

がその譫語のうちに私の名が時々出て来るとい  
うのです」

主人は無論、迷亭先生も「御安おやすくないね」などと

いう月並つきなみは云わず、静肅に謹聴している。

「医者を呼んで見てもらうと、何だか病名はわから

んが、何しろ熱が劇<sup>はげ</sup>しいので脳を犯しているから

、もし睡眠<sup>すいみんざい</sup>剤が思うように功を奏しないと危険であ

ると云う診断だそうで私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起ったのです。ちようと夢でうなされる

時のような重くるしい感じで周囲の空気が急に固形体になって四方から吾が身を締めつけるごとく思わ



れました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあの健康な○○子さんが……」

「ちよつと失敬だが待つてくれ給え。さつきから伺

つていると○○子さんと云うのが二返<sup>へん</sup>ばかり聞える

ようだが、もし差支<sup>さしつか</sup>えがなければ承<sup>うけたま</sup>わりたいね、君」

と主人を顧<sup>かえり</sup>みると、主人も「うむ」と生返<sup>なまへんじ</sup>事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れませんが、  
から廃よしましょう」

「すべて曖あいあいぜん々然として昧まいまいぜん々然たるかたで行くつもり  
かね」

「冷笑なさってはいけません、極真面目ごくまじめな話しなん  
ですから……とにかくあの婦人が急にそんな病気に

なつた事を考えると、ひからくよう実に飛花落葉の感慨で胸が一

杯になつて、そうしん総身の活気が一度にストライキを起し

たように元気がにわかに滅入めいつてしまひまして、た

だ蹠々そうそうとして踉々ろうろうという形かたちで吾妻橋へきかかつた

のです。欄干に倚よつて下を見ると満潮か干潮か分り

ませんが、黒い水がかたまつてただ動いているよう

に見えます。はなかわど花川戸の方から人力車が一台馳かけて来

て橋の上を通りました。その提灯の火を見送つてい

さっぽろ

ると、だんだん小くなつて札幌ビールの処で消えま

はる

した。私はまた水を見る。すると遙かの川上の方で

私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に

おもて

呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見

なん

ましたが暗くて何にも分りません。気のせいに違い

そうそう

ない早々帰ろうと思つて一足二足あるき出すと、ま

た微かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はま

た立ち留つて耳を立てて聞きました。三度目に呼ば

れた時には欄干に捕まつていながら膝頭ががくがく

悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の底か

ら出るようですが紛れもない○○子の声なんでしょ

う。私は覚えぬ「はい」と返事をしたのです。そ

の返事が大きかったものですから静かな水に響いて、

自分で自分の声に驚かされて、はっと周囲を見渡し  
ました。人も犬も月も何にも見えません。その時に  
私はこの「夜」<sup>よる</sup>の中に巻き込まれて、あの声の出る  
所へ行きたいと云う気がむらむらと起つたのです

。○○子の声がまた苦しそうに、訴えるように、救  
を求めるように私の耳を刺し通したので、今度は「  
今直<sup>すぐ</sup>に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒

い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が浪なみの下から

無理に洩もれて来るように思われましてね。この水の

下だなと思いながら私はとうとう欄干の上に乗りま

したよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見

つめているとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。

ここだと思つて力を込めて一反いったん飛び上がっておいて、

そして小石か何ぞのようになく落ちてしまいま

した」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかった」と迷亭が自分の鼻の頭をちよいとつまむ。

「飛び込んだ後あとは気が遠くなって、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、ど



こも濡れた所ぬも何もない、水を飲んだような感じも

しない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。

こりや変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きま

したね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、

つい間違つて橋の真中へ飛び下りたので、その時は

実に残念でした。前と後ろうしの間違だけであの声の出

る所へ行く事が出来なかったのです」寒月はにやに

や笑いながら例のごとく羽織の紐ひもを荷厄介にやっかいにしている。  
る。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ている  
ところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。  
人間の感応と云う題で写生文にしたらきつと文壇を  
驚かすよ。……そしてその○○子さんの病気はどう  
なったかね」と迷亭先生が追窮する。

にさんちまえ

「二三日前年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いていましたから病氣は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の体であつたが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ氣を出す。

「あるって、何があるんだい」迷亭の眼中に主人な

どは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合あんごうで妙ですな」と寒月が笑う。

欠けた前歯のうちに空也餅くうやもちが着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも二十日頃はつかだよ。細君

が御歳暮の代りに摂津大掾を聞かしてくれろと云うせつったいじょう

から、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物

は何だと聞いたら、細君が新聞を参考して鰻谷だうなぎだにと

云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとその日

はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持っ

て来て今日は堀川ほりかわだからいいでしょうと云う。堀川

は三味線もので賑みやかなばかりで実みがないからよそ

うと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった

。その翌日になると細君が云うには今日は三十三間

堂です、私は是非<sup>せつ</sup>撰津の三十三間堂が聞きたい。あ

なたは三十三間堂も御嫌いか知らないが、私に聞か  
せるのだからいっしょに行つて下すつても宜<sup>い</sup>いでし

ようと手詰<sup>てづめ</sup>の談判をする。御前がそんなに行きたい

なら行つても宜<sup>よ</sup>ろしい、しかし一世一代と云うので

大變な大入だから到底突懸<sup>とうていつつか</sup>けに行つたつて這<sup>はい</sup>入れる

きづか  
氣遣いはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と

云うものが在<sup>あ</sup>ってそれと交渉して相当の席を予約す

るのが正当の手続きだから、それを踏まないで常規

を脱した事をするのはよくない、残念だが今日はや

めようと云うと、細君は凄<sup>すご</sup>い眼付をして、私は女で

すからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、

大原のお母あさんも、鈴木<sup>鈴木</sup>の君代さんも正当の手続

きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いく

らあなたが教師だからって、そう手<sup>てすう</sup>数のかかる見物

をしないでもすみましよう、あなたはあんまりだと

泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事

にしよう。晩飯をくって電車で行こうと降参をする

と、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくつ

ちやいけません、そんなぐずぐずしてはいられませ



んと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行つて場所をとらなくちや這入れないからですと鈴木の君代さんから教えられた通りを述べる。それじや四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不思議な事にはその時から急に悪寒おかんがし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴんぴんしていらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に萎縮いしゆくする感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困つた事になった。細君が年に一度の願だか

らは是非叶かなえてやりたい。平生叱りつけたり、口を聞

かなかつたり、身上しんしょうの苦勞をさせたり、小供の世話

をさせたりするばかりで何一つ洒掃薪水さいそうしんすいの勞に酬むくい

た事はない。今日は幸い時間もある、囊中のうちゆうには四五

枚の堵物とぶつもある。連れて行けば行かれる。細君も行

きたいだろう、僕も連れて行つてやりたい。是非連

れて行つてやりたいがこう悪寒がして眼がくらんで

は電車へ乗るところか、靴脱くつぬぎへ降りる事も出来ない。

ああ気の毒だ気の毒だと思うとなお悪寒がしてなお眼がくらんでくる。早く医者に見てもらって服薬で

もしたら四時前には全快するだろうと、それから細

あまき

君と相談をして甘木医学士を迎いにやると生憎昨夜

あいにくゆうべ

が当番でまだ大学から帰らない。二時頃には御帰り

になりますから、帰り次第すぐ上げますと云う返事

きょうにんすい

である。困ったなあ、今杏仁水でも飲めば四時前に

なお

きま

はきつと癒るに極っているんだが、運の悪い時には

何事も思うように行かんもので、たまさか妻君の喜

はず

ぶ笑顔を見て楽もうと云う予算も、がらりと外れそ

うら

うになつて来る。細君は恨めしい顔付をして、到底

とうてい

いらつしやれませんかと聞く。行くよ必ず行くよ

。四時までにはきつと直つて見せるから安心してい

るがいい。早く顔でも洗って着物でも着換えて待っているがいい、と口では云ったようなものの胸中は無限の感慨である。悪寒はますます劇はげしくなる、眼はいよいよよぐらぐらする。もしや四時までに全快して約束を履行りこうする事が出来なかったら、気の狭い女の事だから何をするかも知れない。情なさけない仕儀になつて来た。どうしたら善かろう。万一の事を考え

ると今の内に有為ういてんぺん轉變の理、生者しょうじゃひつめつ必滅の道を説き聞

かして、もしもの変が起つた時取り乱さないくらい

の覺悟をさせるのも、夫おつとの妻つまに対する義務ではある

まいかと考え出した。僕は速すみやかに細君を書斎へ呼ん

だよ。呼んで御前は女だけれども many a

slip 't wixt the cup and

the lip と云う西洋の諺ことわざくらいは心得て

いるだろうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知る  
もんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存  
じの癖にわざと英語を使って人にからかうのだから、  
宜しゅうございます、どうせ英語なんかは出来ない  
んですから、そんなに英語が御好きなら、なぜ耶蘇<sup>ヤソ</sup>が  
学校の卒業生かなんかをお貰いなさらなかったんで  
す。あなたくらい冷酷な人はありはしないと非常な



権幕<sup>けんまく</sup>なんで、僕もせつかくの計画の腰を折られてし

まった。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意

で使った訳じゃない。全く妻<sup>さい</sup>を愛する至情から出た

ので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬が

ない。それにさつきからの悪寒<sup>おかん</sup>と眩暈<sup>めまい</sup>で少し脳が乱

れていたところへもって来て、早く有為転変、生者

必滅の理を呑み込ませようと少し急<sup>せ</sup>ぎ込んだものだ

から、つい細君の英語を知らないと云う事を忘れて、何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えるところは僕が悪<sup>わ</sup>るい、全く手落ちであつた。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐらぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行つて両<sup>もろ</sup>肌を脱いで御化粧をして、箆<sup>たんす</sup>笥から着物を出して着換える。もういつでも出掛けられますと云う風情<sup>ふぜい</sup>で待ち構え

ている。僕は気が気でない。早く甘木君が来てくれれば善いがと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しかない。「そろそろ出掛けましようか」と妻君が書斎の開き戸を明けて顔を出す。自分の妻を褒め<sup>さいほ</sup>めるのはおかしいようであるが、僕はこの時ほど細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脱いで石鹼で磨<sup>みが</sup>き上げた皮膚がぴかついて黒縮<sup>くろちり</sup>

緬<sup>めん</sup>の羽織と反映している。その顔が石鹼と撰津大掾<sup>せつただいじよう</sup>

を聞こうと云う希望との二つで、有形無形の両方面から輝やいて見える。どうしてもその希望を満足させて出掛けてやろうと云う氣になる。それじゃ奮発して行こうかな、と一ぷくふかしているとようやく甘木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が容体をはなすと、甘木先生は僕の舌を眺<sup>なが</sup>めて、手を握つ

て、胸をたた叩いて背を撫なでて、目縁まぶちを引つ繰り返して、

頭蓋骨ずがいこつをさすつて、しばらく考え込んでいる。「ど

うも少しけんのん陰呑のような気がしまして」と僕が云うと、

先生は落ちついて、「いえ格別の事もございませんま  
い」と云う。「あのちよつとくらい外出致しても差さし

支つかえはございますまいね」と細君が聞く。「さよう」

と先生はまた考え込む。「御気分さえ御悪くなければ

ば……」 「気分は悪いですよ」と僕がいう。 「じゃ

ともかくも頓服とんぷくと水薬すいやくを上げますから」 「へえどう

か、何だかちと、危あぶないようになりそうですな」 「

いや決して御心配になるほどの事じゃございません、  
神経を御起しになるといけませんよ」と先生が帰る。

三時は三十分過ぎた。下女を薬取りにやる。細君の

厳命で馳かけ出して行つて、馳かけ出して返ってくる

。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある

。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無かつ

たのに、急に嘔はきけ氣もよを催おして來た。細君は水藥すいやくを茶

碗へ注ついで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り

上げて飲もうとすると、胃の中からげーと云う者が

吶とっかん喊して出てくる。やむをえず茶碗を下へ置く。細

君は「早く御飲おのみになつたら宜いいでしよう」と逼せまる。

早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思い切  
って飲んでしまおうとまた茶碗を唇へつけるとまた  
ゲーが執念深く妨害をする。しゅうねんぶか飲もうとしては茶碗を  
置き、飲もうとしては茶碗を置いていると茶の間の  
柱時計がチンチンチンと四時を打った。さあ四  
時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り上げ  
ると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事だろ



う、四時の音と共に吐<sup>は</sup>き気<sup>け</sup>がすっかり留<sup>とど</sup>まつて水薬  
が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃にな  
ると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事  
が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐ  
らぐらするのも夢のように消えて、当分立つ事も出  
来まいと思つた病気がたちまち全快したのは嬉しか  
つた」

「それから歌舞伎座へいっしょに行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかつたが四時を過ぎちや、這<sup>はい</sup>入れないと云

う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。

もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の

義理も立つし、妻<sup>さい</sup>も満足したろうに、わずか十五分

の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶな

いところだったと今でも思うのさ」

おわ

語り了った主人はようやく自分の義務をすました  
ような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云  
う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた歯を出して笑いながら「  
それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な夫を  
おっと

持った妻君は実に仕合せだな」と独り言ひとことのようにな

う。障子の蔭でエヘンと云う細君せきばらの咳払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていた  
がおかしくも悲しくもなかった。人間というものは  
時間を潰つぶすために強しいて口を運動させて、おかしく  
もない事を笑ったり、面白くもない事を嬉しがった

りするほかに能もない者だと思った。吾輩の主人の

わがまま　へんきよう

我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言

ふだん

葉数を使わないので何だか了解しかねる点があるよ

うに思われていた。その了解しかねる点に少しは恐

しいと云う感じもあつたが、今の話を聞いてから急

けいべつ

に軽蔑したくなつた。かれはなぜ兩人の話しを沈黙

して聞いていられないのだろう。負けぬ氣になつて

愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだろう。

エピクテタスにそんな事をしろと書いてあるのか知

らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で

、彼等は糸瓜へちまのごとく風に吹かれて超然と澄すまし切つ

ているようなものの、その実はやはり娑婆しやば気もあり

慾よく気もある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が

日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一歩進め

ば彼等が平常罵倒ばとうしている俗骨共ぞつこつどもと一つ穴の動物に

なるのは猫より見て気の毒の至りである。ただその

言語動作が普通の半可通はんかつうのごとく、文切り形もんきの厭味がた

を帯びてないのはいささかの取り得とえでもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなつた

ので、三毛子の様子でも見て来きようかと二絃琴にげんきんの御

師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾かどまつしめかざりはすでに取り

払われて正月も早はや十日となつたが、うららかな春は

るび

日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度

に照らして、十坪に足らぬ庭の面おもも元日の曙光しょうこうを受

けた時より鮮あざやかな活気を呈している。椽側ぎぶとんに座蒲団

が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてある

のは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師

匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜いい方



か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合もけわい

しないから、泥足のまま椽側えんがわへ上あがって座蒲団の真中

へ寝転ねころんで見るといい心持ちだ。ついうとうとと

して、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると  
急に障子のうちで人声がする。

「御苦労だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり  
留守ではなかったのだ。

「はい遅くなりましたして、仏師屋へ参りましたらちよ

うど出来上ったところだと申しまして」「どれお見

せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かば

れましょう。金は剥げる事はあるまいね」「ええ念

を押しましたら上等を使つたからこれなら人間の位

牌よりも持つと申しておりました。……それから猫

誉信女の誉の字は崩した方が恰好がいいから少し劃

を易<sup>か</sup>えたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変わたと蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫誉信女、南無

阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

「御前も回向<sup>えこう</sup>をしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と

今度は下女の声がする。吾輩は急に動悸どうきがして来た。座蒲団の上に立つたまま、木彫きぼりの猫のように眼も動かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪かぜを引いたんでございましょうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかったかも知れないよ

」「一体あの甘木さんが悪うございますよ、あんま

り三毛を馬鹿にし過ぎまさあね」 「そう人様ひとさまの事を

悪く云うものではない。これも寿命じゅみょうだから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫のらねこが無暗むやみ

に誘い出したからだと、わたしは思うよ」 「ええあ

の畜生ちぎしょうが三毛のかたきでございますよ」

少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころと  
唾を呑んで聞いている。話しはしばし途切れる。<sup>つば</sup>  
<sup>とぎ</sup>

「世の中は自由にならん者でのう。三毛のような器

量よしは早死をするし。<sup>はやしに</sup>不器量な野良猫は達者でい

たずらをしているし……」  
「その通りでございます

よ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探して

あるいたって、<sup>ふたり</sup>二人とはおりませんからね」

二匹と云う代りに二ふたりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思つてゐるらしい。そう云えばこの下女の顔は吾等猫属ねこぞくとはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」 「あの教師の所の野良のらが死ぬと御誂おあつらえ通りに参つたんでございませうがねえ」

御誂え通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事

はどんなものか、まだ経験した事がないから好きと

も嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺ひけしつぼ

の中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも

知らんで上から蓋ふたをした事があつた。その時の苦し

さは考えても恐しくなるほどであつた。白君の説明

によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬのであるそ



うだ。三毛子の身代りみがわになるのなら苦情もないが

、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのな  
ら、誰のためでも死にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらったり

、かいみよう戒名をこしらえてもらったのだから心残りはある

まい」「そうでございますとも、全く果報者かほうものでござ

いますよ。ただ慾を云うとあの坊さんの御経があま

り軽少だったようでございますね」「少し短か過ぎ  
たようだったから、大變御早うございますねと御尋  
ねをしたら、月桂寺さんげっけいじは、ええ利目ききめのあるところ  
をちよいとやっておきました、なに猫だからあのく  
らいで充分浄土へ行かれますとおっしゃったよ」「  
あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、こ

の下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつて浮かばれる事はございませんよ」

吾輩はその後野良ごが何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を途中で聞き棄てて

、布団ふとんをすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万

八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震みぶるいをした。

その後二絃琴ごにげんきんの御師匠さんの近所へは寄りついた事

がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽

少な御回向ごえこうを受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵ものうく

感ぜらるる。主人に劣らぬほどの無性猫ぶしょうねことなつた

。主人が書齋にのみ閉じ籠こもっているのを人が失恋だ

失恋だと評するのも無理はないと思うようになった。

ねずみ

鼠はまだ取った事がないので、一時は御三おさんから放ほう

ちくろん

ていしゅつ

逐論さえ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普

通一般の猫でないと云う事を知っているものだから

吾輩はやはりのらくらしてこの家やに起臥きがしている

。この点については深く主人の恩を感謝すると同時

かつがん

にその活眼かつがんに対して敬服の意を表するに躊躇ちゅうちよしない

つもりである。御三が吾輩を知らずして虐待をするのは別に腹も立たない。今に左甚五郎ひだりじんごろうが出て来て

吾輩の肖像を楼門ろうもんの柱に刻きざみ、日本のスタンラン

が好んで吾輩の似顔をカンヴァスの上に描えがくように

なったら、彼等鈍瞎漢どんかつかんは始めて自己の不明を恥はずる

であらう。

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂寞せきばく

の感はあるが、幸い人間に知己ちぎが出来たのでさほど

退屈とも思わぬ。せんだっては主人の許もとへ吾輩の写

真を送ってくれと手紙で依頼した男がある。この間

は岡山の名産吉備きび団子だんごをわざわざ吾輩の名宛で届け

てくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるるに従つて、己おのれが猫である事はようやく忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近まして来たような心持になつて、同族を糾合きゆうごうして二本足の先生と雌雄しゆうを決しようなどと云いう量見は昨今のところ毛頭もうとうない。それのみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたの



もしい。あえて同族を輕蔑けいべつする次第ではない。ただ

性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢いきおいの

しからしむるところで、これを変心とか、輕薄とか、

裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言

語を弄ろうして人を罵詈ばりするものに限つて融通の利きかぬ

貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して

見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介にやうにしている訳に

は行かん。やはり人間同等の氣位きぐらいで彼等の思想、言

行を評隲ひようしつしたくなる。これも無理はあるまい。ただ

そのくらいな見識を有している吾輩をやはり一般猫びよ

児うじの毛の生はえたものくらいに思つて、主人が吾輩に

一言いちごんの挨拶もなく、吉備団子きびだんごをわが物顔に喰い尽し

たのは残念の次第である。写真もまだ撮とつて送らぬ

容ようす子だ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、

吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異ことなるのは致し方もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすましているのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に上りのぼにくい。迷亭、寒月諸先生の評判だけで御免蒙まこうむる事に致そう。

今日は上天気の日曜なので、主人はのそのそ書斎から出て来て、吾輩の傍そばへ筆硯ふですずりと原稿用紙を並べて

腹這はらばいになつて、しきりに何か唸うなっている。大方草稿

を書き卸おろす序開じよびらきとして妙な声を発するのだらうと

注目していると、ややしばらくして筆太ふでぶとに「香一炷かういつしゆ」

とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一

炷とは、主人にしては少し洒落過しやれぎているがと思う

間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行ぎんよう

を改めて「さつきから天然居士てんねんこじの事をかこうと考え

ている」と筆を走らせた。筆はそれだけではたと留  
ったぎり動かない。主人は筆を持って首を捻ひねったが  
別段名案もないものと見えて筆の穂を嘗なめだした

唇が真黒になつたと見ていると、今度はその下へ  
ちよいと丸をかいた。丸の中へ点を二つうつて眼を  
つける。真中へ小鼻の開いた鼻をかいて、真一文字  
に口を横へ引張った、これでは文章でも俳句でもな

い。主人も自分で愛想あいそが尽きたと見えて、そこそこ

に顔を塗り消してしまった。主人はまた行ぎょうを改める。

彼の考によると行さえ改めれば詩か賛か語か録か何なんかになるだろうとただ宛あてもなく考えているらしい

。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を読み

、焼芋やきいもを食はい、鼻汁はなを垂らす人である」と言文一致

体で一気呵成いっきかせいに書き流した、何となくごたごたした

文章である。それから主人はこれを遠慮なく朗読して、いつになく「ハハハハ面白い」と笑ったが「鼻<sup>は</sup>汁<sup>な</sup>を垂らすのは、ちと酷<sup>こく</sup>だから消そう」とその句だけへ棒を引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な併<sup>へい</sup>行<sup>こう</sup>線<sup>せん</sup>を描<sup>か</sup>く、線がほかの行<sup>ぎょう</sup>まで食<sup>は</sup>み出しても構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出来ないと見えて、今度は筆を捨てて髭<sup>ひげ</sup>を捻<sup>ひね</sup>つ

て見る。文章を髭から捻り出して御覧に入れますと

けんまく

云う見幕で猛烈に捻ってはねじ上げ、ねじ下ろして

いるところへ、茶の間から妻君さいくんが出て来てぴたりと

主人の鼻の先へ坐すわる。「あなたちよつと」と呼ぶ。

「なんだ」と主人は水中で銅鑼どらを叩たたくような声を出

す。返事が気に入らないと見えて妻君はまた「あな

たちよつと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の



穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと抜く。「  
今月はちつと足りませんが……」 「足りんはずはな  
い、医者へも薬礼はすましたし、本屋へも先月払つ  
たじゃないか。今月は余らなければならん」とすま  
して抜き取った鼻毛を天下の奇観のごとく眺<sup>なが</sup>めてい  
る。「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵<sup>パン</sup>麩<sup>を</sup>  
御<sup>お</sup>食<sup>た</sup>べになつたり、ジャムを御<sup>お</sup>舐<sup>な</sup>めになるものです

から」 「元来ジャムは幾缶舐めたのかい」 「今月は

八つ入りいしましたよ」 「八つ？ そんなに舐めた覚え

はない」 「あなたばかりじゃありません、子供も舐

めます」 「いくら舐めたって五六円くらいなものだ」

と主人は平気な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が付いているのでぴんと針を立て

たごとくに立つ。主人は思わぬ発見をして感じ入っ

た体で、ふっと吹いて見る。ねんちやくりよく粘着力が強いので決し

て飛ばない。「いやに頑固がんこだな」と主人は一生懸命

に吹く。「ジャムばかりじゃないんです、ほかに買

わなけりや、ならない物もあります」と妻君はおおい大に

不平な気色けしきを両頬みなぎに漲らす。「あるかも知れないさ」

と主人はまた指を突っ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤

いのや、黒いのや、種々の色まじが交る中に一本真白な

のがある。大に驚いた様子で穴の開くほど眺めていた主人は指の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の手を突き戻す。「ちよつと見ろ、鼻毛の白髪だ」と主人は大に感動した様子である。さすがの妻君も笑いながら茶の間へ這入る。経済問題は断念したらしい。主人はまた天然居士に取り懸る。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心と

云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこうと焦るあせ

体であるがなかなか筆は動かない。てい「焼芋を食うも

蛇足だ、割愛しよう」とついにこの句も抹殺するだそくかつあいまっさつ

。「香一炷もあまり唐突だから已めろ」と惜気もなとうとつや

く筆誅する。ひつちゅう余す所は「天然居士は空間を研究し論

語を読む人である」と云う一句になってしまった

。主人はこれでは何だか簡単過ぎるようだなと考え

ていたが、ええ面倒臭い、文章は御廃おはいしにして、銘

だけにしろと、筆を十文字に揮ふるって原稿紙の上へ下

手な文人画の蘭を勢よくかく。せっかくの苦心も一

字残らず落第となった。それから裏を返して「空間

に生れ、空間を究きわめ、空間に死す。空たり間またり天て

然居士噫んねんこじああ」と意味不明な語を連つらねているところへ例

のごとく迷亭が這入<sup>はい</sup>つて来る。迷亭は人の家も自分<sup>うち</sup>

の家も同じものと心得ているのか案内も乞わず、ず

かずか上<sup>あ</sup>つてくる、のみならず時には勝手口から飄<sup>ひよ</sup>

然<sup>うぜん</sup>と舞い込む事もある、心配、遠慮、気兼<sup>きがね</sup>、苦勞

、を生れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立ったまま主人に聞く。「

そう、いつでも巨人引力ばかり書いてはおらんさ

天然居士の墓銘を撰せんしているところなんだ」と大

おげさ

袈裟な事を云う。「天然居士と云うなあやはり偶然

童子のような戒名かね」と迷亭は不相変出鱈目あいかわらずでたらめを云

う。「偶然童子と云うのもあるのかい」「なに有り

やしないがまずその見当けんとうだろうと思つていらあね

」「偶然童子と云うのは僕の知つたものじゃないよ

うだが天然居士と云うのは、君の知つてる男だぜ



「一体だれが天然居士なんて名を付けてすまして

いるんだい」 「例の曾呂崎そろさきの事だ。卒業して大学院

へ這入って空間論と云う題目で研究していたが、あ

まり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂崎

はあれでも僕の親友なんだからな」 「親友でもいい

さ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を

天然居士に変化させたのは一体誰の所作しよさだい」 「僕

さ、僕がつけてやったんだ。元来坊主のつける戒名

ほど俗なものは無いからな」と天然居士はよほど雅<sup>が</sup>

な名のように自慢する。迷亭は笑いながら「まあそ

の墓碑銘<sup>ぼひめい</sup>と云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて

「何だ……空間に生れ、空間を究め<sup>きわ</sup>、空間に死す

。空たり間たり天然居士噫<sup>あゐ</sup>」と大きな声で読み上る<sup>あげ</sup>。

「なるほどこりやあ善<sup>い</sup>い、天然居士相当のところだ」

主人は嬉しそうに「善いだろう」と云う。「この墓ぼ

銘めいを沢庵石たくあんいしへ彫ほり付けて本堂の裏手ちからいしへ力石ちからいしのように

抛ほうり出して置くんだね。雅がでいいや、天然居士も浮

かばれる訳だ」「僕もそうしようと思っっているのさ」

と主人は至極真面目しごくまじめに答えたが「僕あちよつと失敬

するよ、じき帰るから猫にでもからかっていてくれ

給え」と迷亭の返事も待たず風然ふうぜんと出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想ぶあいそ

な顔もしていられないから、ニヤーニヤーと愛嬌あいきょうを

振り蒔まいて膝ひざの上へ這はい上あがつて見た。すると迷亭は

「イヨー大分肥だいぶんったな、どれ」と無作法ぶさほうにも吾輩の

襟髪えりがみを攫つかんで宙へ釣つるす。「あと足をこうぶら下げ

ては、鼠ねずみは取れそうもない、……どうです奥さんこ

の猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だ

と見えて、隣りの室の妻君へやに話しかける。「鼠どこ

ろじゃございません。御雑煮おぞうにを食べて踊りをおどる

んですもの」と妻君は飛んだところで旧悪を暴くあば

吾輩は宙乗りちゅうのをしながらも少々極りが悪かった

。迷亭はまだ吾輩を卸おろしてくれない。「なるほど踊

りでもおどりそうな顔だ。奥さんこの猫は油断のな

らない相好そうごうですぜ。昔むかしの草双紙くさぞうしにある猫ねこ又またに似て

いますよ」と勝手な事を言いながら、しきりに細君さいくんに話しかける。細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注つぎ易かえて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ参るにも断わって行つた事の無い男ですか  
ら分りかねますが、大方御医者へでも行つたんでし

よう」　「甘木さんですか、甘木さんもあるな病人に

捕ま<sup>つら</sup>つちや災難ですな」　「へえ」と細君は挨拶のし

ようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭は一向<sup>いっこう</sup>

頓着しない。「近頃はどうぞ、少しは胃の加減が

能<sup>い</sup>いんですか」　「能<sup>い</sup>いか悪いか頓<sup>とん</sup>と分りません、い

くら甘木さんにかかったって、あんなにジャムばか

り嘗<sup>な</sup>めては胃病の直る訳がないと思います」と細君

は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。せんごく「そんなにジャムを嘗めるんですかまるで小供のようですね」

「ジャムばかりじゃないんで、この頃は胃病の薬だとか

云つて大根卸しを無暗に嘗めますので……」だいこおろ「驚ろ

いたな」と迷亭は感嘆する。むやみ「何でも大根卸の中に

はジャスターゼが有るとか云う話を新聞で読んで

からです」つぐな「なるほどそれでジャムの損害を償おう



と云う趣向ですな。なかなか考えていらあハハハハ」

と迷亭は細君の訴うったえを聞いて大おおに愉快けしきな気色である

。「この間などは赤ん坊にまで嘗めさせまして……」

「ジャムをですか」 「いいえ大根卸だいこおろしを……あなた

坊や御父様がうまいものをやるからおいででって、

——たまに小供を可愛がつてくれるかと思うとそん

な馬鹿な事ばかりするんです。にさんちまえ 二三日前には中の娘

を抱いて箆笥たんすの上へあげましてね……」 「どう云う

趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づく

めに解釈する。「なに趣向も何も有りやしません

、ただその上から飛び下りて見ろと云うんですわ

、三つや四つの女の子ですもの、そんな御転婆おてんばな事

が出来るはずがないです」「なるほどこりや趣向が

無さ過ぎましたね。しかしあれで腹の中は毒のない

善人ですよ」「あの上腹の中に毒があっちゃ、辛防<sup>しんぼう</sup>

は出来ませんわ」と細君は<sup>おおい</sup>大に<sup>きえん</sup>気焰を揚げる。「ま

あそんなに不平を云わんでも善いでさあ。こうやつ

て不足なくその日その日が暮らして行かれれば上<sup>じょう</sup>の

分<sup>ぶん</sup>ですよ。苦沙弥君<sup>くしゃみくん</sup>などは道楽はせず、服装にも構

わず、地味に世帯向<sup>しよたいむ</sup>きに出来上った人でさあ」と迷

亭<sup>がら</sup>は柄にない説教を陽気な調子でやっている。「と

ころがあなた大違いで……」 「何か内々でやります

かね。油断のならない世の中だからね」と飄然ひようぜんとふ

わふわした返事をする。「ほかの道楽はないですが、

無暗むやみに読みもしない本ばかり買いましたね。それも

善い加減に見計みはからって買ってくれと善いんですけ

れど、勝手に丸善へ行っちゃ何冊でも取って来て

、月末になると知らん顔をしているんですもの、去

年の暮なんか、月々のが溜たまつて大變困りました」「

なあに書物なんか取つて来るだけ取つて来て構わん

ですよ。払いをとりに来たら今にやる今にやると云

つていりや歸つてしまいまさあ」「それでも、そう

いつまでも引張る訳にも参りませんから」と妻君は

懽然ふぜんとしている。「それじゃ、訳を話して書籍費しよじやくひを

削減させるさ」「どうして、そんな言ことを云つたって、

なかなか聞くものですか、この間などは貴様は学者

さい

の妻にも似合わん、毫ごうも書籍しよじやくの価値を解しておらん、

むか

ローマ

昔し羅馬にこう云う話がある。後学のため聞いて

おけと云うんです」「そりや面白い、どんな話しで

すか」「迷亭は乗気になる。細君に同情を表している

というよりむしろ好奇心に駆かられている。「何んで

ローマ

たるきん

も昔し羅馬に樽金とか云う王様があつて……」「樽たる

金きん？

樽金はちと妙ですぜ」 「私は唐人とうじんの名なんか

むずかしくて覚えられませんわ。何でも七代目なんだそうです」 「なるほど七代目樽金は妙ですな。ふんその七代目樽金がどうかしましたかい」 「あら

、あなたまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知っていらっしやるなら教えて下さればいいじやありませんか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食って掛る。

「何冷かすなんて、そんな人の悪い事をする僕じゃない。ただ七代目樽金は振ふるつてると思つてね……ええお待ちなさいよ羅馬ローマの七代目の王様ですね、こうつとたしかには覚えていないがタークイン・ゼ・プ  
ラウドの事でしよう。まあ誰でもいい、その王様が  
どうしました」「その王様の所へ一人の女が本を九  
冊持つて来て買つてくれないかと云つたんだそうで



す」「なるほど」「王様がいくらなら売るといつて聞いたら大変な高い事を云うんですって、あまり高いもんだから少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて焚やいてしまったそうです」「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かほかで見られない事が書いてあるんですって」「へえー」「王様は九冊が六冊になったか

ら少しは価<sup>ね</sup>も減つたろうと思つて六冊でいくらだと

聞くと、やはり元の通り一文も引かないそうです

、それは乱暴だと云うと、その女はまた三冊をとつ

て火にくべたそうです。王様はまだ未練があつたと

見えて、余つた三冊をいくらで売ると聞くと、やは

り九冊分のねだんをくれと云うそうです。九冊が六

冊になり、六冊が三冊になつても代価は、元の通り

一厘も引かない、それを引かせようとすると、残つてゐる三冊も火にくべるかも知れないので、王様はとうとう高い御金を出して焚<sup>や</sup>け余<sup>あま</sup>りの三冊を買つたんですって……どうだこの話で少しは書物のありがた味<sup>み</sup>が分つたろう、どうだと力味<sup>りき</sup>むのですけれど、私にや何があるがたいんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促<sup>うな</sup>がす

。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、袂たもとからハン

ケチを出して吾輩をじやらしていたが「しかし奥さ

ん」と急に何か考えついたように大きな声を出す

。「あんなに本を買って矢鱈やたらに詰め込むものだから

人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ

。この間ある文学雑誌を見たらくしやみくん苦沙弥君の評が出て

いましたよ」「ほんとに？」と細君は向き直る。主

人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える

。「何とかいてあつたんです」「なあに二三行ばか

りですがね。苦沙弥君の文は行雲流水のごとしとあ

りましたよ」細君は少しにこにこして「それぎりで

すか」「その次にね——出ずるかと思えば忽ち消え、  
たちま

逝ゆいては長えに帰るを忘るとありましたよ」細君は  
とこしな

妙な顔をして「賞ほめたんでしようか」と心元ない調

子である。「まあ賞めた方でしような」と迷亭は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方もござんすまいが、よつぽど偏<sup>へん</sup>屈<sup>くつ</sup>でしてねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙答をする。「せんだって

などは学校から帰ってすぐわきへ出るのに着物を着

換えるのが面倒だものですから、あなた外套も脱が

がいとう

ないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳

おぜん

を火燧櫓の上へ乗せまして——私は御櫃を抱えて坐

こたつやぐら

おはち

かか

っておりましたがおかしくって……」「何だかハイ

カラの首実検のようですな。しかしそんなところが

苦沙弥君の苦沙弥君たるところで——とにかく月並

つきなみ

でない」と切<sup>せつ</sup>ない褒<sup>ほ</sup>め方をする。「月並か月並でな

いか女には分りませんが、なんぼ何でも、あまり乱暴ですわ」「しかし月並より好いですよ」と無暗に加勢すると細君は不満な様子で「一体、月並月並と皆さんが、よくおっしゃいますが、どんなのが月並なんです」と開き直って月並の定義を質問する、「月並ですか、月並と云うと――さようちと説明しに



くいのですが……」 「そんな曖昧あいまいなものなら月並だ

って好きそうなものじゃありませんか」 と細君は女によ

人にん一流の論理法で詰め寄せる。 「曖昧じゃありません

んよ、ちゃんと分っています、ただ説明しにくいだ

けの事でさあ」 「何でも自分の嫌いな事を月並と云

うんでしよう」 と細君は我われ知らず穿うがった事を云う

。迷亭もこうなると何とか月並の処置を付けなければ

ばならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云うのはね、

まず年は二八か二九からぬと言わず語らず物思いの

間に寝転あいだんでいて、この日や天気晴朗とくると必ず

一瓢を携えて墨堤に遊ぶ連中れんじゅうを云うんです」「そん

な連中があるでしょうか」と細君は分らんものだから

好いい加減な挨拶をする。「何だかごたごたして私に

は分りませんわ」とついに我がを折る。「それじゃ馬ば

きん  
琴の胴へメジヨオ・ペンデニスの首をつけて一二年

欧州の空気で包んでおくんですね」「そうすると月

並が出来るでしょうか」「迷亭は返事をしないで笑っ

ている。「何そんな手数てすうのかかる事をしないでも出

来ます。中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で

割ると立派な月並が出来上ります」「それでしよう

か」と細君は首を捻ひねったまま納得なつとくし兼ねたと云う風ふう

情せいに見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの間まにやら帰って

来て迷亭の傍そばへ坐すわる。「まだいるのかはちと酷こくだ

な、すぐ帰るから待ってい給えと言ったじやないか」

「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧かえりみる

。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまっ

たぜ」「女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫く

らい沈黙を守るといいがな」と主人は吾輩の頭を撫な

でてくれる。「君は赤ん坊に大根卸しを嘗なめさした

そうだな」「ふむ」と主人は笑ったが「赤ん坊でも

近頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や

辛いのはどこと聞くときつと舌を出すから妙だ」「

まるで犬に芸を仕込む氣でいるから残酷だ。時に寒かん

月げつはもう来そうなものだな」「寒月が来るのかい

」と主人は不審な顔をする。「来るんだ。午後一時

までに苦沙弥くしやみの家へ来いと端書はがきを出しておいたから」

「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を

呼んで何をするんだい」「なあに今日のはこっちの

趣向じゃない寒月先生自身の要求さ。先生何でも理

学協会で演説をするとか云うのでね。その稽古をや

るから僕に聴いてくれと云うから、そりやちようど

いい苦沙弥にも聞かしてやろうと云うのでね。そこ

で君の家へ呼ぶ事うちにしておいたのさ——なあに君は

ひま人だからちようどいいやね——差支さしつかえなんぞあ

る男じゃない、聞くがいいさ」と迷亭は独ひとりで呑み

込んでいる。「物理学の演説なんか僕にや分らん

」と主人は少々迷亭の専断せんだんを憤いきどおったもののごとくに

云う。「ところがその問題がマグネ付けられたノツ

ズルについてなどと云う乾燥無味なものじゃないん

だ。首<sup>、</sup>縊<sup>、</sup>りの<sup>、</sup>力<sup>、</sup>学<sup>、</sup>と云う脱俗超凡<sup>だつぞくちやうぼん</sup>な演題なのだから

傾聴する価値があるさ」 「君は首を<sup>く</sup>縊<sup>そ</sup>り損<sup>そ</sup>くなつた

男だから傾聴するが好いが僕なんざあ……」 「歌舞

伎座で悪寒<sup>おかん</sup>がするくらいの人間だから聞かれないと

云う結論は出そうもないぜ」と例のごとく軽口を叩

く。妻君はホホと笑って主人を<sup>かえり</sup>顧みながら次の間へ



退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫なでる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演舌えんぜつをするといふので例になく立派なフロツクを着て、洗濯し立ての白襟カラーを聳そびやかして、男振りを二割方上げて、「少し後おくれまして」と落ちつき払つて、挨拶をする。「さつきから二人で大待

ちに待ったところなんだ。早速願おう、なあ君」と

主人を見る。主人もやむを得ず「うむ」と生返事をなまへんじ

する。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂

戴しましょう」と云う。「いよー本式にやるのか次

には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は独

りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠うちかくしから草稿を取り出

して徐ろおもむに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願

います」と前置をして、いよいよ演舌の御浚おさらいを始める。

「罪人を絞罪こうざいの刑に処すると云う事は重おもにアングロ

サクソン民族間に行われた方法でありまして、それ

より古代に溯さかのぼって考えますと首縊くびくりは重に自殺の方

法として行われた者であります。猶太人中ユダヤじんちゆうに在あって

は罪人を石を抛なげつけて殺す習慣であつたそうでご

ざいます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハ

ンギングなる語は罪人の死体を釣るして野獸または

肉食鳥の餌食とする意義と認められます。ヘロドタ

スの説に従つて見ますと猶太人はエジプトを去る以

前から夜中死骸を曝やちゆうされることを痛く忌さいみ嫌つたよ

うに思われます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴

だけを十字架に釘付けくぎづにして夜中曝し物にしたそう

で御座います。波斯人ペルシャじんは……」 「寒月君首縊りと縁

がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「これから本論に這はい入るところですか

ら、少々御辛防ごしんぼうを願います。……さて波斯人はどう

かと申しますとこれもやはり処刑には磔はりつけを用いたよ

うでございます。但し生きているうちに張付けはりつけに致

したもののか、死んでから釘を打ったもののかその辺へんは

ちと分りかねます……」 「そんな事は分らんでもい

いさ」と主人は退屈そうに欠伸あくびをする。「まだいろ

いろ御話し致したい事もございますが、御迷惑であ  
らっしやいましょうから……」 「あらっしやいまし

ようより、いらっしやいましょうの方が聞きいいよ、

ねえ苦沙弥君くしやみくん」 とまた迷亭が咎め立とがだてをすると主人は

「どっちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。「

さていよいよ本題に入りまして弁じます」「弁じま

すなんか講釈師の云い草だ。演舌家はもつと上品な

詞を使つて貰いたいね」と迷亭先生また交ぜ返す

。「弁じます、が下品なら何と云つたらいいでしょう」

と寒月君は少々むつとした調子で問いかける。「迷

亭のは聴いているのか、交ぜ返しているのか判然し

ない。寒月君そんな弥次馬やじうまに構わず、さつさとやる

が好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むっとして弁じましたる柳かな、かね

」と迷亭はあいかわらず飄然ひょうぜんたる事を云う。寒月は

思わず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いまし

たのは、私の調べました結果によりますると、オデ

イセーの二十二巻目に出ております。すなわ即ち彼のかテレ

マカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するとい



う条りくだでございます。希臘語ギリシヤゴで本文を朗読しても宜よろ

しゅうございますが、ちと銜てらうような気味にもなり

ますからやめに致します。四百六十五行から、四百

七十三行を御覧になると分ります」 「希臘語うんぬん云々は

よした方がいい、さも希臘語が出来ますと云わんば

かりだ、ねえ苦沙弥君」 「それは僕も賛成だ、そん

な物欲しそうな事は言わん方が奥床おくゆかしくて好い」と

主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。兩人は毫りょうにんごうも希臘語が読めないのである。「それではこの両三句は今晚抜く事に致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、彼かのテレマカスがユーミナス及びフヒリーシヤスの援たすけを藉かりて

繩の一端を柱へ括りつけます。そしてその繩の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れておいて、片方の端をぐいと引張つて釣し上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツのように女がぶら下つたと見れば好いんだろう」「その通りで、それから第二は繩の一端を前のごとく柱へ括り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るの

です。そしてその高い縄から何本か別の縄を下げて、それに結び目の輪になつたのを付けて女の頸くびを入れ  
ておいて、いざと云う時に女の足台を取りはずすと  
云う趣向なのです」 「たとえて云うと縄なわ暖簾のれんの先へ  
提灯玉を釣ちようしたような景色けしきと思えば間違はあるまい」  
「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申され  
ませんが、もしあるとすればその辺へんのところかと思

います。――それでこれから力学的に第一の場合は到底成立すべきものでないと云う事を証拠立てて御覧に入れます」 「面白いな」と迷亭が云うと「うん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣られると仮定します。また一番地面に近い二人の女の首と首を繋いでいる繩はホリゾンタルと仮定します。そこで $\alpha_1 \alpha_2 \dots \alpha_6$

を縄が地平線と形づくる角度とし、 $T_1 T_2 \dots T_6$ を縄の各部が受ける力と見<sup>みな</sup>做し、 $T_7 \parallel X$ は縄のもつとも低い部分の受ける力とします。 $W$ は勿<sup>もちろん</sup>論女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。但しこの大抵と云う度合は<sup>りょうにん</sup>兩人が勝手に作ったのだ

から他人の場合には応用が出来ないかも知れない

。「さて多角形に関する御存じの平均性理論により  
ますと、下の<sup>しも</sup>ごとく十二の方程式が立ちます。T 1

$$\cos \alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2 \cdots \cdots (1) \quad T_2 \cos$$

$$\alpha_2 = T_3 \cos \alpha_3 \cdots \cdots (2) \quad \cdots \cdots \text{」}$$

方程式はそのくらいで沢山だろう」と主人は乱暴な  
事を云う。「実はこの式が演説の首脳なんです

「と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは逐<sup>お</sup>つて何う事にしようじゃないか」と迷亭も少々恐縮の体<sup>てい</sup>に見受けられる。「この式を略してしまふとせつかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」と主人は平気で云う。「それでは仰せに従つて、無理ですが略しましょう



「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移つて論じますと、ベオウルフの

こうしゆかなすなわ

中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪

の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われ

ます。ブラクストンの説によるともし絞罪に処せ

られる罪人が、万一縄の具合で死に切れぬ時は再度

ふたたび

同様の刑罰を受くべきものだとしてあります。が、妙な事にはピヤース・プローマンの中にはたとい仮令兇漢でも二度絞める法はないと云う句があるのです。まあどっちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から

飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。また

やり直すと今度は縄が長過ぎて足が地面へ着いたの  
でやはり死ねなかつたのです。とうとう三返目に見

物人が手伝つて往生おうじょうさしたと云う話しです」「やれ

やれ」と迷亭はこんなところへくると急に元氣が出

る。「本当に死に損そこないだな」と主人まで浮かれ出す。

「まだ面白い事があります首を縊くると背せいが一いっすん寸ばか

り延びるそうです。これはたしかに医者が計つて見たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、どうだいくしやみ苦沙弥などはちと釣つて貰つちやあ、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背せいが延びて生き返る事があるだろうか」と聞く。「それは駄目きまに極きまっています。釣せきずいられて脊髄

が延びるからなんで、早く云うと背が延びると云うより壊こわれるんですからね」「それじゃ、まあ止やめよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはずでいたが、迷亭が無暗に風来坊ふうらいぼうのような珍語を挟はさむのと、主人が時々遠慮なく欠伸あくびをするので、ついに途中でやめて

歸つてしまった。その晩は寒月君がいかなる態度で、  
いかなる雄弁を振ふるつたか遠方で起つた出来事の事だ  
から吾輩には知れよう訳がない。

にさんち

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃

くうくう

また迷亭先生は例のごとく空々として偶然童子のご  
とく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君

おちとうふう

たかなわじけん

「越智東風の「高輪事件を聞いたかい」と旅順陥落の

号外を知らせに來たほどの勢を示す。「知らん、近

頃は合あわんから」と主人は平生いっもの通り陰気である

。「きようはその東風子とうふうしの失策物語を御報道に及ぼ

うと思つて忙しいところをわざわざ來たんだよ」「

またそんな仰山ぎょうさんな事を云う、君は全体不埒ふらちな男だ

」「ハハハハ不埒と云わんよりむしろ無埒むらちの方だ

ろう。それだけはちよつと區別しておいて貰わんと

名誉に關係するからな」 「おんなし事だ」 と主人は

うそぶ

嘯うそぶいている。純然たる天然居士の再来だ。 「この前

の日曜に東風子とうふうしが高輪泉岳寺たかなわせんがくじに行つたんだそうだ

。この寒いのによせばいいのに――第一いまだき今時泉岳寺

などへ参るのはさも東京を知らない、田舎者いなかもののよう

じゃないか」 「それは東風の勝手さ。君がそれを留

める権利はない」 「なるほど権利は正まさにない。権利



はどうでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見世物があるだろう。君知ってるか」「うんにや」「知らない？　だって泉岳寺へ行つた事はあるだらう」「いいや」「ない？　こりや驚ろいた。道理で大変東風を弁護すると思つた。江戸っ子が泉岳寺を知らないのは情け<sup>なさ</sup>ない」「知らなくても教師は務<sup>つと</sup>まるからな」と主人はいよいよ天然居士になる。「そ

りや好いが、その展覽場へ東風が這入<sup>はい</sup>つて見物して

いると、そこへ独逸人<sup>ドイツじん</sup>が夫婦連<sup>づれ</sup>で来たんだって。そ

れが最初は日本語で東風に何か質問したそうだと

ころが先生例の通り独逸語が使つて見たくてたまら

ん男だろう。そら二口三口べらべらやって見たとさ。

すると存外うまく出来たんだ——あとで考えるとそ

れが災<sup>わざわい</sup>の本<sup>もと</sup>さね」「それからどうした」と主人はつ

いに釣り込まれる。「独逸人が大鷹源吾おおたかげんごの蒔絵まきえの印いん

籠ろうを見て、これを買いたいが売ってくれるだろうか

と聞くんだったそう。その時東風の返事が面白いじや

ないか、日本人は清廉の君子くんしばかりだから到底駄目どうてい

だと云ったんだとさ。その辺は大分景気だいぶがよかった

が、それから独逸人の方では恰好かっこうな通弁を得たつも

りでしきりに聞くそう。「何を？」「それがさ

、何だか分るくらいなら心配はないんだが、早口で

むやみ

無暗に問い掛けるものだから少しも要領を得ないの

さ。たまに分るかと思うと鳶口とびぐちや掛矢、の事を聞かれ

る。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻訳して善いのか

習った事が無いんだから弱よわらあね」「もつともだ」

と主人は教師の身の上に引き較くらべて同情を表する

。「ところへ閑人ひまじんが物珍しそうにぽつぽつ集ってく

る。仕舞しまいには東風と独逸人を四方から取り巻いて見

物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの

勢に引き易かえて先生大弱りの体ていさ」 「結局どうなっ

たんだい」 「仕舞に東風が我慢出来なくなつたと見

えてさいならと日本語で云つてぐんぐん歸つて来た

そうだ、さいならは少し変だ君の国ではさよならを

さいならと云うかつて聞いて見たら何やつぱりさよ

なら、ですが相手が西洋人だから調和を計るために

、さいなら、にしたんだって、東風子は苦しい時でも

調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいい

が西洋人はどうした」「西洋人はあっけに取られて

茫然<sup>ぼうぜん</sup>と見ていたそうだハハハ面白いじゃないか

」「別段面白い事もないようだ。それをわざわざ報<sup>し</sup>

知<sup>らせ</sup>に来る君の方がよっぽど面白いぜ」と主人は巻煙<sup>まきた</sup>

草の灰を火桶の中へはたき落す。折柄格子戸のベル

が飛び上るほど鳴って「御免なさい」と鋭どい女の

声がする。迷亭と主人は思わず顔を見合わせて沈黙する。

主人のうちへ女客は稀有だなと見ていると、かの

鋭どい声の所有主は縮緬の二枚重ねを畳へ擦り付け

ながら這入って来る。年は四十の上を少し超したく

らいだろう。抜け上った生え際はぎわから前髪が堤防工事

のように高く聳そびえて、少なくとも顔の長さの二分の

一だけ天に向ってせり出している。眼が切り通しの

坂くらいな勾配こうばいで、直線に釣るし上げられて左右に

対立する。直線とは鯨くじらより細いという形容である

。鼻だけは無暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の

真中へ据すえ付けたように見える。三坪ほどの小庭へ



招魂社の石灯籠を移した時のごとく、ひとり独りで幅を利

かしているが、何となく落ちつかない。その鼻はい

わゆるかぎばな鍵鼻で、ひと度たびは精一杯高くなつて見たが

、これではあんまりだと中途からけんそん謙遜して、先の方

へ行くと、初めの勢に似ず垂れかかつて、下にある

唇をのぞ覗き込んでいる。かくいちじ著るしい鼻だから、この

女が物を言うときは口が物を言うと言わんより、鼻

が口をきいているとしか思われない。吾輩はこの偉

大なる鼻に敬意を表するため、以来はこの女を称し

て鼻子はなこ鼻子と呼ぶつもりである。鼻子は先ず初対面

の挨拶を終つて「どうも結構な御住居おすまいですこと」と

座敷中を睨ねめ廻わす。主人は「嘘をつけ」と腹の中

で言つたまま、ぶかぶか煙草たばこをふかす。迷亭は天井

を見ながら「君、ありや雨洩あまもりか、板の木目もくめか、妙

な模様が出ているぜ」と暗に主人を促<sup>うな</sup>がす。「無論

雨の洩りさ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷

亭がすまして云う。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹

の中で憤<sup>いきどお</sup>る。しばらくは三人鼎坐<sup>ていざ</sup>のまま無言である。

「ちと伺いたい事があつて、参ったんですが」と鼻

子は再び話の口を切る。「はあ」と主人が極めて冷

淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私は

つい御近所で——あの向う横丁の角屋敷かどやしきなんですが」

「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理で

あすこには金田かねだと云う標札ひょうさつが出ていますな」と主人

はようやく金田の西洋館と、金田の倉を認識したよ

うだが金田夫人に対する尊敬の度合どあいは前と同様であ

る。「実は宿やどが出まして、御話を伺うんですが会社

の方が大変忙がしいもんですから」と今度は少し利きいたろうという眼付をする。主人は一向動いっこうじない

。鼻子の先刻さつきからの言葉遣いが初対面の女としては

あまり存在ぞんざい過ぎるのですでに不平なのである。「会

社でも一つじや無いんです、二つも三つも兼ねてい  
るんです。それにどの会社でも重役なんで——多分

御存知でしょうが」これでも恐れ入らぬかと云う顔

付をする。元来この主人は博士とか大学教授とか  
いうと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業  
家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中  
学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じて  
おらんでも、融通の利かぬ性質として、到底実業家、  
金満家の恩顧を蒙る事は覚束ないと諦らめている  
いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世

話になる見込のないと思い切った人の利害には極めて無頓着である。それだから学者社会を除いて他の方面の事には極めて迂濶うかつで、ことに実業界などでは、どこに、だれが何をしているか一向知らん。知つても尊敬畏服の念は毫ごうも起らんのである。鼻子の方では天あめが下したの一隅にこんな変人がやはり日光に照らされて生活していようとは夢にも知らない。今まで世

の中の人間にも大分だいぶん接して見たが、金田の妻さいですと

名乗って、急に取扱いの変らない場合はない、どこ

の会へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に

金田夫人を通して行かれる、いわんやこんなくすぶ燻り返

った老書生においてをやで、私わたしの家は向う横丁の角か

屋敷どやしきですとさえ云えば職業などは聞かぬ先から驚く

だろうと予期していたのである。



「金田って人を知ってるか」と主人は無雑作むぞうさに迷亭

に聞く。「知ってるとも、金田さんは僕の伯父の友

達だ。この間なんざ園遊会へおいでになった」と迷

亭は真面目な返事をする。「へえ、君の伯父さんて

えな誰だい」まきやまだんしやく「牧山男爵さ」と迷亭はいよいよ真面

目である。主人が何か云おうとして云わぬ先に、鼻

子は急に向き直って迷亭の方を見る。迷亭は大島紬おおしまつむぎ

に古渡更紗か何か重ねてすましている。「おや、あなたが牧山様の――何でいらっしやいますか、ちつとも存じませんで、はなはだ失礼を致しました。牧山様には始終御世話になると、宿やどで毎々御噂おうわさを致しております」と急に叮嚀ていねいな言葉使をして、おまけに御辞儀までする、迷亭は「へええ何、ハハハハ」と笑っている。主人はあつけ気けに取られて無言で二人を

見ている。「たしか娘の縁辺えんぺんの事につきましてもい

ろいろ牧山さまへ御心配を願いましたそうで……

」「へえー、そうですか」とこればかりは迷亭にも

ちと唐突過ぎたと見えてちよつと魂消たまげたような声を

出す。「実は方々からくれくれと申し込はございますま

すが、こちらの身分もあるものでございますから

、滅多めったな所ところへも片付けられませんので……」」「ごも

つともで」と迷亭はようやく安心する。「それにつ

いて、あなたに伺おうと思つて上がったんですがね」

と鼻子は主人の方を見て急に存在ぞんざいな言葉に返る。「

あなたの所へ水島寒月みずしまかんげつという男が度々たびたび上がるそうで

すが、あの人は全体どんな風な人でしよう」「寒月

の事を聞いて、何なんにするんです」と主人は苦々にがにがしく

云う。「やはり御令嬢の御婚儀上の関係で、寒月君

の性行せいこうの一斑いっぱんを御承知になりたいという訳でしよう」

と迷亭が氣転きを利かす。「それが伺えれば大變都合

が宜よろしいのでございますが……」 「それじゃ、御令

嬢を寒月におやりになりたいとおっしやるんで」 「

やりたいなんてえんじや無いんです」 と鼻子は急に

主人を参らせる。「ほかにもだんだん口が有るんで

すから、無理に貰っていただかないだつて困りやし

ません」「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好い

でしょう」と主人も躍起<sup>やつき</sup>となる。「しかし御隠しな

さる訳もないでしょう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。

迷亭は双方の間に坐つて、銀煙管<sup>ぎんぎせる</sup>を軍配団扇<sup>ぐんぱいうちわ</sup>のよう

に持つて、心の裡<sup>うち</sup>で八卦<sup>はっけ</sup>よいやよいやと怒鳴つてい

る。「じゃあ寒月の方では是非貰<sup>く</sup>いたいとでも云つた

のですか」と主人が正面から鉄砲<sup>く</sup>を喰<sup>く</sup>わせる。「貰

いたいと云ったんじゃないんですけれども……」

貰いたいだろうと思つていらつしやるんですか」と

主人はこの婦人鉄砲に限ると覺さとつたらしい。「話し

はそんなに運んでるんじゃないやありませんが——寒月さ

んだつて満更まんざら嬉しくない事もないでしょう」と土俵

際で持ち直す。「寒月が何かその御令嬢に恋着れんちやくした

というような事でもありますか」あるなら云つて見

ろと云う権幕けんまくで主人は反そり返る。「まあ、そんな見けん

とう

当でしようね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏し

ない。今まで面白おもしろげ氣に行司ぎようじ氣取りで見物していた迷

亭も鼻子いちづいの一言に好奇心を挑撥ちようはつされたものと見えて、

きせる

煙管を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付つ

ぶみ

け文でもしたんですか、こりや愉快だ、新年になっ

て逸話がまた一つ殖ふえて話しの好材料になる」と一



人で喜んでゐる。「付け文じゃないんです、もつと

烈しいんでさあ、御二人とも御承知じやありません

か」と鼻子は乙おつにからまって来る。「君知ってるか」

と主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭

も馬鹿ばか気げた調子で「僕は知らん、知つていりや君だ」

とつまらんとところで謙遜けんそんする。「いえ御両人共御存おふたりとも

じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」

と御両人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私<sup>わた</sup>

しから御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さん

の御屋敷で演奏会があつて寒月さんも出掛けただじや

ありませんか、その晩歸りに吾妻橋で何かあつたで

<sup>あずまばし</sup>

しょう——詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑

になるかも知れませんか——あれだけの証拠があ

りや充分だと思ひますが、どんなものでしょう」と

ダイヤモンド  
金剛石入りの指環の嵌はまった指を、膝の上へ併ならべて

、つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます異  
彩を放って、迷亭も主人も有れども無きがごとき有  
様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃ふいうちには胆きもを  
抜かれたものと見えて、しばらくは呆然ぼうぜんとして瘡おこりの  
落ちた病人のように坐まっていたが、驚愕きょうがくの箍たががゆる

んでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云

う感じが一度に呐喊とっかんしてくる。兩人ふたりは申し合せたご

とく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少

し当てがはずれて、この際笑うのははなはだ失礼だ

と兩人を睨にらみつける。「あれが御嬢さんですか、な

るほどこりやいい、おっしやる通りだ、ねえ苦沙弥くしゃみ

君、全く寒月はお嬢さんを恋おもつてるに相違ないね：

：もう隠したってしようがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云ったままである。「本当に御隠しなさってもいけませんよ、ちゃんと種は上ってるんですからね」と鼻子はまた得意になる。「こうなりや仕方がない。何でも寒月君に関する事実は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、そう、にやにや笑っていては埒らちがあ

かんじやないか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。いくら隠しても、どこからか露見するかな。——しかし不思議と云えば不思議ですねえ

、金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になつ

たんです、実に驚ろきますな」と迷亭は一人で喋舌

る。「私わたしの方だつて、ぬかりはありませんやね

」と鼻子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかりが

無さ過ぎるようすぜ。一体誰に御聞きになつたんです」 「じきこの裏にいる車屋の神さんかみからです

」 「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸くする。 「ええ、寒月さんの事じゃ、よつぽど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話をするかと思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせを貰うんです」 「そりや苛ひどい」と主人は大きな声を

出す。「なあに、あなたが何をなさろうとおっしや  
ろうと、それに構ってるんじゃないんです。寒月さ  
んの事だけですよ」「寒月の事だつて、誰の事だつ  
て——全体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と  
主人は一人怒り出す。おこ「しかしあなたの垣根のそと  
へ来て立っているのは向うの勝手じやありませんか、  
話しが聞えてわるけりやもつと小さい声でなさるか、



もつと大きなうちへ御這入おはいんなさるがいいでしよう」

と鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかり

じやありません。新道しんみちの二絃琴にげんきんの師匠からも大分だいぶんい

ろいろな事を聞いています」「寒月の事をですか

」「寒月さんばかりの事じやありません」と少し凄すご

い事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あの師匠

はいやに上品ぶって自分だけ人間らしい顔をしてい

る、馬鹿野郎です」 「憚り様、女ですよ。野郎は御

かどちが

門違いです」 と鼻子の言葉使いはますます御里を

おさと

らわして来る。これではまるで喧嘩をしに来たよう

なものであるが、そこへ行くと迷亭はやはり迷亭で

この談判を面白そうに聞いている。

鉄拐仙人てっかいせんが軍鶏しやも

けあ

の蹴合けあいを見るような顔をして平気で聞いている。

あっこう

悪口あっこうの交換では到底鼻子の敵でないと自覚した主

人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さんに恋着したようにばかりおっしゃるが、私の聞いたんじや、少し違いますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじや御嬢さんの方が、始め病氣になって――何だかうわごとをいったように聞いたね」「なにそんな

事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。「それでも寒月はたしかに○○博士の夫人から聞いたと云っていましたぜ」「それがこっちの手なんでさあ、○○博士の奥さんを頼んで寒月さんの気を引いて見たんでさあね」「○○の奥さんは、それを承知で引き受けたんですか」「ええ、引き受けて貰うたって、ただじゃ出来ませんやね、

それやこれやでいろいろ物を使っているんですから」

「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなく

つちや御帰りにならないと云う決心ですかね」と迷

亭も少し気持を悪くしたと見えて、いつになく手障てざわ

りのあらいい言葉を使う。「いいや君、話したって損

の行く事じやなし、話そうじやないか苦沙弥君――

奥さん、わたし私でも苦沙弥でも寒月君に関する事実で差さし

支えのない事は、みんな話しますからね、——そう、  
順を立ててだんだん聞いて下さると都合がいいです  
ね」

鼻子はようやく納得なつとくしてそろそろ質問を呈出する。

一時荒立てた言葉使いも迷亭に対してはまたもとの  
ごとく丁寧になる。「寒月さんも理学士だそうですね」  
が、全体どんな事を専門にしているのでございます」

「大学院では地球の磁気の研究をやっています」と  
主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子  
には分らんものだから「へえー」とは云ったが怪訝けげん  
な顔をしている。「それを勉強すると博士になれま  
しょうか」と聞く。「博士にならなければやれない  
とおっしゃるんですか」と主人は不愉快そうに尋ね  
る。「ええ。ただの学士じゃね、いくらでもありま

すからね」と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見ていよいよいやな顔をする。「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞いていただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でもその地球の——何かを勉強しているんでございましょうか」「二三日前は首縊り、の力学と云う研究の結果を理学協会で演説しました」



と主人は何の気も付かずに云う。「おやいやだ、首、  
縊りだなんて、よっぽど変人ですねえ。そんな首、  
縊りや何かやってたんじゃ、とても博士にはなれます  
まいね」「本人が首を縊くっちやあむずかしいですが、  
首、縊りの力学なら成れないとも限らんです」「そう  
でしょうか」と今度は主人の方を見て顔色を窺うかがう  
。悲しい事に力学と云う意味がわからんので落ちつ

きかねている。しかしこれしきの事を尋ねては金田

夫人の面目に關すると思つてか、ただ相手の顔色で

八卦を立てて見る。はつけ主人の顔は渋い。「そのほかに

なにか、分り易いやすものを勉強しておりますまいか

」「そうですね、せんだつて団栗どんぐりのスタビリチーを

論じて併せて天体の運行に及ぶと云う論文を書いた

事があります」「団栗どんぐりなんぞでも大学校で勉強する

ものでしょうか」「さあ僕も素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなことから、研究する価値があると見えますな」と迷亭はすまして冷かす。鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと見えて、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが――この御正月に椎茸しいたけを食べて前歯を二枚折ったそうじゃございませんか」「ええその欠けたと

くうやもち

ころに空也餅がくっ付いていましてね」と迷亭はこ

なわばりうち

の質問こそ吾繩張内だと急に浮かれ出す。「色気の

ようじ

ない人じゃございませんか、何だつて楊子を使わな

あ

いんでしよう」「今度逢つたら注意しておきましょ

う」と主人がくすくす笑う。「椎茸で歯がかけるく

しょう

らいじゃ、よほど歯の性が悪いと思われませんが、如

かが

何なものでしよう」「善いとは言われますまいな――

「ねえ迷亭」 「善い事はないがちよつと愛嬌あいぎようがある

よ。あれぎり、まだ填つめないところが妙だ。今だに

空也餅引掛所ひっかけどころになつてゐるなあ奇観だぜ」 「齒を填め

る小遣こづかいがないので欠けなりにしておくんですか、ま

たは物好きで欠けなりにしておくんでしようか」 「

何も永く前齒欠成まえばかけなりを名乗る訳でもないでしようから

御安心なさいよ」 と迷亭の機嫌はだんだん回復して

くる。鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙  
かなんぞ当人の書いたものでもございますならちよ  
つと拝見したいもんでございますが」「端書はがきなら沢  
山あります、御覧なさい」と主人は書斎から三四十  
枚持つて来る。「そんなに沢山拝見しないでも――  
その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを  
撰よつてやろう」と迷亭先生は「これなぞあ面白いで

しょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あらいやだ、狸たぬきだよ

。何だって撰りに撰つて狸なんぞかくんでしようね

——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句を読んで御覧なさい」と主人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読

み出す。「旧暦の歳としの夜よ、山の狸が園遊会をやつて

さかん

盛に舞踏します。その歌に曰いわく、来こいさ、としの夜よ

で、御山婦美おやまふみも来くまいぞ。スツポコポンノポン」「

何ですこりや、人を馬鹿にしているじゃございませ

んか」と鼻子は不平ていの体である。「この天女てんによは御氣

に入りませんか」と迷亭がまた一枚出す。見ると天

はごろも

女が羽衣を着て琵琶びわを弾ひいている。「この天女の鼻



が少し小さ過ぎるようですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を読んで御覧なさい」文句にはこうある。「昔むかしある所に一人の天文学者がありました。ある夜よいつものように高い台に登って、一心に星を見ていますと、空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出したので、天文学者は身に沁しむ寒さも忘れて聞き惚ほれてしまい

ました。朝見るとその天文学者の死骸しがいに霜しもが真白に

降っていました。これは本当の噺はなしだと、あのうそつ

きの爺じいやが申しました」「何の事ですこりや、意味

も何もないじゃありませんか、これでも理学士で通  
るんですかね。ちつと文芸倶楽部でも読んだらよさ

そうなものですがねえ」と寒月君さんざんにやられ  
る。迷亭は面白半分に「こりやどうです」と三枚目

を出す。今度は活版で帆懸舟ほかけぶねが印刷してあつて、例

のごとくその下に何か書き散らしてある。「よべの

とま じゅうろくこじよろ

泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯ありその千鳥、さ

よの寢覚ねざめの千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」「う

まいのねえ、感心だ事、話せるじやありませんか

」「話せますかな」「ええこれなら三味線に乗りま

すよ」「三味線に乗りや本物だ。こりや如何いかです

「と迷亭は無暗むやみに出す。「いえ、もうこれだけ拝見

すれば、ほかのは沢山で、そんなに野暮やぼでないんだ

と云う事は分りましたから」と一人で合点している。

鼻子はこれで寒月に関する大抵の質問を卒おえたもの

と見えて、「これははなはだ失礼を致しました。ど

うか私の参った事は寒月さんへは内々に願います

」と得手勝手えてかってな要求をする。寒月の事は何でも聞か

なければならぬが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をする。「いずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出た兩人ふたりが席へ返るや否や迷亭が「ありや何だい」と云うと主人も「ありや何だい」と双方から同じ問をかける。奥の部屋で細君がこしらえ切れなか

つたと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来ましたぜ。月並もあのくらいになるとなかなか振ふるつていますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口氣こうきで「第一氣に喰わん顔だ」と悪にくらしそうに云うと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が顔

の中央に陣取つて乙おつに構えているなあ」とあとを付

ける。「しかも曲つていらあ」「少し猫背ねこぜだね。猫

背の鼻は、ちと奇抜きばつ過ぎる」と面白そうに笑う。「

夫おつとこを剋こくする顔だ」と主人はなお口惜くやしそうである

。「十九世紀で売れ残つて、二十世紀で店曝たなざらしに逢

うと云う相そうだ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところ

へ妻君が奥の間まから出て来て、女だけに「あんまり

悪口をおっしやると、また車屋の神さんかみにいつ、つけられますよ」と注意する。「少しいつ、ける方が薬ですよ、奥さん」「しかし顔の讒訴ざんそなどをなさるのは

、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる訳でもありませんから——それに相手が婦人ですからね、あんまり苛ひどいわ」と鼻子の鼻を弁護すると、同時に自分の容貌ようぼうも間接に弁護しておく。「



何ひどいものか、あんなのは婦人じゃない、愚人だ、  
ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかえら者  
だ、大分<sup>だいぶ</sup>引き搔<sup>か</sup>かれたじゃないか」「全体教師を何  
と心得ているんだろう」「裏の車屋くらいに心得て  
いるのさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士にな  
るに限るよ、一体博士になつておかんのが君の不了<sup>ふりよう</sup>  
見<sup>けん</sup>さ、ねえ奥さん、そうでしょう」と迷亭は笑いな

がら細君を顧<sup>かえり</sup>みる。「博士なんて到底駄目ですよ

」と主人は細君にまで見離される。「それでも今に

なるかも知れん、軽蔑<sup>けいべつ</sup>するな。貴様なぞは知るまい

が昔<sup>むか</sup>しアイソクラチスと云う人は九十四歳で大著述

をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かし

たのは、ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは

八十で妙詩を作った。おれだって……」「馬鹿馬鹿

しいわ、あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。「失敬な、——甘木さんへ行つて聞いて見ろ——元来御前がこんな皺しわ苦茶な黒木綿くろもめんの羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているよきな奴を着るから出しておけ」「出しておけつて

あんな立派な御召おめしはござんせんわ。金田の奥さん

が迷亭さんに叮嚀ていれいになったのは、伯父さんの名前を  
聞いてからですよ。着物の咎とがじやございません」と  
細君うまく責任を逃のがれる。

主人は伯父さん、と云う言葉を聞いて急に思い出し  
たように「君に伯父があると云う事は、今日始めて  
聞いた。今までついにうわさ噂をした事がないじゃないか、

本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてた

と云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬

鹿に頑物がんぶつでねえ——やはりその十九世紀から連綿と

今日まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半

々に見る。「オホオホ面白い事ばかりおっしや

って、どこに生きていらっしやるんです」「静岡に

生きてますがね、それがただ生きてるんじや無いで

す。頭にちよん髷まげを頂いて生きてるんだから恐縮し

まさあ。帽子を被かぶれってえと、おれはこの年になる

が、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと威張はってるんです——寒いから、もっと寝ねていらっし

やいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時間

以上寝るのは贅ぜいたく沢の沙汰だって朝暗いうちから起き

てくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間

に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちは

どうしても眠ねむたくていかなんだが、近頃に至って始

めて随处任意しよきようの庶境いに入いってはなはだ嬉しいと自慢

するんです。六十七になつて寝られなくなるなあ当

り前でさあ。修業も糸瓜へちまも入いつたものじゃないのに

当人は全く克己こつきの力で成功したと思つてゐるんですか

らね。それで外出する時には、きつと鉄扇てっせんをもつて

出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、ただ持って出るんだね。まあステツキの代りくらいに考えてるかも知れんよ。ところがせんだって妙な事がありましたね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合さあいのなことしい返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云うんです。ち



よつと驚ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で祝捷会しゆくしょうかいがあるからそれまでに間に合まうように

、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおか

しいのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減な大きさを買ってくれ、洋服も寸法を見計らつて

大丸だいまるへ注文してくれ……」 「近頃は大丸でも洋服を

仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋しろきやと間違え

たんだあね」「寸法を見計ってくれたって無理じゃ

ないか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どう

した？」「仕方がないから見計らって送ってやった」

「君も乱暴だな。それで間に合ったのかい」「まあ、

どうにか、こうにかおっついたんだろう。国の新聞

を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートに

て、例の鉄扇てっせんを持ち……」 「鉄扇だけは離さなかつ

たと見えるね」 「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは  
入れてやろうと思つてゐるよ」 「それでも帽子も洋  
服も、うまい具合に着られて善かった」 「ところが  
大間違さ。僕も無事に行つてありがたいと思つてゐ  
と、しばらくして国から小包が届いたから、何か礼  
でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、

手紙が添えてあつてね、せつかく御求め被下候えどくだされそうら

も少々大きく候間、そろあいだ帽子屋へ御遣わしの上、御縮め

被下度候。くだされたくそろ縮め賃は小為替にて此方より御送可申上こがわせ

候とあるのさきそろ「なるほど迂濶だな」うかつと主人は己れおの

より迂濶なものの天下にある事を発見して大に満足おおい

の体ていに見える。やがて「それから、どうした」と聞

く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴し

て被<sup>かぶ</sup>つていらあ」「あの帽子かあ」と主人がにやに

や笑う。「その方<sup>かた</sup>が男爵でいらっしやるんですか

」と細君が不思議そうに尋ねる。「誰がです」「そ

の鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者でさあ、若い

時聖堂<sup>せいどう</sup>で朱子学<sup>しゅしがく</sup>か、何かにこり固まったものだから、

電気灯の下で恭<sup>うやうや</sup>しくちよん髷<sup>まげ</sup>を頂いているんです

。仕方がありません」ととやたらに頤<sup>あご</sup>を撫<sup>な</sup>で廻す。「

それでも君は、さっきの女に牧山男爵と云ったよう  
だぜ」「そうおっしやいましたよ、私も茶の間で聞  
いておりました」と細君もこれだけは主人の意見に  
同意する。「そうでしたかなアハハハハ」と迷亭  
は訳もなく笑う。わけ「そりや嘘うそですよ。僕に男爵の伯  
父がありや、今頃は局長くらいになっ  
ていまさあ

」と平気なものである。「何だか変だと思つた」と

主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あらまあ、よく真面目であんな嘘が付けますねえ。あなたもよっぽど法螺ほらが御上手でいらっしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上うわ手てでさあ」「あなただつて御負けなさる氣遣きづかいはありません」「しかし奥さん、僕の法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、曰いわく付

きの嘘ですぜ。たちが悪いです。猿智慧さるぢえから割り出

した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちや、コメ  
ディーの神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳  
に立ち至りますからな」主人は俯目ふしめになつて「どう  
だか」と云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ  
」と云う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。



角屋敷の金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。

聞いた事さえ今が始めてである。主人の家で実業家

が話頭に上った事は一返もないので、主人の飯を食

う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみなら

ず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻<sup>はか</sup>図らずも

鼻子の訪問を受けて、余所<sup>よそ</sup>ながらその談話を拝聴し、

その令嬢の艷美<sup>えんぴ</sup>を想像し、またその富貴<sup>ふうき</sup>、権勢を思

い浮べて見ると、猫ながら安閑として椽側えんがわに寝転ん

でいられなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君

に対してはなはだ同情の至りに堪えん。先方では博

士の奥さんやら、車屋の神さんかみやら、二絃琴にげんきんの天璋てんしよ

院ういんまで買収して知らぬ間まに、前齒の欠けたのさえ探

偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして

羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業した

ての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つ

て、ああ云う偉大な鼻を顔のうち中に安置している女の

事だから、滅多めったな者では寄り付ける訳の者ではない。

こう云う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつ

あまりに錢ぜにがなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はしな

いが、あんな偶然童子だから、寒月に援たすけを与える

便宜べんぎはすくない。して見ると可哀相かわいそうなのは首縊、りの

力学を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなくて、あまり不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の家に寄寓うち きぐうする猫で、世間一般の痴猫ちびよう、愚猫ぐびようとは少しく撰せんを殊ことにしている。この冒険をあえてするくらいもとの義侠心は固より尻尾しっぽの先に畳み込んである

。何も寒月君に恩になつたと云う訳もないが、これ

はただに個人のためにする血氣躁狂の沙汰ではない。  
けつきそうきよう

大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意を現實に

する天晴な美挙だ。  
あつぱれ 人の許諾を経ずして吾妻橋事件  
あずまばし

などを至る処に振り廻す以上は、人の軒下に犬を

忍ばして、その報道を得々として逢う人に吹聴する  
ふいちよう

以上は、車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、日雇  
ばてい ぶらいかん ひやとい

婆ばあ、産婆、妖婆ようば、按摩あんま、頓馬とんまに至るまでを使用して

国家有用の材に煩はんを及ぼして顧みかえりざる以上は——猫

にも覚悟がある。幸い天気も好い、霜解しもどけは少々閉口

するが道のためには一命もすてる。足の裏へ泥が着

いて、椽側えんがわへ梅の花の印を押すくらいな事は、ただ

おさん

御三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申

されない。翌日あすとも云わずこれから出掛けようと勇ゆう

もうしょうじん

猛精進の大決心を起して台所まで飛んで出たが「待

てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達し

ているのみならず、脳力の発達においてはあえて中

学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しいかな

のど  
咽喉の構造だけはどこまでも猫なので人間の言語が

しゃべ

饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充

分敵の情勢を見届けたところで、  
かんじん  
肝心の寒月君に教

えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せ

ない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受

ダイヤモンド

けて光らぬと同じ事で、せっかくの智識も無用の長物となる。これは愚<sup>ぐ</sup>だ、やめようかしらんと上り口

で佇<sup>たたず</sup>んで見た。

しかし一度思い立った事を途中でやめるのは、白<sup>ゆう</sup>

雨<sup>だち</sup>が来るかと待っている時黒雲共隣<sup>とも</sup>国へ通り過ぎた



ように、何となく残り惜しい。それも非がこつちに  
あれば格別だが、いわゆる正義のため、人道のため  
なら、たとい無駄死むだじにをやるまでも進むのが、義務を  
知る男児の本懐であろう。無駄骨を折り、無駄足を  
汚よごすくらいは猫として適當のところである。猫と生  
れた因果いんがで寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭ぜつとう  
に相互の思想を交換する技倆ぎりょうはないが、猫だけに忍

びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を

じょうじゆ

成就するのはそれ自身において愉快である。吾われ一箇

でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快

である。人に告げられんでも人に知られているなと

云う自覚を彼等に与うるだけが愉快である。こんな

に愉快が続々出て来ては行かずにはいられない。や

はり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角<sup>か</sup>

<sup>どじめん</sup>  
わがものがお

地面を吾物顔に占領している。この主人もこの西洋

館のごとく傲慢<sup>ごうまん</sup>に構えているんだらうと、門を這入<sup>はい</sup>

ってその建築を眺<sup>なが</sup>めて見たがただ人を威圧しようと、

二階作りが無意味に突っ立っているほかに何等の能

もない構造であつた。迷亭のいわゆる月並<sup>つきなみ</sup>とはこれ

であらうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜け

て、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生の台所の十倍はたしかにある。せんだって日本新聞に詳しく書いてあつた大隈伯おおくまはくの勝手にも劣るまいと思うくらい整然とぴかぴかしている。「模範勝手

だな」と這はい入り込む。見ると漆喰しっくいで叩き上げた二坪

ほどの土間に、例の車屋の神かみさんが立ちながら、御ご

飯はん焚たきと車夫を相手にしきりに何か弁じている。こ

いつは劍呑けんのおんだと水桶みずおけの裏へかくれる。「あの教師あ、

うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚めしたきが云う

。「知らねえ事があるもんか、この界限かいわいで金田さん

の御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪かたわだあな

」これは抱え車夫の声である。「なんとも云えない

よ。あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らな

い変人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知って

りや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供

の歳としさえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金

田さんでも恐れねえかな、厄介な唐変木とうへんぼくだ。構かまあ事こと

あねえ、みんなで威嚇おどかしてやろうじゃねえか」「

それが好いよ。奥様の鼻が大き過ぎるの、顔が気に

喰わないのって——そりやあ酷ひどい事を云うんだよ

。自分の面つらあ今戸焼いまどやきの狸たぬき見たような癖に——あれで

一人前だと思っっているんだからやれ切れないじゃない

いか」 顔ばかりじゃない、手拭てぬぐいを提さげて湯に行く

ところからして、いやに高慢ちきじゃないか。自分

くらいえらい者は無いつもりでいるんだよ」と苦沙

弥先生は飯焚にも大おおいに不人望である。「何でも大勢

であいつの垣根の傍そばへ行つて悪口をさんざんいつて

やるんだね」「そうしたらきつと恐れ入るよ」「し

かしこつちの姿を見せちやあ面白くねえから、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれって、さつき奥様が言い付けておいでなすったぜ」 「そりや分っているよ」と神さんは悪口  
の三分の一を引き受けると云う意味を示す。なるほどこの手合が苦沙弥先生を冷やかに来るなと三人の横を、そつと通り抜けて奥へ這入る。



猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いても

不器用な音のした試しがない。空を踏むがごとく

、雲を行くがごとく、水中に磬けいを打つがごとく、洞と

裏うりに瑟しつを鼓こするがごとく、醍醐だいごの妙味を嘗なめて言詮ごんせん

のほかれいだんに冷暖れいだんを自知じちするがごとし。月並な西洋館も

なく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、権助ごんすけも

、飯焚も、御嬢さまも、仲働なかばたらきも、鼻子夫人も、夫

人の旦那様もない。行きたいところへ行つて聞きた

い話を聞いて、舌を出し尻尾しっぽを掉ふつて、髭ひげをぴんと

立てて悠々ゆうゆうと歸るのみである。ことに吾輩はこの道

に掛けては日本一の堪能かんのうである。草双紙くさぞうしにある猫又ねこまた

の血脈を受けておりはせぬかと自ら疑うくらいであ

る。墓がまの額ひたいには夜光やこうの明珠めいしゆがあると云うが、吾輩の

尻尾には神祇釈教恋無常しんぎしやつきようこいむじようは無論の事、満天下の人間

を馬鹿にする一家相伝いっかそうでんの妙薬が詰め込んである。金

田家の廊下を人の知らぬ間まに横行するくらいは、仁

王様が心太を踏ふみ潰つぶすよりも容易である。この時吾

輩は我ながら、わが力量に感服して、これも普段大

事にする尻尾の御蔭だないと気が付いて見るとただ置

かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝らいはいして二

ヤン運長久を祈らばやと、ちよつと低頭して見たが、

けんとう

どうも少し見当が違ふようである。なるべく尻尾の

方を見て三拝しなければならん。尻尾の方を見よう

と身体を廻すと尻尾も自然と廻る。追付こうと思つ

て首をねじると、尻尾も同じ間隔をとつて、先へ馳か

てんちげんこう

け出す。なるほど天地玄黄を三寸裏りに収めるほどの

霊物だけあつて、到底吾輩の手に合わない、尻尾を

めぐ  
ななた  
くたび

環る事七度び半にして草臥れたからやめにした。少

々眼がくらむ。どこにいたのだかちよつと方角が分  
らなくなる。構うものかと滅茶苦茶にあるき廻る

。障子の裏で鼻子の声うちがする。ここだと立ち留まつ

て、左右の耳をはすに切つて、息を凝こらす。「貧乏

教師の癖に生意氣じゃありませんか」と例の金切りかなき

声こえを振り立てる。「うん、生意氣な奴だ、ちと懲こら

しめのためにいじめてやろう。あの学校にや国のも

のもいるからな」 「誰がいるの？」 「津木<sup>つき</sup>ピン助<sup>すけ</sup>や

<sup>ふくち</sup>

福地<sup>ふくち</sup>キシヤゴがいるから、頼んでからかわしてやろ

<sup>しやうごく</sup>

う」 吾輩は金田君の生国<sup>しやうごく</sup>は分らんが、妙な名前の人

<sup>そろ</sup>

間ばかり揃<sup>そろ</sup>った所だと少々驚いた。 金田君はなお語

をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「

はあ、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か

専門に教えるんだって云います」 「どうせ碌<sup>ろく</sup>な教師

じやあるめえ」あるめえにも尠すくなからず感心した

。「この間ピン助に遇あつたら、私の学校にや妙な奴

がおります。生徒から先生番茶は英語で何と云いま  
すと聞かれて、番茶は S a v a g e t e a で

あると真面目に答えたんで、教員間の物笑いとなつ  
ています、どうもあんな教員があるから、ほかのも

の、迷惑になつて困りますと云つたが、おおかた大方あい

つの事だぜ」 「あいつに極きまつていまさあ、そんな事

を云いそうな面構つらがまえですよ、いやに髭ひげなんか生はやし

て」 「怪けしからん奴だ」 髭を生やして怪しからなけ

れば猫などは一足だつて怪しかりようがない。 「そ

れにあの迷亭とか、へべれけとか云う奴は、まあ何

てえ、頓狂な跳返はねっかえりなんでしょう、伯父の牧山男爵

だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんぞ、有るはず



がないと思つたんですもの」「御前がどこの馬の骨  
だか分らんものの言う事を真まに受けるのも悪い」「  
悪いって、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじやありま  
せんか」と大變残念そうである。不思議な事には寒  
月君の事は一言半句いちごんはんくも出ない。吾輩の忍んで来る前  
に評判記はすんだものか、またはすでに落第と事が  
極きまつて念頭きまにないものか、その辺へんは懸念けねんもあるが仕

方がない。しばらく佇たたずんでいると廊下を隔てて向う

の座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事が

ある。後おくれぬ先に、とその方角へ歩を向ける。

来て見ると女が独ひとりで何か大声で話している。そ

の声が鼻子とよく似ているところをもつて推おすと

、これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂入水をあ

えてせしめたる代物しろものだろう。惜哉障子越しで玉の御おん

姿を拝する事が出来ない。すがた従って顔の真中に大きな

鼻を祭り込んでいるか、どうだか受合えない。しか

し談話の模様から鼻息の荒いところなどを綜合してそうごう

考えて見ると、満更人の注意を惹かぬ獅鼻とも思わ

れない。女はしきりに喋舌しゃべっているが相手の声が少

しも聞えないのは、噂うわさにきく電話というものである

う。「御前は大和かい。やまと明日ね、あした行くんだからね

鶉の三を取っておいておくれ、いいかえ——分つ

たかい——なに分らない？ おやいやだ。鶉の三を

取るんだよ。——なんだって、——取れない？ 取

れないはずはない、とるんだよ——へへへへ御冗ごじよう

談だんをだって——何が御冗談なんだよ——いやに人を

おひやらかすよ。全体御前は誰だい。長吉ちようきちだ？ 長

吉なんぞじや訳が分らない。お神さんに電話口へ出

ろって御云いな——なに？

私<sup>わたく</sup>しで何でも弁じます

？——お前は失敬だよ。妾<sup>あた</sup>しを誰だか知ってるのか

い。金田だよ。——へへへへ善く存じております

だって。ほんとに馬鹿だよこの人あ。——金田だっ

てえばさ。——なに？——毎度御<sup>ごひいき</sup>鼻<sup>び</sup>肩<sup>かた</sup>にあずかりま

してありがとうございます？——何がありますか？

だね。御礼なんか聞きたかあないやね——おやまた

笑ってるよ。お前はよっぽど愚物ぐぶつだね。——仰せの

通りだって？——あんまり人を馬鹿にすると電話を切ってしまうよ。いいのかい。困らないのかよ——

黙ってちや分らないじゃないか、何とか御云いなさ

いな」電話は長吉の方から切ったものか何の返事も

ないらしい。令嬢は癩癩かんしやくを起してやけにベルをジャ

ラジャラと廻す。足元で狎ちんが驚ろいて急に吠え出す。

これは迂濶うかつに出来ないと、急に飛び下りて椽えんの下へもぐり込む。

折柄廊下を近くおりから足音がして障子を開ける音がする。ちかづ

誰か来たなと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらつしやいます」と小間使らしい声がする。「知らないよ」と令嬢は剣突けんつくを食わせる。「ちよつと用があるから嬢じょうを呼んで来いとお

つしやいました」「うるさいね、知らないてば」と  
令嬢は第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さん  
の事で御用があるんだそうでございます」と小間使  
は氣を利<sup>き</sup>かして機嫌を直そうとする。「寒月でも

、水月でも知らないんだよ——大嫌いだわ、糸瓜<sup>へちま</sup>が

とまど

戸迷いをしたような顔をして」第三の剣突は、憐れ  
なる寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ



束髪そくはつに結いったの」小間使はほっと一息ついて「今日こんにち」

となるべく単簡たんかんな挨拶をする。「生意気だねえ、小

間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食わす。「

そうして新しい半襟はんえりを掛けたじゃないか」「へえ

、せんだって御嬢様からいたadakしましたので、結構

過ぎて勿体もったいないと思つて行李こうりの中へしまっておきま

したが、今までののがあまり汚よごれましたからかけ易かえ

ました」「いつ、そんなものを上げた事があるの

」「この御正月、白木屋へいらつしやいまして、御

求め遊ばしたので――鶯茶へ相撲うぐいすちや すもうの番附ばんづけを染め出し

たのでございます。妾あたしには地味過ぎていやだから

御前に上げようとおつしやつた、あれでございます」

「あらいやだ。善く似合うのね。にくらしいわ」「

恐れ入ります」「褒ほめたんじやない。にくらしいん

だよ」「へえ」「そんなによく似合うものをなぜだ  
まって貰ったんだい」「へえ」「御前にさえ、その  
くらい似合うなら、妾あなしにだっておかしい事あない  
だろうじゃないか」「きつとよく御似合い遊ばしま  
す」「似あうのが分ってる癖になぜ黙っているんだ  
い。そうしてすまして掛けているんだよ、人の悪い」  
剣突けんつくは留めどもなく連発される。このさき、事局は

どう発展するかと謹聴している時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狎ちんが顔の中心に眼と口を引き集めたような面かおをして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の成績せいせきである。

歸つて見ると、奇麗な家から急に汚ない所へ移つ

たので、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟どうくつ

の中へ入り込んだような心持ちがする。探險中は

ほかの事に気を奪われて部屋の装飾、襖ふすま、障子の

具合などには眼も留らなかつたが、わが住居すまいの下等

なるを感ずると同時に彼のいわゆる月並つきなみが恋しくな

る。教師よりもやはり実業家がえらいように思われ

る。吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾しっぽに伺いを立

てて見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託ごたく

宣せんがあつた。座敷へ這入はいつて見ると驚いたのは迷亭

先生まだ帰らない、巻煙草まきたばこの吸い殻を蜂の巣のごと

く火鉢の中へ突き立てて、大胡坐おおあぐらで何か話し立てて

いる。いつの間まにか寒月君さえ来ている。主人は手

枕をして天井の雨洩あまもりを余念もなく眺めている。あい

かわらず太平の逸民の会合である。

「寒月君、君の事をうわごとにまで言つた婦人の名は

、当時秘密であつたようだが、もう話しても善かろう」と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私

だけに関する事なら差支さしつかえないんですが、先方の迷

惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに

○○博士夫人に約束をしてしまったもんですから

「他言をしないと云う約束かね」「ええ」と寒月

君は例のごとく羽織の紐をひねくる。ひもその紐は売品

にあるまじき紫色である。「その紐の色は、ちと天てん

保調ぼうちょうだな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件

などには無頓着である。「そうさ、到底とうてい日露戦争時

代のものではないな。陣笠じんがさに立葵たちあおいの紋の付いたぶつ

割さき羽織でも着なくつつちや納まりの付かない紐だ



。織田信長が髻入むこいりをするとき頭の髪を茶筌ちやせんに結いった

と云うがその節用いたのは、たしかそんな紐だよ

」と迷亭の文句はあいかわらず長い。「實際これは

爺じいが長州征伐の時に用いたのです」と寒月君は真面

目である。「もういい加減に博物館へでも献納して

はどうだ。首くび縊くりの力学の演者、理学士水島寒月君

ともあろうものが、売れ残りの旗本のような出いで立たち

をするのはちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云つてくれる人もありますので——」「誰だ

い、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの

方なんじゃないんで——」「御存じでなくてもいい

や、一体誰だい」「去る女性によしやうなんです」「ハハハハ

ハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返御駄おだぶつ仏を極きめ込んじやどうだい」と

迷亭が横合から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んではおりません。ここから乾いぬいの方角にあたる

しょうじょう

清浄な世界で……」 「あんまり清浄でもなさそうだ、

毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月是不審な顔をす

る。「向う横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、ここへ、実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君

」「うむ」と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻つて誰

の事です」「君の親愛なる久遠くおんの女性によしろうの御母堂様だ」

「へえー」「金田の妻さいという女が君の事を聞きに來

たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉

しがるか、恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺うかがつて

見ると別段の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、あの娘を貰ってくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひねくる。「ところが大違さ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主ぬしでね……」迷亭が半なかば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻について俳体はいたいし詩を考えているんだがね」と木に竹を接ついだような事を云う

。隣の室<sup>へや</sup>で妻君がくすくす笑い出す。「随分君も吞<sup>の</sup>

んき

気だなあ出来たのかい」「少し出来た。第一句がこ  
の顔に鼻祭り<sup>、</sup>と云うのだ」「それから?」「次がこ  
の鼻に神酒供え<sup>、</sup>というのさ」「次の句は?」「まだ  
それぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒  
月君がにやにや笑う。「次へ穴二つ<sup>、</sup>幽かなりと付け  
ちやどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒月が「

奥深く毛も見えずはいけますまいか」と各々出鱈目

おのおのでたらめ

を並べていると、垣根に近く、往来で「今戸焼の狸いまどやき たぬき

今戸焼の狸」と四五人わいわい云う声がする。主人

も迷亭もちよつと驚ろいて表の方を、垣の隙すきからす

かして見ると「ワハハハハハ」と笑う声がして遠く

へ散る足の音がする。「今戸焼の狸というな何だい」

と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」

と主人が答える。「なかなか振ふるつていますな」と寒

月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか急に

立ち上つて「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻に

ついて研究した事がございますから、その一斑いっぽんを披ひ

瀝れきして、御両君の清聴を煩わづらわしたいと思ひます」と

演舌の真似をやる。主人はあまりの突然にぼんやり

して無言のまま迷亭を見ている。寒月は「是非承うけたまわり



たいものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見  
ましたが鼻の起源はどうも確しかと分りません。第一の  
不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が  
二つでたくさんである。何もこんなに横風おうふうに真中か  
ら突き出して見る必用がないのである。ところがど  
うしてだんだん御覧のごとく斯様かようにせり出して参っ  
たか」と自分の鼻を抓つまんで見せる。「あんまりせり

出してもおらんじやないか」と主人は御世辞のないところを云う。「とにかく引っ込んではおりませんか。ただ二個の孔があななら併んでいる状態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも計られませんか、あらかじめ予め御注意をしておきます。――で愚見によりますと鼻の発達はなは吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行為の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈

出したものでございます」 「佯<sup>いつわ</sup>りのない愚見だ」と

そうにゆう

また主人が寸評を挿入する。 「御承知の通り鼻<sup>はな</sup>汁を

かむ時は、是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことに

この局部だけに刺激を与えますと、進化論の大原則

によつて、この局部はこの刺激に応ずるがため他に

比例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くな

ります、肉も次第に硬<sup>かた</sup>くなります。ついに凝<sup>こ</sup>つて骨

となります」 「それは少し——そう自由に肉が骨に  
一足飛に変化は出来ますまい」と理学士だけあつて  
寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳べ  
続ける。「いや御不審はごもつともですが論より証  
拠この通り骨があるから仕方ありません。すでに  
骨が出来る。骨は出来ても鼻汁はなは出ますな。出れば  
かまずにはいられません。この作用で骨の左右が削けず

り取られて細い高い隆起と変化して参ります——実

に恐ろしい作用です。点滴てんてきの石を穿うがつがごとく、賓び

頭んずる顱おのずの頭が白から光明を放つがごとく、不思議薰不ふしぎくんふ

思議臭しぎしゅうの喩たとえのごとく、斯かよう様に鼻筋が通つて堅くなり

ます」 「それでも君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」 「演

者自身の局部は回護かいごの恐れがありますから、わざと

論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻の

ごときは、もつとも発達せるもつとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思います」寒月君は思わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度

に達しますと偉観には相違ございませんが何となく

おそろ

びりよう

怖しくて近づき難いものであります。あの鼻梁など

は素晴らしいには違いございませんが、少々峻嶮過ぎ

しゅんけん

るかと思われます。古人のうちにててもソクラチス

、ゴールドスミスもしくははサッカーの鼻などは構造の上から云うと随分申し分はございましょうがその申し分のあるところに愛嬌あいきょうがございます。鼻高きが故に貴たつとからず、奇きなるがために貴しとはこの故でもございましょうか。下世話げせわにも鼻より団子と申しますれば美的価値から申しますとまず迷亭くらいのところが適當かと存じます」寒月と主人は「フッフ

フ」と笑い出す。迷亭自身も愉快そうに笑う。「さ

てただ今<sup>いま</sup>まで弁じましたのは——」先生弁じまし

たは少し講釈師のようで下品ですから、よしていた

だきましよう」と寒月君は先日<sup>ふくしゅう</sup>の復讐をやる。「さ

ようしからば顔を洗って出直しましよかな。——

ええ——これから鼻と顔の権衡<sup>けんこう</sup>に一言論<sup>いちごん</sup>及したいと

思います。他に關係なく単独に鼻論をやりますと



かの御母堂などはどこへ出しても恥ずかしからぬ

くらまやま

鼻——鞍馬山で展覧会があつても恐らく一等賞だろ

うと思われるくらいな鼻を所有していらせられます

が、悲しいかなあれは眼、口、その他の諸先生と何

等の相談もなく出来上った鼻であります。ジュリア

ス・シーザーの鼻は大したものに相違ございません。

はさみ

しかしシーザーの鼻を鋏でちよん切つて、当家の猫

の顔へ安置したらどんな者でございましょうか。喩たと

ひたい

えにも猫の額と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が

とつこつ

そび

突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据すえ

付けたようなもので、少しく比例を失するの極、そ

の美的価値を落す事だろうと思います。御母堂の鼻

まさ

えいしさつそう

はシーザーのそれのごとく、正しく英姿颯爽たる隆

いによ

起に相違ございませぬ。しかしその周囲を圍繞する

顔面的条件は如何いかな者でありましょう。無論当家の

猫のごとく劣等ではない。しかし癩癰てんかんや病みの御かめ、

のごとく眉まゆの根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上

げらるるのは事実であります。諸君、この顔にして

この鼻ありと嘆ぜざるを得んではありませんか」迷

亭の言葉が少し途切れる途端とたん、裏の方で「まだ鼻の

話しをしているんだよ。何てえ剛突ごうつく張はりだろう」と

云う声が聞える。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。迷亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたつて、新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の深く名誉と思うところであります。ことに宛転えんてんたる嬌音きようおんをもつて、乾燥なる講筵こうえんに一点の艶味えんみを添えられたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧けんこに背か

ざらん事を期する訳でありますが、これから少々

力学上の問題に立ち入りますので、いきおい勢御婦人方には

御分りにくいかも知れませんが、どうか御辛防ごしんぼうを願ひ

ます」寒月君は力学と云う語を聞いてまたにやにや

する。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこ

の顔は到底調和しない。ツアイシングの黄金律を失

していると云う事なんで、それを嚴格に力学上の公

式から演繹して御覧に入れようと云うのであります。

まずHを鼻の高さとします。 $\alpha$ は鼻と顔の平面の交

又より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と

御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。

……「分るものか」と主人が云う。「寒月君はど

うだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困

ったな。苦沙弥くしやみはとにかく、君は理学士だから分る

だろうと思つたのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやった甲斐かいがないのだが――まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう

「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「

当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、――いいか両君よ能く聞き給え、これからが結論だぜ。――さて以上の公式にウイ

ルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は無論の事許さねばなりません。またこの形体に追陪ついはいして起る心意的状況は、たとい後天性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなりません。従つてかくのごとく身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異



状がある事と察せられます。寒月君などは、まだ年

が御若いから金田令嬢の鼻の構造において特別の異  
状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝は潜

伏期の長いものでありますから、いつ何時なんどき氣候の劇

変と共に、急に発達して御母堂のそれのごとく、咄と

嗟つさの間に膨脹かんぼうちょうするかも知れません、それ故にこの御

婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御

断念になつた方が安全かと思われます、これには当  
家の御主人は無論の事、そこに寝ておらるる猫ねこまたどの又殿  
にも御異存は無かろうと存じます」主人はようよう  
起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が  
貰うものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱  
心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を表するた  
めににやーにやーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月

君は別段騒いだ様子もなく「先生方の御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、もし当人がそれを気にして病気にでもなったら罪ですから――

」「ハハハハハハえんざい艶罪と云うわけ訳だ」主人だけはおおい大にむ

きになつて「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘

なら碌ろくな者でないに極きまつてらあ。初めて人のうちへ

来ておれをやり込めに掛つた奴だ。傲慢ごうまんな奴だ」と

ひとりひとでぶんぶんする。するとまた垣根のそばで三四

人が「ワハハハハハ」と云う声がする。一人が「高

慢とうへんぼくちきな唐変木だ」と云うと一人が「もっと大きな

家うちへ這はい入りてえだろう」と云う。また一人が「御氣

の毒だが、いくら威張ったって蔭弁慶かげべんけいだ」と大きな

声をする。主人は椽側えんがわへ出て負けないような声で「

やかましい、何だわざわざそんな堀へいの下へ来て」と

怒鳴る。どな「ワハハハハサヴェジ・チーだ、サヴェ

ジ・チーだ」と口々に罵ののしる。主人はおおい大に逆鱗げきりんの体てい

で突然起たつてステツキを持って、往来へ飛び出す

。迷亭は手を拍うつて「面白い、やれやれ」と云う

。寒月は羽織の紐を撚ひねつてにやにやする。吾輩は主

人のあとを付けて垣の崩れから往来へ出て見たら

、真中に主人が手持無沙汰にステツキを突いて立つ

ている。人通りは一人もない、ちよつと狐きつねに抓つままれた体ていである。

#### 四

例によつて金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更いまさら解釈する必要もない。しばし

ばを自乗じじようしたほどの度合を示す語ことばである。一度やつ

た事は二度やりたいもので、二度試みた事は三度試  
みたいのは人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫  
といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ  
出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以  
上繰返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行  
為が生活上の必要と進化するのもまた人間と相違は

ない。何のために、かくまで足繁くあししげ金田邸へ通うの

かと不審を起すならその前にちよつと人間に反問し

たい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻

から吐き出すのであるか、腹の足たしにも血の道の薬

にもならないものを、恥はずかし氣げもなく吐吞とどんして憚はばか

らざる以上は、吾輩が金田にしゅつにゆう出入するのを、あまり

大きな声で咎とがめ立だてをして貰もらいたくない。金田邸は



吾輩の煙草たばこである。

忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か間男まおとこ

のようで聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは、招

待こそ受けないが、決して鯉かつおの切身きりみをちよろまかし

たり、眼鼻が顔の中心に痙攣けいれん的に密着てきしている狎君ちん

などと密談するためではない。——何探偵？——も

つてのほかの事である。およそ世の中に何が賤いやしい

家業だかぎようと云つて探偵と高利貸ほど下等な職はないと

思っている。なるほど寒月君のために猫にあるまじ

きほどの義侠心ぎぎようしんを起して、一度は金田家の動静を余よ

所そながら窺うかがつた事はあるが、それはただの一遍で

、その後は決して猫の良心に恥ずるような陋劣ろうれつな振

舞を致した事はない。——そんなら、なぜ忍しのび込こむ

と云いうような胡乱うろんな文字を使用した？——さあ、そ

れがすこぶる意味のある事だて。元来吾輩の考によ

たいくう

おお

ると大空は万物を覆うため大地は万物を載のせるため

しつよう

に出来ている——いかに執拗な議論を好む人間でも

この事実を否定する訳には行くまい。さてこの大空たいく

うだいち

大地を製造するために彼等人類はどのくらいの労力

つい

せきすん

を費やしているかと云うと尺寸の手伝もしておらぬ

ではないか。自分が製造しておらぬものを自分の所

有と極める法はなからう。自分の所有と極めても差

つか

し支えないが他の出入を禁ずる理由はあるまい。こ

しゆつにゆう

ぼうぼう

の茫々たる大地を、小賢しくも垣を囲らし棒杭を立

こざか

めぐ

ぼうぐい

てて某々所有地などと劃し限るのはあたかもかの蒼

かく

そう

てん  
なわばり

天に縄張して、この部分は我の天、あの部分は彼の

われ

かれ

天と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一

坪いくらの所有権を売買するなら我等が呼吸する空

氣を一尺立方に割つて切売をしても善い訳である

。空氣の切売が出来ず、空の縄張が不当なら地面の

私有も不合理ではないか。如是によぜかん觀によりて、如是によぜほう法

を信じている吾輩はそれだからどこへでも這入はいつて

行く。もつとも行きたくない処へは行かぬが、志す

方角へは東西南北の差別は入らぬ、平氣な顔をして、

のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳が

ない。――しかし猫の悲しさは力ずくでは到底人間

には叶かなわない。強勢は権利なりとの格言さえあるこ

の浮世に存在する以上は、いかにこつちに道理があ

っても猫の議論は通らない。無理に通そうとすると

車屋の黒のごとく不意に肴屋さかなやの天秤棒てんびんぼうを喰くらう恐れが

ある。理はこつちにあるが権力は向うにあると云う

場合に、理を曲げて一も二もなく屈従するか、また

は権力の目を掠<sup>かす</sup>めて我理を貫くかと云えば、吾輩は

無論後者を択<sup>えら</sup>ぶのである。天秤棒は避けざるべから

ざるが故に、忍<sup>、</sup>ばざるべからず。人の邸内へは這入

り込んで差支<sup>さしつか</sup>えなき故に、込<sup>、</sup>まざるを得ず。この故に吾

輩は金田邸へ忍<sup>、</sup>び込<sup>、</sup>むのである。

忍<sup>ど</sup>び込む度が重なるにつけ、探偵をする気はない

が自然金田君一家の事情が見たくもない吾輩の眼に

映じて覚えたくもない吾輩の脳裏のうりに印象を留とどむるに

至るのはやむを得ない。鼻子夫人が顔を洗うたんび

に念を入れて鼻だけ拭く事や、富子令嬢が阿倍川餅あべかわもち

を無暗むやみに召し上がらるる事や、それから金田君自身

が——金田君は妻君に似合わず鼻の低い男である

。単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分

喧嘩をして、餓鬼がきだいしよう大将のために頸筋くびすじを捉つかまえられて、



うんと精一杯に土塀<sup>どべい</sup>へ圧<sup>お</sup>し付けられた時の顔が四十

年後の今日<sup>こんにち</sup>まで、因果<sup>いんが</sup>をなしておりはせぬかと怪<sup>あやし</sup>ま

るくらい平坦な顔である。至極<sup>しごく</sup>穏かで危険のない

顔には相違ないが、何となく変化に乏しい。いくら

怒<sup>おこ</sup>つても平<sup>たい</sup>かな顔である。——その金田君が鮪<sup>まぐろ</sup>の刺<sup>さ</sup>

身<sup>しみ</sup>を食<sup>く</sup>つて自分で自分の禿頭<sup>はげあたま</sup>をぴちやぴちや叩<sup>たた</sup>く事

や、それから顔が低いばかりでなく背が低いので

、無暗に高い帽子と高い下駄を穿く事や、それを車  
夫がおかしがつて書生に話す事や、書生がなるほど  
君の觀察は機敏だと感心する事や、——一々数え切  
れない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、築山つきやまの陰か  
ら向うを見渡して障子が立て切つて物静かであるな  
と見極めがつくと、徐々そろそろ上り込む。もし人声にぎやが賑か

であるか、座敷から見透みすかさるる恐れがあると思え

ば池を東へ廻まわつて雪隠せついんの横から知らぬ間まに椽えんの下へ

出る。悪い事をした覚おぼえはないから何も隠れる事も

、恐れる事もないのだが、そこが人間と云う無法者

に逢あつては不運と諦あきらめるより仕方がないので、もし

世間が熊坂長範くまさかちようはんばかりになつたらいかなる盛徳の君

子もやはり吾輩のような態度に出ずるであろう。金

田君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範の  
ように五尺三寸を振り廻す氣遣きづかいはあるまいが、承うけたまわる  
処によれば人を人と思わぬ病氣があるそうである

。人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。

して見れば猫たるものはいかなる盛徳の猫でも彼の  
邸内で決して油断は出来ぬ訳わけである。しかしその油

断の出来ぬところが吾輩にはちよつと面白いので

吾輩がかくまでに金田家の門を出入しゆつにゆうするものも、た

だこの危険が冒おかして見たいばかりかも知れぬ。それ

は追つて篤とくと考えた上、猫の脳裏のうりを残りなく解剖し

得た時改めて御吹聴ごふいちようかまつ仕ろう。

今日はどんな模様だなと、例の築山の芝生しばふの上に

顎あごを押しつけて前面を見渡すと十五畳の客間を弥生やよい

の春に明け放つて、中には金田夫婦と一人の来客と

おはなさいちゅう

の御話最中である。

あいにく

生憎鼻子夫人の鼻がこつちを向

いて池越しに吾輩の額の上を正面から睨め付けてい

にら

る。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである

。金田君は幸い横顔を向けて客と相對しているから

例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り

あいか

鼻の在所が判然しない。

ただ胡麻塩色の口髯が好い

ごましお

くちひげ

加減な所から乱雑に茂生して

もせい

いるので、あの上に孔

あな

が二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。春<sup>はる</sup>

<sup>かぜ</sup>なめら

風もああ云う滑かな顔ばかり吹いていたら定めて楽<sup>らく</sup>

だろうと、ついでながら想像を逞<sup>たくま</sup>しゆうして見た

。御客さんは三人の中<sup>うち</sup>で一番普通な容貌<sup>ようぼう</sup>を有してい

る。ただし普通なだけに、これぞと取り立てて紹介

するに足るような雑作<sup>ぞうさく</sup>は一つもない。普通と云うと

結構なようだが、普通の極<sup>きよく</sup>平凡の堂<sup>のぼ</sup>に上り、庸俗の

室に入<sup>い</sup>ったのはむしろ憫然<sup>びんぜん</sup>の至りだ。かかる無意味

<sup>つらがまえ</sup>

な面構<sup>つら</sup>を有すべき宿命を帯びて明治の昭代<sup>しょうだい</sup>に生れて

来たのは誰だろう。例のごとく椽の下まで行つてその談話を承わらなくては分らぬ。

「……それで妻<sup>さい</sup>がわざわざあの男の所まで出掛けて

<sup>ようす</sup>

行つて容子を聞<sup>き</sup>いたんだがね……」と金田君は例の

<sup>おうふう</sup>

ごとく横風な言葉使である。横風ではあるが毫<sup>ごう</sup>も峻<sup>しゅ</sup>



嶮<sup>んけん</sup>なところがない。言語も彼の顔面のごとく平板<sup>へいばんぼう</sup>彪。

大<sup>だい</sup>である。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がございま  
すので——なるほど、よい御思い付きで——なるほ  
ど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得ないので」

「ええ苦<sup>く</sup>沙<sup>し</sup>弥<sup>や</sup>じや要領を得ない訳<sup>わけ</sup>で——あの男は私

がいつしよに下宿をしている時分から実に煮え切らない——そりや御困りでございましたろう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのってあなた、私わたししやこの年になるまで人のうちへ行つて、あんな不取扱ふとりあつかいを受けた事はありやしません」と鼻子は例によつて鼻嵐を吹

く。

「何か無礼な事でも申しましたか、昔むかしから頑固がんこな性分で——何しろ十年一日のごとくりードル専門の教師をしているのでも大体御分りになりましたよう。」と御客さんは体ていよく調子を合せている。

「いや御話しにもならんくらいで、妻さいが何か聞くとまるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは怪けしからん訳で——一体少し学問をしてい

るととかく慢心が萌きざすもので、その上貧乏をすると  
負け惜しみが出ますから——いえ世の中には随分無  
法な奴がおりますよ。自分の働きのないのにや気が  
付かないで、無暗むやみに財産のあるものに喰くつて掛かるな  
んてえのが——まるで彼等の財産でも捲まき上げたよ  
うな気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さ  
んは大恐悦ていの体である。

「いや、まことに言語同断で、ああ云うのは必竟世

ごんごどうだん

ひつきよう

わがまま

間見ずの我儘から起るのだから、ちつと懲らしめの

こ

ためにいじめてやるが好かろうと思つて、少し当つてやったよ」

「なるほどそれでは大分答だいぶんえましたろう、全く本人

のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる

うけたまわ

当り方が承らぬ先からすでに金田君に同意している。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでしょう。学校へ出ても福地<sup>ふくち</sup>さんや、津木<sup>つぎ</sup>さんには口も利<sup>き</sup>かないんだそうです。恐れ入って黙っているのかと思つたらこの間は罪もない、宅<sup>たく</sup>の書生をステッキを持って追つ懸けたつてんです——三十面<sup>づら</sup>さげてよく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじや

ありませんか、全くやけで少し気が変になつてるんですよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやつたんで……」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云つて通つたんだそうです、すると、いきなり、ステッキを持って

はだし  
跣足で飛び出して来たんだそうです。よしんば、ち

つとやそつと、何か云ったって小供じゃありません

か、ひげづら髯面の大僧おおぞうの癖にしかも教師じゃありませんか」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云うと、金

田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上はい

かなる侮辱を受けても木像のようにおとなしくして



おらねばならぬとはこの三人の期せずして一致した  
論点と見える。

「それに、あの迷亭って男はよっぽどな酔興人です  
すいきようじん

ね。役にも立たない嘘うそ八百を並べ立てて。私わたししやあ

んな変挺へんてこな人にや初めて逢いましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺ほらを吹くと見え

ますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになったんです

か。あれに掛っちやたまりません。あれも昔むかし白炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですから能よく喧嘩けんかをしましたよ」

「誰だって怒りまさあね、あんなじや。そりや嘘をつくのも宜ようござんしようさ、ね、義理が悪ういとか、ばつを合せなくつちやあならないとか——そんな時には誰しも心にならない事を云うもんでさあ。しか

しあの男のは吐<sup>つ</sup>かなくつてすむのに矢<sup>や</sup>鱈<sup>たら</sup>に吐くんだ  
から始末に了<sup>お</sup>えないじやありませんか。何が欲しく  
つて、あんな出<sup>で</sup>鱈<sup>たら</sup>目を――よくまあ、しらじらしく  
云えると思いますよ」

「ごもつともで、全く道楽からくる嘘だから困りま  
す」

「せっかくあなた真面目に聞きに行つた水島の事も

滅茶滅茶になつてしまいました。めちやめちや 私や剛腹で忌々しわたし ぎょうはら いまいま

くつて——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりです。から、後あとで車夫にビールを一ダース持たせてやったんです。ところがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理由がない、持つて歸れつて云うんだそうで。いえ御礼だから、どうか御取り下さいって車夫

が云つたら――悪<sup>に</sup>くいじやありませんか、俺はジ

ヤムは毎日舐<sup>な</sup>めるがビールのような苦<sup>にが</sup>い者は飲んだ

事がないって、ふいと奥へ這<sup>はい</sup>入ってしまつたって――

――言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じやありませんか」

「そりや、ひどい」と御客さんも今度は本氣に苛<sup>ひど</sup>いと感<sup>かん</sup>じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者は陰から、からかつてさえいればすむようなものの、少々それでも困る事があるじやて……」と鮪まぐろの刺身を食う時のごとく禿頭はげあたまをぴちやぴちや叩たたく。もつとも吾輩は椽えんの下にいるから實際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿頭の音は近来大分聞だいぶん

馴れている。比丘尼びくにが木魚の音を聞き分けるごとく、

椽の下からでも音さえたしかであればすぐ禿頭だな

と出所しゅっしょを鑑定する事が出来る。「そこでちよつと君

を煩わづらわしたいと思つてな……」

「私に出来ます事なら何でも御遠慮なくどうか――

今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ

ろ御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますか

ら」と御客さんは快よく金田君の依頼を承諾する

くちよう

。この口調で見るとこの御客さんはやはり金田君の

世話になる人と見える。いやだんだん事件が面白く

発展してくるな、今日はあまり天氣が宜いので、来

る気もなしに來たのであるが、こう云う好材料を得え

ようとは全く思い掛がけなんだ。

御彼岸おひがんにお寺詣てらまいりを

ほうじよう

ぼたもち

して偶然方丈で牡丹餅の御馳走になるような者だ



。金田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下から耳を澄して聞いている。

「あの苦沙弥と云う変物へんぶつが、どう云う訳か水島に入いれ智慧ぢえをするので、あの金田の娘を貰いつては行かんなどとはのめかすそうだ——なあ鼻子そうだな」

「ほのめかすどころじゃないんです。あんな奴の娘を貰いう馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決して

貰つちやいかんよつて云うんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云つたのか」

「云つたどころじゃありません、ちゃんと車屋の神さんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞の通りの次第さ、随分厄介だろうが？」

「困りますね、ほかの事と違って、こう云う事には  
他人が妄りみだに容喙ようかいするべきはずの者ではありません  
からな。そのくらいな事はいかな苦沙弥でも心得て  
いるはずですが。一体どうした訳なんでしょう」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をして  
いて、今はとにかく、昔は親密な間柄であつたそう  
だから御依頼するのだが、君当人に逢つてな、よく

利害を諭<sup>さと</sup>して見てくれんか。何か怒<sup>おこ</sup>っているかも知

れんが、怒るのは向<sup>むこう</sup>が悪<sup>わる</sup>いからで、先方がおとな

しくしてさえいれば一身上の便宜も充分計<sup>はか</sup>ってやる

し、氣に障<sup>さ</sup>わるような事もやめてやる。しかし向が

向ならこつちもこつちと云う氣になるからな——つ

まりそんな我<sup>が</sup>を張るのは当人の損だからな」

「ええ全くおっしやる通り愚<sup>ぐ</sup>な抵抗をするのは本人

の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く申し聞けましょう」

「それから娘はいろいろと申し込もある事だから

、必ず水島にやると極<sup>き</sup>める訳にも行かんが、だんだ

ん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあるいはもう事が出来るかも知れんくらいはそれと

なくほのめかしても構わん」

「そう云つてやったら当人も励はげみになつて勉強する

事でしよう。宜よろしゅうございます」

「それから、あの妙な事だが——水島にも似合わん  
事だと思ふが、あの変物へんぶつの苦沙弥を先生先生と云つ

て苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だから困る。なに  
そりや何も水島に限る訳では無論ないのだから苦沙

弥が何と云つて邪魔をしようと、わしの方は別に差さし  
支つかえもせんが……」

「水島さんが可哀そうですからね」と鼻子夫人が口  
を出す。

「水島と云う人には逢つた事もございませんが、と  
にかくこちらと御縁組が出来れば生涯しょうがいの幸福で、本  
人は無論異存はないのでしよう」

「ええ水島さんは貰いたがっているんですが、苦沙弥だの迷亭だのって変り者が何だとか、かんだとか云うものですから」

「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合わん所作しよさですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じましょう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それ



から実は水島の事も苦沙弥が一番詳くわしいのだがせん  
だつて妻さいが行つた時は今の始末で碌々ろくろく聞く事も出来  
なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等  
をよく聞いて貰いたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから  
廻つたら、もう歸つておりましよう。近頃はどこに  
住んでおりますか知らん」

「ここの前を右へ突き当って、左へ一丁ばかり行くと崩れかかった黒堀のあるうちです」と鼻子が教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。歸りにちよつと寄つて見ましょう。なあに、大体分りましょうひょうさつ標札を見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺

を御饌粒ごぜんつぶで門へ貼はり付けるのでしよう。雨がふると

剥はがれてしまひましょう。すると御天氣の日にまた

貼はり付けるのです。だから標札は当あてにやなりません

よ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札きふだでも懸

けたらよさそうなもんですがねえ。ほんとうにどこ

までも氣の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちに聞

いたら大概分るでしょう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、  
好い事がある。何でも屋根に草が生え<sup>は</sup>たうちを探して行けば間違っこありませんよ」

「よほど特色のある家<sup>いえ</sup>ですなアハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合

が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である

。椽えんの下を伝わって雪隠せついんを西へ廻って築山つきやまの陰から

往来へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ

歸つて来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ白毛布しろげつとを敷いて、腹這はらばいになつて麗うらちか

はるはるび春日こうらに甲羅を干している。太陽の光線は存外公平

なもので屋根にペンペン草の目標のある陋屋ろうおくでも

、金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが

、気の毒な事には毛布けつとだけが春らしくない。製造元

では白のつもりで織り出して、唐物屋とうぶつやでも白の気で

売り捌さばいたのみならず、主人も白と云う注文で買っ

て来たのであるが――何しろ十二三年前の事だか

ら白の時代はとくに通り越してただ今は濃灰色のうかいしよくなる

変色の時期に遭遇そうぐうしつつある。この時期を経過して

他の暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかだか

は、疑問である。今でもすでに万遍なく擦<sup>す</sup>り切れて、

豎横<sup>たてよこ</sup>の筋は明かに読まれるくらいだから、毛布と称

するのはもはや僭<sup>せんじょう</sup>上の沙汰であつて、毛の字は省<sup>はぶ</sup>い

て単にツトとでも申すのが適當である。しかし主人

の考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持っ

た以上は生涯<sup>しょうがい</sup>持たねばならぬと思つてゐるらしい

。随分呑氣のんきな事である。さてその因縁いんねんのある毛布けつとの

上へ前申ぜんす通り腹這になつて何をしているかと思う

と両手で出張つた顚あごを支えて、右手の指の股に巻煙まきた

草ばこを挟んでゐる。ただそれだけである。もつとも彼

がフケだらけの頭の裏うちには宇宙の大真理が火の車の

ごとく廻転しつつあるかも知れないが、外部から拝

見したところでは、そんな事とは夢にも思えない。



煙草の火はだんだん吸口の方へ逼せまつて、一寸いっすんばかり

燃え尽した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるの

も構わず主人は一生懸命に煙草から立ち上のぼる煙の行

末を見詰めている。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、

流れる輪を幾重いくえにも描いて、紫深き細君あらいがみの洗髪あらの根

本へ吹き寄せつつある。——おや、細君の事を話し

ておくはずだった。忘れていた。

細君は主人に尻しりを向けて――なに失礼な細君だ？

別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次

第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のと

ころへ頬杖ほおづえを突き、細君は平気で主人の顔の先へ莊そう

嚴ごんなる尻を据すえたまでの事で無礼も糸瓜へちまもないので

ある。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間まに礼儀作法

などと窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。

——さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう

りようけん

云う了見か、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒

髪を、麤ふ海苔のりと生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見

えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけ

て、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている

。実はその洗髪を乾かすために唐縮緬とうちりめんの布団ふとんと針箱

えんがわ

を椽側へ出して、恭うやうやしく主人に尻を向けたのである。

あるいは主人の方で尻のある見当へ顔を持って来た

のかも知れない。そこで先刻御話しをした煙草たばこの煙

りが、豊かに靡なびく黒髪かげろうの間に流れ流れて、時ならぬ

陽炎の燃えるところを主人は余念もなく眺めている。

しかしながら煙は固もとより一所いっしょに停とどまるものではない、

その性質として上へ上へと立ち登るのだから主人の

眼もこの煙りの髪毛かみげと纏もつれ合う奇観を落ちなく見よ

うとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ

。主人はまず腰の辺から觀察を始めて徐々じょじょと背中を

伝つたつて、肩から頸筋くびすじに掛つたが、それを通り過ぎて

ようよう脳天に達した時、覺えずあつと驚いた。――

――主人が偕老同穴かいろうどうけつを契ちぎつた夫人の脳天の真中まんには真

丸まるな大きな禿はげがある。しかもその禿が暖かい日光を

反射して、今や時を得顔に輝いている。思わざる辺へん

にこの不思議な大発見をなした時の主人の眼は眩まばゆ

い中に充分の驚きを示して、烈しい光線で瞳孔どうこうの開

くのも構わず一心不乱に見つめている。主人がこの

禿を見た時、第一彼の脳裏のうりに浮んだのはかの家伝いえ来

の仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿おとうみようざらであ

る。彼の一家いっけは真宗で、真宗では仏壇に身分不相応

な金を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その

家の倉の中に、薄暗く飾り付けられたる金箔厚き厨きんぱくず

子しがあつて、その厨子の中にはいつでも真鍮しんちゆうの灯明

皿がぶら下つて、その灯明皿には昼でもぼんやりし

た灯ひがついていた事を記憶している。周囲が暗い中

にこの灯明皿が比較的明瞭に輝やいていたので小供

心にこの灯を何遍となく見た時の印象が細君の禿に

喚よび起されて突然飛び出したものであろう。灯明皿

は一分立たぬ間に消えた。この度はたび観音様の鳩かんのんさまの事

を思い出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の關係

もないようであるが、主人の頭では二つの間に密接

な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行くと必

ず鳩に豆を買ってやった。豆は一皿がぶんきゆう文久二つで

、赤い土器かわらけへ這入はいっていた。その土器かわらけが、色と云い

大さとおおきと云いこの禿によく似ている。



「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だって、御前の頭にや大きな禿があるぜ。知ってるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿げているなら欺だまされたのであると口へは出さないが心の中うちで思う。

「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだって宜いいじやありませんか」と大おおに悟ったものである。

「どうだつて宜いって、自分の頭じゃないか」と主人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだつて宜いんだわ」と云つ

たが、さすが少しは氣になると見えて、右の手を頭に乘せて、くるくる禿を撫なでて見る。「おや大分大だいふ

きくなつた事、こんなじゃ無いと思つていた」と言つたところをもつて見ると、年に合わして禿があま

り大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は鬻まげに結ゆうと、ここが釣れますから誰でも禿はげげるんですわ」と少しく弁護しだす。

「そんな速度で、みんな禿はげげたら、四十くらいになれば、から薬缶やかんばかり出来なければならん。そりや病気に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭

を撫<sup>な</sup>で廻して見る。

「そんなに人の事をおっしやるが、あなただつて鼻の孔<sup>あな</sup>へ白髪<sup>しらが</sup>が生<sup>は</sup>えてるじゃありませんか。禿が伝染するなら白髪だつて伝染しますわ」と細君少々ぷりぷりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が――  
――ことに若い女の脳天がそんなに禿げちゃ見苦しい。

不具だ<sup>かたわ</sup>」

<sup>かたわ</sup>

「不具なら、なぜ御貰いになったのです。御自分が

好きで貰っておいて不具だなんて……」

「知らなかったからさ。全く今日<sup>きょう</sup>まで知らなかった

んだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時頭を見  
せなかったんだ」

「馬鹿な事を！　どこの国に頭の試験をして及第し

たら嫁にくるなんて、ものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は背せいが人並外はずれて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじやありませんか、背せいの低いのは最初から承知で御貰いになつたんじやありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるか

と思つたから貰つたのさ」

はたち

「廿にもなつて背せいが延びるなんて——あなたもよ

つぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は袖そでなしを抛ほう

り出して主人の方に振ねじ向く。返答次第ではその分

にはすまさんと云う権幕けんまくである。

はたち

「廿はたちになつたつて背せいが延びてならんと云う法はあ

るまい。嫁に来てから滋養分でも食わしたら、少し



は延びる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔をして妙な理窟りくつを述べていると門口かどぐちのベルが勢いきおいよく鳴り立てて頼むと云う大きな声がする。いよいよ鈴木君がペンペン草を目的めあてに苦沙弥先生の臥竜窟がりようくつを尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲つて、倉皇針箱そうこうと袖なしを抱かかえて茶の間へ逃げ込む。主人は鼠色の毛布けつとを丸め

て書斎へ投げ込む。やがて下女が持つて来た名刺を見て、主人はちよつと驚ろいたような顔付であつたが、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握つたまま後架へ這入こゝかはいつた。何のために後架へ急に這入こゝかはいつたか一向要領を得ん、何のために鈴木藤十郎君すずきとうじゅうろうの名刺を後架まで持つて行つたのかなおさら説明に苦しむ。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜら

れた名刺君である。

下女が更紗さらさの座布団とこを床の前へ直して、どうぞこ

れへと引き下がった、跡あとで、鈴木君は一応室内を見

廻まわす。床に掛けた花開万国春はなひらばんこくのはるとある木菴もくあんの贗物にせものや、

京製の安青磁やすせいじに活いけた彼岸桜ひがんぎくらなどを一々順番に点検

したあとで、ふと下女の勧めた布団の上を見るとい

つの間まにか一足びきの猫がすまして坐っている。申すま

でもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君の胸のうちにちよつとの間顔色にも出ぬほどの風波が起つた。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然と蹲踞そんきよしている。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。もしこの布団が勧められたまま

主<sup>ぬし</sup>なくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木

君はわざと謙遜<sup>けんそん</sup>の意を表<sup>ひょう</sup>して、主人がさあどうぞと

云うまでは堅い畳の上で我慢していたかも知れない。

しかし早晩自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく

乗ったものは誰であろう。人間なら譲る事もあるう

が猫とは怪<sup>け</sup>しからん。乗り手が猫であると言うのが

一段と不愉快を感じしめる。これが鈴木君の心の平

均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度が

もつとも癩しやくに障る。少しは気の毒そうにでもしてい

る事か、乗る権利もない布団の上に、傲然ごうぜんと構えて、

丸い無愛嬌ぶあいきような眼をばちつかせて、御前は誰だいと云

わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。これが平

均を破壊する第三の条件である。これほど不平があ

るなら、吾輩の頸根くびねつこを捉とらえて引きずり卸したら

宜<sup>よ</sup>さそうなものだが、鈴木君はだま<sup>よ</sup>つて見ている

。堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云う事は有ろうはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を洩<sup>も</sup>らさないかと云うと、これは全く鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自重心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであろうが

、体面を重んずる点より考えると、いかに金田君の股こ

肱こうたる鈴木藤十郎その人もこの二尺四方の真中に鎮

座まします猫大明神を如何いかんともする事が出来ぬので

ある。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争いをしたとあつてはいささか人間の威厳に関する。真

面目に猫を相手にして曲直きよくちよくを争うのはいかにも大人おと

気なげない。滑稽である。この不名誉を避けるためには



多少の不便は忍ばねばならぬ。しかし忍ばねばなら

ぬだけそれだけ猫に対する憎悪ぞうおの念は増す訳である

から、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦にがい顔をする。

吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の念を抑おさえてなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行わ

れつつある間に主人は衣紋えもんをつくろって後架こうかから出

て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところをもつて見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと思見える。名刺こそ飛んだ厄運やくうんに際会したものだと思まう間もなく、主人はこの野郎と吾輩の襟えりがみを攫つかんでえいとばかりに椽側えんがわへ擲たたきつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来

た」と主人は旧友に向つて布団を勧める。鈴木君はちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかつたが、実はこの間から東京の本社の方へ帰るようになってね……」

「それは結構だ、大分<sup>だいぶん</sup>長く逢わなかつたな。君が田舎<sup>なか</sup>へ行つてから、始めてじゃないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだから、いつでも失敬するような訳さ。悪<sup>わ</sup>るく思つてくれたもうな。会社の方は君の職業とは違つて随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違ふもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は

頭を美麗きれいに分けて、英国仕立のトウイードを着て

、派手な襟飾えりかざりをして、胸に金鎖りさえピカつかせ

ている体裁、どうしても苦沙弥君くしやみの旧友とは思えな  
い。

「うん、こんな物までぶら下げなくちや、ならんよ  
うになってね」と鈴木君はしきりに金鎖りを気にし  
て見せる。

「そりや本ものかい」と主人は無作法ぶさほうな質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが「君も大分年を取ったね。たしか小供があるはずだった  
が一人かい」

「いいや」

「二人？」

「いいや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先幾人出来るか分らん」

「相変わらず気楽な事を云つてるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよつぽどだろう」

「うん、いくつか能く知らんが大方六つか、七つかだろう」

「ハハハ教師は呑氣のんきでいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なつて見ろ、三日で嫌いやになるから」

「そうかな、何だか上品で、氣樂で、閑暇ひまがあつて、

すきな勉強が出来て、よさそうじゃないか。実業家

も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家になる

ならずつと上にならなくつちやいかん。下の方にな



るとやはりつまらん御世辞を振り撒いたり、好かん

ちよこ

猪口をいただきに出たり随分愚なもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れれ

ば何でもする、昔で云えば素町人だからな」と実業

すちやうにん

家を前に控えて太平樂を並べる。

ひか

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下品

かね しんじゆう

なところもあるのさ、とにかく金と情死をする覚悟

でなければやり通せないから——ところがその金と

云う奴が曲者で、——くせもの今もある実業家の所へ行つて

聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなく

ちやいけないと云うのさ——義理をかく、人情をか

く、恥をかく、これで三角になるそうだ面白いじやな

いかアハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちよつと有名だがね、君知らんかしら、ついこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ 何<sup>な</sup>んだあんな奴」

「大變怒ってるね。なあに、そりや、ほんの冗談<sup>じょうだん</sup>だらうがね、そのくらいにせんと金は溜らんと云<sup>た</sup>う喩<sup>え</sup>さ。君のようにそう真面目に解釈しちや困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はな  
んだ。君行つたんなら見て来たろう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云つてゐるんだ。せんだつ

て僕はあの鼻について俳体詩はいたいしを作ったがね」

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

「ああ僕のように忙がしいと文学などは到底駄目さ。とうてい

それに以前からあまり数奇すきでない方だから」

「君シャーレマンの鼻の恰好かっこうを知ってるか」

「アハハハハ随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と異名いみようをつけ

られていた。君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじ

やないか鼻なんか丸くても尖<sup>と</sup>んがってても」

「決してそうでない。君パスカルの事を知ってるか」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たようなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かかったならば世界の表面に大變化を来きたしたろうと」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無雜作むぞうさに鼻を馬鹿にしていかな

「まあいいさ、これから大事にするから。そりやそうとして、今日来たのは、少し君に用事があつて来

たんだがね——あの元君もとの教えたとか云う、水島——ええ水島ええちよつと思ひ出せない。——そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

「寒月かんげつか」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちよつと聞きたい事があつて来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」



「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行ったら……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだって、細君もそう云っていたよ

。苦沙弥さんに、よく伺おうと思つて上つたら、生あい

憎迷亭にくが来ていて茶々を入れて何が何だか分らなく  
してしまつたつて」

「あんな鼻をつけて来るから悪るいや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がお  
つたもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行  
かなかつたので残念だったから、もう一遍僕に行つ  
てよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだか  
らね。僕も今までこんな世話はした事はないが、も  
し当人同士が嫌いやでないなら中へ立まつて纏まとめるのも、

決して悪い事はないからね——それでやって来たの  
さ」

「御苦労様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では  
当人同士と云う語を聞いて、ことばどう云う訳か分らんが、  
ちよつと心を動かしたのである。蒸し熱い夏の夜に  
いちろる一縷の冷風が袖口を潜くぐったような気分になる。元来  
この主人はぶつ切ら棒の、頑固がんこつや光沢消しを旨むねとして

製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情

な文明の産物とは自おのずからその撰せんを異ことにしている。彼

が何なんぞと云うと、むかつ腹をたててぶんぶんするの

でも這裏しやりの消息は会得えとくできる。先日鼻と喧嘩をした

のは鼻が気に食わぬからで鼻の娘には何の罪もない

話しである。実業家は嫌いだから、実業家の片割れ

なる金田某も嫌きらいに相違ないがこれも娘その人とは没

交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も恨みもな

くて、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生

である。もし鈴木君の云うごとく、当人同志が好い

た仲なら、間接にもこれを妨害するのは君子のなす

べき所作しよさでない。——苦沙弥先生はこれでも自分を

君子と思っている。——もし当人同志が好いている

なら——しかしそれが問題である。この事件に対し

て自己の態度を改めるには、まずその真相から確めなければならん。

「君その娘は寒月の所へ来たがつてるのか。金田や鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりや、その——何だね——何でも——え、来たがつてるんだろうじゃないか」鈴木君の挨拶は少々

曖昧あいまいである。実は寒月君の事だけ聞いて復命さえす  
ればいいつもりで、御嬢さんの意向までは確かめて  
来なかつたのである。従つて円転滑脱かつたつの鈴木君もち  
よつと狼狽ろうばいの気味に見える。

「だ、ろ、う、た判然しない言葉だ」と主人は何事によら  
ず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちよつと僕の云いようがわるかつた。

令嬢の方でもたしかに意があるんだよ。いえ全くだよ——え？——細君が僕にそう云ったよ。何でも時々寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪しからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじや寒月に意がないんじゃないか」



「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いてい  
る人の悪口などは殊更云ことさらにつて見る事もあるからね」

「そんな愚ぐな奴がどこの国にいるものか」と主人は

斯かよう様な人情の機微に立ち入った事を云われても頓とんと

感じがない。

「その愚な奴が随分世の中にやあるから仕方がない。

現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。戸惑とまどいを

した糸瓜へちまのようだなんで、時々寒月さんの悪口を云いますから、よっぽど心の中うちでは思ってるに相違ありませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず

、鈴木君の顔を、だいたいどうえきしや大道易者のように昵じつと見つめている。鈴木君はこいつ、この様子では、ことによると

やり損なうなと疳<sup>かん</sup>づいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。

「君考えても分るじゃないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつて相応の家<sup>うち</sup>へやれるだろうじゃないか。寒月だつてえらいかも知れんが身分から云や——いや身分と云つちや失礼かも知れない。——財産と云う点から云や、まあ、だ

れが見たつて釣り合わんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が気を揉<sup>も</sup>んでるのは本人が寒月君に意があるからの事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなところにまごまごしているとまた唸<sup>とつ</sup>喊<sup>かん</sup>を喰う危険があるから、早く話しの歩を進めて

一刻も早く使命を完<sup>ま</sup>うする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で云うには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に附属した資格が欲しい——資格と云うと、まあ肩書だね、——博士になつたらやつてもいいなんて威張つてゐる次第じゃない——誤解しちやいかん。せんだ

つて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云う  
ものだから——いえ君が悪いのじゃない。細君も君  
の事を御世辞のない正直ない方だかたと賞ほめていたよ。  
全く迷亭君がわるかったんだろう。——それでさ本  
人が博士にでもなってくれば先方でも世間へ対し  
て肩身が広い、面目めんぼくがあると云うんだがね、どうだ  
ろう、近々きんきんの内水島君は博士論文でも呈出して、博

士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあに——金田だけなら博士も学士もいらんのさ、ただ世間と云う者があるとね、そう手軽にも行かんからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りに

してやりたくなる。主人を活いかすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰うつもりかどうかだか、それからまず問い正ただして見なくちやいかんからな」



「問い正すなんて、君そんな角張かどばった事をして物が

纏まとまるものじゃない。やっぱり普通の談話の際にそ

れとなく気を引いて見るのが一番近道だよ」

「気を引いて見る？」

「うん、気を引くと云うと語弊があるかも知れん

。——なに気を引かんでもね。話しをしていると自

然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊ぶこわすのは善くないと思う。仮令たとい勧めないまでも、こんな事は本人の随意にすべきはずのものだからね。今度寒月君が来たらなるべくどうか邪魔をしないようにしてくれ給え

。――いえ君の事じゃない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかかると到底助かりっこないんだから

」と主人の代理に迷亭の悪口をきいていると、噂うわさを

すれば陰の喩たとえに洩もれず迷亭先生例のごとく勝手口か

ら飄然ひょうぜん しゅんぷうと春風に乗じて舞い込んて来る。

「いやー珍客だね。僕のような狎客こうかくになると苦沙弥くしゃみ

はとかく粗略にしたがつていかん。何でも苦沙弥の

うちへは十年に一遍くらいくるに限る。この菓子

いつもより上等じゃないか」と藤村ふじむらの羊羹ようかんを無雑作むぞうさ

に頼張ほおばる。鈴木君はもじもじしている。主人はにや

にやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾

輩はこの瞬時の光景を椽側えんがわから拝見して無言劇と云

うものは優に成立し得ると思った。禅家ぜんけで無言の問

答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居

も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれどもすこぶる鋭どい幕である。

「君は一生旅鳥かと思つてたら、いつの間にか舞い

たびがらす

戻つたね。長生はしたいもんだな。どんな僥倖に廻

ながいき

ぎょうこう

めぐ

り合わんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に対し

ても主人に対するごとく毫も遠慮と云う事を知らぬ。

ごう

いかに自炊の仲間でも十年も逢わなければ、何とな

く気のおけるものだが迷亭君に限って、そんな素振そぶりも見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちよつと見当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は当らず障さわらずの返事はしたが、何とな  
く落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじってい  
る。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を發する。

「今日は諸君からひやかされに來たようなものだ

。なんぼ田舎者だつて——これでも街鉄がいてつを六十株持  
つてるよ」

「そりや馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持  
つていたが、惜しい事に大方虫おおかたが喰つてしまつて

「今じや半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところを十株ばかりやるところだった惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として

、ああ云う株は持ってて損はないよ、年々ねんねん高くなる

ばかりだから」

「そうだたとい仮令半株だって千年も持ってるうちにや倉



が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかりはない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などとは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考えているんだから」とまた羊羹ようかんをつまんで主人の方を見ると、主人も迷亭の食くい気けが伝染して自おのずから菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のものが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は曾呂崎そろさきに一度で

いいから電車へ乗らしてやりたかった」と主人は喰  
い欠けた羊羹の齒痕はあとを撫然ぶぜんとして眺める。

「曾呂崎が電車へ乗ったら、乗るたんびに品川まで  
行ってしまうは、それよりやっぱり天然居士てんねんこじで沢庵たくあん  
石いしへ彫ほり付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ

「いい頭の男だったが惜しい事をした」と鈴木君が云うと、迷亭は直ちに引き受けて

「頭は善かったが、飯を焚く事は一番下手だったぜ。

曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出をして蕎麦で凌いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦げくさくって心があつて僕も弱った。御負けに御菜に必ず豆腐をなま

で食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から喚よび起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で毎晩いっしょに汁粉を食しるこいに出たが、その崇たたりで今じや慢性胃

弱になつて苦しんでゐるんだ。実を云うと苦沙弥の

方が汁粉の数を余計食つてゐるから曾呂崎より先へ死んで宜いい訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と号して、毎晩竹刀しな刀いを持って裏の卵塔婆らんとうばへ出て、石塔を叩たたいてるところを坊主に見つかつて劍突けんつくを食つたじゃないか」と主人も負けぬ氣になつて迷亭の旧惡を曝あばく。

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれって言つたつけ。しか

し僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは手暴てあらだぜ。石塔と相撲をとって大小三個ばかり転がしてしまったんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非元のように起せと云うから人足を傭やとうまで待ってくれないと云ったら人足じやいかん懺悔ざんげの意を表するためにあなたが自身で起さなくては仏の意に背そむくと云うん

だからね」

「その時の君の風采ふうさいはなかったぜ、金巾かなきんのしやつに

越中えっちゅうふんどし禪で雨上りの水溜りの中でうんうん唸うなって……」

「それを君がすました顔で写生するんだから苛ひどい

。僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時ば

かりは失敬だと心しんから思ったよ。あの時の君の言草

をまだ覚えてゐるが君は知つてゐるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えてゐるものか、しか

しあの石塔にきせんいん帰泉院でんこう殿黄鶴大居士安永五年辰正月と

彫ほつてあつただけはいまだに記憶してゐる。あの

石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す時に盗んで行

きたかつたくらいだ。実に美学上の原理に叶かなつて

、ゴシック趣味な石塔だった」と迷亭はまた好い加



滅な美学を振り廻す。

「そりやいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾輩

は美学を専攻するつもりだから天地間の面白てんちかんい出来

事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなけ

ればならん、気の毒だの、可哀相かわいそうだのと云う私情は

学問に忠実なる吾輩ごときものの口にすべきところ

でないかと平気で云うのだらう。僕もあんまりな不人

情な男だと思ったから泥だらけの手で君の写生帖を  
引き裂いてしまった」

「僕の有望な画才が頓挫とんざして一向振いっこうわなくなつたの

も全くあの時からだ。君に機鋒きほうを折られたのだね

。僕は君に恨うらみがある」

「馬鹿にしちやいけない。こつちが恨めしいくらい  
だ」

「迷亭はあの時分から法螺吹ほらふきだったな」と主人は羊よう

羹かんを食おい了わつて再び二人の話の中に割り込んで来る。

「約束なんか履行りこうした事がない。それで詰問を受け

ると決して詫わびた事がない何とか蚊かとか云う。あの

寺の境内に百日紅さるすべりが咲いていた時分、この百日紅が

散るまでに美学原論と云う著述をすると云うから

駄目だ、到底出来る氣遣きづかいはないと云ったのさ。す

ると迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である、そんなに疑うなら賭かけをしよう

と云うから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を奢おごりっこかなにかに極きめた。きっと書物なんか

書く氣遣はないと思ったから賭をしたようなものの内心は少々恐ろしかった。僕に西洋料理なんか奢る

金はないんだからな。ところが先生一向稿を起す景いっこう

色しきがない。七日なぬか立っても二十日はつか立っても一枚も書か

ない。いよいよ百日紅が散って一輪の花もなくなつ

ても当人平気でいるから、いよいよ西洋料理に有り

ついたなと思つて契約履行をせま逼ると迷亭すまして取

り合わない」

「また何とか理窟りくつをつけたのかね」と鈴木君が相の

手を入れる。

「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能はないが意志だけは決して君方に負けはせんと剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云ったぜ。吾輩は意志の

一点においてはあえて何人にも一步も譲らん。しかし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日紅の散るまでに著書が出来なかったのは記憶の罪で意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と鈴木君はなぜだか面白がっている。迷亭のおらぬ時の語気とはよほど違っている。これが利口な人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも怒おこっている様子である。

「それは御氣の毒様、それだからその埋うめあわ合せをする



ために孔雀くじやくの舌なんかを金と太鼓で探しているじゃないか。まあそう怒おこらずに待っているさ。しかし著書と云えば君、今日は一大珍報を齎もたらして来たんだよ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が出来ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も

引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起したのを知っているか。寒月はあんな妙に見識張った男だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思つたら、あれでやつぱり色気があるからおかしいじゃないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃はどんぐりはかせ団栗博士の夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話し

てはいけぬと顚あごこと眼で主人に合図する。主人には一いっ

向意味こうが通じない。さつき鈴木君に逢つて説法を受

けた時は金田の娘の事ばかりが気の毒になつたが

、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした

事を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々

は悪にくらしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しか

けたのは何よりの御見おみやげで、こればかりは迷亭先

生白賛のごとくまずまず近來の珍報である。啻に珍

ただ

報のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。

とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分の

ように出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで

しらき

くすぶ

いかん

うま

白木のまま燻くすぶつていても遺憾いかんはないが、これは旨く

仕上がったと思う彫刻には一日も早く箔はくを塗つてや

りたい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図は  
そつち除<sup>の</sup>けにして、熱心に聞く。

「よく人の云う事を疑ぐる男だ。——もつとも問題

は団栗<sup>どんぐり</sup>だか首縊<sup>くびく</sup>りの力学だか確<sup>しか</sup>と分らんがね。とに

かく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違い

ない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞きた  
んびに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気  
が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリ  
ストラム・シャンデーの中に鼻論はなろんがあるのを発見し  
た。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料に  
なつたろうに残念な事だ。

びめい鼻名を千載せんざいに垂れる資格

は充分ありながら、あのままで朽くち果つるとは不憫ふびん

せんばん

千万だ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写

生してやろう」と相変らず口から出で任まかせに喋しゃべ舌り立

てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」と

主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君

はこれは迷惑だと云う顔付をしてしきりに主人に目

くばせをするが、主人は不導体のごとく一向電氣にいっこう感染しない。

「ちよつと乙おつだな、あんな者の子でも恋をするところ  
が、しかし大した恋じやなかろう、大方鼻恋はなごいくら  
いなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」

「貰えばいいがって、君は先日大反対だったじやな



いか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

「しかしどう、かしたんだろう。ねえ鈴木、君も実業

家の末席を汚すばっせき一人だから参考のために言つて聞か

せるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるものの

息女などを天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉るあが

のは、少々提灯と釣鐘と云う次第で、我々朋友たるちようちん  
ほうゆう

者が冷々<sup>れいれい</sup>黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、た

とい実業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変わらず元気がいいね。結構だ。君は十年前と容<sup>よ</sup>

子が少しも変<sup>うす</sup>っていないからえらい」と鈴木君は柳

に受けて、胡麻化<sup>ごまか</sup>そうとする。

「えらいと褒<sup>ほ</sup>めるなら、もう少し博学なところを御

目にかけるがね。昔<sup>むか</sup>しの希臘<sup>ギリシャ</sup>人は非常に体育を重ん

じたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百  
方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事に  
は学者の智識ちしきに対してのみは何等の褒美ほうびも与えたと  
云う記録がなかったので、今日まで実は大に怪しん  
でいたところさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子  
を合せる。

「しかるについ兩三日前に至つて、美学研究の際ふ  
とその理由を発見したので多年の疑團ぎだんは一度に氷解。  
しつづ  
漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て歡天喜地かんでんきちの  
至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が仰山ぎょうさんなので、さすが御上手者おじょうずもの  
の鈴木君も、こりや手に合わないと云う顔付をする。  
主人はまた始まつたなと云わぬばかりに、象牙ぞうげの箸はし

で菓子皿の縁を<sup>ふち</sup>かんかん叩いて俯<sup>うつ</sup>つ向<sup>む</sup>いている。迷亭だけは<sup>ふち</sup>大得意で弁じつつける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒の淵<sup>ふち</sup>から吾人の疑を千載<sup>せんざい</sup>の下<sup>もと</sup>に救い出してくれた者は誰だと思う。学問あつて以来の学者と称せらるる彼の<sup>か</sup>希臘<sup>ギリシヤ</sup>の哲人、逍遙派<sup>しょうようは</sup>の元祖アリストートルその人である。彼の説明に曰<sup>いわ</sup>くさ——おい菓子皿などを

叩かんで謹聴していなくちやいかん。――彼等希臘

人が競技において得るところの賞与は彼等が演ずる

技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美にほうび

もなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至

つてはどうである。もし智識に対する報酬として何

物をか与えんとするならば智識以上の価値あるもの

を与えざるべからず。しかし智識以上の珍宝が世の

中にあるうか。無論あるはずがない。下手なものをやれば智識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等は智識に対して千両箱をオリムパスの山ほど積み

、クリーサスの富を傾け<sup>かたむ</sup>尽<sup>つく</sup>しても相当の報酬を与え

んとしたのであるが、いかに考えても到底<sup>とうてい</sup>釣り合

はずがないと云う事を観破<sup>かんぱ</sup>して、それより以来と云

うものは奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしま

った。こうはくせいせん黄白青銭が智識の匹敵ひつてきでない事はこれで十分

理解出来るだろう。さてこの原理を服膺ふくようした上で時

事問題に臨のぞんで見るがいい。金田某は何だい紙幣さつに

眼鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警なる語を

もって形容するならば彼は一個の活動紙幣かつどうしへいに過ぎん

のである。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなところ

ろだろう。ひるがえ翻ひるがえって寒月君は如何いかんと見ればどうだ。かたじ辱



けなくも学問最高の府を第一位に卒業して毫ごうも倦怠けんたい

の念なく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日

夜どんぐり団栗のスタビリチーを研究し、それでもなお満足

する様子もなく、近々きんきんの中ロード・ケルヴィンを圧

倒するほどな大論文を発表しようとしつつあるでは

ないか。たまたま吾妻橋あずまばしを通り掛って身投げの芸を

仕損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有りが

ちの発作的所為で毫も彼が智識の問屋たるに煩いほっさできしよいをとんやわづら

及ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流の喩たとえをもつ

て寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識を

もつて捏こね上げたる二十八珊サンチの弾丸である。この弾

丸が一たび時機を得て学界に爆発するなら、——も

し爆発して見給え——爆発するだろう——」迷亭は

ここに至つて迷亭一流と自称する形容詞が思うよう

に出て来ないので俗に云う竜頭蛇尾の感に多少ひる

んで見えたがたちまち「活動切手などは何千万枚あ

ったって粉な微塵こみじんになつてしまふさ。それだから寒

月には、あんな釣り合わない女性によしようには駄目だ。僕が不

承知だ、百獣の中うちでもっとも聡明なる大象と、もつ

とも貪婪たんらんなる小豚と結婚するようなものだ。そうだ

ろう苦沙弥君」と云つて退のけると、主人はまた黙つ

て菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹へこんだ気味で

「そんな事も無かろう」と術じゆつなげに答える。さつき

まで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで無暗むやみな事を

云うと、主人のような無法者はどんな事を素すつ破ぱ抜ぬ

くか知れない。なるべくここは好いい加減に迷亭の鋭鋒

をあしらって無事に切り抜けるのが上分別なのであ

る。鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けら

るるだけ避けるのが当世で、無要の口論は封建時代

の遺物と心得ている。人生の目的は口舌こうぜつではない実

行にある。自己の思い通りに着々事件が進捗しんちよくすれば、

それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心

配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は

こくらくりゆう

極楽流に達せられるのである。鈴木君は卒業後この

極楽主義によって成功し、この極楽主義によって金

時計をぶら下げ、この極楽主義で金田夫婦の依頼をうけ、同じくこの極楽主義でまんまと首尾よく苦沙弥君を説き落して当該事件とうがいが十中八九まで成就じょうじゆしたところへ、迷亭なる常規をもつて律すべからざる

、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる風来坊ふうらいぼうが飛び込んで来たので少々その突然なるに面めん喰くらっているところである。極楽主義を発明したもの

は明治の紳士で、極楽主義を實行するものは鈴木藤十郎君で、今この極楽主義で困却しつつあるものもまた鈴木藤十郎君である。

「君は何にも知らんからそうでもな、かろうなど澄し返って、例になく言葉寡ことばすくなに上品に控ひかえ込むが

、せんだってあの鼻の主が来た時の容子ようすを見たら

かに実業家鼻負びいきの尊公へきえきでも辟易きまするに極きまってるよ

、ねえ苦沙弥君、君大に奮闘おおいしたじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれてすまして学校へ出ちゃいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだが、そんなに凶太くは出来ん敬服の至りだ」



「生徒や教師が少々愚図愚図言ったって何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の評論家であるが巴里<sup>パリ</sup>大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は学生の攻撃に応ずるため外出の際必ず<sup>あいくち</sup>匕首を袖<sup>そで</sup>の下に持って防<sup>ぼう</sup>禦<sup>ぎ</sup>の具となした事がある。ブルヌチエルがやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は：

…」

「だって君や大学の教師でも何でもないじゃないか。高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは雑ざ魚こが鯨くじらをもつて自みずから喩たとえるようなもんだ、そんな事を云うとなおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブーヴだって俺だって同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもつて歩あ行るくだけ

はあぶないから真ま似ねない方がいいよ。大学の教師が

懐剣ならリードルの教師はまあ小刀こがたなくらいなところ

だな。しかしそれにしても刃物は剣けん呑のんだから仲見世なかみせ

へ行つておもちやの空気銃を買つて来て背負しよつてあ

るくがよかろう。愛嬌あいぎようがあつていい。ねえ鈴木君

」と云うと鈴木君はようやく話が金田事件を離れた  
のでほっと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振りで始めて君等に逢ったんで何だか窮屈な路次ろじから広い野原へ出たような気持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がなくなくてね。何を云うにも気をおかなくちやならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがいいね。そして昔しの書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくなつていい。ああ今日ははか図らず

迷亭君に遇<sup>あ</sup>つて愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸<sup>か</sup>けると、迷亭も「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸矯風会<sup>えんげいきょうふうかい</sup>に行かなくっちゃならんから、そこまでいっしよに行こう」「そりやちようどいい久し振りでいっしよに散歩しよう」と両君は手を携<sup>たずさ</sup>えて帰る。

二十四時間の出来事を洩れ<sup>も</sup>なく書いて、洩れなく

読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら

写生文を鼓吹<sup>こすい</sup>する吾輩でもこれは到底猫の企て<sup>くわだ</sup>及ぶ

べからざる芸当と自白せざるを得ない。従っていか

に吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇

言奇行を弄ろうするにも関からず逐一これを読者に報知す

るの能力と根氣のないのははなはだ遺憾いかんである。遺

憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必

要である。鈴木君と迷亭君の歸つたあとは木枯こがしの

はたと吹き息やんで、しんしんと降る雪の夜のごとく

静かになつた。主人は例のごとく書齋へ引き籠こもる

。小供は六畳の間まへ枕をならべて寝る。一間半の襖ふすま

を隔てて南向の室には細君が数え年三つになる、め

ん子さんと添乳そえちして横になる。花曇りに暮れを急い

だ日は疾とく落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取

るように茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛みんなてきを吹くの

が絶えたり続いたりして眠い耳底じていに折々鈍い刺激を

与える。外面そとは大方臃おぼろであろう。晚餐に半ペンはんの煮だ

汁しで鮑貝あわびがいをからにした腹ではどうしても休養が必要



である。

ほのかに承<sup>うけたま</sup>われれば世間には猫の恋とか称する俳諧<sup>はいかい</sup>

趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安

からぬまで浮かれ歩<sup>あ</sup>るく夜もあるとか云うが、吾輩

はまだかかる心的變化に遭逢<sup>そうほう</sup>した事はない。そもそ

も恋は宇宙的の活力である。上<sup>かみ</sup>は在天の神ジュピタ

より下<sup>しも</sup>は土中に鳴く蚯蚓<sup>みみず</sup>、おけらに至るまでこの

道にかけて浮身を窶すやつのが万物の習いであるから

、吾輩どもが朧おぼろうれしと、物騒な風流気を出すのも

無理のない話しである。回顧すればかく云いう吾輩も

三毛子みけこに思い焦こがれた事もある。三角主義の張本金

田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云

う噂うわさである。それだから千金しゆんしょうの春宵を心も空に満天

下の雌猫雄猫めねこおねこが狂い廻るのを煩惱ぼんのうの迷まよひのと輕蔑けいべつする

念は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠くては恋も出来ぬ。のそのそと小供の布団ふとんの裾すそへ廻まつて心地ここち快く眠る。……

ふと眼を開あいて見ると主人はいつの間まにか書斎から寢室へ来て細君の隣に延べてある布団ふとんの中にいつ

の間にか潜<sup>もぐ</sup>り込んでゐる。主人の癖として寝る時は

必ず横文字の小本<sup>こほん</sup>を書斎から携<sup>たずさ</sup>えて来る。しかし横

になつてこの本を二頁<sup>ページ</sup>と続けて読んだ事はない。あ

る時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触

れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ

提<sup>さ</sup>げてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人

の主人たるところでいくら細君が笑つても、止せと

云つても、決して承知しない。毎夜読まない本をご  
苦勞千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つ  
て三四冊も抱えて来る。せんだつてじゆうは毎晩ウ  
エブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである

。思うにこれは主人の病気で贅沢ぜいたくな人りゆうぶんどうが竜文堂に鳴

る松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人  
も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、し

て見ると主人に取っては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗<sup>のぞ</sup>いて見ると、赤い薄い

本が主人の口髯<sup>くちひげ</sup>の先につかえるくらいな地位に半分

開かれて転がっている。主人の左の手の拇指<sup>おやゆび</sup>が本の

間に挟<sup>はさ</sup>まったままであるところから推<sup>お</sup>すと奇特にも

今夜は五六行読んだものらしい。赤い本と並んで例

のごとくニツケルたもとどけいの袂時計が春に似合わぬ寒き色を放っている。

細君は乳呑児ちのみごを一尺ばかり先へ放り出して口を開あ

いていびきをかいて枕を外はずしている。およそ人間に

おいて何が見苦しいと云って口を開けて寝るほどの

不体裁はあるまいと思う。猫などは生涯しょうがいこんな恥を

かいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を

吐吞<sup>とどん</sup>するための道具である。もつとも北の方へ行く

と人間が無精になつてなるべく口をあくまいと儉約をする結果鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、鼻を閉塞<sup>へいそく</sup>して口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーズーよりも見ともないと思う。第一天井から鼠<sup>ねずみ</sup>の糞<sup>ふん</sup>でも落ちた時危険である。

小供の方はと見るとこれも親に劣らぬ体<sup>てい</sup>たらくで



寝そべっている。姉のとん子は、姉の権利はこんなものだと云わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。妹のすん子はその復讐ふくしゅうに姉の腹の上に片足をあげて踏反ふんぞり返っている。双方共寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。

。しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつ両人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

さすがに春の灯火ともしびは格別である。天真爛漫らんまんながら

無風流極まるこの光景の裏うちに良夜を惜しめとばかり

床ゆかしげに輝やいて見える。もう何時なんじだろうと室へやの中

を見廻すと四隣はしんとしてただ聞えるものは柱時

計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋はぎしりをする音の

みである。この下女は人から齒軋りをすると云われ

るといつでもこれを否定する女である。私は生れて

こんにち

おぼえ

から今日に至るまで齒軋りをした覚はございません  
と強情を張って決して直しましうとも御氣の毒で  
ございますとも云わず、ただそんな覚はございませ  
んと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚は  
ないに違ない。しかし事實は覚がなくても存在する  
事があるから困る。世の中には悪い事をしておりな  
がら、自分はどこまでも善人だと考えているものが

ある。これは自分が罪がないと自信しているのだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事実はいかに無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。――夜はだいぶふ大分更けたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中あたつた者がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の

鼠だろう、鼠なら捕らん事に極めているから勝手に

あばれるが宜しい。よろ——またトントンと中る。あたどう

も鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。

主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日にっ

中ちゅうでも夜中やちゅうでも乱暴狼藉ろうぜきの練修に余念なく、憫然びんぜんな

る主人の夢を驚破きょうはするのを天職のごとく心得ている

連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今の

はたしかに鼠ではない。せんだってなどは主人の寝

ちんにゆう

室にまで闖入して高からぬ主人の鼻の頭を嚙かんで凱が

歌いかを奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆

病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を

下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出

ゆる

来るだけ緩やかに、溝に添すべうて滑すべらせる。いよいよ

鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わ

ず戸締とじまりを外はずして御光来になるとすれば迷亭先生や

鈴木君ではないに極きまっている。御高名だけはかねて

承うけたまわっている泥棒陰士どろぼういんしではないか知らん。いよいよ

陰士とすれば早く尊顔そんがんを拝したいものだ。陰士は今

や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足ふたあしばかり進ん

だ模様である。三足目と思う頃揚板あげいたに蹶つまずいてか、ガ

タリと夜よるに響くような音を立てた。吾輩の背中せなかの毛

が靴刷毛くつばけで逆に擦こすられたような心持がする。しば

らくは足音もしない。細君を見ると未まだ口をあいて

太平の空気を夢中に吐吞とどんしている。主人は赤い本に

拇指おやゆびを挟はさまれた夢でも見ているのだろう。やがて台

所でマチを擦する音が聞える。陰土でも吾輩ほど夜陰

に眼は利きかぬと見える。勝手にわるくて定めし不都

合だろ



この時吾輩は蹲踞うずくまりながら考えた。陰士は勝手

から茶の間の方面へ向けて出現するのであるうか

、または左へ折れ玄関を通過して書斎へと抜けるで

あろうか。――足音は襖ふすまの音と共に椽側えんがわへ出た。陰

士はいよいよ書斎へ這入はいった。それぎり音も沙汰も

ない。

吾輩はこの間まに早く主人夫婦を起してやりたいも

のだとようやく気が付いたが、さてどうしたら起き

るやら、一向いっこう要領を得ん考のみが頭の中に水車の勢みずぐるま

で廻転するのみで、何等の分別も出ない。布団ふとんの裾すそ

をくわ唧くわえて振って見たらと思つて、二三度やつて見た

が少しも効用がない。冷たい鼻を頬すに擦り付けたら

と思つて、主人の顔の先へ持つて行つたら、主人は

眠つたまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを

否<sup>い</sup>やと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急所である。痛む事おびただしい。此<sup>こんど</sup>度は仕方がないからにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉<sup>のど</sup>に物が痞<sup>つか</sup>えて思ふような声が出ない。やつとの思いで洩りながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心<sup>かんじん</sup>の主人は覺<sup>さ</sup>める氣色<sup>けしき</sup>もないのに突然陰士の足音がし出した。ミチ

リミチリと椽側を伝つたつて近づいて来る。いよいよ来

たな、こうなつてはもう駄目だと諦あきらめて、襖ふすまと柳やな

行李ぎこうりの間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺うかがう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てぴたりと已やむ。

吾輩は息を凝こらして、この次は何をするだろうと一

生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕とる時は、こん

な気分になれば訳はないのだ、魂たましいが両方の眼から飛

び出しそうな勢である。いきおい 陰土の御蔭で二度とない悟さと

を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧さんの

三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それ

を透すして薄紅なものがだんだん濃く写ったと思うと、

紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌は

しばしの間まに暗い中に消える。入れ代って何だか恐

しく光るものが一つ、破れた孔あなの向側にあらわれる。

疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が

、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の  
後に隠れて<sup>うしろ</sup>いた吾輩のみを見つめているように感ぜ

られた。一分にも足らぬ間ではあつたが、こう睨<sup>にら</sup>ま

れては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我  
慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時

、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がつい

に眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介するの榮譽を有する訳であるが、その前ちよつと卑見わげを開陳かいちんしてご高慮あがを煩わずらわしたい事がある。古代の神は全智全能と崇められてゐる。ことに耶蘇教ヤソキョウの神は二十世紀の今日こんにちまでもこの全智全能の面めんを被かぶっている。しかし俗人の

考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が出来る。こう云うのは明かにパラドックスである

。しかるにこのパラドックスを道破どうはした者は天地開てんちかいび

闢やく以来吾輩のみであらうと考えると、自分ながら満まん

更さうな猫でもないと言いう虚栄心も出るから、是非共こ

こにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないとい

云う事を、高慢なる人間諸君の脳裏のうりに叩き込みたい



と考える。天地万有は神が作ったそうなの、して見れば人間も神の御製作であろう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそうだ。さてこの人間について、人間自身が数千年来の観察を積んで

おおい

大に玄妙不思議がると同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外ほかでもない、人間もかようにうじやうじやいるが同じ

顔をしている者は世界中に一人もいない。顔の道具

は無論極きまっている、大さおおきも大概は似たり寄ったりで

ある。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げら

れている、同じ材料で出来ているにも関らず一人も

同じ結果に出来上っておらん。よくまああれだけの

簡単な材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと

思うと、製造家の伎倆ぎりょうに感服せざるを得ない。よほ

ど独創的な想像力がないとこんな変化は出来ないので

ある。一代の画工が精力を消耗しょうこうして変化を求めた顔

でも十二三種以外に出る事が出来んのをもって推おせ

ば、人間の製造を一手いってで受負うけおった神の手際てぎわは格別な

者だと驚嘆せざるを得ない。到底人間社会において

目撃し得ざる底ていの伎倆であるから、これを全能的伎

倆と云つても差さし支つかえないだろう。人間はこの点に

おいて大に神に恐れ入っているようである、なるほど人間の観察点から云えばもつともな恐れ入り方である。しかし猫の立場から云うと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。

もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだろうと思う。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが

、当初から胸中に成算があつてかほどの変化を示し

たものか、または猫も杓子しゃくしも同じ顔に造ろうと思つ

てやりかけて見たが、とうてい旨うまく行かなくて出来

るのも出来るのも作り損そこねてこの乱雑な状態に陥おちいつ

たものか、分らんではないか。彼等顔面の構造は神

の成功の紀念と見らるると同時に失敗の痕迹こんせきとも判

ぜらるるではないか。全能とも云えようが、無能と

評したって差し支えはない。彼等人間の眼は平面の上  
上に二つ並んでいるので左右を一時いちじに見る事が出来  
んから事物の半面だけしか視線内に這入はいらんのは氣  
の毒な次第である。立場を換かえて見ればこのくらい  
単純な事實は彼等の社会に日夜間断なく起りつつあ  
るのだが、本人逆のぼせ上がって、神に吞のまれているか  
ら悟りようがない。製作の上に變化をあらわすのが

困難であるならば、その上に徹頭徹尾の模倣もこうを示す

のも同様に困難である。ラファエルに寸分違わぬ聖

母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマ

ドンナを双幅そうふく見せろと逼せまると同じく、ラファエルに

とっては迷惑であろう、否同じ物を二枚かく方がか

えって困難かも知れぬ。弘法大師に向つて昨日きのう書い

た通りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書

体を換かえてと注文されるよりも苦しいかも分らん

。人間の用うる国語は全然模倣もこうしゆぎ主義で伝習するもの

である。彼等人間が母から、乳母うばから、他人から実

用上の言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返

すよりほかに毛頭の野心はないのである。出来るだ

けの能力で人真似をするのである。かように人真似

から成立する国語が十年二十年と立つうち、発音に



自然と變化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣もこう

の能力がないと云う事を証明している。純粹の模倣もこう

はかくのごとく至難なものである。従つて神が彼等

人間を区別の出来ぬよう、悉皆しっかい焼印の御かめのごと

く作り得たならばますます神の全能を表明し得るも

ので、同時に今日こんにちのごとく勝手次第な顔を天日てんぴに曝さら

らさして、目まぐるしきまでに變化を生ぜしめたの

はかえってその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れてしまった。本を忘<sup>もと</sup>却するのは人間にさえありがち

の事であるから猫には当然の事さ和大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬつと現われた泥棒陰士を瞥<sup>べっけん</sup>見した時、以上の感

想が自然と胸中に湧き出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならん。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見ると

その顔が——平常神の製作についてその出来栄をあ

るいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、

それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の眉目<sup>びもく</sup>がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜<sup>うり</sup>二つであると言ふ事實である。吾輩は無論泥棒に多くの知己<sup>ちぎ</sup>は持たぬが、その行為の乱暴なところから平常<sup>ふだん</sup>想像して私<sup>ひそ</sup>かに胸中に描<sup>えが</sup>いていた顔はないでもない。小鼻の左下に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、毬栗<sup>いかぐり</sup>

頭あたまにきま

つていると自分で勝手に極きめたのであるが、

見ると考えるとは天地の相違、想像は決してたくまし遅くす

るものではない。この陰士は背せいのすらりとした、色

の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年

は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写生で

ある。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際てぎわがあ

るとすれば、決して無能をもつて目する訳には行か

ぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変にな  
つて深夜に飛び出して来たのではあるまいかと、は  
つと思つたくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒  
く髯ひげの芽生めえが植え付けてないのでさては別人だと  
気が付いた。寒月君は苦味にがみばしった好男子で、活動  
小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に  
吸収するに足るほどの念入れの製作物である。しか

しこの陰士も人相から觀察するとその婦人に対する  
引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らな  
い。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷った  
のなら、同等の熱度をもつてこの泥棒君にも惚れ込  
まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合  
わない。ああ云う才気のある、何でも早分りのする  
性質だからこのくらいの事は人から聞かんでもきつ

と分るであらう。して見ると寒月君の代りにこの泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて琴瑟調和きんしつの実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰士が健在であるうちは大丈夫である。

吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やっと安心した。この泥棒君が天地



の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる  
一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人さつき

が書斎へ放り込んだ古毛布ふるげつとである。唐棧とうざんの半纏はんてんに

御納戸おなんどの博多はかたの帯を尻の上にむすんで、生白なましろい脛すね

は膝ひざから下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上

へ入れる。先刻さつきから赤い本に指を噛かまれた夢を見て

いた、主人はこの時寝返りを堂と打ちながら「寒月

だ」と大きな声を出す。陰士は毛布けつとを落して、出し

た足を急に引き込めます。障子の影に細長い向脛むこうずねが二

本立ったまま微かすかに動くのが見える。主人はうーん、

むにやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして、

黒い腕を皮癬病ひぜんやみのようにぼりぼり搔かく。そのあと

は静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまう。寒

月だと云つたのは全く我知らずの寢言と見える。陰

士はしばらくえんがわ椽側に立つたまま室内の動静をうかが

っていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済みすまして

また片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う声

も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穂いっすいの春灯しゅんとう

で豊かに照らされていた六畳の間まは、陰士の影に鋭

どく二分せられて柳行李やなぎごうりの辺へんから吾輩の頭の上を越

えて壁の半なかばが真黒になる。振り向いて見ると陰士

の顔の影がちょうど壁の高さの三分の二の所に漠然ばくぜん

と動いている。好男子も影だけ見ると、八やつ頭がしらの化ば

け物もののごとくまことに妙な恰好かつこうである。陰士は細君

の寝顔を上から覗のぞき込んで見たが何のためかにやに

やと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるには

吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付くぎづ

けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の

国は唐津からつの住人多々良三平君が先日帰省した時御土おみ

産やげに持つて来た山の芋いもである。山の芋を枕元へ飾つ

て寝るのはあまり例のない話しではあるがこの細君

は煮物に使う三盆さんぼんを用簞笥ようだんすへ入れるくらい場所の適

不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君にとれ

ば、山の芋は愚か、沢庵が寢室に在<sup>あ</sup>つても平気かも

知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうは

ずがない。かくまで鄭重<sup>ていちょう</sup>に肌身に近く置いてある以

上は大切な品物であろうと鑑定するのも無理はない。

陰士はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重さ

が陰士の予期と合して大分<sup>だいぶん</sup>目方が懸<sup>か</sup>りそうなのです

こぶる満足<sup>てい</sup>の体である。いよいよ山の芋を盗むなと

思つたら、しかもこの好男子にして山の芋を盗むな  
と思つたら急におかしくなつた。しかし滅多めったに声を  
立てると危険であるからじつと忪こらえている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭うやうやしく古毛布ふるげつとにくるみ

初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見

廻す。と、幸い主人が寝る時に解ときすてた縮緬ちりめんの兵へ

古帯こおびがある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしつかり

括くつて、苦もなく背中へしよう。あまり女が好すく体

裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚

、主人のめり安やすの股引ももひきの中へ押し込むと、股のあた

りが丸く膨ふくれて青大将が蛙あおだを飲いんだようしな——ある

いは青大将の臨月りんげつと云う方がよく形容し得るかも知

れん。とにかく変な恰好かっこうになった。嘘だと思おもうなら

試しにやってみるがよろしい。陰士はめり安をぐる



ぐる首くびつ環たまへ捲まきつけた。その次はどうするかと思

うと主人の紬つむぎの上着を大風呂敷のようにひろ拡げてこれ

に細君の帯と主人の羽織じゅばんと繻絆じゅばんとその他あらゆるぞう雑

物ものを奇麗に畳もつんでくるみ込む。その熟練と器用なや

り口にもちよつと感心した。それから細君の帯上げ

としごきとを続つぎ合わせてこの包みを括くくって片手に

さげる。まだ頂戴ちやうだいするものは無いかなと、あたりを

見廻していたが、主人の頭の先に「朝日」の袋があ

るのを見付けて、ちよつと袂たもとへ投げ込む。またその

袋の中から一本出してランプに翳かざして火を点ける

。旨うまそうに深く吸って吐き出した煙りが、乳色の

ホヤを繞めぐってまだ消えぬ間に、陰士の足音は椽側えんがわを

次第に遠のいて聞えなくなつた。主人夫婦は依然と

して熟睡している。人間も存外迂濶うかつなものである。

吾輩はまた暫時ざんじの休養を要する。のべつに喋舌しゃべつていては身体が続かない。ぐつと寝込んで眼が覚めさた時は弥生やよいの空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人夫婦が巡査と対談をしている時であつた。

「それでは、ここから這入はいつて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中いっそうで一向いっそう気がつかなくつたのですな」

「ええ」と主人は少し極きまりがわるそうである。

「それで盗難に雇かかったのは何時頃なんじですか」と巡査は

無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何なにも盗ま

れる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思

っているらしい。

「あなたは夕べ何時に御休みになつたんですか」  
ゆう

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ私わたくしの伏せつたのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だったかな」

「七時半でしたらう」

「すると盗賊の這入はいつたのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしよう」

よなか

「夜中は分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。巡査はただ

形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところ

いつこうつうよう

が一向痛痒を感じないのである。嘘でも何でも、い

い加減な事を答えてくれれば宜よいと思っっているのに

主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから  
少々焦<sup>じ</sup>れたくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと、  
主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですね」と答える。巡査は笑いもせず  
に

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝

たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外してどこそ

みぎこくそに

こに忍び込んで品物を何点盗んで行つたから右告訴

おまびろうなり

及候也という書面をお出しなさい。届ではない告訴

なあて

です。名宛はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出す

んです。——いや這入はいって見たって仕方がない。盗と



られたあとなんだから」と平気な事を云つて歸つて行く。

主人は筆硯ふですずりを座敷の真中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「これから盗難告訴をかくから、盗られたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調で云う。

「あら厭いやだ、さあ云えだなんて、そんな権柄けんぺいづくで

誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けたままどつかと腰を据<sup>す</sup>える。

「その風はなんだ、宿場女郎の出来損<sup>できそこな</sup>い見たようだ。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何でも盗られりや仕方がないじやありませんか」

「帯までとって行つたのか、苛<sup>ひど</sup>い奴だ。それじや帯

から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯って、そんなに何本もあるもんですか

くろじゆす　ちりめん  
、黒縹子と縮緬の腹合せの帯です」

「黒縹子と縮緬の腹合せの帯一筋——あたい価はいくらくら  
らいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意気に高い帯をしめてるな。今度から一円五十

錢くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは  
不人情だと云うんです。女房などは、どんな汚な  
い風をしていても、自分さい宜<sup>よ</sup>けりや、構わないん  
でしよう」

「まあいいや、それから何だ」

「糸織<sup>いとおり</sup>の羽織です、あれは河野<sup>こうの</sup>の叔母さんの形身<sup>かたみ</sup>に

もらつたんで、同じ糸織でも今の糸織とは、たちが違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじやありませんか、あなたに買つていただきやあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行ったのか。煮て食うつもりか、

とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行  
つて聞いていらっしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじやありませんか、いくら唐津からつから

掘つて来たつて山の芋が十二円五十銭してたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ

。まるで論理に合わん。それだから貴様はオタンチ



ン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは——俺の着物は一向いっこう出て来んじやないか」

「あとは何でも宜<sup>よ</sup>うござんす。オタンチン・パレオ  
ロガスの意味を聞かして頂戴<sup>ちようだい</sup>」

「意味も何<sup>な</sup>にもあるもんか」

「教えて下すつてもいいじやありませんか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていらっしゃるのね。きつと人が英語を知らないと思つて悪口をおっしゃつたんだよ」

「愚<sup>ぐ</sup>な事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたって間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」  
「そんなら、品物の方もありません」

「頑愚<sup>がんぐ</sup>だな。それでは勝手にするがいい。俺はもう

盗難告訴を書いてやらんから」

「私も品数<sup>しなかず</sup>を教えて上げません。告訴はあなたが御

自分でなさるんですから、私は書いてただかない  
でも困りません」

「それじゃ廃<sup>よ</sup>そう」と主人は例のごとくふいと立つ  
て書齋へ這<sup>はい</sup>入る。細君は茶の間へ引き下がって針箱

の前へ坐る。兩人共十分間ばかりは何にもせず黙  
つて障子を睨め付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者

多々良三平君が上ってくる。多々良三平君はもとこ

の家の書生であつたが今では法科大学を卒業してあ

る会社の鉱山部に雇われている。これも実業家の芽

生で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前

の関係から時々旧先生の草廬そうろを訪問して日曜などには一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない間柄である。

「奥さん。よか天気でござります」と唐津訛からつなまりか何かで細君の前にズボンズボンのまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすったか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい

。たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言っても駄目だから、あなたが先生にそうおっしゃい」

「そればってんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半

分妻君に聞いているや否や次の間まからとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御お寿司すしを持って来て？」と姉

のとん子は先日きんじつの約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を搔かきながら

「よう覚えているのう、この次はきつと持ッて来ます。今日は忘れた」と白状する。



「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直って少々笑顔になる。

「寿司は持って来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさったか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋

ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御母<sup>おか</sup>あさんに煮て御貰

い。唐津<sup>からつ</sup>の山の芋は東京のとは違つてうまかあ」と

三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすったか、折れんように箱を誂あつらえて堅くつめて来たから、長いままでありますろう」

「ところがせつかく下すった山の芋を夕べ泥棒ゆうに取られてしまつて」

「ぬす盗とが？　馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君大おおに感心してい

る。

「御母<sup>おか</sup>あさま、夕べ泥棒が這入<sup>はい</sup>ったの？」と姉が尋ねる。

「ええ」と細君は輕<sup>かろ</sup>く答える。

「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らん。

で

「恐<sup>こわ</sup>い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「恐い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉が気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失礼な事を」

「ハハハハ<sup>わたし</sup>私の顔はそんなに恐いですか。困ったな」

と頭を搔く。か多々良君の頭の後部には直径一寸ばかりの禿はげがある。一カ月前から出来だして医者に見て貰ったが、まだ容易に癒なおりそうもない。この禿を第一番に見付けたのは姉のトン子である。

「あら多々良さんの頭は御母おかあさまのように光ひかつてよ」

「だまっていらいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かつて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり煩わしくて話も何も出来ぬので「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて

見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食うなんて、そりや鬚まげで釣るところは女だから少しは禿げますさ」

「禿はみんなバクテリアですばい」

「わたしのはバクテリアじゃありません」



「そりや奥さん意地張りたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボールドとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もっと長い名があるのでしょう」

「先生に聞いたたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

「私は<sup>わたし</sup>ボールドより知りませんが。長かって、どげ

んですか」

「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭な  
んでしょう」

「そうかも知れませんか。今に先生の書齋へ行つてウェブスターを引いて調べて上げましょう。しかし先生もよほど變つていなさいますな。この天氣の好いのに、うちにじつとして——奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさるごと勧めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は

決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐め<sup>な</sup>なさるか」

「ええ相変らずです」

「せんだって、先生こぼしていなさいました。どう

も妻<sup>さい</sup>が俺のジャムの舐め方が烈しいと云って困るが、

俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだ

ろうと云いなさるから、そりや御嬢さんや奥さんが

いっしょに舐めなさるに違ない——」

「いやな多々良さんだ、何だってそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだって舐めそうな顔をしていなさるばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばってんが——それじゃ奥さん少しも舐め

なさらんか」

「そりや少しは舐めますさ。舐めたって好いじやありませんか。うちのものだもの」

「ハハハハそうだろうと思った——しかし本の事ほんこと

、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり持って行いたのですか」

「山の芋ばかりなら困りやしません、不斷着をみ

んな取って行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかつたに——惜しい事をしたなあ。奥さん犬の大か奴ふとやつを是非一丁飼いなさい

——猫は駄目ですばい、飯を食うばかりで——ちつとは鼠でも捕とりますか」

「一匹もとつた事はありません。本当に横着な図ず々う

図々<sup>ずう</sup>しい猫ですよ」

「いやそりや、どうもこうもならん。早々棄てなさい。私が貰<sup>わたし</sup>って行<sup>い</sup>って煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は旨<sup>うも</sup>うござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人があ



よじ  
る由はかねて伝聞したが、吾輩が平生眷顧けんこを辱かたじけうす

る多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今  
まで夢にも知らなかった。いわんや同君はすでに書

生ではない、卒業の日は浅きにも係かわらず堂々たる

一個の法学士で、六むつ井物産会社の役員であるのだ

から吾輩の驚愕きょうがくもまた一と通りではない。人を見た

ら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によつ

てすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思  
えとは吾輩も多々良君の御蔭によつて始めて感得し  
た真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉  
しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなら  
なくなる。狡猾こうかつになるのも卑劣になるのも表裏二枚  
合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつ  
て、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌ろくな

ものがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは

今のうちに多々良君の鍋なべの中で玉葱たまねぎと共に成仏じょうぶつする

方が得策かも知れんと考えて隅すみの方に小さくなつて

いると、最前さいぜん細君と喧嘩をして一反書齋いったんへ引き上げ

た主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさったそうですね。なんちゆ愚ぐ

な事です」と劈頭<sup>へきとう</sup>一番にやり込める。

「這<sup>はい</sup>入る奴が愚<sup>ぐ</sup>なんだ」と主人はどこまでも賢人をもつて自任している。

「這入る方も愚<sup>ぐ</sup>だばってんが、取られた方もあまり賢<sup>かし</sup>こくはなかごたる」

「何にも取られるものの無い多々良さんのようなのが一番賢<sup>かし</sup>こいんでしよう」と細君が此度<sup>こんど</sup>は良人<sup>おっと</sup>の肩

を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、  
どう云う了見じやろう。鼠は捕とらず泥棒が来ても知  
らん顔をしている。——先生この猫を私わたしにくんなさ  
らんか。こうしておいたっちゃ何の役にも立ちませ  
んばい」

「やっても好い。何にするんだ」

「煮て喰べます」

主人は猛烈なるこの一言いちごんを聞いて、うふと気味の

悪い胃弱性の笑を洩もらしたが、別段の返事もしない

ので、多々良君も是非食いたいとも云わなかったのは吾輩にとって望外の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くて

いかん」と大に銷沈おおいしやうちんの体ていである。なるほど寒いはず

である。昨日きのうまでは綿入を二枚重ねていたのに今日

はあわせ袷はんそでに半袖のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐こざ

したぎりであるから、不十分な血液はことごとく胃

のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておったちやとうていあかんで

すばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る――一いっ

ちよう

丁今から考を換かえて実業家にでもなんなさらんか」

きらい

「先生は実業家は嫌きらいだから、そんな事を言つたつて

駄目よ」

そば

と細君が傍そばから多々良君に返事をする。細君は無

論実業家になつて貰もらいたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんなさるか」



「今年で九年目でしよう」と細君は主人を顧みるかえり

。主人はそうだとも、そうで無いとも云わない。

「九年立っても月給は上がらず。いくら勉強しても

人は褒めほちやくれず、郎君独寂寞ろうくんひとりせきばくですたい」と中学

時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細君はちよつと分りかねたものだから返事をしない。

「教師は無論嫌きらだが、実業家はなお嫌いだ」と主人

は何が好きだか心の裏で考えているらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけですか」と多々良君柄に

似合わぬ冗談を云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもつとも簡明である。細

君は横を向いてちよつと澄したが再び主人の方を見

て、

「生きていらつしやるのも御嫌おきらひなんでしょう」と充

分主人を凹へこましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外のんき呑気な返事をする。

これでは手のつけようがない。

「先生ちつと活潑かつぱつに散歩でもしなさんと、からだ

を壊こわしてしまえますばい。——そして実業家にな

んなさい。金なんか儲もうけるのは、ほんに造作ぞうさもない

事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やつと会社へ這<sup>はい</sup>入ったばかりで

すもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの」これも細君

の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円宛ずつ会社の方で預つて積んでおいて、いざと云う時にやります。――

――奥さん小遣錢で外濠線そとぼりせんの株を少し買いなさらんか、

今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢つたつて困りやしな

いわ」

「それだから実業家に限ると云うんです。先生も法  
科でもやって会社か銀行へでも出なされば、今頃は  
月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でご  
ざんしたな。——先生あの鈴木藤十郎と云う工学士  
を知ってなさるか」

「うんきのう昨日来た」

「そうでござんすか、せんだつてある宴会で逢いま  
した時先生の御話をしたら、そうか君は苦沙弥君くしやみの  
ところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは昔むか  
し小石川の寺でいっしょに自炊をしておった事があ  
る、今度行ったら宜よろしく云うてくれ、僕もその内尋  
ねるからと云っていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだづめ東京詰になりました。なかなか旨いうまです。私わたしなぞにでも朋友のように話します。——先生あの男がいくら貰つてると思いなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますばい。あげな男が、



よかしこ取っておるのに、先生はリーダー専門で十

いちこきゅう

年一狐裘じや馬鹿氣ておりますなあ」

「實際馬鹿氣ているな」と主人のような超然主義の

人でも金銭の觀念は普通の人間と異なる<sup>こと</sup>ところはな

い。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れ

ない。多々良君は充分実業家の利益を吹聴<sup>ふいちやう</sup>してもう

云う事が無くなつたものだから

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人<sup>じん</sup>が来ますか」

「ええ、善くいらっしゃいます」

「どげんな人物ですか」

「大變學問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、私わたしくらいなものですか」と多々良君真面目である。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が聞く。

「せんだって或る人から頼まれました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、私わたしよりえらいですか」と笑

いもせず怒りおこもせぬ。これが多々良君の特色である。

「近々博士きんきんになりますか」

「今論文を書いてるそうだ」

「やっぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、も

う少し話せる人物かと思つたら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になつたら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていましたから、そんな馬鹿があるうか、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどましだと云つてや

りました」

「だれに」

「私に<sup>わたし</sup>水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にや、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

「多々良さんは<sup>かげんけい</sup>蔭弁慶ね。うちへなんぞ来ちや大変

威張つても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなつて  
るんでしよう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。先<sup>さ</sup>

刻<sup>つき</sup>から<sup>あわせ</sup>拾一枚であまり寒いので少し運動でもしたら

暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のな  
い動議を呈出したのである。行き当りばったりの多

々良君は無論<sup>しゅんじゅん</sup>逡巡する訳がない。

「行きましょう。上野にしますか。芋坂<sup>いもざか</sup>へ行つて団

子を食いましょうか。先生あすこの団子を食つた事

がありますか。奥さん一返行つて食つて御覧。柔ら

かくて安いです。酒も飲ませます」と例によつて秩

序のない駄弁<sup>ふる</sup>を揮つてうちに主人はもう帽子を被

つて沓脱<sup>くつぬぎ</sup>へ下りる。



吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が

上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食

ったかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行びこう

する勇氣もないからずっと略してその間休養せんけあいだ

ればならん。休養は万物の旻天びんてんから要求してしかる

べき権利である。この世に生息すべき義務を有して

蠢動しゅんどうする者は、生息の義務を果すために休養を得ね

ばならぬ。もし神ありて汝は働くために生れたり寝

なんじ

るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答え  
て云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生れたり  
故に働くために休養を乞うと。主人のごとく器械に  
不平を吹き込んだまでの木強漢ぼくきやうかんですら、時々は日曜  
以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして  
日夜心神を勞する吾輩ごとき者はたとい仮令猫といえども

主人以上に休養を要するは勿論の事である。ただ先さ

つき

刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もな

ぜいぶつ

い贅物のごとくに罵ののしつたのは少々気掛りである。と

ぶつしよう

かく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以

外に何等の活動もないので、他を評価するのでも形

わた

骸以外に渉わたらんのは厄介である。何でも尻でも端折はしよ

つて、汗でも出さないと働らいていないように考え

ている。たまるま達磨と云う坊さんは足の腐るまで座禅をし

て澄ましていたと云うが、たとい仮令壁の隙すきから蔦つたが這い

込んで大師の眼口を塞ふさぐまで動かないにしろ、寝て

いるんでも死んでいるんでもない。頭の中は常に活

動して、廓然無聖などかくねんむしようと乙な理窟を考え込んでいる。

儒家にも静坐の工夫と云うのがあるそうだ。これだ

って一室うちの中に閉居して安閑あんかんと壁かべの修行をするので

はない。脑中の活力は人一倍熾さかんに燃えている。ただ

外見上は至極沈静端肅の態ていであるから、天下の凡眼

はこれらの知識巨匠をもつて昏睡こんすいかし仮死の庸人ようじんと見倣みな

して無用の長物とか穀潰こくつぶしとか入らざる誹謗ひぼうの声を

立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見

ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、――し

かも彼かの多々良三平君のごときは形を見て心を見ざ

る第一流の人物であるから、この三平君が吾輩を目

かんしけつ

して乾屎橛同等に心得るのももつともだが、恨むら

くは少しく古今の書籍を読んで、やや事物の真相を

解し得たる主人までが、浅薄なる三平君に一も二も

ねこなべ

なく同意して、猫鍋に故障を挟む景色さしはさのない事であ

けしき

る。しかし一歩退いて考えて見ると、かくまでに彼

けいべつ

等が吾輩を輕蔑するのも、あながち無理ではない

。 大声は俚耳りじに入らず、陽春白雪の詩には和するも

の少なしの喩たとえも古い昔からある事だ。形体以外の活

動を見る能あたわざる者に向つて己これい霊の光輝を見よと強し

ゆるは、坊主に髪を結いえと逼せまるがごとく、鮪まぐろに演説

をして見ろと云うがごとく、電鉄に脱線を要求する

がごとく、主人に辞職を勧告するごとく、三平に金

の事を考えるなと云うがごとくものである。ひっきよう 必竟無

理な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会的動物である。社会的動物である以上はいかに高く<sup>みずか</sup>自ら標置するとも、或る程度までは社会と調和して行かねばならん。主人や細君や乃至御さん、三平連<sup>ないしおづれ</sup>が吾輩を吾輩相当に評価してくれんのは残念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剥<sup>は</sup>いで三味線屋に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に上<sup>のぼ</sup>すよ



うな無分別をやられては由々しき大事である。吾輩

は頭をもつて活動すべき天命を受けてこの娑婆しゃばに出

現したほどの古今来ここんらいの猫であれば、非常に大事な身

体である。千金の子は堂陞どうすいに坐せずとの諺ことわざもある事

なれば、好んで超邁ちようまいを宗そうとして、徒らいたずに吾身の危険

を求むるのは単に自己の災わざわいなるのみならず、また大

いに天意に背くそむ訳である。猛虎も動物園に入れば糞ふん

豚とんの隣りに居を占め、鴻雁こうがんも鳥屋に生擒いけどらるれば雛すう

鶏けいと俎まないたを同じゆうす。庸人ようじんと相互あいごする以上は下くだつて

ようびよう

庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠を

捕とらざるべからず。——吾輩はとうとう鼠をとる事

に極きめた。

せんだってじゆうから日本は露西亞ロシアと大戦争をし

ているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本びいき負

である。出来得べくんば混成猫旅団こんせいねこりょだんを組織して露西

亜兵を引つ搔かいてやりたいと思うくらいである。か

くまでに元氣旺盛おうせいな吾輩の事であるから鼠の一疋や

二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕とれる。昔むかしある人當時有名な禪師に向つて

、どうしたら悟れましようとと聞いたら、猫が鼠を覘ねら

うようにさしやれと答えたそうだ。猫が鼠をとるよ

うにとは、かくさえすれば外はずれっこはござらぬと

云う意味である。女賢さかしゆうしてと云う諺はあるが

猫賢さかしゆうして鼠捕とり損そこなうと云う格言はまだ無いは

ずだ。して見ればいかに賢かしこい吾輩のごときもので

も鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるま

いどころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らん

のは、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうの

ごとく暮れて、折々の風に誘わるる花吹雪が台所の

はなふぶき

腰障子の破れから飛び込んで手桶ておけの中に浮ぶ影が

、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜

こそ大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決

心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻って地形を飲

み込んでおく必要がある。戦闘線は勿論もちろんあまり広か

ろうはずがない。畳敷にしたら四畳敷もあろうか

、その一疊を仕切つて半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へつついは貧乏勝手に似合わぬ立派な者で赤の銅壺どうこがぴかぴかして、後ろうしは羽目板の間まを二尺遺のこして吾輩あわびがいの鮑貝あわびがいの所在地である。茶の間に近き六尺は膳碗ぜんわん皿さら小鉢こばちを入れる戸棚となつて狭せまき台所をいとど狭く仕切つて、横に差し出すむき出しの棚とすれすれの高さになっている。そ

の下に摺鉢すりばちが仰向けあおむに置かれて、摺鉢の中には小桶

の尻が吾輩の方を向いている。大根卸し、摺小木すりこぎが

並んで懸かけてある傍かたわらに火消壺だけが悄然しょうぜんと控ひかえて

いる。真黒になつた樽木たるきの交叉した真中から一本の

自在じざいを下ろして、先へは平たい大きな籠かごをかける

。その籠が時々風に揺れて鷹揚おうように動いている。この

籠は何のために釣るすのか、この家うちへ来たてには一いっ

向要領を得なかつたが、猫の手の届かぬためわざと食物をここへ入れると云う事を知ってから、人間の意地の悪い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかにこつちに便宜べんぎな地形だからと云って一人で待ち構えていてはてんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口



を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと  
台所の真中に立って四方を見廻わす。何だか東郷大  
将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻  
つて来<sup>こ</sup>ん。小供はとくに寝ている。主人は芋坂<sup>いもざか</sup>の団  
子を喰つて歸つて来て相変らず書齋に引き籠<sup>こも</sup>つてい  
る。細君は——細君は何をしているか知らない。大  
方居眠りをして山芋の夢でも見ているのだらう。時

々門前を人力がしんりき通るが、通り過ぎた後はあと一段と淋し

い。わが決心と云い、わが意氣と云い台所の光景と

云い、四辺しへんの寂寞せきばくと云い、全体ことごとの感じが悉く悲壯で

ある。どうしても猫中ねこちゆうの東郷大将としか思われない。

こう云う境界きようがいに入ると物凄ものすごい内に一種の愉快を覚え

るのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底

に一大心配が横よこたわっているのを発見した。鼠と戦争

をするのは覚悟の前だから何足来ても恐くはないが、

出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。周密

なる觀察から得た材料を綜合して見ると鼠賊そぞくの逸出いつしゅつ

するのには三つの行路がある。彼れらがもしどぶ鼠

であるならば土管を沿うて流しから、へつついの裏

手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、

歸り道を絶つてやる。あるいは溝みぞへ湯を抜く漆喰しっくいの

穴より風呂場を迂回<sup>うかい</sup>して勝手へ不意に飛び出すかも

知れない。そうしたら釜の蓋<sup>ふた</sup>の上に陣取って眼の下

に來た時上から飛び下りて一攫<sup>ひとつか</sup>みにする。それから

とまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅が半月<sup>はんげつ</sup>

形<sup>けい</sup>に喰い破られて、彼等の出入<sup>しゅつにゅう</sup>に便なるかの疑があ

る。鼻を付けて臭<sup>か</sup>いで見ると少々鼠臭<sup>くさ</sup>い。もしここ

から吶喊<sup>とっかん</sup>して出たら、柱を楯<sup>たて</sup>にやり過ごしておいて、

横合からあつと爪をかける。もし天井から来たらと

上を仰ぐと真黒な煤がランプの光で輝やいて、地獄

を裏返しに釣るしたごとくちよつと吾輩の手際では

上る事も、下る事も出来ん。まさかあんな高い処か

ら落ちてくる事もなからとこの方面だけは警

戒を解く事にする。それにしても三方から攻撃され

る懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる

。二口ならどうか、こうにかやつてのける自信がある。しかし三口となるといかに本能的に鼠を捕とるべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。さればと云つて車屋の黒ごときものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好かろう。どうしたら好かろうと考えると考へて好い智ちえ慧が出ない時はうしたら好かろうと考へて好い智ちえ慧が出ない時はそんな事は起るきづかい氣遣はないと決めるのが一番安心

を得る近道である。また法のつかない者は起らない  
と考へたくなるものである。まず世間を見渡して見  
給え。きのう貰つた花嫁も今日死なるとも限らんで  
はないか、しかしむこどの聶殿は玉椿千代も八千代もなど  
、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせんではな  
いか。心配せんのは、心配する価値がないからでは  
ない。いくら心配したつて法が付かんからである

。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾輩も安心を欲する。よって三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分った。三個の計



略のうちいずれを選んだのがもつとも得策であるか

みづか

の問題に対して、自ら明瞭なる答弁を得るに苦しむ

はんもん

からの煩悶である。戸棚から出るときには吾輩これ

に応ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに

はかりごと

対する計がある、また流しから這い上るときはこれ

を迎うる成算もあるが、そのうちどれか一つに極め

き

おおい

ねばならぬとなると大に当惑する。東郷大將はバル

チック艦隊が対馬海峡つしまかいきょうを通るか、津軽海峡つがるかいきょうへ出るか、

そうやかいきょう

あるいは遠く宗谷海峡を廻るかについて大に心配さ

おおい

れたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像し

て見て、ご困却の段実に御察し申す。吾輩は全体の

状況において東郷閣下とうこうかくかに似ているのみならず、この

格段なる地位においてもまた東郷閣下とよく苦心を

同じゅうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらしていると、突然破れた腰障子が開あいて御三おさんの顔がぬうと出る

。顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳では

ない。ほかの部分は夜目よめでよく見えんのに、顔だけ

が著るしく強い色をして判然眸底ぼうていに落つるからであ

る。御三はその平常より赤き頬をますます赤くして

洗湯から歸つたついでに、昨夜ゆうべに懲こりてか、早くか

ら勝手の戸締とじまりをする。書斎で主人が俺のステッキを

枕元へ出しておけと云う声が聞える。何のために枕

頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかつた。ま

さか易水えきすいの壮士を気取つて、竜鳴りゅうめいを聞こうと云う酔

狂でもあるまい。きのうは山の芋、今日はステッキ、

明日あすは何になるだろう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は

大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間らんまと云う

ような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに

引窓の代理を勤めている。惜し気もなく散る彼岸桜ひがんざくら

を誘うて、颯さっと吹き込む風に驚ろいて眼を覚さますと、

朧月おぼろづきさえいつの間まに差してか、竈へつついの影は斜めに揚板あげいた

の上にかかる。寝過ごしはせぬかと二三度耳を振つ

て家内の容子ようすを窺うかがうと、しんとして昨夜のごとく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだろう。

戸棚の中でことごと音がしだす。小皿の縁ふちを足で抑えて、中をあらしているらしい。ここから出るわいと穴の横へすくんで待っている。なかなか出て来る景色けしきはない。皿の音はやがてやんだが今度はど

んぶりか何かに掛つたらしい、重い音が時々ごとごととする。しかも戸を隔ててすぐ向う側でやってい  
る、吾輩の鼻づらと距離にしたら三寸も離れておら  
ん。時々はちよろちよろと穴の口まで足音が近寄る  
が、また遠のいて一匹も顔を出すものはない。戸一  
枚向うに現在敵が暴行を逞たくましくしているのに、吾輩  
はじつと穴の出口で待っておらねばならん随分気の

長い話だ。鼠は旅順<sup>りょじゅん</sup>碗<sup>わん</sup>の中で盛に舞踏会を催うして

いる。せめて吾輩の這<sup>はい</sup>入れるだけ御三がこの戸を開けておけば善いのに、氣の利かぬ山出しだ。

今度はへつついの影で吾輩の鮑貝<sup>あわびがい</sup>がことりと鳴る。

敵はこの方面へも来たなと、そーつと忍び足で近寄ると手桶の間から尻尾<sup>しっぽ</sup>がちらと見えたぎり流しの下へ隠れてしまった。しばらくすると風呂場でうがい



茶碗が金盃かなだらいにかちりと当る。今度は後方うしろだと振りむ

く途端に、五寸近くある大な奴がひらりと齒磨の袋おおき

を落して椽えんの下へ馳かけ込む。逃がすものかと続いて

飛び下りたらもう影も姿も見えぬ。鼠を捕とるのは思

ったよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕  
る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し

戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中

に頑張がんばっていると三方面共少々ずつ騒さわぎ立てる。小

癩やくと云おうか、卑怯ひきようと云おうかとうてい彼等は君子

の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと気

を疲らし心しんを勞つからして奔走努力して見たがついに一

度も成功しない。残念ではあるがかかる小人しょうじんを敵に

してはいかなる東郷大将も施ほとこすべき策がない。始

めは勇氣もあり敵愾心てきがいにしんもあり悲壯と云う崇高な美感

さえあつたがついには面倒と馬鹿氣ているのと眠いのと疲れたので台所の真中へ坐つたなり動かない事になつた。しかし動かんでも八方睨はっぽうにらみを極きめ込んでいれば敵は小人だから大した事は出来ないのである

。目ざす敵と思つた奴が、存外けちな野郎だと、戦争が名誉だと云う感じが消えて悪にくいと云う念だけ

残る。悪にくいと云う念を通り過すと張り合が抜けて  
ぼーとする。ぼーとしたあとは勝手にしろ、どうせ  
気の利きいた事は出来ないのだからと輕蔑けいべつの極眠きよくねむたくな  
なる。吾輩は以上の徑路をたどって、ついに眠くな  
った。吾輩は眠る。休養は敵中に在あっても必要であ  
る。

横向に底ひさしを向いて開いた引窓から、また花吹雪はなふぶきを

一塊りなげ込んで、烈しき風の吾を遶めぐると思えば

、戸棚の口から弾丸のごとく飛び出した者が、避く

る間まもあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰い

つく。これに続く黒い影は後ろうしに廻るかと思う間も

なく吾輩の尻尾しっぽへぶら下がる。瞬またたく間の出来事であ

る。吾輩は何の目的もなく器械的に跳上はねあがる。満身の

力を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする

。耳に喰い下がったのは中心を失ってだらりと吾が

横顔に懸る。護謨管ゴムかんのごとき柔かき尻尾の先が思い

掛なく吾輩の口に這入る。屈くつきよう竟てがかの手懸りに、砕くだけよ

とばかり尾を啣くわえながら左右にふると、尾のみは前

歯の間に残って胴体は古新聞で張った壁に当って

、揚板の上に跳はね返る。起き上がるところを隙間すきまな

く乗のし掛かれば、毬まりを蹴けたるごとく、吾輩の鼻づらを

掠<sup>かす</sup>めて釣り段の縁<sup>ふち</sup>に足を縮めて立つ。彼は棚の上か

ら吾輩を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。

距離は五尺。その中に月の光りが、大幅<sup>おおはば</sup>の帯<sup>くう</sup>を空に

張るごとく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、

やつとばかり棚の上に飛び上がろうとした。前足だ

けは首尾よく棚の縁<sup>ふち</sup>にかかったが後足<sup>あとあし</sup>は宙にもがい

ている。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離る

まじき勢で喰い下っている。吾輩は危あやうい。前足を

懸かけ易かえて足懸あしがりを深くしようとする。懸かけ易える

度に尻尾の重みで浅くなる。二三分滑にさんぶれば落ちねば

ならぬ。吾輩はいよいよ危あやうい。棚板を爪で搔かきむ

しる音ががりがりがりと聞える。これではならぬと左の

前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたの

で吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。自分と尻



尾に喰いつくものの重みで吾輩のからだがりぎり  
と廻わる。この時まで身動きもせずねらに覘いをつけて  
いた棚の上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目懸けて  
棚の上から石を投ぐるがごとく飛び下りる。吾輩の  
爪は一縷いちるのかかりを失う。三つの塊かたまりが一つとな  
って月の光をたて豎に切って下へ落ちる。次の段に乗せ  
てあつたすりばち摺鉢と、摺鉢の中の小桶とこおけジャムの空缶あきかんが

ひとかたまり

同じく一塊となつて、下にある火消壺を誘つて、半

みずがめ

分は水甕の中、半分は板の間の上へ転がり出す。す

べてが深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の魂をさえ寒からしめた。

どうまづえ

「泥棒！」と主人は胴間声を張り上げて寢室から飛

び出して来る。見ると片手にはランプを提げ、片手

まなこ

にはステッキを持って、寝ぼけ眼よりは身分相応の

炯々たる光を放っている。吾輩は鮑貝あわびがいの傍そばにおとな

しくして蹲踞うづくまる。二足の怪物は戸棚の中へ姿をかく

す。主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさ

せたのは」と怒気を帯びて相手もいないのに聞いて

いる。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切はんきれ

ほどに細くなつた。

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱

いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだイギリスと英吉利

のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う

話があるが、たとい骨だけにならなくとも好いから、

せめてこの淡灰色の斑入ふいりの毛衣けごろもだけはちよつと洗い

張りでもするか、もしくは当分の<sup>うち</sup>中質にでも入れた  
いような気がする。人間から見たら猫などは年が年  
中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至  
って単純な無事な<sup>ぜに</sup>銭のかからない<sup>しょうがい</sup>生涯を送っている  
ように思われるかも知れないが、いくら猫だって相  
応に暑さ寒さの感じはある。たまには行水<sup>ぎょうずい</sup>の一度く  
らいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上

から湯を使った日には乾かすのが容易な事でないか  
ら汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾のれん  
を潜くぐった事はない。折々は団扇うちわでも使つて見ようと  
云う気も起らんでもないが、とにかく握る事が出来  
ないのだから仕方がない。それを思うと人間は贅沢ぜいたく  
なものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ  
煮て見たり、焼いて見たり、酢すに漬つけて見たり、味み

そ 贈をつけて見たり好んで余計な手数てすうを懸けて御互に

恐悦している。着物だつてそうだ。猫のように一年

中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた

彼等にとって、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに

雑多なものを皮膚の上へ載のせて暮さなくてももの

事だ。羊の御厄介になつたり、蚕かいこの御世話になつた

り、綿畠おなさの御情けさえ受けるに至つては贅沢ぜいたくは無能

の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず大目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接の利害もないところまでこの調子で押して行くのは毫ちひさも合点がてんが行かぬ。第一頭の毛などと云うものは自然に生えるものだから、放ほうっておく方がもつとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好かつこうをこしらえて得意である。



坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くして  
いる。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包  
む。これでは何のために青い物を出しているのか主  
意が立たんではないか。そうかと思うと櫛とか称す  
る無意味な鋸様の道具を用いて頭の毛を左右に等分  
して嬉しがってるのもある。等分にしないと七分三  
分の割合で頭蓋骨の上へ人為的の区劃を立てる。中

にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろまで食み<sup>は</sup>

出しているのがある。まるで贗造<sup>がんでう</sup>の芭蕉葉<sup>ばしやうは</sup>のようだ。

その次には脳天を平らに刈って左右は真直に切り落

す。丸い頭へ四角な枰<sup>わく</sup>をはめているから、植木屋を

入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか

五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから

、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、

マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも

知れない。とにかくそんなに憂身うきみを窶やつしてどうする

つもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか

使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれ

だけはかも行く訳だのに、いつでも二本ですまして、

残る二本は到来の棒鱈ぼうたらのように手持無沙汰にぶら下

げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよ

ほど猫より閑なもので退屈のあまりかようないたず  
らを考案して楽しんでゐるものと察せられる。ただお  
かしいのはこの閑人ひまじんがよると障さわると多忙だ多忙だ  
と触れ廻わるのみならず、その顔色がいかにも多忙  
らしい、わるくすると多忙に食い殺されはしまいか  
と思われるほど、せついている。彼等のあるものは  
吾輩を見て時々あんなになつたら気楽でよからうな

どと云うが、氣樂でよければなるが好い。そんなに  
こせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなかろう。自  
分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦  
しいと云うのは自分で火をかんかん起して暑い暑い  
と云うようなものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通  
りも考え出す日には、こう氣樂にしてはおられんさ。  
氣樂になりたければ吾輩のように夏でも毛衣けごろもを着て

通されるだけの修業をするがよろしい。――とは云うものの少々熱い。毛衣では全く熱つ過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないか

な、永らく人間社会の観察を怠おこたったから、今日は久

し振りで彼等が酔興に齷齪あくせくする様子を拝見しようか

と考えて見たが、生憎主人はこの点に関してすこぶ

る猫に近い性分しょうぶんである。昼寝は吾輩に劣らぬくらい

やるし、ことに暑中休暇後になってからは何一つ人間らしい仕事をせないので、いくら観察をしても一向いっこう観察する張合がない。こんな時に迷亭でも来ると胃弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫に遠ざかるだろうに、先生もう来ても好い時だと思っ  
ていると、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折

々大きな声で相の手を入れている。「いや結構」

どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中うちじゅうに響

き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな大

きな声と、こんな無作法ぶさほうな真似をやるものはほかに

はない。迷亭に極きまっている。

いよいよ来たな、これで今日半日は潰つぶせると思っ

ていると、先生汗を拭ふいて肩を入れて例のごとく座



敷までずかずか上つて来て「奥さん、苦沙弥君はどくしゃみ

うしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ抛りほう

出す。細君は隣座敷で針箱の側そばへ突つ伏して好い心

持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答え

るほどの響がしたのではっと驚ろいて、醒さめぬ眼を

わざと睜みはつて座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布を着さつまじょうふ

て勝手な所へ陣取つてしきりに扇使いをしている。

「おやいらしやいまし」と云つたが少々狼狽ろうばいの気味

で「ちつとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をかいたまま御辞儀をする。「いえ、今来たばかりなん

ですよ。今風呂場で御三おさんに水を掛けて貰つてね。よ

うやく生き帰つたところで――どうも暑いじやあり

ませんか」りょうさんち「この両三日は、ただじつとしておりま

しても汗が出るくらいで、大変御暑うございます

。――でも御変りもございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがとう。なに暑いくらいでそんなに変りやしませんや。しかしこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくってね」「私<sup>わたくし</sup>なども、ついに昼寝などを致した事がないんでございますが、こう暑いとつい――」「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜寝られりや、こん

な結構な事はないでさあ」とあいかわらず呑気のんきな事

を並べて見たがそれだけでは不足と見えて「私わたしなん

ざ、寝たくない、質たちでね。苦沙弥君などのように来

るたんびに寝ている人を見ると羨うらやましいですよ。もっ

とも胃弱にこの暑さは答えるからね。丈夫な人でも

今日なんかは首を肩の上に載のせてるのが退儀でさあ。

さればと云って載つてゐる以上はもぎとる訳にも行か

ずね」と迷亭君いつになく首の処置に窮している

。「奥さんなんざ首の上へまだ載っけておくものが  
あるんだから、坐っちやいられないはずだ。まげ 齧の重

みだけでも横になりたくりますよ」と云うと細君

は今まで寝ていたのが齧かっこうの恰好から露見したと思っ

て「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじって見  
る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日はね、きのう

屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙な

事を云う。「フライをどうなさったんでございます」

「屋根の瓦があまり見事に焼けていましたから、ただ置くのも勿体ないと思つてね。バタを溶かして玉

子を落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやつ

ぱり天日てんぴは思ふように行きませんや。なかなか半熟

にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客が来たもんだからつい忘れてしまつて、今朝になつて急に思い出して、もう大丈夫だろうと上つて見たらね」「どうなつておりました」「半熟どころか、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑く

なるのは不思議ですね」「ほんとでございますよ

。せんだってじゆうは単衣ひとえでは寒いくらいでござい

ましたのに、一昨日おとといから急に暑くなりましたね」「

蟹かになら横に這はうところだが今年の気候はあ、とびさ

をするんですよ。倒行とうこうして逆施げきしすまた可ならずやと

云うような事を言っているかも知れない」「なんで

ござんす、それは」「いえ、何でもないので。ど



うもこの氣候の逆戻りをするところはまるでハーキ  
ユリスの牛ですよ」と凶に乗っていよいよ変ちきり  
んな事を言うと、果せるかな細君は分らない。しか  
し最前の倒行して逆施すで少々懲りこっているから、今  
度はただ「へえー」と云ったのみで問い返さなかつ  
た。これを問い返されないと迷亭はせつかく持ち出  
した甲斐かいがない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御

存じですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存じ  
ないですか、ちよつと講釈をしましうか」と云う  
と細君もそれには及びませんとも言ひ兼ねたものだ  
から「ええ」と云つた。「昔むかしハーキュリスが牛を  
引つ張つて来たんです」「そのハーキュリスと云う  
のは牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありません  
よ。牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節は

希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」

「あら希臘のお話しなの？　そんなら、そうおっし

やればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心

得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」

「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキ

ュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らない

と思いました。それでその男がどうしたんで――

「その男がね奥さん見たように眠くなつてぐうぐ

う寝ている——」 「あらいやだ」 「寝ている間に<sup>ま</sup>

、ヴァルカンの子が来ましてね」 「ヴァルカンて何

です」 「ヴァルカンは鍛冶屋<sup>かじや</sup>ですよ。この鍛冶屋の

せがれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛

の尻尾<sup>しっぽ</sup>を持ってぐいぐい引いて行つたもんだからハ

ーキュリスが眼を覚<sup>さ</sup>まして牛やーい牛やーいと尋ね

てあるいても分らないんです。分らないはずでさあ。  
牛の足跡をつけたって前の方へあるかして連れて行  
ったんじやありませんもの、後ろうしへ後ろうしへと引きず  
って行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては  
大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天氣の話は忘れ  
ている。

「時に御主人はどうしました。相変らず午睡ひるねですか

ね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありますね。何の事もない毎日少しずつ死んで見るようなものですぜ、奥さん御手数おてすうだがちよつと起していらつしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたば

かりだのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん

、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですがね」と平気な顔をして聞きもせぬ事を吹聴する。ふいちよう

「おやまあ、時分どきだのにちつとも気が付きませんで——それじゃ何もございませんが御茶漬でも

」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ」  
「それでも、あなた、どうせ御口に合うようなもの

はございませんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭

は悟ったもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙

るんです。今途中で御馳走を誂あつらえて来ましたから、

そいつを一つここでいただきますよ」ととうてい素しろ

人ひとには出来そうもない事を述べる。細君はたった一ひと

言こと「まあ！」と云ったがそのままあの中うちには驚ろいた

まあと、気を悪くしたまあと、手てすう数が省けてあり



がたいと云うまあが合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいので、寝つき掛った眠をさかに扱こかれたような心持で、ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかまし

い男だ。せつかく好い心持に寝ようとしたところを」

と欠伸交あくびまじりに仏頂面ぶつちようづらをする。「いや御目覚おめざめかね。鳳ほう

眠みんを驚かし奉みんつてはなはだ相済まん。しかしたまに

は好かろう。さあ坐りたまえ」とどつちが客だか分

らぬ挨拶をする。主人は無言のまま座に着いて寄木よせぎ

細工ざいくの巻煙草まきたばこ入から「朝日」を一本出してすばすば

吸い始めたが、ふと向むこうの隅すみに転がっている迷亭の帽

子に眼をつけて「君帽子を買ったね」と云った。迷

亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君

の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。大変目が細かく

って柔らかいんですね」と細君はしきりに撫で廻わ

す。「奥さんこの帽子は重宝ちようほうですよ、どうしても言う

事を聞きますからね」と拳骨げんこつをかためてパナマの横

ッ腹をぽかりと張り付けると、なるほど意のごとく

拳こぶしほどな穴があいた。細君が「へえ」と驚く間まもな

く、この度は拳骨たびを裏側へ入れてうんと突ッ張ると

釜かまの頭がぽかりと尖とんがる。次には帽子を取って鰐つば

と鰐とを両側から押し潰して見せる。潰れた帽子は

めんぼう

の

そば

麵棒で延した蕎麦のように平たくなる。それを片端

むしろ

から蓆でも巻くごとくぐるぐる畳む。「どうですこ

の通り」と丸めた帽子を懷中へ入れて見せる。「不

思議です事ねえ」と細君は帰天齋正一の手品でも見

きてんさいしようにいち

物しているように感嘆すると、迷亭もその気になつ

たものと見えて、右から懷中に収めた帽子をわざと

そでぐち

左の袖口から引つ張り出して「どこにも傷はありません」と元のごとくに直して、人さし指の先へ釜の底を載せてくるくると廻す。もう休めるかと思つたら最後にぽんと後ろへ放<sup>うし</sup>げてその上へ堂<sup>な</sup>つさりと尻餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ懸<sup>け</sup>念<sup>ねん</sup>らしい顔を<sup>い</sup>する。細君は無論の事心配そうに「せつかく見事な帽子をもし壊<sup>こ</sup>わしでもしちやあ大変ですから、

もう好い加減になすつたら宜<sup>よ</sup>うござんしよう」と注

意をする。得意なのは持主だけで「ところが壊われ

ないから妙でしょう」と、くちやくちやになつたの

を尻の下から取り出してそのまま頭へ載せると、不

思議な事には、頭の恰好<sup>かっこう</sup>にたちまち回復する。「実

に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしよう」と

細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじや

ありません、元からこう云う帽子なんです」と迷亭は帽子を被ったまま細君に返事をしている。

「あなたも、あんな帽子を御買になつたら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた

。「だって苦沙弥君は立派な麦藁むぎわらの奴を持つてるじ

やありませんか」「ところがあなた、せんだって小供こどもがあれを踏み潰つぶしてしましまして」「おやおやそ

りや惜しい事をしましたね」「だから今度はあなたのような丈夫で奇麗なのを買ったら善かろうと思ひますんで」と細君はパナマの価段ねだんを知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。

迷亭君は今度は右の袂たもとの中から赤いケース入りの鍬はさみを取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそ



のくらいにしてこの鋏を御覧なさい。これがまたす

ちようほう

こぶる重宝な奴で、これで十四通りに使えるんです」

この鋏が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになるところであつたが、幸に細君が女として持つて

生れた好奇心のために、この厄運やくうんを免まぬかれたのは迷

ぎようこう

亭の機転と云わんよりむしろ僥倖ぎようこうの仕合せだと吾輩

は看破した。「その鋏がどうして十四通りに使えま

す」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらつしやい。いいですか

。ここに三日月形みかづきがたの欠け目がありましたよう、ここへ

葉巻を入れてぷつりと口を切るんです。それからこ

の根にちよと細工がありましたよう、これで針金をぽ

つぽつやりますね。次には平たくして紙の上へ横に

置くと定規じょうぎの用をする。また刃はの裏には度盛どもりがして

あるから物指ものさしの代用も出来る。こちらの表にはヤス、

リが付いているこれで爪を磨すりまさあ。ようがすか。

この先さきを螺旋鋏らせんぴようの頭へ刺し込んでぎりぎり廻すと

金槌かなづちにも使える。うんと突き込んでこじ開けると大

抵くぎづけの釘付の箱なんざあ苦もなく蓋ふたがとれる。まった、

こちらの刃の先は錐きりに出来ている。ここところん所は書き

損けずいの字を削る場所で、ばらばらに離すと、ナイフ

となる。一番しまいに――さあ奥さん、この一番し

まいが大変面白いんです、ここに蠅はえの眼玉くらいな

大きさの球たまがありましょう、ちよつと、覗のぞいて御覧

なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさるんだ

から」「そう信用がなくつちや困つたね。だが欺だまさ

れたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。え？

厭いやですか、ちよつとでいいから」と鉏はさみを細君に渡

す。細君は覚束おぼつかなげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼

玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりにねらい覘をつけてい

る。「どうです」「何だか真黒ですわ」「真黒じゃ

いけませんね。もう少し障子の方へ向いて、そう鋏を  
寝かさずに——そうそうそれなら見えるでしょう

」「おやまあ写真ですねえ。どうしてこんな小さな  
写真を張り付けたんでしよう」「そこが面白いところ

ろでさあ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。最前から黙っていた主人はこの時急に写真が見たくなつたものと見えて「おい俺にもちよつと覽みせろ

」と云うと細君は鍬を顔へ押し付けたまま「実に奇麗です事、裸体の美人ですね」と云つてなかなか離さない。「おいちよつと御見せと云うのに」「まあ待っていらつしやいよ。美くしい髪ですね。腰まで

ありますよ。少し仰向あおむいて恐ろしい背せいの高い女だ事、

しかし美人ですね」「おい御見せと云つたら、大抵

にして見せるがいい」と主人は大に急おおいき込せんで細君

に食つて掛る。「へえ御待遠さま、たんと御覧遊ば

せ」と細君が鋏を主人に渡す時に、勝手から御三おさんが

御客さまの御詔おあつらえが参りましたと、二個の笊蕎麦ざるそばを座

敷へ持つて来る。

「奥さんこれが僕の自弁じべんの御馳走ですよ。ちよつと

御免蒙つて、ここではくつく事に致しますから」と

叮嚀ていねいに御辞儀をする。真面目なような巫山ふざけ戯たよう

な動作だから細君も応対に窮したと見えて「さあど

うぞ」と軽く返事をしたぎり拝見している。主人は

ようやく写真から眼を放して「君この暑いのに蕎麦そば

は毒だぜ」と云った。「なあに大丈夫、好きなもの



は滅多に中るもんじやない」と蒸籠の蓋をとる。「

打ち立てはありがたいな。蕎麦の延びたのと、人間

の間が抜けたのは由来たのもしくないもんだよ」と

薬味をツユの中へ入れて無茶苦茶に掻き廻わす。「

君そんなに山葵を入れると辛いぜ」と主人は心配

そうに注意した。「蕎麦はツユと山葵で食うもんだ

あね。君は蕎麦が嫌いなんだろう」「僕は饅頭が好

きだ」 「鰻鮓は馬子<sup>まご</sup>が食うもんだ。蕎麦の味を解し

ない人ほど気の毒な事はない」と云いながら杉箸<sup>すぎばし</sup>を

むざと突き込んで出来るだけ多くの分量を二寸ばかりの高さにしやくい上げた。「奥さん蕎麦を食うに

もいろいろ流儀がありますがね。初心<sup>しよしん</sup>の者に限って、

無暗<sup>むやみ</sup>にツユを着けて、そうして口の内うちでくちやくち

ややっていますね。あれじや蕎麦の味はないですよ。

何でも、こう、一ひとしやくいに引つ掛けてね」と云

せいぞろ

いつつ箸を上げると、長い奴が勢揃いをして一尺ばかり空中に釣るし上げられる。迷亭先生もう善かろ

うと思つて下を見ると、まだ十二三本の尾が蒸籠の

すだ

底を離れないで簀垂れの上に纏綿てんめんしている。「こい

つは長いな、どうです奥さん、この長さ加減は」と

また奥さんに相の手を要求する。奥さんは「長いも

のでございますね」とさも感心したらしい返事をす

る。「この長い奴へツユを三分一さんぶいちつけて、一口に飲

んでしまうんだね。噛かんじやいけない。噛んじや蕎

麦の味がなくなる。つるつると咽喉のどを滑すべり込むとこ

ろがねうちだよ」と思い切つて箸はしを高く上げると蕎

麦はようやくの事で地を離れた。左手ゆんでに受ける茶碗

の中へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先からだんだ

んに浸ひたすと、アーキミジスの理論によつて、蕎麦の

浸つかつた分量だけツユの嵩かさが増してくる。ところが茶

碗の中には元からツユが八分目這はい入いっているから

、迷亭の箸にかかつた蕎麦の四半分も浸つからない先に

茶碗はツユで一杯になつてしまった。迷亭の箸は茶

碗を去さる五寸の上に至つてぴたりと留まつたきりし

ばらく動かない。動かないのも無理はない。少しで

も卸おろせばツユが溢こぼれるばかりである。迷亭もここに

ちゆうちよてい

至いたつて少し蹣蹣だつとの体であつたが、たちまち脱兎だつとの勢

を以て、口を箸の方へ持つて行つたなと思ふ間まもな

く、つるつるちゆうと音がして咽喉のどぶえ笛が一二度上下じょうげ

へ無理に動いたら箸の先の蕎麦は消えてなくなつて

おつた。見ると迷亭君の両眼から涙のようなものが

一二滴めじり眼尻から頬へ流れ出した。山葵わさびが利きいたもの

か、飲み込むのに骨が折れたものかこれはいまだに  
判然しない。「感心だなあ。よくそんなに一どきに  
飲み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見事で  
す事ねえ」と細君も迷亭の手際を<sup>てぎわ</sup>激賞した。迷亭は  
何にも云わないで箸を置いて胸を二三度<sup>たた</sup>敲いたが「  
奥さん<sup>ごさる</sup>は大抵三口半か四口で食うんですね。それ  
より<sup>てすう</sup>手数を掛けちや<sup>うま</sup>旨く食えませんよ」とハンケチ

で口を拭いてちよつと一息入れている。

ところへ寒月君が、どう云う了見りようけんかこの暑いのに

御苦勞にも冬帽を被かぶつて両足を埃ほこりだらけにしてやつ

てくる。「いや好男子の御入来ごにゆうらいだが、喰い掛けたも

のだからちよつと失敬しますよ」と迷亭君は衆人環しゅうじんか

座んざの裏うちにあつて臆面おくめんもなく残った蒸籠を平たいらげる。今

度は先刻さつきのように目覚めざましい食方もしなかつた代りに、



ハンケチを使つて、途中で息を入れると云う不体裁もなく、蒸籠せいろう二つを安々とやってのけたのは結構だった。

「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人が聞くと迷亭もその後あとから「金田令嬢がお待ちかねだそうそうていしゆつから早々呈出したまえ」と云う。寒月君は例のごと

く薄気味の悪い笑を洩もらして「罪ですからなるべく

早く出して安心させてやりたいのですが、何しろ問題が問題で、よほど労力の入る研究を要するのですから」と本気の沙汰とも思われない事を本気の沙汰らしく云う。「そうさ問題が問題だから、そう鼻の言う通りにもならないね。もつともあの鼻なら充分鼻息をうかがうだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶をする。比較的眞面目なのは主人であ

る。「君の論文の問題は何とか云ったつけな」「蛙

めだま

の眼球の電動作用に対する紫外光線の影響と云うの

しがいこうせん

です」「そりや奇だね。さすがは寒月先生だ、蛙の

ふる

眼球は振ってゐるよ。どうだろう苦沙弥君、論文脱稿

前にその問題だけでも金田家へ報知しておいては

「主人は迷亭の云う事には取り合わないで」「君そん

な事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「え

え、なかなか複雑な問題です、第一蛙の眼球のレンズの構造がそんな単簡たんかんなものでありませんからね

。それでいろいろ実験もしなくちやなりません

がまず丸い硝子ガラスの球たまをこしらえてそれからやろうと思つ

ています」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば訳な

いじゃないか」「どうして——どうして」と寒月先

生少々反身そりみになる。「元来えん円とか直線とか云うのは

幾何学的のもので、あの定義に合ったような理想的な円や直線は現実世界にはないもんです」「ないもんなら、廃<sup>よ</sup>したらよかろう」と迷亭が口を出す。「それでまず実験上<sup>さ</sup>支<sup>つか</sup>えないくらいの球を作つて見ようと思ひましてね。せんだつてからやり始めたのです」「出来たかい」と主人が訳のないようにきく。「出来るものですか」と寒月君が云つたが、こ

れでは少々矛盾だと気が付いたと見えて「どうもむずかしいです。だんだん磨<sup>す</sup>って少しこっち側の半径が長過ぎるからと思つてそつちを心持落すと、さあ大変今度は向側<sup>むこうがわ</sup>が長くなる。そいつを骨を折つてようやく磨<sup>す</sup>り潰<sup>つぶ</sup>したかと思うと全体の形がいびつになるんです。やつとの思いでこのいびつを取るとまた直径に狂いが出来ます。始めは林檎<sup>りんご</sup>ほどな大きさの

ものがだんだん小さくなつて苳いちごほどになります。それでも根氣よくやっていると大豆だいずほどになります

。大豆ほどになつてもまだ完全な円は出来ませんよ。

私も随分熱心に磨りましたが——この正月からガラス玉を大小六個磨り潰しましたよ」と嘘だか本当だ

か見当のつかぬところを喋ちやうちやう々と述べる。「どこでそ

んなに磨っているんだい」「やっぱり学校の実験室

です、朝磨り始めて、昼飯のときちよつと休んでそれから暗くなるまで磨るんですが、なかなか楽じゃありません」「それじゃ君が近頃忙がしい忙がしいと云つて毎日日曜でも学校へ行くのはその珠を磨りに行くんだね」「全く目下のところは朝から晩まで珠ばかり磨っています」「珠作りの博士となつて入り込みしは——と云うところだね。しかしその熱心



を聞かせたら、いかな鼻でも少しはありがたがるだろう。実は先日僕がある用事があつて図書館へ行つて歸りに門を出ようとしたら偶然老梅君に出逢つたのさ。あの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと思つて感心に勉強するねと云つたら先生妙な顔をして、なに本を読みに来たんじやない、今門前を通り掛つたらちよつと小用こようがしたくなつた

から拝借に立ち寄つたんだと云つたんで大笑をした

が、老梅君と君とは反対の好例として新撰蒙求しんせんもうぎゆうに是

非入りたいよ」と迷亭君例のごとく長たらしい註釈

をつける。主人は少し真面目になつて「君そう毎日

毎日珠ばかり磨つてるのもよからうが、元来いつ頃

出来上るつもりかね」と聞く。「まあこの容子ようすじや

十年くらいかかりそうです」と寒月君は主人より吞の

氣に見受けられる。「十年じゃ——もう少し早く磨り上げたならよかろう」「十年じゃ早い方です、事によると廿年くらいかかります」「そいつは大変だ

、それじゃ容易に博士にやなれないじゃないか」「

ええ一日も早くなつて安心さしてやりたいのですがとにかく珠を磨り上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなにご心配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨つてゐる事はよく承知しています。実は二三日前にさんち行つた時にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行つていらつしやるじやありませんか」

せんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少

へきえき

てい

し辟易の体であつたが「そりや妙ですな、どうした

んだろう」ととぼけている。こう云う時に重宝なの

は迷亭君で、話の途切とぎれた時、極きまりの悪い時、眠く

なつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛

び出してくる。「先月大磯へ行つたものにりようさんち両三日前

東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交換

だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象が起るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にして  
も現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思い  
も思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯恋の  
何物たるを御解しにならん方には、御不審ももつと  
もだが……」「あら何を証拠にそんな事をおつしや  
るの。随分軽蔑けいべつなさるのね」と細君は中途から不意

に迷亭に切り付ける。「君だつて恋煩いこいわずらなんかした

事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に

助太刀をする。「そりや僕の艶聞えんぶんなどは、いくら有

つてもみんな七十五日以上経過しているから、君方きみがた

の記憶には残っていないかも知れないが——実はこ

れでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らし

ているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻わす

。「ホホホ面白い事」と云つたのは細君で、「馬鹿にしていらいあ」と庭の方を向いたのは主人である。ただ寒月君だけは「どうかその懐旧談を後学こうがくのため

に伺いたいもので」と相変らずにやにやする。

「僕だいぶのも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合もないんだが、せっかく



だから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴しなくっちゃいけないよ」と念を押していよいよ本文に取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——何年前だったかな——面倒だからほぼ十五六年前としておこう」じょうだん「冗談じゃない」と主人は鼻からフンと息をした。「大変物覚えが御悪いのね」と細君がひやかした。寒月君だけは約束を守って一言もいちごん云わ

ずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何で

もある年の冬の事だが、僕が越後の国は蒲原郡筍谷

かんばらへのおむけのこだに

を通つて、蛸壺峠たこつぽとうげへかかつて、これからいよいよ会あい

津領づりようへ出ようとするところだ」「妙なところだな

」と主人がまた邪魔をする。「だまつて聴いていら

っしゃいよ。面白いから」と細君が制する。「とこ

ろが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がな

いから峠の真中にある一軒屋をたた叩いて、これこれか

ようかようしかじかの次第だから、どうか留めてく

れと云うと、御安い御用です、さあ御上がんなさい

はだかろうそく

と裸蠟燭を僕の顔に差しつけた娘の顔を見て僕はぶ

るぶるとふる悸えたがね。僕はその時から恋と云うくせもの曲者

の魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな

山の中にも美しい人があるんでしようか」「山だっ

て海だつて、奥さん、その娘を一日あなたに見せた

いと思うくらいですよ、文金ぶんきんの高島田たかしまだに髪を結いいま

してね」「へえー」と細君はあつけに取られている。

「這はい入つて見ると八畳の真中に大きな囲炉裏いろりが切つ

てあつて、その周まわりに娘と娘の爺じいさんと婆ばあさんと僕

と四人坐つたんですがね。さぞ御腹おなかが御減おへりでしょ

うと云いますから、何でも善いから早く食わせ給え

と請求したんです。すると爺さんがせつかくの御客  
さまだから蛇飯へびめしでも炊たいて上げようと云うんです

。さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだ  
からしつかりして聴きたまえ」「先生しつかりして  
聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だって冬、蛇  
がいやしますまい」「うん、そりや一応もつともな  
質問だよ。しかしこんな詩的な話しになるとそう理り

窟くつにばかり拘泥こうでいしてはいられないからね。鏡花の小説にや雪の中から蟹かにが出てくるじゃないか」と云つたら寒月君は「なるほど」と云つたきりまた謹聴の態度に復した。

「その時分の僕は随分悪あくもの食いの隊長で、蝗いなづま、なめくじ、赤蛙などは食あい厭あきていたくらいなところだから、蛇飯おつは乙だ。早速御馳走になろうと爺さん

に返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋なべをかけ  
て、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。  
不思議な事にはその鍋なべの蓋ふたを見ると大小十個ばかり  
の穴があいている。その穴から湯気がぷうぷう吹く  
から、旨いうま工夫をしたものだ、田舎いなかにしては感心だ  
と見てみると、爺さんふと立って、どこかへ出て行  
ったがしばらくすると、大きなぎる箆ざるを小脇に抱かい込ん

で帰つて来た。何気なくこれを囲炉裏の傍そばへ置いた

から、その中を覗のぞいて見ると——いたね。長い奴が、

寒いもんだから御互にとぐろの捲まきくらをやつて塊かた

まつていましたね」「もうそんな御話しは廃よしにな

さいよ。厭いやらしい」と細君は眉に八の字を寄せる

。「どうしてこれが失恋の大原因になるんだからな

かなか廃やせませんや。爺さんはやがて左手に鍋の蓋



をとつて、右手に例の塊まつた長い奴を無雑作むぞうさにつ

かまえて、いきなり鍋の中へ放り込ほうんで、すぐ上か

ら蓋をしたが、さすがの僕もその時ばかりははつと

息の穴が塞ふさがつたかと思つたよ」「もう御やめになさ

いよ。気味きびの悪るい」と細君しきりに怖こわがつている。

「もう少しで失恋になるからしばらく辛抱しんぼうしてい

つしやい。すると一分立つか立たないうちに蓋の穴

から鎌首がひよいと一つ出ましたのには驚ろきま  
したよ。やあ出たなと思うと、隣の穴からもまたひよ  
いと顔を出した。また出たよと云ううち、あちらか  
らも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中蛇なべじゅうの面つら  
だらけになってしまった」「なんで、そんなに首を  
出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這  
い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよかろ

う、引つ張らっしとか何とか云うと、婆さんはあ

ーと答える、娘はあいと挨拶をして、めいめい名々に蛇の頭

を持つてぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけ

は奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出してくる」 「蛇の骨抜きですね」と寒月

君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜だ、器用な事をやるじゃないか。それから蓋を取って、杓子しゃくしでも

つて飯と肉を矢鱈やたらに掻き交まぜて、さあ召し上がれと

来た」「食ったのかい」と主人が冷淡に尋ねると

、細君は苦にがい顔をして「もう廃よしになさいよ、胸が

悪るくつて御飯も何もたべられやしない」と愚痴を

こぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そん

な事をおっしやるが、まあ一遍たべてご覧なさい

、あの味ばかりは生涯しょうがい忘れられませんぜ」「おお

「いやだ、誰が食べるもんですか」「そこで充分御

饌ぜんも頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見

るし、もう思いおく事はないと考えていると、御休

みなさいましと云うので、旅の労れつかもある事だから、

仰おおに従って、ごろりと横になると、すまん訳だが前

後を忘却して寝てしまった」「それからどうなさい

ました」と今度は細君の方から催促する。「それか

あくるあさ

さま

ら明朝になつて眼を覚さましてからが失恋でさあ」「ど

うかなさつたんですか」「いえ別にどうもしやしま

せんがね。朝起きてまきたばこ巻煙草をふかしながら裏の窓か

ら見ていると、向うのかけひ笥そばの傍で、やかんあたま薬缶頭が顔を洗つ

ているんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞

く。「それがさ、僕にも識別しにくかったから、し

ばらく拝見していて、その薬缶がこちらを向く段に

なつて驚ろいたね。それが僕の初恋をした昨夜の娘

なんだもの」「だつて娘は島田に結いつているとさつ

き云つたじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事

な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿に

していらあ」と主人は例によつて天井の方へ視線を

そらす。「僕も不思議の極内きよく心少々怖こわくなつたから、

なお余所よそながら容子ようすを窺うかがつていると、薬缶はようや

く顔を洗おわい了わつて、傍かたえの石の上に置いてあつた高

かづら

島田の鬘かづらを無雜作かぶに被かつて、すましてうちへ這はい入いつ

たんでなるほどと思つた。なるほどとは思つたよう

なものその時から、とうとう失恋の果敢はかなき運命

をかこつ身となつてしまつた」 「くだらない失恋も

あつたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋で

も、こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が寒



月君に向つて迷亭君の失恋を評すると、寒月君は「  
しかしその娘が丸薬缶でなくつてめでたく東京へで  
も連れて御歸りになつたら、先生はなお元気かも知  
れませんよ、とにかくせつかくの娘が禿はげであつたの  
は千秋の恨事せんしゅう こんじですねえ。それにしても、そんな若い  
女がどうして、毛が抜けてしまつたんでしよう」「  
僕もそれについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯

を食い過ぎたせいに相違ないと思う。蛇飯てえ奴は

のぼせるからね」「しかしあなたは、どこも何とも

なくて結構でございましたね」「僕は禿にはならず

にすんだが、その代りにこの通りその時から近眼きんがんに

なりました」と金縁の眼鏡をとってハンケチで叮嚀ていねい

に拭ふいている。しばらくして主人は思い出したよう

に「全体どこが神秘的なんだい」と念のために聞い

て見る。「あの鬘はどこで買ったのか、拾ったのか  
どう考えても未だに分らないからそこが神秘さ」と  
迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。「  
まるで噺<sup>はな</sup>し家<sup>か</sup>の話<sup>はなし</sup>を聞くようでござんすね」とは細  
君の批評であつた。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうや  
めるかと思ひのほか、先生は猿轡<sup>さるぐつわ</sup>でも嵌<sup>は</sup>められない

うちはとうてい黙っている事が出来ぬ性たちと見えて

、また次のような事をしやべり出した。

「僕の失恋も苦にがい経験だが、あの時あの薬缶やかんを知ら

ずに貰ったが最後生涯の目障りめざわになるんだから、よ

く考えないと険吞けんのんだよ。結婚なんかは、いざと云う

間際になつて、飛んだところに傷口が隠れているの

を見出みいだす事がある者だから。寒月君などもそんなに

憧憬しょうけいしたり恟忼しょうきやうしたり独ひとりでむずかしがらないで

、篤とくと氣を落ちつけて珠たまを磨するがいいよ」といやに

異見めいた事を述べると、寒月君は「ええなるべく

珠ばかり磨こっていたいんですが、向うでそうさせな

いんだから弱り切ります」とわざと辟易へきえきしたような

顔付をする。「そうさ、君などは先方が騒さわぎ立てる

んだが、中には滑稽こけなのがあるよ。あの図書館へ小

便をしに來た老梅君などになるとすこぶる奇だから

ね」「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて

承<sup>うけたま</sup>わる。「なあに、こう云う訳さ。先生その昔静岡

の東西館へ泊った事があるのさ。——たった一と晩

だぜ——それでその晩すぐにそこの下女に結婚を申

し込んだのさ。僕も随分呑<sup>のん</sup>氣<sup>き</sup>だが、まだあれほどに

は進化しない。もつともその時分には、あの宿屋に

御夏さんと云う有名な別嬪べっぴんがいて老梅君の座敷へ出たのがちょうどその御夏さんなのだから無理はないがね」「無理がないどころか君の何とか峠とまるで同じじゃないか」「少し似ているね、実を云うと僕と老梅とはそんなに差異はないからな。とにかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないうちに水瓜すいかが食いたくなつたんだがね」「何

だつて？」と主人が不思議な顔をする。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねつてちよつと考えて見る。迷亭は構わずどんどん話を進行させる。「御夏さんと呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だつて水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持つてくる。そこで老梅君食ったそうだ。山盛



りの水瓜をことごとく平らげて、御夏さんの返事を

待っていると、返事の来ないうちに腹が痛み出して

ね、うーんうーんと唸うなったが少しも利目ききめがないから

また御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまい

かと聞いたら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だって

医者くらいはありますよと云って、天地玄黄とかい

せんじもん

う千字文を盗んだような名前のドクトルを連れて来

た。翌朝になつて、腹の痛みも御蔭でとれてありが

たいと、出立する十五分前に御夏さんと呼んで、昨<sup>き</sup>

日<sup>のう</sup>申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さん

は笑いながら静岡には水瓜もあります、御医者もあ

りますが一夜作りの御嫁はありませんよと出て行つ

たきり顔を見せなかったそうだ。それから老梅君も

僕同様失恋になつて、図書館へは小便をするほか来

なくなつたんだつて、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受けて「本当にそうだ。せんだつてミュッセの脚本を読んだらそのうちの人物が羅馬ローマの詩人を引用してこんな事を云つていた

。――羽より軽い者は塵ちりである。塵より軽いものは風である。風より軽い者は女である。女より軽いものは無むである。――よく穿うがつてるだろう。女なんか

仕方がない」と妙なところで力味りきんで見せる。これ

うけたまわ

を承うつた細君は承知しない。「女の軽いのがいけな

いとおつしやるけれども、男の重いんだって好い事

はないでしょう」「重いた、どんな事だ」「重いと

云うな重い事ですわ、あなたのようなのです」「俺

がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議

論が始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やが

て口を開いて「そう赤くなつて互に弁難攻撃をするところか夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだつたに違いない」とひやかすのだか賞<sup>ほ</sup>めるのだか曖<sup>あい</sup>昧<sup>まい</sup>な事を言つたが、それでやめておいても好い事をまた例の調子で布<sup>ふ</sup>衍<sup>えん</sup>して、下<sup>しも</sup>のごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつ

たんだって云うが、それなら唾おしを女房にしていると

同じ事で僕などは一向いっこうありがたくない。やっぱり奥

さんのようにあなたは重いじやありませんかとか何

とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、

たまには喧嘩の一つ二つしなくっちゃ退屈でしょう

がないからな。僕の母などと来たら、おやじの前へ

出てはいとへいで持ち切っていたものだ。そうして

二十年もいっしょになつてゐるうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじや

ないか。もつとも御蔭で先祖代々の戒名はことごと

かいみよう

く暗記している。男女間の交際だつてそうさ、僕の

小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏を

したり、もうろうたい霊の交換をやつて朦朧体で出合つて見たり

する事はとうてい出来なかつた」「御氣の毒様で

「と寒月君が頭を下げる。「実に御氣の毒さ。しか

もその時分の女が必ずしも今の女より品行がいいと

かなら

限らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何

だのとやかましく云いますがね。なに昔はこれより

はげ

烈しかったですよ」「そうでしょうか」と細君は

真面目である。「そうですとも、出鱈目じやない

でたらめ

、ちゃんと証拠があるから仕方がありませんや。苦



沙弥君、君も覚えているかも知れんが僕等の五六歳

の時までは女の子を唐茄子とうなすのように籠かごへ入れて天秤てんびん

棒ぼうで担かついで売ってあるいたもんだ、ねえ君」「僕は

そんな事は覚えておらん」「君の国じゃどうだか知

らないが、静岡じゃたしかにそうだった」「まさか」

と細君が小さい声を出すと、「本当ですか」と寒月

君が本当らしからぬ様子で聞く。

「本當さ。現に僕のおやじが価ねを付けた事がある

。その時僕は何でも六つくらいだつたろう。おやじ

といつしよに油町あぶらまちから通町とおうちょうへ散歩に出ると、向うか

ら大きな声をして女の子はよしかな、女の子はよし

かなと怒鳴どなつてくる。僕等がちようど二丁目の角へ

来ると、伊勢源いせげんと云う呉服屋の前でその男に出っ食

わした。伊勢源と云うのは間口が十間で蔵くらが五つ戸と

前<sup>まえ</sup>あつて静岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て来

給え。今でも歴然と残っている。立派なうちだ。そ

の番頭が甚兵衛と云つてね。いつでも御袋<sup>おふくろ</sup>が三日前

に亡<sup>な</sup>くなりましたと云うような顔をして帳場の所へ

控<sup>ひか</sup>えている。甚兵衛君の隣りには初<sup>はつ</sup>さんという二十

四五の若い衆<sup>しゅ</sup>が坐っているが、この初さんがまた雲<sup>うん</sup>

照<sup>しょう</sup>律師<sup>うりつし</sup>に帰依<sup>きえ</sup>して三七二十一日の間蕎麦湯<sup>そばゆ</sup>だけで通

したと云うような青い顔をしている。初さんの隣り

ちよう

が長どんでこれは昨日きのう火事で焚やき出されたかのごと

しゆうぜん

そろばん

く愁然と算盤に身を凭もたしている。長どんと併ならんで：

「君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をす

るのか」「そうそう人売りの話しをやっていたんだ

つけ。実はこの伊勢源についてもすこぶる奇譚きだんがあ

かつあい

るんだが、それは割愛して今日は人売りだけにして

おこう」「人売りもついでにやめるがいい」「どう

こんにち

してこれが二十世紀の今日と明治初年頃の女子の品

だい

性の比較について大なる参考になる材料だから、そ

たやす

んなに容易くやめられるものか——それで僕がおや

じと伊勢源の前までくると、例の人売りがおやじを

しまいもの

見て旦那女の子の仕舞物はどうです、安く負けてお

てんびんぼう

くから買っておくんなさいと云いながら天秤棒をお

ろして汗を拭ふいているのさ。見ると籠の中には前に

一人後ろうしに一人両方とも二歳ばかりの女の子が入れ

てある。おやじはこの男に向つて安ければ買つても

いいが、もうこれぎりかいと聞くと、へえ生憎あいにく今日

はみんな売り尽つくしてたった二つになつちまいしました。

どっちでも好いから取つとくんなさいなと女の子を

両手で持つて唐茄子とうなすか何ぞのようにおやじの鼻の先

へ出すと、おやじはぽんぽんと頭を叩たたいて見て、は

はあかなりな音だと云った。それからいよいよ談判

が始まって散々さんざ価値切ねぎった末おやじが、買つても好い

が品はたしかだろうなと聞くと、ええ前の奴は始終

見ているから間違はありませんがね後ろうしに担かついでる

方は、何しろ眼がないんですから、ことによるとひ

びが入ってるかも知れません。こいつの方なら受け

合えない代りにねだん価段を引いておきますと云った。僕

はこの問答を未だいまに記憶しているんだがその時小供

心に女と云うものはなるほど油断のならないものだ

と思ったよ。——しかし明治三十八年の今日こんにちこんな

馬鹿な真似をして女の子を売ってあるくものもなし、

眼を放して後ろうしへ担かついだ方はけんのん陰呑だなどと云う事も

聞かないようだ。だから、僕の考ではやはりたいせい泰西文



明の御蔭で女の品行もよほど進歩したものだろうと  
断定するのだが、どうだろう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず鷹揚な咳払を一つし  
て見せたが、それからわざと落ちついた低い声で

、こんな観察を述べられた。「この頃の女は学校の  
行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよ  
いと買って頂戴な、あらおいや？　などと自分で自

分を売りにあるいていますから、そんな八百屋やおやのお

余りを雇つて、女の子はよしか、なんて下品な依托いたく

販売はんばいをやる必要はないですよ。人間に独立心が発達

してくると自然こんな風になるものです。老人なん

ぞはいらぬ取越苦勞をして何とかかとか云いますが、

實際を云うとこれが文明の趨勢すうせいですから、私などは

大に喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表して

いるのです。買う方だつて頭を敲たたいて品物は確かか

なんて聞くような野暮やぼは一人もいないんですからそ

の辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中に、

そんな手数てすうをする日にやあ、際限がありませんから

ね。五十になつたつて六十になつたつて亭主を持つ

事も嫁に行く事も出来やしません」寒月君は二十世

紀の青年だけあつて、大おおに当世流の考を開陳かいちんしてお

いて、敷島しきしまの煙をふうーと迷亭先生の顔の方へ吹き

付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易へきえきする男ではな

い。「仰せの通り方今ほうこんの女生徒、令嬢などは自尊自

信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男子

に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学

校の生徒などと来たらえらいものだぜ。筒袖つつそでを穿はい

て鉄棒かなぼうへぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から

彼等の体操を目撃するたんびに古代希臘ギリシャの婦人を追懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発しているから仕方がない。美学者と希臘とはとうてい離れられないやね。——ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnoldice の

逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。

「またむずかしい名前が出て来ましたね」と寒月君は依然としてにやにやする。「Agnodice

はえらい女だよ、僕は実に感心したね。当時アテン亜典の

法律で女が産婆を営業する事を禁じてあつた。不便

な事さ。Agnodice だってその不便を感じず

るだろうじゃないか」「何だい、その——何とか云

うのは」「女さ、女の名前だよ。この女がつらつら考えるには、どうも女が産婆になれないのは情けない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱こまぬいて考え込んだね。ちようと三日目の暁方あけがたに、隣の家で赤ん坊がおぎやあと泣いた声を聞いて、うんそうだと豁然かつぜん大悟して、それから早速長い髪を切って男の

着物をきて Hierophilus の講義をき

きに行つた。首尾よく講義をきき終<sup>おお</sup>せて、もう大丈

夫と云うところでもつて、いよいよ産婆を開業した。

ところが、奥さん流<sup>はや</sup>行りましたね。あちらでもおぎ、

や、あと生れるこちらでもおぎ、や、あと生れる。それが

みんな Agnoldice の世話なんだから大変

儲<sup>もう</sup>かつた。ところが人間万事塞翁<sup>さいおう</sup>の馬、七転<sup>ななころ</sup>び八起<sup>やお</sup>



き、弱り目に祟り目で、ついこの秘密が露見に及ん

おかみ

ごはつと

でついに御上の御法度を破つたと云うところで、重

しおき

き御仕置に仰せつけられそうになりました」「まる

で講釈見たようです事」「なかなか旨いうまでしょう

アテン

。ところが亜典の女連が一同連署して嘆願に及んだ

から、時の御奉行もそう木で鼻を括くくつたような挨拶

も出来ず、ついに当人は無罪放免、これからとはたと

い女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う御布令おふれ

さえ出てめでたく落着を告げました」「よくいろいろ

ろな事を知っていらつしやるのね、感心ねえ」「え

え大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の

馬鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知

ってます」「ホホホ面白い事ばかり……」と細君

相形そうせいを崩して笑っていると、格子戸こうしどのベルが相変ら

ず着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違いに座敷へ這入はいつて来たものは誰かと思つたらご存じの越智東風君であつた。

おちとうふう

ここへ東風君さえくれば、主人の家へ出入うちでいりする変

人はことごとく網羅し尽つくしたとまで行かずとも、少

なくとも吾輩の無聊を慰むるに足るほどの頭数あたまかずは御

ぶりよう

おそ

揃そろいになつたと云わねばならぬ。これで不足を云つて

は勿もつたい体ない。運悪るくほかの家へ飼われたが最後

生涯人間中にかかる先生方が一人でもあろうとさ

え気が付かずに死んでしまふかも知れない。幸さいわいにし

て苦沙弥先生門下の猫児びょうじとなつて朝夕虎皮ちようせきこの前に侍はん

べるので先生は無論の事迷亭、寒月ないし乃至東風などと

云う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑

連の挙止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千載一遇の光栄である。御蔭様でこの暑いのに毛袋でつつまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせこれだけ集まれば只事ただごとではすまない。何か持ち上がるだろうと襖ふすまの陰から謹つつしんで拝見する。

「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御辞

儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくやはり

奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者どんちようやくしや

のようにも見えるが、白い小倉こくらの袴はかまのゴワゴワする

のを御苦労にも鹿爪しかづめらしく穿はいているところは榊原さかきば

健吉けんきちの内弟子としか思えない。従つて東風君の身体

で普通の人間らしいところは肩から腰までの間だけ

である。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあず

つと、こつちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の家うち

らしい挨拶をする。「先生には大分だいぶん久しく御目にか

かりません」「そうさ、たしかこの春の朗読会ぎり

だったね。朗読会と云えば近頃はやはり御盛おさかんかね

。その後御宮ごおみやにやなりませんか。あれは旨うまかつたよ。

僕はおおい大に拍手したぜ、君氣が付いてたかい」「ええ

御蔭で大きに勇氣が出まして、とうとうしまいまで

漕ぎつけました」 「今度はいつ御催しがありますか」

と主人が口を出す。 「七八両月ふたつきは休んで九月には何

か賑にぎやかにやりたいと思っております。 何か面白い

趣向はございますまいか」 「さよう」と主人が気の

ない返事をする。 「東風君僕の創作を一つやらない

か」と今度は寒月君が相手になる。 「君の創作なら

面白いものだろうが、一体何かね」 「脚本さ」と寒



月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちよつと毒気をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進めると、寒月先生なお澄し返つて「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか新劇とか大部だいぶやかましいから、僕も一つ新機軸を出して俳優はいげきと云うのを作つて見たのさ」「俳優たどんな

ものだい」 「俳句趣味の劇と云うのを詰めて俳劇の  
二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少煙けむに捲ま  
かれて控ひかえている。 「それでその趣向と云うのは？」  
と聞き出したのはやはり東風君である。 「根が俳句  
趣味からくるのだから、あまり長たらしくって、毒  
悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた」 「  
なるほど」 「まず道具立てから話すが、これも極簡ごくかん

単なのがいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の方へヌツと出させて、その枝へ鳥をからす一羽とまらせる

「鳥がじつとしていればいいが」と主人が独り言ひとごと

のように心配した。「何わけは有りません、鳥の足

を糸で枝へ縛りしば付けておくんです。でその下へ行水ぎょうずい

盤だらひを出しましてね。美人が横向きになつて手拭を使

っているんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ます。美術学校のモデルを雇ってくるんです」「そりや警視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心配している。「だって興行さえしなければ構わんじやありませんか。そんな事をとやかく云った日にや学校で裸体画の写生なんざ出来っこ

ありません」「しかしあれは稽古のためだから、ただ見ているのとは少し違うよ」「先生方がそんな事を云った日には日本もまだ駄目です。絵画だつて

、演劇だつて、おんなじ芸術です」と寒月君大いに

きえん

気焰を吹く。「まあ議論はいいが、それからどうす

るのだい」と東風君、ことによると、やる了見と見

りようけん

えて筋を聞きたがる。「ところへ花道から俳人高浜

たかは

虚子まきよしがステッキを持って、白い灯心とうしん入りの帽子を被かぶ

って、透綾すきやの羽織に、薩摩飛白さつまがすりの尻端折しりつばしりの半靴と

云うこしらえて出てくる。着付けは陸軍の御用達見ごようたし

たようだけれども俳人だからなるべく悠々ゆうゆうとして腹

の中では句案に余念のない体ていであるかなくつつちやい

けない。それで虚子が花道を行き切つていよいよ本

舞台に懸つた時、ふと句案の眼をあげて前面を見る

と、大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴び  
ている、はつと思つて上を見ると長い柳の枝に鳥が  
一羽とまつて女の行水を見下ろしている。そこで虚  
子先生大におお俳味に感動したと云う思い入れが五十秒  
ばかりあつて、行水の女に惚れる鳥かなと大きな声  
で一句朗吟するのを合図に、拍子木をひょうしぎ入れて幕を引  
く。――どうだろう、こう云う趣向は。御氣に入り

ませんかね。君御宮おみやになるより虚子になる方がよほ

どいいぜ」東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「  
あんまり、あつけないようだ。もう少し人情を加味  
した事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今ま  
で比較的小となしくしていた迷亭はそういつまでも  
だまっているような男ではない。「たったそれだけ  
で俳劇はすさまじいね。上田敏君うえだびんの説によると俳味



とか滑稽とか云うものは消極的で亡国の音いんだそうだが、敏君だけあつてうまい事を云つたよ。そんなつまらない物をやつて見給え。それこそ上田君から笑われるばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極的で分らないじやないか。失礼だが寒月君はやはり実験室で珠たまを磨いてる方がいい。俳優なんぞ百作つたつて二百作つたつて、亡国の音いんじや駄目だ

「寒月君は少々憤<sup>むっ</sup>として、「そんなに消極的でしよ

うか。私はなかなか積極的なつもりなのですが」ど  
ちでも構わん事を弁解しかける。「虚子がですね。

虚子先生が女に惚れる烏かなと烏を捕<sup>とら</sup>えて女に惚れ

さしたところが大に積極的<sup>おおい</sup>だろうと思います」「こ

りや新説だね。是非御講釈を伺がいきましょう」「理

学士として考えて見ると烏が女に惚れるなどと云う

のは不合理でしょう」「ごもつとも」「その不合理

な事を無雑作むぞうさに言い放って少しも無理に聞えません」

「そうかしら」と主人が疑った調子で割り込んだが

寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります

。実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人

その人に存する感情で烏とは没交渉の沙汰でありま

す。しかるところあの鳥は惚れてるなと感じるのは、

つまり鳥がどうのこうのと云う訳じやない、必竟自ひっきよう

分が惚れているんでさあ。虚子自身が美しい女の行ぎよ

水うずいしているところを見てはっと思う途端にずっと惚

れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で鳥

が枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見

たものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参って

るなと癩違かんちがいをしたのです。癩違かんちがいには相違ないで

すがそこが文学的でかつ積極的なところなんです

。自分だけ感じた事を、断りもなく烏の上に拡張し

て知らん顔をしてすましているところなんぞは、よ

ほど積極主義じゃありませんか。どうです先生」「

なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違い

ない。説明だけは積極だが、実際あの劇をやられた

日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見なくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作もありませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云つて御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日

詩集を出して見ようと思ひまして——稿本こうほんを幸い持

つて参りましたから御批評を願ひましょう」と懐か

ら紫の袱紗ふくさづつみ包を出して、その中から五六十枚ほどの

原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人

はもつともらしい顔をして拝見と云つて見ると第一

頁に

世の人に似ずあえかに見え給う

## 富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちよつと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま眺<sup>なが</sup>めているので、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗<sup>のぞ</sup>き込んで「やあ、捧げたね。東風君、思い切つて富



子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞める。主人

はなお不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人なのですか」と聞く。「

へえ、この前迷亭先生とごいっしよに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの御近所に住んでおります。実はただ今詩集を見せようと思つてちよつと

寄つて参りましたが、あいにく生憎先月から大磯へ避暑に行

って留守でした」と真面目くさって述べる。「苦沙弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしないで、早く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この捧げ方は少しまずかったね。このあえかにと云う雅言がげんは全体何と言う意味だと思ってるかね」「蚊弱かよわいとかたよわくと云う字だと思います」「なるほどそうも取れん事はないが本来の字義を云うと危あやうきにと

云う事だぜ。だから僕ならこうは書かないね」「どう書いたらもつと詩的になりましたよ」「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え給う富子嬢の鼻の下に捧ぐとするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのとは大變感じに相違があるよ」「なるほど」と東風君は解げしかねたところを無理に納得した体なつとくにもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていいよい  
よ巻頭第一章を読み出す。

倦<sup>う</sup>んじて薰<sup>くん</sup>ずる香裏<sup>こうり</sup>に君の

霊か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛<sup>から</sup>きこの世に

あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならんのはごもつともで、十年前の詩界と今日こんにちの詩界とは見違えるほど発達しております

すから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではどうてい分りようがないので、作った本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。註釈や訓義くんぎは学究のやる事で私共の方では頓とんと構いません。せんだつても私の友人で送籍そうせきと云う男が一夜、という短篇をか

きしましたが、誰が読んでも朦朧もうろうとして取り留めとがつ

かないので、当人に逢とくつて篤と主意のあるところを

糺ただして見たのですが、当人もそんな事は知らないよ

と云つて取り合わないのです。全くその辺が詩人の

特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な

男ですね」と主人が云うと、迷亭が「馬鹿だよ」と

単簡たんかんに送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけでは

まだ弁じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取<sup>と</sup>

除<sup>りの</sup>けですが、私の詩もどうか心持ちその気で読んで

いただきたいので。ことに御注意を願いたいのはか、

らきこの世と、あまき口づけと対<sup>つい</sup>をとったところが

私の苦心です」「よほど苦心をなすった痕迹<sup>こんせき</sup>が見え

ます」「あまいとからいと反照するところなんか十<sup>じゆ</sup>

うしちみちよあうがらしちよう

七味調唐辛子調で面白い。全く東風君独特の伎倆で



敬々服々の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでゐる。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書斎の方へ行つたがやがて一枚の半紙を持って出てくる。「東風

君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」といささか本気の沙汰である。」「天然居士てんねんこじの墓碑銘ぼひめいならもう二三遍拝聴したよ」

「まあ、だまっていなさい。東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

「大和魂！」  
やまとだまし

と叫んで日本人が肺病やみのような咳せき

をした」

「起し得て突兀とっこつですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！　と新聞屋が云う。大和魂！　と掏摸すりが

云う。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂

の演説をする。独逸ドイツで大和魂の芝居をする」

「なるほどこりや天然居士てんねんこじ以上の作だ」と今度は迷

亭先生がそり返って見せる。

「東郷大將が大和魂を有<sup>も</sup>っている。肴屋<sup>さかなや</sup>の銀さんも大和魂を有<sup>も</sup>っている。詐偽師<sup>さぎし</sup>、山師<sup>やまし</sup>、人殺しも大和魂を有<sup>も</sup>っている」

「先生そこへ寒月も有<sup>も</sup>っているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五六間行<sup>い</sup>ってからエヘンと云<sup>い</sup>う声<sup>こゑ</sup>が聞<sup>きこ</sup>こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か

。大和魂は名前の示すごとく魂である。魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいぶ面白うございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成

」と云つたのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない

。誰も聞いた事はあるが、誰も遇あつた者がない。大

和魂はそれ天狗てんぐの類たぐいか」

主人は一結いっけつようぜん杳然と云うつもりで読み終つたが、さ

すがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事

と思つて待っている。いくら待つていても、うんとも、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は軽くかる「うん」と答えた。うんは少し氣樂過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつものようにあまり駄弁を振わなかつたが、やがて向き直つて、「君も短篇を集めて一巻として、そうして誰

かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに

「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は「真平だまっぴら

」と答えたぎり、先刻細君に見せびらかした鋏はさみをち

よきちよき云わして爪をとっている。寒月君は東風

君に向つて「君はあの金田の令嬢を知ってるのかい」

と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意に

なつてそれから始終交際をしている。僕はあの令



嬢の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、自分のうちは詩を作っても歌を詠よんでも愉快に興が乗って出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の朋友ほうゆうからインスピレーションを受け  
るからだろうと思う。それで僕はあの令嬢に対しては切実に感謝の意を表しなければならんからこの機  
を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔むかしか

ら婦人に親友のないもので立派な詩をかいたものはないそうだ」「そうかなあ」と寒月君は顔の奥で笑いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談話の火の手は大分下火になつた。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねばならぬ義務もないから、失敬して庭へ蟪蛄かまきりを探しに出た。あおぎり梧桐の緑を綴つづる間から西に傾く日が斑まだらに洩も

れて、幹にはつくつく法師ほうしが懸命けんめいにないている。晩はことによると一雨かかるかも知れない。

## 七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利きいた風だと一概に冷罵れいばし去る手合てあいにちよつと申し聞

けるが、そう云う人間だつてつい近年までは運動の  
何者たるを解せず、食つて寝るのを天職のように  
心得ていたではないか。無事ぶじ是貴人これきにんとか称となえて、懷ふと

ころで手をして座布団ざぶとんから腐れかかった尻を離さざるをも

つて旦那の名誉と脂下やにさがつて暮したのは覚えてゐるは

ずだ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、

海の中へ飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠こもつて

当分霞を食えの<sup>くら</sup>とくだらぬ注文を連発するようにな

ったのは、西洋から神国へ伝染した<sup>ばんきん</sup>軌近の病気で、

やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていい

くらいだ。もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当

年とって一歳だから人間がこんな病気に<sup>かか</sup>罹り出した

当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその

砌<sup>みぎ</sup>りは浮世の風<sup>かざ</sup>中にふわついておらなかつたに相違

ないが、猫の一年は人間の十年に懸<sup>か</sup>け合うと云つて

もよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短

いに係<sup>かかわ</sup>らず、その短日月の間に猫一疋の発達は十分

仕<sup>つかまつ</sup>るところをもつて推論すると、人間の年月と猫の

星霜<sup>せいそう</sup>を同じ割合に打算するのははなはだしき誤<sup>ご</sup>謬<sup>びゆう</sup>で

ある。第一、一歳何カ月に足らぬ吾輩がこのくらい

の見識を有しているのでも分るだろう。主人の第三

女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時を憤るいきどお吾輩などに較くらべると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって毫も驚ぞうくに足りない。これしきの事をもし驚ろく者

があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない

野呂間のろまきまに極きまっている。人間は昔から野呂間である

であるから近頃に至いたつて漸ようよう々運動の機能を吹聴ふいちようし

たり、海水浴の利益を喋ちやうちやう々して大発明のように考え

るのである。吾輩などは生れない前からそのくらい

な事はちゃんと心得ている。第一海水がなぜ薬にな

るかと言えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じや



ないか。あんな広い所に魚が何疋びきおるか分らないが、

あの魚が一疋も病氣をして医者にかかった試ためしがな

い。みんな健全に泳いでいる。病氣をすれば、から

だが利きかなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚

の往生をあゝがゝると云つて、鳥の薨去こうきよを、落ゝちゝると唱とな

え、人間の寂滅じやくめつをゝねゝると号している。洋行をして

印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事

がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいえと答えるに極っている。それはそう答える訳だ。いく

ら往復したって一匹も波の上に今呼吸いきを引き取った

——呼吸いきではいかん、魚の事だから潮しおを引き取った

と云わなければならん——潮を引き取って浮いてい

るのを見た者はないからだ。あの渺々びようびようたる、あの漫まん

々まんたる、大海たいかいを日となく夜となく続けざまに石炭を

焚<sup>た</sup>いて探<sup>さ</sup>がしてあるいても古往今来<sup>こんらい</sup>一匹も魚が上<sup>う</sup>が、  
つておらんとところをもつて推論すれば、魚はよほど  
丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出  
来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云え  
ばこれまた人間を待つてしかる後<sup>のち</sup>に知らざるなりで、  
訳<sup>わけ</sup>はない。すぐ分る。全く潮水<sup>しおみず</sup>を呑んで始終海水浴  
をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取

けんちよ

って顕著である。魚に取って顕著である以上は人間

に取っても顕著でなくてはならん。一七五〇年にド

クトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水

に飛込めば四百四病そくせき即席全快と大袈裟おおげさな広告を出し

たのは遅い遅いと笑ってもよろしい。猫といえども

相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛

けるつもりでいる。但ただし今はいけない。物には時機

がある。ごいつしんまゑ御維新前の日本人が海水浴の機能を味わう

事が出来ずに死んだごとく、こんにち今日の猫はいまだ裸体

で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇そうぐうしておらん。せ

いては事を仕損しそんずる、今日のように築地つきじへ打っち

やられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗むやみに飛び

込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が

きょうらんどとう

狂瀾怒濤きょうらんどとうに対して適當の抵抗力を生ずるに至るまで

は——換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは——容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極め<sup>き</sup>た。どうも二十世紀の今<sup>こん</sup>にち日運動せんのはいかにも貧民のようで人間きがわるい。運動をせんと、運動せんのではない。運動が出

来なのである、運動をする時間がないのである、余

裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折おり

助すけと笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と

見倣みなされている。吾人の評価は時と場合に応じ吾輩

の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さく

なったり大きくなったりするばかりだが、人間の品ひん

儻しつとくると真逆まっさかさまにひっくり返る。ひっくり返

つても差し<sup>さ</sup>支え<sup>つか</sup>はない。物には両面がある、両端<sup>りようたん</sup>が

ある。両端を叩<sup>たた</sup>いて黒白<sup>こくびやく</sup>の変化を同一物の上に起こ

すところが人間の融通のきくところである。方寸<sup>、</sup>を

逆<sup>さ</sup>かさまにして見ると寸方<sup>、</sup>となるところに愛嬌<sup>あいきよう</sup>があ

る。天<sup>あま</sup>の橋立<sup>はしだて</sup>を股倉<sup>またぐら</sup>から覗<sup>のぞ</sup>いて見るとまた格別<sup>おもむき</sup>な趣

が出る。セクスピアも千古万古セクスピアではつま

らない。偶<sup>たま</sup>には股倉からハムレットを見て、君こり



や駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわるく云った連中が急に運動がしたくなつて、女までがラケットを持って往來をあるき廻つたつて一向不思議はない。ただ猫が運動するのを利きいた風などと笑いさえしなければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を抱いだく者があるかも知れんから一応説明しよう

思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ん。だからボールもバットも取り扱い方に困窮する。次には金がないから買う訳わけに行かない。この二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文いちもんいらず器械なしと名づくべき種類に属する者と思う。そんなら、のそのそ歩くか、あるいは鮪まぐろの切身を啣くわえて馳かけ出す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力

学的に運動させて、地球の引力に順したがつて、大地を横

行するのは、あまり単簡たんかんで興味が無い。いくら運動

と名がついても、主人の時々実行するような、読ん

で字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚けがす者だ

ろうと思う。勿論もちろんただの運動でもある刺激の下もとには

やらんとは限らん。鯉節競争かつぶしきょうそう、鮭探しゃけさがしなどは結構だ

がこれは肝心かんじんの対象物があつての上の事で、この刺

激を取り去ると索然さくぜんとして没趣味なものになつてし

まう。懸賞的興奮剤がないとすれば何か芸のある運

動がして見たい。吾輩はいろいろ考えた。台所の廂ひさし

から家根やねに飛び上がる方、家根の天辺てっぺんにある梅花形ばいかがた

の瓦かわらの上に四本足で立つ術、物干竿ものほしざおを渡る事——こ

れはとうてい成功しない、竹がつるつる滑すべって爪

が立たない。後うしろから不意に小供に飛びつく事、——

——これはすこぶる興味のある運動のひとつ一だが滅多めったにや

るとひどい目に逢うから、高々たかだか月に三度くらいしか

試みない。紙袋かんぶくろを頭へかぶせらるる事——これは苦

しいばかりではなはだ興味の乏とぼしい方法である。こ

とに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次

には書物の表紙を爪で引き搔かく事、——これは主人

に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、

割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない

。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である

。新式のうちにはなかなか興味の深いのである。第

一に蠅螂狩り。どうろうが——蠅螂狩りは鼠狩りねずみがほどの大運動

でない代りにそれほど危険がない。夏の半なかばから秋

の始めへかけてやる遊戯としてはもっとも上乘のも

のだ。その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の蠅螂かまきり

をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出す

のは雑作ぞうさもない。さて見付け出した螭螂君そばの傍へは

つと風を切つて馳かけて行く。するとすわこそと云う

身構みがまえをして鎌首をふり上げる。螭螂でもなかなか健け

気なげなもので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつ

もりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足

でちよつと参る。振り上げた首は軟かいからぐにや

り横へ曲る。この時の螭螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云う思い入れが充分ある。ところを一足飛びに君きみの後ろへ廻つて今度は背面から君のいっそく羽根を軽く引き搔くかろ。あの羽根は平生大事に畳たたんであるが、引き搔き方が烈はげしいと、ぱつと乱れて中から吉野紙のような薄色の下着があらわれる。君は夏でも御苦労千万に二枚重ねで乙おつに極きまっている。こ



の時君の長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向  
つてくるが、大概の場合には首だけぬつと立てて立  
っている。こつちから手出しをするのを待ち構えて  
見える。先方がいつまでもこの態度でいては運動に  
ならんから、あまり長くなるとまたちよいと一本参  
る。これだけ参ると眼識のある螭螂なら必ず逃げ出  
す。それを我<sup>が</sup>無洒落<sup>むしゃら</sup>に向つてくるのはよほど無教育

な野蛮的蟪蛄である。もし相手がこの野蛮な振舞を  
やると、向つて来たところをねら覘いすまして、いやと  
云うほど張り付けてやる。大概は二三尺飛ばされる  
者である。しかし敵がおとなしく背面に前進すると  
、こっちは気の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のご  
とく廻つてくる。蟪蛄君はまだ五六寸しか逃げ延び  
ておらん。もう吾輩の力量を知ったから手向いをす

る勇氣はない。ただ右往左往へ逃げ惑うのみである

。しかし吾輩も右往左往へ追っかけるから、君はし

まいには苦しがつて羽根を振ふるつて一大活躍を試みる

事がある。元来螳螂の羽根は彼の首と調和して、す

こぶる細長く出来上がったものだが、聞いて見ると

全く裝飾用だそうで、人間の英語、仏語、独逸語ドイツ語の

ごとく毫ごうも実用にはならん。だから無用の長物を利

用して一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり機能のありよう訳がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引きずつてあるくと云うに過ぎん。こうなると少々気の毒な感はあるが運動のためだから仕方がない。御免蒙ごめんこうむつてたちまち前面へ馳かけ抜ける。君は惰性で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進してくる。その鼻をなぐりつける。この時蠟

螂君は必ず羽根を広げたままたお仆れる。その上をうん

と前足で抑おさえて少しく休息する。それからまた放す

。放しておいてまた抑える。七擒七縱しちきんしちしようめい孔明の軍略で

攻めつける。約三十分この順序を繰り返して、身動

きも出来なくなつたところを見すましてちよつと口

へ啣くわえて振つて見る。それからまた吐き出す。今度

は地面の上へ寝たぎり動かないから、こつちの手で

突っ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑え  
つける。これもいやになってから、最後の手段とし  
てむしやむしや食ってしまふ。ついでだから螻蛄を  
食った事のない人に話しておくが、螻蛄はあまり旨  
い物ではない。そうして滋養分も存外少ないよう  
である。螻蛄狩りに次いで蝉取りと云う運動をやる  
。単に蝉と云ったところが同じ物ばかりではない

人間にも油野郎、あぶらやろう みんなみん野郎、おしいつくつく

野郎があるごとく、蟬にも油蟬、みんな、おしい

つくつくがある。油蟬はしつこくて行いかん。みんな

んは横風おうふうで困る。ただ取って面白いのはおしいつく

つくである。これは夏の末にならないと出て来ない

。八やつ口くちの綻ほころびから秋風あきかぜが断たわりなしに膚はだを撫なでて

はつくしよ風邪かぜを引いたと云う頃さかん熾さかんに尾おを掉ふり立て

てなく。善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天職がないと思われるくらいだ。秋の初はこいつを取る。これを称して蟬取り運動と云う。ちよつと諸君に話しておくがいやしくも蟬と名のつく以上は、地面の上に転ころがつてはおらん。地面の上に落ちてゐるものには必ず蟻ありがついてゐる。吾輩の取るのはこの蟻の領分に寝転んでゐる奴



ではない。高い木の枝にとまって、おしいつくつく  
と鳴いている連中を捕とらえるのである。これもついで  
だから博学なる人間に聞きたいがあればおしいつく  
つくと鳴くのか、つくつくおしいと鳴くのか、その  
解釈次第によつては蟬の研究上少なからざる関係が  
あると思う。人間の猫に優まさるところはこんなところ  
に存するので、人間の自みら誇みる点もまたかような点

にあるのだから、今即答が出来ないならよく考えて  
おいたらよからう。もつとも蟬取り運動上はどっち  
にしても差し支<sup>さ</sup>えはな<sup>つか</sup>い。ただ声をしるべに木を上<sup>のぼ</sup>  
って行つて、先方が夢中になつて鳴いているところ  
をうんと捕えるばかりだ。これはもつとも簡略な運  
動に見えてなかなか骨の折れる運動である。吾輩は  
四本の足を有しているから大地を行く事においては

あえて他の動物には劣るとは思わない。少なくとも

二本と四本の数学的智識から判断して見て人間には  
負けないつもりである。しかし木登りに至っては<sup>だ</sup>大

分<sup>いぶ</sup>吾輩より巧者な奴がいる。本職の猿は別物として

、猿の末孫<sup>ばっそん</sup>たる人間にもなかなか侮<sup>あなど</sup>るべからざる手<sup>て</sup>

合<sup>あい</sup>がいる。元来が引力に逆らつての無理な事業だか

ら出来なくても別段の恥辱<sup>ちじよく</sup>とは思わんけれども、蟬

取り運動上には少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があるので、どうかこうか登りはするものの、はたで見るほど楽ではござらん。のみならず蟬は飛ぶものである。

螭螂君かまきりくんと違って一たび飛んで

しまったが最後、せつかくの木登りも、木登らずと何のえら択むところなしと云う悲運に際会する事がないとも限らん。最後に時々蟬から小便をかけられる危

険がある。あの小便がややともすると眼を覗<sup>ねら</sup>つてし

よぐつてくるようだ。逃げるのは仕方がないから

、どうか小便ばかりは垂れんように致したい。飛ぶ

間際<sup>まぎわ</sup>に溺<sup>いば</sup>りを仕<sup>つかまつ</sup>るのは一体どう云う心理的狀態の生

理的器械に及ぼす影響だろう。やはりせつなさのあ

まりかしらん。あるいは敵の不意に出でて、ちよっ

と逃げ出す余裕を作るための方便か知らん。そうす

ると烏賊いかの墨を吐き、ベランメーの刺物ほりものを見せ、主

ラテンご

人が羅匈語を弄する類たぐいと同じ綱目こうもくに入るべき事項と

ゆる

なる。これも蟬学上忽ゆるかせにすべからざる問題であ

る。充分研究すればこれだけでたしかに博士論文の  
価値はある。それは余事だから、そのくらいにして

また本題に帰る。蟬のもつとも集注するのは――集

ちんぷ

注がおかしければ集合だが、集合は陳腐ちんぷだからやは

り集注にする。――蟬のもつとも集注するのは青桐

あおぎり

である。漢名を梧桐ごとうと号するそうだ。ところがこの

青桐は葉が非常に多い、しかもその葉は皆团扇うちわくら

いな大さおおきであるから、彼等が生い重おなると枝がまる

で見えないくらい茂っている。これがはなはだ蟬取

り運動の妨害になる。声はすれども姿は見えずと云

ぞくよう

う俗謡はとくに吾輩のために作った者ではなからう

かと怪しまれるくらいである。吾輩は仕方がないか

らただ声を知るべに行く。下から一間ばかりのそこ

ろで梧桐は注文通り二又ふたまたになっているから、ここで

一休息ひとやすみして葉裏から蟬の所在地を探偵する。もっと

もここまで来るうちに、がさがさと音を立てて、飛

び出す気早な連中がいる。一羽飛ぶともういけない

。真似をする点において蟬は人間に劣らぬくらい馬



鹿である。あとから続々飛び出す。漸々二又ようようふたまたに到着

する時分には満樹寂せきとして片声へんせいをとどめざる事がある。

かつてここまで登って来て、どこをどう見廻わ

しても、耳をどう振っても蟬氣せみけがないので、出直す

のも面倒だからしばらく休息しようと、又またの上に陣

取って第二の機会を待ち合せていたら、いつの間まに

か眠くなつて、つい黒甜郷裡こくてんきょうりに遊んだ。おやと思つ

て眼が醒めたら、二又の黒甜郷裡こくてんきょうりから庭の敷石の上

へどたりと落ちていた。しかし大概是登る度に一つ

は取つて来る。ただ興味の薄い事には樹の上で口に

啣くわえてしまわなくてはならん。だから下へ持つて来

て吐き出す時は大方死んでおおかたいる。いくらじやらして

も引つ搔かいても確然たる手答がない。蟬取りの妙味

はじつと忍んで行つておしい君くんが一生懸命に尻尾しっぽを

延ばしたり縮ちぢましたりしているところを、わつと前

おき

足で抑える時にある。この時つくつく君くんは悲鳴を揚

げて、薄い透明な羽根を縦横無尽に振う。その早い

事、美事なる事は言語道断、実に蟬世界の一偉観で

ある。余はつくつく君を抑える度たびにいつでも、つく

つく君に請求してこの美術的演芸を見せてもらおう

。それがいやになるとご免ごうむを蒙まかつて口の内へ頬張ほおばつ

てしまう。蟬によると口の内へ這入はいつてまで演芸を

つづけているのがある。蟬取りの次にやる運動は松まつ

滑すべりである。これは長くかく必要もないから、ちよ

っと述べておく。松滑りと云うと松を滑るように思

うかも知れんが、そうではないやはり木登りの一種

である。ただ蟬取りは蟬を取るために登り、松滑り

は、登る事を目的として登る。これが両者の差であ

る。元来松は常磐ときわにて最明寺さいみょうじの御馳走ごちそうをしてから以

来今日こんにちに至るまで、いやにごつごつしている。従つ

て松の幹ほど滑らないものはない。手懸りのいいも

のはない。足懸りのいいものはない。——換言すれ

ば爪懸りつまがかりのいいものはない。その爪懸りのいい幹へ

一いっきかせいかに馳あがけ上る。馳あがけ上つておいて馳あがけ下がる

。馳あがけ下がるには二法ある。一はさかさになつて頭

を地面へ向けて下りてくる。一は上のぼったままの姿勢

をくずさずに尾を下にして降りる。人間に問うがど

っちがむずかしいか知ってるか。人間のあさはかな

りようけん

了見では、どうせ降りるのだから下向したむきに馳け下りる

方が楽だと思うだろう。それが間違ってる。君等は

ひよどりごえ

義経が鶉越ひよどりごえを落としたことだけを心得て、義経でさ

え下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下した向

きでたくさんだと思ふのだらう。そう輕蔑するもの

けいべつ

ではない。猫の爪はどっちへ向いて生はえていると思

ふ。みんな後ろうしろへ折れている。それだから鳶口とびぐちのよ

うに物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し

出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登った

とする。すると吾輩は元來地上の者であるから、自

然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巔いたadakiに留とどまるを

許さんに相違ない、ただおけば必ず落ちる。しかし手放しで落ちては、あまり早過ぎる。だから何等か的手段をもつてこの自然の傾向を幾分かゆるめなければならん。これ即ちすなわ降りるのである。落ちるのと降りるのは大變な違のようだが、その実思ったほどの事ではない。落ちるのを遅くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると



降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。すなわ即ちあるものをもつて落ちる速度に抵抗しなければならぬ。吾輩の爪は前申す通りぜん皆後ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、ことごと落ちる勢に逆つて利用出来る訳である。従つて落ちるが變じて降りるになる

。 実に見易き道理である。 しかるにまた身を逆にし

みやす

さか

て義経流に松の木越をやつて見給え。 爪はあつても

まこえ

役には立たん。 ずるずる滑つて、どこにも自分の体

量を持ち答える事は出来なくなる。 ここにおいてか

くわだ

せつかく降りようと企てた者が変化して落ちる事に

ひよどりごえ

なる。 この通り鶉越はむずかしい。 猫のうちでこの

芸が出来る者は恐らく吾輩のみであろう。 それだか

ら吾輩はこの運動を称して松滑りと云うのである

最後に垣巡りかきめぐについて一言いちげんする。主人の庭は竹垣

をもつて四角にしきられている。椽側えんがわと平行してい

る一片いっぺんは八九間もあろう。左右は双方共四間に過ぎ

ん。今吾輩の云った垣巡りと云う運動はこの垣の上

を落ちないように一周するのである。これはやり損そこな

う事もままあるが、首尾よく行くとお慰なぐさみになる。こ

とに所々に根を焼いた丸太が立っているから、ちよ  
つと休息に便宜べんぎがある。今日は出来がよかったので  
朝から昼までに三返べんやって見たが、やるたびにうま  
くなる。うまくなる度たびに面白くなる。とうとう四返  
繰り返したが、四返目に半分ほど巡りまわかけたら、隣  
の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向うに  
列を正してとまった。これは推参な奴だ。人の運動

の妨さまたげをする、ことにどこの鳥だか籍せきもない分ぶん在ざいで

、人の塀へとまるといふ法があるもんかと思つたか

ら、通るんだおい除のきたまえと声をかけた。真先の

鳥はこつちを見てにやにや笑っている。次のは主人

の庭を眺ながめている。三羽目は嘴くちばしを垣根の竹で拭ふいて

いる。何か食つて来たに違ない。吾輩は返答を待つ

ために、彼等に三分間の猶予ゆうよを与えて、垣の上に立

つていた。烏は通称を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待ってても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やっと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思ったら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！ 地面の上ならその分に捨てお

くのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といってまた立留ま<sup>り</sup>つて三羽が立ち退<sup>の</sup>くのを待つのもいやだ。第一そう待<sup>り</sup>つていては足がつづかない。

先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従<sup>したが</sup>つて氣に入ればいつまでも逗<sup>と</sup>留<sup>り</sup>するだろう。こ<sup>り</sup>っちはこれで四返目だたださえ大<sup>だ</sup>

分<sup>いぶつか</sup>勞れてゐる。いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼

運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちん

とは保証が出来んのに、こんな黒装束が、三個も前

途を遮<sup>さえぎ</sup>つては容易ならざる不都合だ。いよいよとな

れば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がな

い。面倒だから、いつそさよう仕ろうか、敵は大勢

の事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見馴れ



ぬ人体である。にんてい 口嘴が乙くちばしに尖おつがつて何だか天狗てんぐの啓もう

し子ごのようだ。どうせ質たちのいい奴でないには極きまつて

いる。退却が安全だろう、あまり深入りをして万一

落ちでもしたらなおさら恥辱だ。と思つていると左ひだ

向りむけをした烏が阿呆あほうと云つた。次のも真似をして阿呆

と云つた。最後の奴は御鄭寧ごていねいにも阿呆阿呆と二声叫

んだ。いかに温厚なる吾輩でもこれは看過かんか出来ない

。第一自己の邸内からすはいで烏輩に侮辱されたとあつては

吾輩の名前にかかわる。名前はまだないから係わ

りようがなからうと云うなら体面に係わる。決して

退却は出来ない。ことわざ諺にも烏合うごうの衆と云うから三羽だ

つて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸

を据すえて、のそのそ歩き出す。烏は知らん顔をして

何か御互に話をしていゝ様子だ。いよいよ肝癰かんしやくに障さわ

る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合  
せてやるんだが、残念な事にはいくら怒つても、の  
そのそとしかあるかれない。ようやくの事先鋒を去  
る事約五六寸の距離まで来てもう一息だと思つと  
、勘左衛門は申し合せたように、いきなり羽搏をし  
て一二尺飛び上がった。その風が突然余の顔を吹い  
た時、はつと思つたら、つい踏み外はずして、すとな

と落ちた。これはしくじったと垣根の下から見上げ

ると、三羽共元の所にとまって上からくちばし そろ嘴を揃えて吾

輩の顔を見下している。凶太い奴だ。睨にらめつけてや

ったが一向利いっこうきかない。背を丸くして、少々唸うなったが

、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩がわから

ぬごとく、吾輩が彼等に向って示す怒りの記号も何

等の反応を呈出しない。考えて見ると無理のないと

ころだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱つていた。それが悪い。猫ならこのくらいやればたしかにこた応えるのだが生憎あいにく相手は烏だ。烏の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主人くしやみ苦沙弥先生を压倒しようとおせるごとく、西行さいぎやうに銀製の吾輩を進呈するがごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞ふんをひるようなものである。機を見るに敏なる吾輩はとうて

い駄目と見て取ったから、奇麗さっぱりと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動もいいが度を過ぎたと行かぬ者で、からだ全体が何となく緊しまりがない、ぐたぐたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛ごろもは、西日を感じる存分吸収したと見えて、ほてってたまらない。毛穴から染しみ出す汗が、流れればと思うのに毛の

根に膏あぶらのようにねばり付く。背中せなかがむずむずする

。汗でむずむずするのと蚤のみが這はつてむずむずするの

は判然と區別が出来る。口の届く所なら噛かむ事も出

来る、足の達する領分は引き搔かく事も心得にあるが

、脊髓せきずいの縦に通う真中と来たら自分の及ぶ限かぎりでない

。こう云う時には人間を見懸けて矢鱈やたらにこすり付け

るか、松の木の皮で充分摩擦術を行うか、二者その

一を扱えらばんと不愉快で安眠も出来兼ねる。人間は愚ぐ

なものであるから、猫なで声で——猫なで声は人間

の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安めやすにして考えれ

ば猫なで声ではない、なでられ声である——よろし

い、とにかく人間は愚なものであるから撫なでられ声

で膝そばの傍へ寄って行くと、大抵の場合において彼も

しくは彼女を愛するものと誤解して、わが為なすまま



に任せるのみか折々は頭さえ撫なでてくれるものだ

もうちゅう

。しかるに近来吾輩の毛中にのみと号する一種の寄

生虫が繁殖したので滅多めったに寄り添うと、必ず頸筋くびすじを

持つて向うへ抛ほうり出される。わずかに眼に入るいるか入い

らぬか、取るにも足らぬ虫のために愛想あいそをつかした

ひるがえ

と見える。手を翻せば雨、手を覆くつがえせば雲とはこの事

びき

だ。高がのみの千足や二千足でよくまあこんなに現

金な真似が出来たものだ。人間世界を通じて行われ  
る愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。――自己  
の利益になる間は、すべからく人を愛すべし。――  
人間の取り扱が俄然豹変がぜんひょうへんしたので、いくら痒かゆくて  
も人力を利用する事は出来ん。だから第二の方法に  
よつてしょうひまさつほう松皮摩擦法をやるよりほかに分別はない。し  
からばちよつとこすつて参ろうかとまた椽側えんがわから降

りかけたが、いやこれも利害相償わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。松には脂やにがある

。この脂やにたるすこぶる執着心の強い者で、もし一た

び、毛の先へくっ付けようものなら、雷が鳴っても

バルチック艦隊が全滅しても決して離れない。しか

のみならず五本の毛へこびりつくが早いか、十本に

蔓延まんえんする。十本やられたなと気が付くと、もう三十

本引つ懸つてゐる。吾輩は淡泊<sup>たんぱく</sup>を愛する茶人<sup>ちやじん</sup>的猫<sup>てきねこ</sup>で

ある。こんな、しつこい、毒悪な、ねちねちした

執念<sup>しゅうねん</sup>深い奴は大嫌だ。たとい天下の美猫<sup>びみょう</sup>といえど

もご免蒙る。いわんや松脂<sup>まつやに</sup>においてをやだ。車屋の

黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞<sup>めふ</sup>と拭<sup>えら</sup>ぶところ

なき身分をもつて、この淡灰色<sup>たんかいしよく</sup>の毛衣<sup>けごろも</sup>を大<sup>だい</sup>なしにす

るとは怪<sup>け</sup>しからん。少しは考<sup>かん</sup>えて見<sup>み</sup>るが<sup>が</sup>いい。とい

ったところできやつなかなか考えるきづかい氣遣はない。あ

の皮のあたりへ行つて背中をつけるが早いかな必ずべ  
たりとおいでになるに極きまっている。こんな無分別な

頓痴奇とんちきを相手にしては吾輩の顔に係わるのみならず

、引いて吾輩の毛並に関する訳だ。いくら、むずむ

ずしたって我慢するよりほかに致し方はあるまい

。しかしこの二方法共実行出来んとなるとはなはだ

ひとくふう

心細い。今において一工夫しておかんとしまいには

かか

むずむず、ねちねちの結果病気に罹るかも知れない

あ  
あし

。何か分別はあるまいかなと、後と足を折って思案

したが、ふと思ひ出した事がある。うちの主人は時

シヤボン

ひょうぜん

々手拭と石鹼をもつて飄然といずれへか出て行く事

もう

がある、三四十分して帰ったところを見ると彼の朦

ろう

かんしよく

朧たる顔色が少しは活気を帯びて、晴れやかに見え

る。主人のような汚苦むさくるしい男にこのくらいな影響を

与えるなら吾輩にはもう少し利目ききめがあるに相違ない

。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、これ

より色男になる必要はないようなものの、万一病氣

に罹かかって一歳なん何が月げつで夭折ようせつするような事があつては

天下の蒼生そうせいに対して申し訳がない。聞いて見るとこ

れも人間のひま潰つぶしに案出した洗湯せんとうなるものだそう

だ。どうせ人間の作ったものだから碌ろくなものでない

には極きまっているがこの際の事だから試しに這はい入いって

見るのもよからう。やって見て功験がなければよす

までの事だ。しかし人間が自己のために設備した浴

場へ異類の猫を入れるだけの洪量こうりょうがあるだろうか

。これが疑問である。主人がすまして這はい入いるくらい

のところだから、よもや吾輩を断わる事もなかろう



けれども万一お気の毒様を食うような事があつては  
外聞がわるい。これは一先<sup>ひとま</sup>ず容子<sup>ようす</sup>を見に行くに越し  
た事はない。見た上でこれならよいと当りが付いた  
ら、手拭を<sup>くわ</sup>啣<sup>くわ</sup>えて飛び込んで見よう。とここまで思  
案を定めた上でのそのそと洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなも  
のが屹立<sup>きつりつ</sup>して先から薄い煙を吐いている。これ即<sup>すなわ</sup>ち

洗湯である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏

口から忍び込むのを卑怯ひきようとか未練とか云うが、あれ

は表からでなくては訪問する事が出来ぬものが嫉妬しつと

半分に囓はし立てる繰くり言ごとである。昔から利口な人は

裏口から不意を襲う事にきまっている。紳士養成方ほう

の第二巻第一章の五ページにそう出ているそうだ

。その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身

徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり軽蔑けいべつしてはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割って八寸くらいにしたのが山のように積んであつて、その隣りには石炭が岡のように盛つてある。なぜ松薪まつまきが山のようで、石炭が岡のようかと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、た

だちよつと山と岡を使い分けただけである。人間も

米を食ったり、鳥を食ったり、肴さかなを食ったり、獣けものを

食ったりいろいろの悪あくもの食いをしつくしたあげく

ついに石炭まで食うように墮落したのは不憫ふびんである

。行き当りを見ると一間ほどの入口が明け放しにな

って、中を覗のぞくとがんがらがんのがあんと物静かで

ある。その向側むこうがわで何かしきりに人間の声がする。い

わゆる洗湯はこの声の発する辺へんに相違ないと断定し

たから、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通り抜

けて左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓ガラスまどがあつて

、そのそとに丸い小桶こおけが三角形即ちピラミッドのご

とく積みかさねてある。丸いものが三角に積まれる

のは不本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を

諒りようとした。小桶の南側は四五尺の間板あいだが余つて、あ

たかも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さ

は地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御おあ

誂つらえの上等である。よろしいと云いながらひらりと

身を躍おどらすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の

前にぶらついている。天下に何が面白いと云って

、未だ食いまわざるものを食い、未だ見ざるものを見る

ほどの愉快はない。諸君もうちの主人のごとく一週

三度くらい、この洗湯界に三十分乃至四十分を暮す

ならいいが、もし吾輩のごとく風呂と云うものを見

た事がないなら、早く見るがいい。親の死目しにめに逢あわ

なくてもいいから、これだけは是非見物するがいい

世界広しといえどもこんな奇観きかんはまたとあるまい

何が奇観だ？

何が奇観だって吾輩はこれを口に

するを憚<sup>はば</sup>かるほどの奇観だ。この硝子窓<sup>ガラスまど</sup>の中にうじ

やうじや、があがあ騒いでいる人間はことごとく裸

体である。台湾の生蕃<sup>せいばん</sup>である。二十世紀のアダムで

ある。そもそも衣装<sup>いしやう</sup>の歴史を繙<sup>ひもと</sup>けば——長い事だか

らこれはトイフェルスドレック君に譲って、繙くだ

けはやめてやるが、——人間は全く服装で持つてる

のだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてボ



ー・ナツシが嚴重な規則を制定した時などは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくしたくらいである。今を去る事六十年前<sup>ぜん</sup>これも英国の去る都で図案学校を設立した事がある。図案学校の事であるから

、裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、ここかしこに陳列したのはよかったが、いざ開校式を挙行する一段になって当局者を初め学校の職員が大

困却をした事がある。開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思っていた。人間として着物をつけないのは象の鼻なきがごとく、学校の生徒なきがごとく、兵隊の勇気なきがごとく全くその本体を失<sup>しっ</sup>している。いやしくも本体を失している以上は

人間としては通用しない、獣類である。仮令たとひ模写模

型にせよ獣類の人間と伍するのは貴女の品位を害す

る訳である。でありますから妾等しやうらは出席御断わり申

すと云われた。そこで職員共は話せない連中だとは

思ったが、何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾

品である。米春こめつきにもなれん志願兵にもなれないが

、開校式には欠くべからざる化粧道具けしょうどうぐである。と云

うところから仕方がない、呉服屋へ行つて黒布を三くろぬの

はちぶんのしち

十五反八分七買つて来て例の獸類の人間にことごと

く着物をきせた。失礼があつてはならんと念に念を

入れて顔まで着物をきせた。かようにしてようやく

とどこお

の事滞りなく式をすましたと云う話がある。そのく

らい衣服は人間にとって大切なものである。近頃は

裸体画裸体画と云つてしきりに裸体を主張する先生

もあるがあれはあやまつている。生れてから今日にこんにち

至るまで一日も裸体になつた事がない吾輩から見

と、どうしても間違つている。裸体は希臘ギリシャ、羅馬ローマの

遺風が文芸復興時代の淫靡いんぴの風ふうに誘われてから流行はや

りだしたもので、希臘人や、羅馬人は平常ふだんから裸体

を見みな做なれていたのだから、これをもつて風教上の利

害の關係があるなどとは毫ごうも思い及ばなかつたのだ

ろうが北欧は寒い所だ。日本でさえ裸で道中がなる

ものかと云うくらいだから独逸ドイツや英吉利イギリスで裸になつ

ておれば死んでしまふ。死んでしまつてはつまらな

いから着物をきる。みんなが着物をきれば人間は服

装の動物になる。一たび服装の動物となつた後のちに

突然裸体動物に出逢えば人間とは認めない、けだもの獣と

思う。それだから歐洲人ことに北方の歐洲人は裸体

画、裸体像をもつて獣として取り扱つていいのである。猫に劣る獣と認定していいのである。美しい？

美しくても構わんから、美しい獣と見<sup>みな</sup>做せばいい

のである。こう云うと西洋婦人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼服を拝見した事はない。聞くところによると彼等は胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあらわし

てこれを礼服と称しているそうだ。怪けしからん事だ

。十四世紀頃までは彼等の出いで立たちはしかく滑稽で

はなかった、やはり普通の人間の着るものを着てお

った。それがなぜこんな下等な軽術師流かるわざしに転化して

きたかは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知ら

ぬものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史

はとにかく彼等とはかかる異様な風態をして夜間だけ



は得々たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもあると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまうのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼等の礼服なるものは一種の頓珍漢的作用によつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと言ふ事

が分る。それが口惜くやしければ日中にっちゅうでも肩と胸と腕を

出していて見るがいい。裸体信者だつてその通りだ

。それほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、つ

いでに自分も裸になつて上野公園を散歩でもするが

いい、できない？ 出来ないのではない、西洋人が

やらないから、自分もやらないのだらう。現にこの

不合理極まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ

出懸<sup>でか</sup>けるではないか。その因縁<sup>いんねん</sup>を尋ねると何にもな

い。ただ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だ

ろう。西洋人は強いから無理でも馬鹿氣<sup>ばか</sup>ていても真

似なければやり切れないのだろう。長いものには捲<sup>ま</sup>

かれろ、強いものには折れろ、重いものには圧<sup>お</sup>され

ろと、そうれろ、尽しでは氣が利<sup>き</sup>かんではないか。氣

が利<sup>き</sup>かんでも仕方がないと云うなら勘弁<sup>かんべん</sup>するから

、あまり日本人をえらい者と思つてはいけない。学問といえどもその通りだがこれは服装に關係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである

。人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史

であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。まるで化物ばけものに邂逅かいこうしたようだ。化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構わんが、それでは人間自身が大に困却おおいする事になるばかりだ。その昔むかし自然は人間を平等なるものに製造して世の中に抛ほうり出した。だからどんな人間で

あかはだか

も生れるときは必ず赤裸である。もし人間の本性が

ほんせい

平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のま

まで生長してしかるべきだろう。しかるに赤裸の一

人が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐が

かい

ない。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれ

はおれだ誰が見てもおれだと云うところが目につく

ようにしたい。それについては何か人が見てあつと

魂消る物をからだにつけて見たい。何か工夫はある

まいかと十年間考えてようやく猿股さるまたを発明してすぐ

さまこれを穿はいて、どうだ恐れ入ったろうと威張つ

てそこいらを歩いた。これが今日の車夫こんにちの先祖であ

る。単簡たんかんなる猿股を発明するのに十年の長日月を費つい

やしたのはいささか異いな感もあるが、それは今日か

ら古代に溯さかのぼって身を蒙昧もうまいの世界に置いて断定した結

論と云うもので、その当時にこれくらいの大発明は  
なかつたのである。デカルトは「余は思考す、故に  
余は存在す」という三つ子<sup>みご</sup>にでも分るような真理を  
考え出すのに十何年か懸つたそうだ。すべて考え出  
す時には骨の折れるものであるから猿股の発明に十  
年を費やしたつて車夫の智慧<sup>ちえ</sup>には出来過ぎると云わ  
ねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のき



くのは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけ

て天下の大道を我物顔に横行濶歩かつぽするのを憎らしい

と思つて負けん気の化物が六年間工夫して羽織と云

う無用の長物を発明した。すると猿股の勢力は頓とみに

衰えて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生薬屋きぐすりや

、呉服屋は皆この大発明家の末流ばつりゆうである。猿股期

、羽織期あとの後に来るのが袴期はかまきである。これは、何だ

かんしゃく

羽織の癖にと癩癩を起した化物の考案になつたもの

で、昔の武士今の官員などは皆この種属である。か

ように化物共がわれもわれもと異いを銜てらい新しんを競きそつて

、ついには燕つばめの尾にかたどつた畸形きけいまで出現したが

、退いてその由来を案ずると、何も無理矢理に、出で

たらめ

鱈目たらめに、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決し

てない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝こつてさま

ざまの新形しんがたとなつたもので、おれは手前じゃないぞ

と振れてあるく代りに被かぶっているのである。して見

るとこの心理からして一大発見が出来る。それはほ

かでもない。自然は真空を忌いむごとく、人間は平等

を嫌うと云う事だ。すでに平等を嫌ってやむを得ず

衣服を骨肉のごとくかようにつけ纏まとう今日において

、この本質の一部分たる、これ等を打ちやって、元

の空阿弥もくあみの公平時代に帰るのは狂人の沙汰である

よし狂人の名称を甘んじてても帰る事は到底出来ない。帰った連中を開明人かいめいじんの目から見れば化物である

。仮令たとい世界何億万の人口を挙あげて化物の域に引ずり

おろしてこれなら平等だろう、みんなが化物だから  
恥ずかしい事はないと安心しててもやっぱり駄目であ  
る。世界が化物になった翌日からまた化物の競争が

始まる。着物をつけて競争が出来なければ化物なり  
で競争をやる。あかはだか赤裸は赤裸でどこまでも差別を立て  
てくる。この点から見ても衣服はとうてい脱ぐ事は  
出来ないものになっている。

しかるに今吾輩ががんか眼下に見下した人間の一団体は

この脱ぐべからざる猿股も羽織も乃至袴もないしはかまことごと

とく棚の上に上げて、無遠慮にも本来の狂態を衆目しゅうも

環視くかんしの裡うちに露出して平々然へいへいぜんと談笑ほしいまを縦たてまにしている

。吾輩さつきが先刻一大奇觀と云ったのはこの事である

。吾輩は文明の諸君子のためにここに謹つつしんでその一

般を紹介するの榮を有する。

何だかごちやごちやしていて何なにから記述してい

いか分らない。化物のやる事には規律がないから秩

序立ゆぶねった証明をするのに骨が折れる。まず湯槽ゆぶねから

述べよう。湯槽だか何だか分らないが、大方湯槽と

おおかた

いうものだろうと思うばかりである。幅が三尺くら

い、長は一間半もあるか、それを二つに仕切つて一

ながさ

つには白い湯が這入っている。何でも薬湯とか号す

はい

くすりゆ

るのだそうで、石灰を溶かし込んだような色に濁つ

いしばい

ている。もつともただ濁っているのではない。膏ぎ

あぶら

つて、重た氣に濁っている。よく聞くと腐って見え

げ

るのも不思議はない、一週間に一度しか水を易えな

いのだそうだ。その隣りは普通一般の湯の由だがこ

れまたもって透明、瑩徹などとは誓って申されない

。天水桶を攪き混ぜたくらいの価値はその色の上に

おいて充分あらわれている。これからが化物の記述

だ。大分骨が折れる。天水桶の方に、突っ立ってい

る若造が二人いる。立ったまま、向い合って湯をざ



ぶざぶ腹の上へかけている。いい慰みだ。なぐさ双方共色

の黒い点において間然かんぜんするところなきまでに発達し

ている。この化物は大分だいぶん逞ましいなと見ていると

、やがて一人が手拭で胸のあたりを撫なで廻しながら

「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろ

う」と聞くと金さんは「そりや胃さ、胃て云う奴は

命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心

に忠告を加える。「だってこの左の方だぜ」た左肺さはい

の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺

だよ」「そうかな、おらあまた胃はここいらかと思

った」と今度は腰の辺を叩たたいて見せると、金さんは

「そりや疝氣せんきだあね」と云った。ところへ二十五六

の薄い髯ひげを生はやした男がどぶんと飛び込んだ。する

と、からだに付いていた石鹼シャボンが垢あかと共に浮きあがる

。鉄氣かなけのある水を透すかして見た時のようにきらきら

と光る。その隣りに頭の禿はげた爺さんが五分刈を捕とら

えて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているの

みだ。「いやこう年をとっては駄目さね。人間もや

きが廻まわつちや若い者には叶かなわないよ。しかし湯だけ

は今でも熱いのでないと心持が悪くてね」「旦那な

んか丈夫なものですぜ。そのくらい元氣がありや結

構だ」「元気もないのさ。ただ病気をしないだけさ

。人間は悪い事さえしなけりやあ百二十までは生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんです

か」「生きるとも百二十までは受け合う。御維新前ごいつしんまえ

牛込に曲淵まがりぶちと云う旗本はたもとがあつて、そこにいた下男は

百三十だったよ」「そいつは、よく生きたもんです

ね」「ああ、あんまり生き過ぎてつい自分の年を忘

れてね。百までは覚えていました。それがそれから忘れてしまいましたが云つてたよ。それでわしの知つていたのが百三十の時だったが、それで死んだんじやない。それからどうなつたか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら槽ふねから上あがる。髯ひげを生はやしている男は雲母きららのようなものを自分の廻まりに蒔まき散らしながら独ひとりでにやにや笑つていた。

。入れ代つて飛び込んで来たのは普通一般の化物と

は違つて背せ中に模様画をほり付けている。岩見重太

郎ろうが大刀だいとうを振り翳かざして蟒うわばみを退治たいじるところのようだが

、惜しい事に未だ竣功ま しゅんこうの期に達せんので、蟒はどこ

にも見えない。従つて重太郎先生いささか拍子抜け

の気味に見える。飛び込みながら「篋棒べらぼうに温ぬるいや

」と云つた。するとまた一人続いて乗り込んだのが

「こりやどうも……もう少し熱くなくっちゃあ」と

けしき

顔をしかめながら熱いのを我慢する気色とも見えた

が、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶あいさつ

をする。重太郎は「やあ」と云ったが、やがて「民

さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃん

じやんが好きだからね」「じゃんじやんばかりじや

ねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だ

からね。――どう云うもんか人に好かれねえ、――  
どう云うものだか、――どうも人が信用しねえ。職  
人てえものは、あんなもんじゃねえが」「そうよ

。民さんなんざあ腰が低いんじやねえ、頭ずが高たけえ

んだ。それだからどうも信用されねえんだね」「本

当によ。あれで一いっぱし腕があるつもりだから、――

――つまり自分の損だあな」「白銀町しろかねちょうにも古い人が亡な



くなくてね、今じや桶屋おけやの元さんと煉瓦屋れんがやの大將と

親方ぐれえな者だあな。こちとらあこうしてここで

生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たん

だか分りやしねえ」「そうよ。しかしよくあれだけ

になったよ」「うん。どう云うもんか人に好かれね

え。人が交際つきあわねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻

撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見ると

これはまた非常な大入で、湯の中に人が這入はいつてゐる

と云わんより人の中に湯が這入つてると云う方が適

当である。しかも彼等はすこぶる悠々閑々ゆうゆうかんかんたる物で

先刻さつきから這入るものはあるが出る物は一人もない

。こう這入った上に、一週間もとめておいたら湯も

よごれるはずだと感心してなおよく槽おけの中を見渡す

と、左の隅に圧おしつけられて苦沙弥先生が真ま赤っにな

ってすくんでいる。可かわい哀いそうに誰か路をあけて出し

てやればいいのに思うのに誰も動きそうにもしな

ければ、主人も出ようとする気色けしきも見せない。ただ

じつとして赤くなっているばかりである。これはご

苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯錢を活用しよう

と云う精神からして、かように赤くなるのだろうが

早く上がらんと湯氣ゆけにあがるがと主思しゅうおもいの吾輩は

窓の棚たなから少なからず心配した。すると主人の一軒

置いて隣りに浮いてる男が八の字を寄せながら「こ

れはちと利きき過ぎるようだ、どうも背中せなかの方から熱

い奴がじりじり湧わいてくる」と暗に列席の化物に同

情を求めた。「なあにこれがちようどいい加減です

。薬湯はこのくらいでないと利ききません。わたしの

国なぞではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利くんでしよう」と手拭をたた畳んで凸凹頭をかくした男が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きますよ。何でもいいてえんだからね。豪気まうぎだあね」と云ったのは瘠やせた黄瓜きゅうりのような色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少し

は丈夫そうになれそうなものだ。「薬を入れ立てよ

り、三日目か四日目がちようどいいようです。今日きょう

等は這入などり頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見る

と、膨ふくれ返った男である。これは多分垢肥あかぶとりだろう

。「飲んでも利きましようか」とどこからか知らな

いが黄色い声を出す者がある。「冷ひえた後あとなどは一

杯飲んで寝ると、奇き体たいに小便に起きないから、まあ

やつて御覧なさい」と答えたのは、どの顔から出た声か分らない。

湯槽ゆぶねの方はこれぐらいにして板間いたまを見渡すと、い

るわいるわ絵にもならないアダムがずらりと並んで

各勝手次第おのおのな姿勢で、勝手次第なところを洗つてい

る。その中にもつとも驚ろくべきのは仰向けあおむに寝て

、高い明あかり取とりを眺ながめているのと、腹這はらばいになって

溝の中を覗き込んでゐる両アダムである。これは

よほど閑なアダムと見える。坊主が石壁を向いてし

やがんでゐると後ろから、小坊主がしきりに肩を叩

いてゐる。これは師弟の關係上三介の代理を務める

のであろう。本当の三介もいる。風邪を引いたと見

えて、このあついのにちゃんちゃんを着て、小判形

の桶おけからざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を



見ると親指の股に呉紹ごしょうの垢擦あかすりを挟はさんでいる。こち

こおけ

らの方では小桶を慾張こおけって三つ抱え込んだ男が、隣

シャボン

りの人に石鹼シャボンを使え使えと云いながらしきりに長談

議をしている。何だろうと聞いて見るとこんな事を

言っていた。「鉄砲は外国から渡ったもんだね。昔

は斬り合いばかりさ。外国は卑怯だからね、それで

あんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえよう

だ、やっぱり外国のようだ。和唐内わとうないの時にや無かつ

たね。和唐内はやはり清和源氏さ。なんでも義経が

蝦夷えぞから満洲へ渡った時に、蝦夷の男で大変学がくので

きる人がくっ付いて行つたてえ話しだね。それでそ

の義経のむすこが大明たいみんを攻めたんだが大明じゃ困る

から、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借かし

てくれろと云うと、三代様さんだいさまがそいつを留めておいて

歸さねえ。――何とか云ったつけ。――何でも何と

か云う使だ。――それでその使を二年とめておいて

しまいじょうろに長崎で女郎を見せたんだがね。その女郎に

出来た子が和唐内さ。それから国へ歸つて見ると大

明は国賊に亡ぼされていた。……」何を云うのかさ

っぱり分らない。その後ろうしに二十五六の陰気な顔を

した男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりに

たでている。腫物はれものか何かで苦しんでいると見える

。その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事をべらべら喋舌しゃべつてるのはこの近所の書生だろう

。そのまた次に妙な背中せなかが見える。尻の中から寒竹かんちく

を押し込んだように背骨せぼねの節が歴々ありありと出ている。そ

うしてその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ

行儀よく並んでいる。その十六むさしが赤く爛ただれて

まわり  
周囲に膿うみをもっているのもある。こう順々に書いて

くると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際てぎわにはその

一斑いっぽんさえ形容する事が出来ん。これは厄介な事をや

り始めた者だと少々辟易へきえきしていると入口の方に浅黄あさぎ

木綿もめんの着物をきた七十ばかりの坊主がぬつと見われあら

た。坊主は恭しくこれらの裸体の化物に一礼して「

へい、どなた様も、毎日相変らずありがとう存じま

す。今日は少々御寒うございますから、どうぞ御緩ごゆつ

くり——どうぞ白い湯へ出たり這入はいつたりして、ゆ

るりと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どう

か湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立

てた。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「

あいきよう

愛嬌ものだね。あれでなくては商買しょうばいは出来ないよ

おい

「と大に爺さんを激賞した。吾輩は突然この異いな爺

さんに逢つてちよつと驚ろいたからこつちの記述は  
そのままにして、しばらく爺さんを専門に觀察する  
事にした。爺さんはやがて今上り<sup>あが</sup>立て<sup>た</sup>の四つばかり  
の男の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手  
を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見  
て大變だと思つたか、わーつと悲鳴を揚<sup>あ</sup>げてなき出  
す。爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御泣き

か、なに？　爺さんが恐いこわ？　いや、これはこれは

」と感嘆した。仕方がないものだからたちまち機鋒きほう

を転じて、小供の親に向った。「や、これは源さん

。今日は少し寒いな。ゆうべ、近江屋おうみやへ這入った泥

棒は何と云う馬鹿な奴じやの。あの戸の潜くぐりの所を

四角に切り破つての。そうしてお前の。何も取らず

に行いんだげな。御巡りおまわさんか夜番でも見えたもので



あろう」と大に泥棒の無謀を憫笑びんしょうしたがまた一人を  
捉おらまえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若い  
から、あまりお感じにならんかの」と老人だけにた  
だ一人寒がっている。

しばらくは爺さんの方へ気を取られて他の化物の  
事は全く忘れていたのみならず、苦しそうにすくん  
でいた主人さえ記憶の中うちから消え去った時突然流し

と板の間の間で大きな声を出すものがある。見る

まぎ

と紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の凶抜け

て大いなるのと、その濁って聴き苦しいのは今日に

始まった事ではないが場所が場所だけに吾輩は少か

らず驚ろいた。これは正まさしく熱湯うちの中に長時間のあ

つか

ぎやくじよう

いだ我慢をして浸つかっておったため逆上したに相違な

とっさ

いと咄嗟とっさの際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に病

気の所為せいなら咎とがむる事もないが、彼は逆上しながら

も充分本心を有しているに相違ない事は、何のため

にこの法外の胴間どうまごえ声を出したかを話せばすぐわかる

。彼は取るにも足らぬ生意氣書生なまいきを相手に大人氣おとなげも

ない喧嘩を始めたのである。「もつと下がれ、おれ

の小桶に湯が這入はいっていかん」と怒鳴るのは無論主

人である。物は見ようでもなるものだから

、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要

はない。万人のうちに一人くらいは高山彦九郎が山

たかやまひこくろう

賊を叱しつしたようだけに解釈してくれるかも知れ

ん。当人自身もそのつもりでやった芝居かも知らん

が、相手が山賊をもつて自みらおらん以上は予期する

みずか

結果は出て来ないに極きまっている。書生は後うしろを振り

返って「僕はもとからここにいたのです」とおとな

しく答えた。これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならんので

、その態度と云い言語と云い、山賊として罵<sup>の</sup>り返す

べきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主

人でも分っているはずだ。しかし主人の怒号は書生

の席そのものが不平なのではない、先刻<sup>さつき</sup>からこの両

人は少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利<sup>き</sup>いた風

の事ばかり併ならべていたので、始終それを聞かされた

主人は、全くこの点に立腹したものと見える。だか

ら先方でおとなしい挨拶をしても黙って板の間へ上

がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶おけへ汚な

い水をぴちやぴちや跳はねかす奴があるか」と喝かつし去

った。吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていたから

、この時心中にはちよつと快哉かいさいを呼んだが、学校教

員たる主人の言動としては穩かならぬ事と思つた

おだや

。元来主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殻

がら

見たようにかさかさしてしかもいやに硬い。むかし

ハンニバルがアルプス山を越える時に、路の真中に

こ

當つて大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上

の不便邪魔をする。そこでハンニバルはこの大きな

岩へ醋すをかけて火を焚たいて、柔かにしておいて、そ

れから鋸のこぎりでこの大岩を蒲鉾かまぼこのように切つて滞りなく

通行をしたそうだ。主人のごとくこんな利目ききめのある

薬湯へ煮うだるほど這入はいつても少しも機能のない男は

やはり醋をかけて火炙ひあぶりにするに限ると思う。しか

らずんば、こんな書生が何百人出て来て、何十年か

かつたつて主人の頑固がんこは癒なおりつこない。この湯槽ゆぶねに

浮いているもの、この流しにごろごろしているもの



は文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体であるから、無論常規常道をもつて律する訳にはいかん。何をしたって構わない。肺の所に胃が陣取つて、和唐内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよからう。しかし一たび流しを出て板の間に上がれば、もう化物ではない。普通の人類の生息する娑せいそく婆やばへ出たのだ、文明に必要なる着物をきるのだ。従

つて人間らしい行動をとらなければならんはずである。今主人が踏んでいるところは敷居である。流し

と板の間の境にある敷居の上であつて、当人はこれ

からかんげんゆしよく歡言愉色、えんてんかつだつ円転滑脱の世界に逆戻りをしよう

と云う間際まぎわである。その間際ですらかくのごとく頑固がんこ

であるなら、この頑固は本人にとって牢ろうとして抜く

べからざる病氣に相違ない。病氣なら容易に矯正きやうせいす

る事は出来まい。この病気を癒す方法なおは愚考による

とただ一つある。校長に依頼して免職して貰う事すなわ即

ちこれなり。免職になれば融通の利きかぬ主人の事だ

からきつと路頭に迷うに極きまつてる。路頭に迷う結果

はのたれ死にをしなければならぬ。換言すると免

職は主人にとって死の遠因になるのである。主人は

好んで病気をして喜こんでいるけれど、死ぬのは大だい

嫌きらである。死なない程度において病氣と云う一種の

贅ぜいたく沢がしていたのである。それだからそんなに病

氣をしていると殺すぞと嚇おどかせば臆病なる主人の事

だからびりびりと悸ふるえ上がるに相違ない。この悸え

上がる時に病氣は奇麗に落ちるだろうと思う。それ

でも落ちなければそれまでの事さ。

いかに馬鹿でも病氣でも主人に変わりはない。一飯いっばん

君恩を重んずと云う詩人もある事だから猫だつて主人の身の上を思わない事はあるまい。気の毒だと云う念が胸一杯になつたため、ついそちらに気が取られて、流しの方の觀察を怠<sup>おこ</sup>たつていると、突然白い湯槽<sup>ゆぶね</sup>の方面に向つて口々に罵<sup>ののし</sup>る声が聞える。ここに

も喧嘩が起つたのかと振り向くと、狭い柘榴口<sup>ざくろぐち</sup>に一寸<sup>すん</sup>の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のあ

る脛と、毛のない股と入り乱れて動いている。折か

はつあき

ら初秋の日は暮るるになんなんとして流しの上は天

井まで一面の湯気が立て籠める。こかの化物の犇ひしめく様さま

がその間から朦朧もうろうと見える。熱い熱いと云う声が吾

輩の耳を貫ぬつらいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ

合う。その声には黄なものも、青いのも、赤いのも

、黒いのもあるが互に畳かさなりかかって一種名状すべ

からざる音響を浴場内に漲みなぎらす。ただ混雑と迷乱と

を形容するに適した声と云うのみで、ほかには何の

役にも立たない声である。吾輩は茫然ぼうぜんとしてこの光

景に魅入みいられたばかり立ちすくんでいた。やがてわ

ーわーと云う声が混乱の極度に達して、これよりは

もう一步も進めぬと云う点まで張り詰められた時

、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群むれの中か

ら一大長漢がぬつと立ち上がった。彼の身の丈み たけを見

ると他の先生方ほかよりはたしかに三寸くらいは高い

。のみならず顔から髯ひげが生はえているのか髯の中に顔

が同居しているのか分らない赤つらを反そり返して

、日盛りに破れ鐘かねをつくような声を出して「うめろ

うめろ、熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかり

は、かの紛々ふんぷんと纏もつれ合う群衆の上に高く傑出して



、その瞬間には浴場全体がこの男一人になったと思  
わるるほどである。超人だ。ニーチェのいわゆる超

人だ。魔中の大王だ。化物の頭梁だ。とうりょう。と思つて見て

いると湯槽ゆぶねの後ろうしでおいと答えたものがある。お

やとまたもそちらに眸ひとみをそらすと、暗憚あんたんとして物色

も出来ぬ中に、例のちゃんちゃん姿の三介さんすけが砕けよ

と一塊ひとかたまりの石炭を竈かまどの中に投げ入れるのが見えた

。竈の蓋ふたをくぐつて、この塊りがぱちぱちと鳴ると

きに、三介の半面がぱつと明るくなる。同時に三介

の後ろうしにある煉瓦れんがの壁が暗やみを通して燃えるごとく光

った。吾輩は少々物凄ものすごくなつたから早々そうそう窓から飛び

下りて家いえに帰る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ

、猿股を脱ぎ、袴はかまを脱いで平等になろうと力つとめる赤

裸々の中には、また赤裸々の豪傑が出て来て他の群

小を圧倒してしまふ。平等はいくらはだかになつた  
つて得られるものではない。

歸つて見ると天下は太平なもので、主人は湯上が

りの顔をテラテラ光らして晚餐ばんさんを食っている。吾輩

が椽側えんがわから上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今

頃どこをあるいているんだらうと云つた。膳の上を

見ると、ぜに銭のない癖に二三品御菜おかずをならべている

。そのうちに肴さかなの焼いたのが一疋びきある。これは何と

称する肴か知らんが、何でも昨日きのうあたり御台場近辺おだいば

でやられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明し

ておいたが、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られ

たりしてはたまらん。多病にして残喘ざんぜんを保つ方たもがよ

ほど結構だ。こう考えて膳そばの傍そばに坐すわつて、隙すきがあつ

たら何か頂戴しようと、見るごとく見ざるごとく装よそお

っていた。こんな装い方を知らないものはとうてい

うまい肴は食えないと諦めなければいけない。あきら主人

は肴をちよつと突つついたが、うまくないと云う顔

付をして箸はしを置いた。正面に控ひかえたる妻君はこれま

た無言のまま箸の上下じやうげに運動する様子、主人の両顎りやうがく

の離合開闔りごうかいこうの具合を熱心に研究している。

「おい、その猫の頭をちよつと撲ぶって見ろ」と主人

は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちよつと撲って見ろ」

こうですかと細君は平手ひらてで吾輩の頭をちよつと敲たた

く。痛くも何ともない。

「鳴かんじやないか」

「ええ」

「もう一返へんやって見ろ」

「何返やったって同じ事じゃありませんか」と細君

また平手でまぽかと参まいる。やはり何ともないから、じ

っとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深

き吾輩には頓とんと了解し難い。これが了解出来れば

、どうかこうか方法もあろうがただ撲って見ろだか

ら、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人

は二度まで思い通りにならんで、少々焦れ気味で

「おい、ちよつと鳴くようにぶって見ろ」と云つた

。

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんです

か」と問いながら、またぴしやりとおいでになつた

。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえ

やれば主人を満足させる事は出来るのだ。主人はか



くのごとく愚物ぐぶつだから厭いやになる。鳴かせるためなら

、ためと早く云えば二返も三返も余計な手数てすうはしな

くてもすむし、吾輩も一度で放免になる事を二度も

三度も繰り返えされる必要はないのだ。ただ打ぶって

見ろと云う命令は、打つ事それ自身を目的とする場

合のほかには用うべきものでない。打つのは向うの事

、鳴くのはこっちの事だ。鳴く事を始めから予期し

て懸つて、ただ打つと云う命令のうちに、こつちの  
随意たるべき鳴く事さえ含まつてるように考えるの  
は失敬千万だ。他人の人格を重んぜんと云うものだ  
。猫を馬鹿にしている。主人の蛇蝎だかつのごとく嫌う金  
田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもつて誇る主  
人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のところ  
主人はこれほどけちな男ではないのである。だから

主人のこの命令は狡猾こうかつの極きよくに出いでたのではない。つ

まり智慧ちえの足りないところから湧わいた子子ぼうふらのような

ものと思惟しする。飯を食えば腹が張るに極きまってい

る。切れば血が出るに極きっている。殺せば死ぬに極

まっている。それだから打ぶてば鳴くに極きっていると

速断をやったんだろう。しかしそれはお気の毒だが

少し論理に合わない。その格で行くと川へ落ちれば

必ず死ぬ事になる。天麩羅てんぷらを食えば必ず下痢げりする事

になる。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書

物を読めば必ずえらくなる事になる。必ずそうなつ

ては少し困る人が出来てくる。打てば必ずなかなかけ

ればならんとなると吾輩は迷惑である。目白の時の

鐘と同一に見倣みなされては猫と生れた甲斐かいがない。ま

ず腹の中でこれだけ主人を凹へこましておいて、しかる

後にやーと注文通り鳴いてやった。

すると主人は細君に向つて「今鳴いた、にやあと云う声は感投詞か、副詞か何だか知つてるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない

。実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上がまださめな  
いたためだろうと思つたくらいだ。元来この主人は近きん

所合壁有名な変人で現にある人はたしかに神経病だ  
とまで断言したくらいである。ところが主人の自信  
はえらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の  
奴が神経病だと頑張がんばっている。近辺のものが主人を  
犬々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だと  
か号して彼等を豚々ぶたぶたと呼ぶ。実際主人はどこまでも  
公平を維持するつもりらしい。困ったものだ。こう

云う男だからこんな奇問を細君にむか対つて呈出するの

あさめしまえ

も、主人に取つては朝食前の小事件かも知れないが

、聞く方から云わせるとちよつと神経病に近い人の

云いそうな事だ。だから細君は煙にけむ捲まかれた気味で

何とも云わない。吾輩は無論何とも答えようがない

。すると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚<sup>びっくり</sup>して「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいい  
じゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配して  
いる大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ



。だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありませんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ

。比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分ったんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の肴さかな

をむしやむしや食う。ついでにその隣にある豚と芋いも

のにころばしを食う。「これは豚だな」「ええ豚で

ござんす」「ふん」と大軽蔑だいけいべつの調子をもつて飲み込

んだ。「酒をもう一杯飲もう」と杯さかずきを出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう大分だいぶん赤くなつて

いらつしやいますよ」

「飲むとも——御前世界で一番長い字を知ってるか

」

「ええ、前のさき関白太政大臣でしょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字って横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういいでしょう、これ

で御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「A r c h a i o m e l e s i d o n o p h r u n

i c h e r a t a と云う字だ」

「出鱈目でたらめでしょう」

「出鱈目なものか、ギリシヤご希臘語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴<sup>つづ</sup>りだけ知ってるんだ。長く書くとは六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云ってるところがすこぶる奇観である。もつとも今夜に限って酒を無暗<sup>むやみ</sup>にのむ。平生なら猪口<sup>ちよこ</sup>に二杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。二杯でも随分赤くなる

ところを倍飲んだのだから顔が焼火箸やけひばしのようにほて

って、さも苦しそうだ。それでもまだやめない。「  
もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになったら、いいでしょう。苦しいば  
かりですわ」と苦々にがにがしい顔をする。

「なに苦しくつてもこれから少し稽古するんだ。大おお

町桂月まちけいげつが飲めと云った」

「桂月って何です」さすがの桂月も細君に逢っては  
一文の価値いちもんもない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うの  
だからいいに極きまっているさ」

「馬鹿をおっしやい。桂月だって、梅月だって、苦  
しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅

行をしろといった」

「なおわるいじやありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくつても金さえあればやるかも知れない」

「なくって仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められ



「ちやあ大變ですよ」

「大變だと云うならよしてやるから、その代りもう

おっと

少し夫を大事にして、そうして晩に、もつと御馳走を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道樂は追つて金が這はい入り

次第やる事にして、今夜はこれでやめよう」と飯茶

椀を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。吾輩はその夜豚肉三片よみきれと塩焼の頭を頂戴した。

## 八

垣巡りかきめぐと云う運動いを説明した時に、主人の庭を結ゆい繞めぐらしてある竹垣の事をちよつと述べたつもりで

あるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣みなみとなりの次郎じろ

ちゃんと思つては誤解である。家賃は安いがそ

こは苦沙弥くしやみ先生である。与よつちゃんや次郎ちゃんな

どと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片ぺら

な垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結ん

でおらぬ。この垣の外は五六間の空地あきちであつて、そ

の尽くるところに檜ひのきが蓊然こんもりと五六本併ならんでいる。椽えん

側がわから拝見すると、向うは茂った森で、ここに往む

先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月じつげつを

送る江湖こうこの処士しよしであるかのごとき感がある。但ただし檜

の枝は吹聴ふいちようするごとく密生しておらんの、その間あいだ

から群鶴館ぐんかくかんという、名前だけ立派な安下宿の安屋根

が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのに

はよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下

きよ

がりようくつ

宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥竜窟くらいな  
価値はある。名前に税はかからんから御互にえらそ  
うな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間  
の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それか  
ら、たちまち鉤かぎの手に屈曲して、臥竜窟の北面を取  
り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来な  
ら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張つ

てもいいくらいに家の二側ふたがわを包んでいるのだが、臥がり

ようくつ

れいびよう

竜窟の主人は無論窟内の靈猫たる吾輩すらこのあき

地には手こずっている。南側に檜ひのきが幅を利きかしてい

るごとく、北側には桐きりの木が七八本行列している

。もう周圍一尺くらいにのびているから下駄屋さえ

連れてくればいい価ねになるんだが、借家しゃくやの悲しさに

は、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対し

ても気の毒である。せんだって学校の小使が来て枝を一本切って行つたが、そのつぎに来た時は新らしい桐の俎まないたげ下駄はを穿はいて、この間の枝でこしらえましたと、聞きもせんのに吹聴ふいちようしていた。ずるい奴だ

。桐はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない桐である。玉を抱いだいて罪ありと云う古語があるそうだが、これは桐を生はやして銭ぜになしと云つて

もしかるべきもので、いわゆる宝の持ち腐れである

。愚<sup>ぐ</sup>なるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主<sup>やぬし</sup>

の伝兵衛である。いないかな、いないかな、下駄屋

はいないかなと桐の方で催促しているのに知らん面<sup>かお</sup>

をして屋賃<sup>やちん</sup>ばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵

衛<sup>うらみ</sup>に恨もないから彼の悪口<sup>あっこう</sup>をこのくらいにして、本

題に戻ってこの空地<sup>あきち</sup>が騒動の種であると云う珍譚<sup>ちんだん</sup>を



つかまつ

紹介仕るが、決して主人にいつてはいけない。これ

ぎりの話しである。そもそもこの空地に関して第一

の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い

、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地で

ある。あると云うと嘘をつくようでもよろしくない

。実を云うとあつたのである。しかし話しは過去へ

さかのぼ

溯らんと原因が分からない。原因が分からないと

、医者でも処方しよほうに迷惑する。だからここへ引き越し

て来た当時からゆつくりと話し始める。吹き通しも

夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用心だつ

て金のないところに盗難のあるはずはない。だから

主人の家に、あらゆる塀へい、垣、乃至ないしは乱杭らんぐい、逆茂木さかもぎ

の類は全く不要である。しかしながらこれは空地の

向うに住居すまいする人間もしくは動物の種類いかん如何によつ

て決せらるる問題であらうと思う。従つてこの問題を決するためには勢い向う側に陣取っている君子の性質を明かにせんければならん。人間だか動物だか分らない先に君子と称するのははなはだ早計のようではあるが大抵君子で間違はない。りようじよう梁上の君子などと云つて泥棒さえ君子と云う世の中である。但しこただ

の場合における君子は決して警察の厄介になるよう

な君子ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこなした者と見えて沢山いる。うじやうじやいる

。落雲館らくうんかんと称する私立の中学校――八百の君子をい

やが上に君子に養成するため毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思うと、それがそもそもの間違になる

。その信用すべからざる事は群鶴館ぐんかくかんに鶴の下りざる

ごとく、臥竜窟に猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のごとき氣違のある事を知った以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないと言ふ事がわかる訳だ。それがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿りとま來て見るがいい。

前申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空

地に垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごと

きりばたけ

はい

く、のそのそと桐畠に這入り込んできて、話をする

ささ

ねころ

弁当を食う、笹の上に寝転ぶ——いろいろの事を

やったものだ。それから**は**弁当の死骸**すなわ**ち竹の皮

ふるぞうり

古新聞、あるいは古草履、古下駄、ふると云う名

のつくものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる

主人は存外平気に構えて、別段抗議も申し込まずに

打ち過ぎたのは、知らなかつたのか、知つても咎め

とが

んつもりであつたのか分らない。ところが彼等諸君

子は学校で教育を受くるに従つて、だんだん君子ら

しくなつたものと見えて、次第に北側から南側の方

さんしょく

面へ向けて蚕食を企だてて來た。蚕食と云う語が君

子に不似合ならやめてもよろしい。但しほかに言葉

ただ

がないのである。彼等は水草を追うて居を變ずる沙

すいそう

さ

漠<sup>ばく</sup>の住民のごとく、桐<sup>きり</sup>の木を去<sup>さ</sup>つて檜<sup>ひのき</sup>の方に進んで

来た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆

なる君子でなければこれほどの行動は取れんはずで

ある。一両日<sup>のち</sup>の後彼等の大胆はさらに一層の大を加

えて大々胆<sup>だいだいたん</sup>となつた。教育の結果ほど恐<sup>おそ</sup>しいものは

ない。彼等は単に座敷の正面に逼<sup>せま</sup>るのみならず、こ

の正面において歌をうたいだした。何と云う歌か忘



れてしまつたが、決して三十一文字の類ではない

みそひともし  
たぐい  
かつぱつ

、もつと活澆で、もつと俗耳に入り易い歌であつた

ぞくじ  
やす

。驚ろいたのは主人ばかりではない、吾輩までも彼

たんぷく

等君子の才芸に嘆服して覚えず耳を傾けたくらいで

ある。しかし読者もご案内であろうが、嘆服と云う

事と邪魔と云う事は時として両立する場合がある

はか

。この両者がこの際図らずも合して一となつたのは

、今から考えて見ても返す返す残念である。主人も残念であつたろうが、やむを得ず書斎から飛び出して行つて、ここは君等の這<sup>はい</sup>入る所ではない、出給えと云つて、二三度追い出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞く訳がない。追い出されればすぐ這入る。這入れば活潑なる歌をうたう。高<sup>こうせい</sup>声に談話をする。しかも君子

の談話だから一風違つて、おめえだの知らねえのと

いっぽう

云う。そんな言葉は御維新前ごいつしんまえは折助おりすけと雲助くもすけと三助さんすけの

専門的知識に属していたそうだが、二十世紀になつ

てから教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるそうだ

。一般から軽蔑けいべつせられたる運動が、かくのごとく今こん

にち

日歓迎せらるるようになったのと同じの現象だと説

明した人がある。主人はまた書齋から飛び出してこ

の君子流の言葉にもつとも堪能かんのうなる一人を捉つらまえて

、なぜここへ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品な言葉を忘れて「こ

こは学校の植物園かと思いました」とすこぶる下品な言葉で答えた。主人は将来を戒いましめて放してやった

。放してやるのは亀の子のようでおかしいが、実際

彼は君子の袖そでを捉とらえて談判したのである。このくら

いやかましく云つたらもうよかろうと主人は思つていたそうだ。ところが實際は女媧氏じよかしの時代から予期と違ふもので、主人はまた失敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるから御客かと思うと桐畠の方で笑う声がする。形勢はますます不穩である。教育の功果はいよいよ顕著になってくる。気の毒な主人はこいつは手に

合わんと、それから書齋へ立て籠こもつて、恭うやうやしく一書

を落雲館校長に奉つて、少々御取締をと哀願した

。校長も鄭重ていちようなる返書を主人に送つて、垣をするか

ら待つてくれと云つた。しばらくすると二三人の職

人が来て半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の

境に、高さ三尺ばかりの四つ目垣が出来上がった

。これでようよう安心だと主人は喜こんだ。主人は

愚物である。このくらいの事で君子の挙動の變化する訳がない。

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩のような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかって遊ぶくらいだから、落雲館の君子が、氣の利きかない苦沙弥先生にからかうのは至極しごくもつともなところで

これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけ

であろう。からかうと云う心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかわれる当人が平気ですましていてはならん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強くなくてはいかん。この間主人が動物園から帰って来てしきりに感心して話した事がある。聞いて見ると駱駝らくだと小犬の喧嘩を見たのだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻



転して吠<sup>ほ</sup>え立てると、駱駝は何の気もつかずに、依

然として背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>へ瘤<sup>こぶ</sup>をこしらえて突っ立ったままであ

るそうだ。いくら吠えても狂っても相手にせんので

、しまいには犬も愛<sup>あい</sup>想<sup>いそ</sup>をつかしてやめる、実に駱駝

は無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例

である。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝

と来ては成立しない。さればと云って獅<sup>し</sup>子<sup>し</sup>や虎<sup>とら</sup>のよ

うに先方が強過ぎてても者にならん。からかいかける  
や否や八つ裂きにされてしまふ。からかうと齒をむ  
き出して怒る、怒る事は怒るが、こつちをどうする  
事も出来ないと言ふ安心のある時に愉快は非常に多  
いものである。なぜこんな事が面白いと言ふとその  
理由はいろいろある。まずひまつぶしに適している  
。退屈な時には髯ひげの数さえ勘定して見たくなる者だ

。昔<sup>むか</sup>し獄に投ぜられた囚人の一人は無聊<sup>ぶりよう</sup>のあまり

、房<sup>へや</sup>の壁に三角形を重ねて画<sup>か</sup>いてその日をくらしした

と云う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にく

いものはない、何か活気を刺激する事件がないと生  
きているのがつらいものだ。から、かうと云うのもつ

まりこの刺激を作つて遊ぶ一種の娯楽である。但<sup>ただ</sup>し

多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかし

なくては刺激にならんから、昔しからからかうと云う娯樂に耽<sup>ふけ</sup>るものは人の氣を知らない馬鹿大名のよ  
うな退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は  
考うるに暇<sup>いとま</sup>なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活氣  
の使い道に窮する少年かに限っている。次には自己  
の優勢な事を實地に証明するものにはもつとも簡便  
な方法である。人を殺したり、人を傷<sup>きず</sup>けたり、また

は人を陥<sup>おとし</sup>れたりしても自己の優勢な事は証明出来る

訳であるが、これらはむしろ殺したり、傷けたり

、陥れたりするのが目的のときによるべき手段で

、自己の優勢なる事はこの手段を遂行<sup>すいこう</sup>した後に必然<sup>のち</sup>

の結果として起る現象に過ぎん。だから一方には自

分の勢力が示したくって、しかもそんなに人に害を

与えたくないと言ふ場合には、からかうのが一番御<sup>お</sup>

恰好である。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事実の上に証拠だてられない。事実になつて出て来ないと、頭のうちで安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己を恃たのむものである。否、恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だと云う事を、人に対して実地に応用して見ないと気がすま

ない。しかも理窟りくつのわからない俗物や、あまり自己が恃みになりそうもなくて落ちつきのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする

。柔術使が時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一返ぺんでいいから出逢って見たい、素人しろうとでも構わないから抛なげて見たいと至極危険な了見いだを抱

いて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はいろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致す。聞きたければ鰹節かつぶしの一折ひとりおりも持って習いにくるがいい、いつでも教えてやる。以上に説くところを参考して推論して見ると、吾輩かんがえの考では奥山おくやまの猿さると、学校の教師がからかうには一番手頃である。学校の教師をもつて、奥山の猿に比較しては勿体もったい



ない。――猿に対して勿体ないのではない、教師に  
対して勿体ないのである。しかしよく似ているから  
仕方がない、御承知の通り奥山の猿は鎖くさりで繋つながれて  
いる。いくら齒をむき出しても、きやつきやつ騒い  
でも引き搔かかれる氣遣きづかいはない。教師は鎖で繋がれて  
おらない代りに月給で縛られている。いくらからか  
つたって大丈夫、辞職して生徒をぶんぐる事はな

い。辞職をする勇氣のあるようなものなら最初から

教師などをして生徒の御守りおもは勤めないはずである

。主人は教師である。落雲館の教師ではないが、や

はり教師に相違ない。からかうには至極しごく適當で、至

あんちよく

極安直で、至極無事な男である。落雲館の生徒は少

年である。からかう事は自己の鼻を高くする所以ゆえんで

、教育の功果として至当に要求してしかるべき権利

とまで心得ている。のみならずから、かいでもしな  
れば、活気に充みちた五体と頭脳を、いかに使用して  
しかるべきか十分じつぶんの休暇中持もてあまして困っている  
連中である。これらの条件が備われれば主人は自おのから  
から、か、わ、れ、生徒は自からから、か、う、誰から云わし  
ても毫ごうも無理のないところである。それを怒おこる主人  
は野暮やぼの極、間拔の骨頂でしょう。これから落雲館

の生徒がいかにか主人にからかったか、これに対して主人がいかにか野暮を極めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承知であらう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたって、こしらえなくたって同じ事だ。然し落

雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が養成する君子が潜くぐられんために、わざわざ職人を入れて結ゆい繞めぐらせたのである。なるほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には潜くぐれそうにない。この竹をもつて組み合せたる四寸角の穴をぬける事は、清国しんこくの奇術師張世尊ちようせいそんその人といえどもむずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能を

つくしているに相違ない。主人がその出来上つたのを見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない

。しかし主人の論理には大なる穴がある。おおいこの垣よ

りも大いなる穴がある。どんしゅう吞舟の魚をも洩もらすべき大

穴がある。彼は垣は踰こゆべきものにあらずとの仮定

から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上

はいかに粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界

線の区域さえ判然すれば決して乱入される氣遣はな  
いと仮定したのである。次に彼はその仮定をしばら  
く打ち崩<sup>くず</sup>して、よし乱入する者があつても大丈夫と  
論断したのである。四つ目垣の穴を潜<sup>くぐ</sup>り得る事は  
、いかなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はな  
いから乱入の虞<sup>おそれ</sup>は決してない<sup>そくてい</sup>と速定してしまつたの  
である。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の

目をぬけてくる事はしまい、したくても出来まいが、  
乗り<sup>こ</sup>踰える事、飛び越える事は何の事もない。か  
えって運動になつて面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等  
は北側の空地へばかりぽかりと飛び込む。但し座敷<sup>ただ</sup>

の正面までは深入りをしない。もし追ひ懸けられた  
ら逃げるのに、少々ひまがいるから、<sup>あらかじめ</sup>予め逃げる時



間を勘定に入れて、捕えらるる危険のない所で遊ゆうよく弋

をしている。彼等が何をしているか東の離れにいる

主人には無論目に入いらない。北側の空地あきちに彼等が遊

弋している状態は、木戸をあけて反対の方角から鉤かぎ

の手に曲つて見るか、または後架こうかの窓から垣根越し

に眺ながめるよりほかに仕方がない。窓から眺める時は

どこに何がいるか、一目明瞭に見渡す事が出来るが

よしや敵を幾人見出したからと云つて捕える訳に

いくたり

は行かぬ。ただ窓の格子こうしの中から叱りつけるばかり

である。もし木戸から迂回うかいして敵地を突こうとすれ

ば、足音を聞きつけて、ぽかりぽかりと捉つかまる前に

向う側へ下りてしまふ。膂おつとせい膂がひなたぼっこをし

ているところへ密猟船が向つたような者だ。主人は

無論後架で張り番をしている訳ではない。と云つて

木戸を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。  
もしそんな事をやる日には教師を辞職して、その  
方専門にならなければ追いつかない。主人方の不利  
を云うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見えない  
のと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない事で  
ある。この不利を看破したる敵はこんな軍略を講じ  
た。主人が書斎に立て籠こもっていると探偵した時には

、なるべく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主人をひやかすような事を聞こえよがしに述べる。しかもその声の出所を極めて不分明にする。ちよつと聞くと垣の内で騒いでいるのか、あるいは向う側であばれているのか判定しにくいようにする。

もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が

後架へ——吾輩は最前からしきりに後架後架ときた  
ない字を使用するのを別段の光栄とも思っておらん  
、実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上に  
おいて必要であるからやむを得ない。——即ち主人

すなわ

が後架へまかり越したと見て取るときは、必ず桐の

木の附近を徘徊はいかいしてわざと主人の眼につくようにす

る。主人がもし後架から四隣しりんに響く大音を揚げて怒

鳴りつけければ敵は周章あわてる気色けしきもなく悠然ゆうぜんと根拠地

へ引きあげる。この軍略を用いられると主人ははな

はだ困却する。たしかに這はい入いっているなと思つてス

テツキを持って出懸けると寂然せきぜんとして誰もいない

。いないかと思つて窓からのぞくと必ず一二人這入

っている。主人は裏へ廻つて見たり、後架から覗のぞい

て見たり、後架から覗いて見たり、裏へ廻つて見た

り、何度言つても同じ事だが、何度云つても同じ事を繰り返している。奔命ほんめいに疲れるとはこの事である

。教師が職業であるか、戦争が本務であるかちよつ

と分らないくらい逆上ぎやくじょうして来た。この逆上の頂点に

達した時に下しもの事件が起つたのである。

事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは読んで字

のごとく逆さかさのぼに上るのである、この点に關しては

ゲーレンもパラセルサスも旧弊なる扁鵲へんじやくも異議いぎを唱とな

うる者は一人もない。ただどこへ逆さかさのぼに上るかが

問題である。また何が逆かささに上るかが議論のある

ところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の

体内には四種の液が循環しておつたそうだ。第一に

怒液どえきと云う奴やつがある。これが逆かささに上ると怒り出おこ

す。第二に鈍液どんえきと名づくるのがある。これが逆かさ



に上ると神経が鈍にぶくなる。次には憂液ゆうえき、これは人間

を陰気にする。最後が血液けつえき、これは四肢ししを壮さかんにす

る。その後ご人文が進むに従って鈍液、怒液、憂液は

いつの間まにかなくなって、現今に至っては血液だけ

が昔のように循環していると云う話しだ。だからも

し逆上する者があらば血液よりほかにはあるまいと

思われる。しかるにこの血液の分量は個人によって

ちやんと極きまっている。性分によつて多少の増減は

あるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合である

。だによつて、この五升五合が逆かさに上ると、上

つたところだけは熾さかんに活動するが、その他の局部

は欠乏を感じて冷たくなる。ちやうど交番焼打の当

時巡査がことごとく警察署へ集つて、町内には一人

もなくなつたようなものだ。あれも医学上から診断

をすると警察の逆上と云う者である。でこの逆上を

癒<sup>い</sup>やすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に

分配しなければならん。そうするには逆かさに上つ

た奴を下へ降<sup>おろ</sup>さなくてはならん。その方にはいろいろ

ある。今は故人となられたが主人の先君などは濡<sup>ぬ</sup>

れ手拭<sup>てぬぐい</sup>を頭にあてて炬燵<sup>こたつ</sup>にあたつておられたそうだ

。頭寒足熱は延命息災の徴と傷寒論<sup>しょうかんろん</sup>にも出ている通

り、濡れ手拭は長寿法において一日も欠くべからざる者である。それでなければ坊主の慣用する手段を試みるがよい。いっしょふじゆう一所不住の沙門しゃもん雲水行脚うんすいあんぎゃの衲僧のうそうは必ず樹下石上を宿やどとすとある。樹下石上とは難行苦行のためではない。全くのぼせ、を下さげるために六祖ろくそが米を舂つきながら考え出した秘法である。試みに石の上上に坐まつてご覧、尻しつぽんが冷えるのは当り前だろう。尻

が冷える、のぼせが下がる、これまた自然の順序に  
して毫も疑を挟むべき余地はない。さしはさかようにいろいろ  
な方法を用いてのぼせを下げる工夫は大分だいぶ発明さ  
れたが、まだのぼせを引き起す良方が案出されない  
のは残念である。一概に考えるとのぼせは損あつて  
益なき現象であるが、そうばかり速断してならん場  
合がある。職業によると逆上はよほど大切な者で

、逆上せんと何にも出来ない事がある。その中うちでも

つとも逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上

が必要なる事は汽船に石炭が欠くべからざるような

者で、この供給が一日でも途切れると彼れ等は手を

拱こまぬいて飯を食うよりほかに何等の能もない凡人にな

ってしまう。もつとも逆上は氣違いみようの異名で、氣違に

ならないと家業かぎようが立ち行かんとあつては世間せけん体が悪

いから、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をも  
つてしない。申し合せてインスピレーション、イン  
スピレーションとさも勿体<sup>もったい</sup>そうに称<sup>とな</sup>えている。これ  
は彼等が世間を瞞<sup>まん</sup>着<sup>ちやく</sup>するため製造した名でその実  
は正に逆上である。プレートーは彼等の肩を持って  
この種の逆上を神聖なる狂気と号したが、いくら神  
聖でも狂気では人が相手にしない。やはりインスピ

レーションと云う新発明の売薬のような名を付けて

おく方が彼等のためによからうと思う。しかし蒲鉾かまぼこ

の種が山芋やまいもであるごとく、観音かんのんの像が一寸八分の朽く

木ちぎであるごとく、鴨かも南蛮なんばんの材料が烏であるごとく

、下宿屋の牛鍋ぎゅうなべが馬肉であるごとくインスピレーション

ヨンも実は逆上である。逆上であって見れば臨時の

気違である。巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時、気



違であるからだ。ところがこの臨時の氣違を製造す

る事が困難なのである。一生涯いっしょうがいの狂人はかえって出

来安いが、筆を執とつて紙に向う間あいだだけ氣違にするの

は、いかに巧者こうしやな神様でもよほど骨が折れると見え

て、なかなかこしら拵えて見せない。神が作ってくれん以

上は自力で拵えなければならん。そこで昔こんから今日にち

まで逆上術もまた逆上とりのけ術と同じく大おおに学者

の頭脳を悩ました。ある人はインスピレーションを得るために毎日渋柿を十二個ずつ食った。これは渋柿を食えば便秘する、便秘すれば逆上は必ず起るという理論から来たものだ。またある人はかん徳利を<sup>てっぼうぶろ</sup>持つて鉄砲風呂へ飛び込んだ。湯の中で酒を飲んだら逆上するに<sup>きま</sup>極つていると考えたのである。その人の説によるとこれで成功しなければ<sup>ぶどうしゅ</sup>葡萄酒の湯をわ

かして這<sup>はい</sup>入れれば一返<sup>ぺん</sup>で功能があると信じ切っている

。しかし金がないのでついに実行する事が出来なくて死んでしまったのは気の毒である。最後に古人の真似をしたらインスピレーションが起るだろうと思いついた者がある。これはある人の態度動作を真似ると心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔っばらいのように管<sup>くだ</sup>を捲<sup>ま</sup>いている

と、いつの間にか酒飲みのような心持になる、坐禪

をして線香一本の間我慢しているとどこことなく坊主らしい気分になれる。だから昔からインスピレーシ

ョンを受けた有名の大家の所作しよさを真似れば必ず逆上

するに相違ない。聞くところによればユーゴーは快ヨ

走船ツトの上へ寝転ねころんで文章の趣向を考えたそうだから

、船へ乗って青空を見つめていれば必ず逆上うけあい受合で

ある。スチーヴンソンは腹這はらばいに寝て小説を書いたそ

うだから、打うつ伏ふしになつて筆を持てばきつと血が

逆さかさのぼに上のぼつてくる。かようにいろいろな人がいろ

いろの事を考え出したが、まだ誰も成功しない。ま

ず今日こんにちのところでは人為的逆上は不可能の事となつ

ている。残念だが致し方がない。早晚随意にインス

ピレーションを起し得る時機の到来するは疑うたがいもない

事で、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を逸するのは古来から歴史家の常おちいに陥へいとうる弊竇である。主人の逆上も小事件に逢

う度に一層の劇甚げきじんを加えて、ついに大事件を引き起

したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかにな上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に歸して、世間からはよもやそれほどでもなかろうと見くびられるかも知れない。せつかく逆上しても人から天晴あっぱれな逆上と謡うたわれなくては張り合がないだろう。これから

かかわ

述べる事件は大小に係らず主人に取つて名誉な者ではない。事件その物が不名誉であるならば、責めて逆上なりとも、正銘の逆上であつて、決して人に劣るものでないと云う事を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこれと云つて誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折つて書き立ててやる種がない。



落雲館に群がる敵軍は近日に至って一種のダムダ  
ム弾を発明して、じっぶん十分の休暇、もしくは放課後に至  
って熾さかんに北側の空地あきちに向って砲火を浴びせかける

。このダムダム弾は通称をボールと称とえて、すりこぎ擂粉木

の大きな奴をもつて任意これを敵中に発射する仕掛  
である。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から

発射するのだから、書齋に立て籠こもつてゐる主人に中あたる

きづかい  
氣遣はない。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるの

を自覚せん事はないのだけれど、そこが軍略である

。旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行つて偉大な

功を奏したと云う話であれば、空地へころがり落つ

るボールといえども相当の功果を収め得ぬ事はない

。いわんや一発を送る度<sup>たび</sup>に総軍力を合せてわーと威<sup>い</sup>

嚇<sup>かく</sup>性大音<sup>せいおん</sup>声<sup>しょう</sup>を出<sup>いだ</sup>すにおいてをやである。主人は恐縮

の結果として手足に通う血管が収縮せざるを得ない

はんもん きよく

。煩悶の極そこいらを迷付まぎついている血が逆さかさに上のぼる

はかりごと

はずである。敵の計はなかなか巧妙と云うてよろし

むか ギリシヤ

い。昔し希臘にイスキラスと云う作家があつたそう

だ。この男は学者作家に共通なる頭を有していたと

云う。吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿はげ

と云う意味である。なぜ頭が禿げるかと云えば頭の

營養不足で毛が生長するほど活気がないからに相違ない。学者作家はもつとも多く頭を使うものであつて大概は貧乏に極きまっている。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみんな禿いきおいげている。さてイスキラスも作家であるから自然の勢いきおい禿いきおいげなくてはならん。彼はつるつる然たる金柑頭きんかんあたまを有しておつた。ところがある日の事、先生例の頭——頭に外行よそゆきも普段ふだん着

もないから例の頭に極ってるが——その例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいていた。これが間違いのもとである。禿げ頭を日にあてて遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、光かる頭にも何かあたらなくてはならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の鷺わしが舞っていたが、見るとどこかで生捕いけどった一疋びきの亀を

爪の先に攫つかんだままである。亀、スツポンなどは美

味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅こうらをつけてい

る。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来

ん。海老えびの鬼殻焼おにがらやきはあるが亀の子の甲羅煮は今でさ

えないくらいだから、当時は無論なかったに極って

いる。さすがの鷺わしも少々持て余した折柄おりから、遥はるかの下

界にぴかと光った者がある。その時鷺はしめたと思

った。あの光ったものの上へ亀の子を落したなら

、甲羅は正しくまさ砕けるに極きわまった。砕けたあとか

ら舞い下りて中味なかみを頂戴ちやうだいすれば訳はない。そうだそ

うだと覗ねらいを定めて、かの亀の子を高い所から挨拶も

無く頭の上へ落した。生憎あいにく作家の頭の方が亀の甲よ

り軟らかであつたものだから、禿はめちやめちやに

砕けて有名なるイスキラスはここに無惨むざんの最後を遂

げた。それはそうと、解げしかねるのは驚の了見であ

る。例の頭を、作家の頭と知って落したのか、または禿岩と間違えて落したものか、解決しよう次第で落雲館の敵とこの驚とを比較する事も出来るし

、また出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのそ

れのごとく、また御歴々おれきれきの学者のごとくぴかぴか光

つてはおらん。しかし六畳敷にせよいやくも書斎



と号する一室を控ひかえて、居眠りをしながらも、むず

かしい書物の上へ顔を翳かざす以上は、学者作家の同類

と見倣みなさなければならん。そうすると主人の頭の禿

げておらんのは、まだ禿げるべき資格がないからで

、その内に禿げるだろうとは近々きんきんこの頭の上に落ち

かかるべき運命であろう。して見れば落雲館の生徒

がこの頭を目懸けて例のダムダム丸がんを集注するのは

策のもつとも時宜じぎに適したものと云わねばならん

。もし敵がこの行動を二週間継続するならば、主人

の頭は畏怖いふと煩悶はんもんのため必ず營養の不足を訴えて

、金柑きんかんとも薬缶やかんとも銅壺どうことも変化するだろう。なお

二週間の砲撃を食くらえば金柑は潰つぶれるに相違ない。薬

缶は洩もるに相違ない。銅壺ならひびが入るにきまつ

ている。この睹易みやすき結果を予想せんで、あくまでも

敵と戦鬪を継続しようと苦心するのは、ただ本人たる苦沙弥先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく椽側へ出て午睡

をして虎になつた夢を見ていた。主人に鶏肉を持っ

て来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持っ

て出る。迷亭が来たから、迷亭に雁が食いたい、雁

鍋へ行つて逃らえて来いと云うと、蕪の香の物と

しおせんべい  
塩煎餅といっしよに召し上がりますと雁の味が致

しますと例のごとく茶羅ちやらッ銚ぼこを云うから、大きな口

をあいて、うーと唸うなって嚇おどかしてやったら、迷亭は蒼あお

くなつて山下やましたの雁鍋は廃業致しましたがいかが取り

計はからいましょうかと云った。それなら牛肉で勘弁する

から早く西川へ行つてロースを一斤取つて来い、早

くせんと貴様から食い殺すぞと云ったら、迷亭は尻

を端折<sup>はしよ</sup>つて馳<sup>か</sup>け出した。吾輩は急にからだが大きく

なつたので、椽側一杯に寝そべつて、迷亭の歸るの

を待ち受けていると、たちまち家中<sup>うちじゅう</sup>に響く大きな声

がしてせつかくの牛<sup>ぎゅう</sup>も食わぬ間<sup>ま</sup>に夢がさめて吾に歸

つた。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏してい

たと思ひのほかの主人が、いきなり後架<sup>こうか</sup>から飛び出

して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴<sup>け</sup>たから

、おやと思ううち、たちまち庭下駄をつっかけて木戸から廻って、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急に猫と収縮したのだから何となく極きまりが悪くもあり、おかしくもあつたが、主人のこの権幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまつた。同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦する面白いわいと、痛いのを我慢して、後あとを慕つて裏口

へ出た。同時に主人がぬすつ、とうと怒鳴る声が聞え

くつきよう

る、見ると制帽をつけた十八九になる倔強な奴が一  
人、四ツ目垣を向うへ乗り越えつつある。やあ遅か

ったと思ううち、彼の制帽は馳け足の姿勢をとって

根拠地の方へ韋駄天のごとく逃げて行く。主人はぬ、

おい

すつ、とうが大に成功したので、またもぬすつ、とうと

高く叫びながら追いかけて行く。しかしかの敵に追

いつくためには主人の方で垣を越さなければならん

。深入りをすれば主人みずか自らが泥棒になるはずである

。前申ぜんす通り主人は立派なる逆上家である。こう勢いきおい

に乗じてぬすつとうを追ひ懸ける以上は、夫子自身ふうし

がぬすつとうに成つても追ひ懸けるつもりと見えて

、引き返す気色けしきもなく垣の根元まで進んだ。今一步

で彼はぬすつとうの領分はいに入らなければならんと云



まぎわ  
う間際に、敵軍の中から、薄い髯ひげを勢なく生はやした  
将官がのこのこと出馬して来た。両人ふたりは垣を境に何  
か談判している。聞いて見るとこんなつまらない議  
論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他ひとの邸内へ侵入するの  
ですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ断つて、取りに來ないのですか」

「これから善く注意します」

「そんなら、よろしい」

りゅうとうこう

竜騰虎鬪の壯觀があるだろうと予期した交渉はか

くのごとく散文的なる談判をもつて無事に迅速に結

了した。主人の壯さかんなるはただ意気込みだけである

いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あたかも吾輩が虎の夢から急に猫に返ったような観がある。吾輩の小事件と云うのは即ち<sup>すなわ</sup>これである。小事件を記述したあとには、順序として是非大事件を話さなければならん。

主人は座敷の障子を開いて腹這<sup>はらばい</sup>になつて、何か思案している。恐らく敵に対して防禦策を講じている<sup>ぼうぎよさく</sup>

のだろう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外静かである。ただ校舎の一室で、倫理の講義をしているのが手に取るように聞える。朗々たる音声でなかなかうまく述べ立てているのを聴くと、全く昨日きのう敵中から出馬して談判の衝しょうに当った將軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ行つて見ると、フランス仏蘭西でもドイツ独逸でもイギリス英吉利でも、どこ

へ行つても、この公德の行われておらん国はない

。またどんな下等な者でもこの公德を重んぜぬ者はない。悲しいかな、我が日本に在<sup>あ</sup>つては、未<sup>ま</sup>だこの

点において外国と拮抗<sup>きつこう</sup>する事が出来ないのである。で

公德と申すと何か新しく外国から輸入して来たよう

に考える諸君もあるかも知れんが、そう思うのは大<sup>だい</sup>

なる誤りで、昔<sup>せきじん</sup>人も夫子<sup>ふうし</sup>の道<sup>みち</sup>一<sup>いつ</sup>以<sup>もつ</sup>て之<sup>これ</sup>を貫<sup>つらぬ</sup>く、忠恕<sup>ちゅうじょ</sup>

のみ矣いと云われた事がある。この恕じよと申すのが取り

も直さず公德しゅつしよの出所である。私も人間であるから時

には大きな声をして歌などうたつて見たくなる事が

ある。しかし私が勉強している時に隣室のものなど

が放歌するのを聴くと、どうしても書物の読めぬの

が私の性分である。であるからして自分が唐詩選とうしせんで

も高声こうせいに吟じたら気分が晴々せいせいしてよかろうと思う時

ですら、もし自分のように迷惑がる人が隣家に住んでおつて、知らず知らずその人の邪魔をするような事があつてはすまんと思つて、そう云う時はいつでも控<sup>ひか</sup>えるのである。こう云う訳だから諸君もなるべく公德を守つて、いやしくも人の妨害になると思う事は決してやつてはならのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが

ここに至つてにやりと笑つた。ちよつとこのにやりの意味を説明する必要がある。皮肉家がこれをよんだらこのにやりうちの裏には冷評的分子が交っていると思うだろう。しかし主人は決して、そんな人の悪い男ではない。悪いと云うよりそんなに智慧ちえの発達した男ではない。主人はなぜ笑つたかと云うと全く嬉しくつて笑つたのである。倫理の教師たる者がか



ように痛切なる訓戒を与えるからはこの後は永久のちダ

ムダム弾の乱射を免まぬがれるに相違ない。当分のうち

頭も禿げずにすむ、逆上は一時に直らんでも時機さ

えくれば漸次ぜんじ回復するだろう、濡ぬれ手拭てぬぐいを頂いて

炬燵こたつにあたらなくとも、樹下石上を宿やどとしなくと

も大丈夫だろうと鑑定したから、にやにやと笑った

のである。借金はず返す者と二十世紀の今日こんにちにも

やはり正直に考えるほどの主人がこの講話を真面目に聞くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとやんだ。他の教室の課業も皆一度に終った。すると今ま

で室内に密封された八百の同勢はとき閨いきおいの声をあげて

、建物を飛び出した。その勢いきおいと云うものは、一尺ほ

どな蜂はちの巣たたを敲たたき落したごとくである。ぶんぶん

、わんわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやしくも穴の開あいている所なら何の容赦もなく我勝ちに飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立ても何もあるものかと云うのは間違っている。普通の人は戦争とさえ云えば沙河しやかとか奉天ほうてんとかまた旅順りよじゆんとかそのほかに戦争はないもののごとくに考えてい

る。少し詩がかつた野蛮人になると、アキリスがへ

クトーの死骸を引きずつて、トロイの城壁を三匝しさんそう

たとか、燕えんびと張飛ちようはんきようじようはちが長坂橋に丈八の蛇矛だぼうを横よこえて

、曹操そうそうの軍百万人を睨にらめ返したとか大袈裟おおげさな事ばか

り連想する。連想は当人の随意だがそれ以外の戦争

はないものと心得るのは不都合だ。太古蒙昧たいこもうまいの時代

に在あつてこそ、そんな馬鹿氣た戦争も行われたかも

知れん、しかし太平の今日、こんにち大日本国帝都の中心に

おいてかくのごとき野蛮的行動はあり得べからざる

奇蹟に属している。いかに騒動が持ち上がっても交

番の焼打以上に出る氣遣きづかいはない。して見ると臥竜窟がりようくつ

主人の苦沙弥先生と落雲館裏り八百の健児との戦争は

、まず東京市あつて以来の大戦争の一として数えて

もしかるべきものだ。左氏さしが鄢陵えんりょうの戦たたかいを記するに当

つてもまず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則になっている。だによつて吾輩が蜂の陣立てを話すのも仔細なしさいかろう。それでまず蜂の陣立ていかんと見てみると、四つ目垣の外側に縦列を形ちかたづくつた一隊がある。これは主人を戦鬪線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ

「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな

」「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわ

ん」「わんわん」「わんわんわんわん」これから先

は縦隊総がかりとなつて呐喊とっかんの声を揚げる。縦隊を

少し右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を

占めて陣地を布しいている。臥竜窟がりようくつに面して一人の将

官が搗粉木すりこぎの大きな奴を持つて控ひかえる。これと相對

して五六間の間隔をとつてまた一人立つ、搗粉木の  
あとにまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突っ立  
っている。かくのごとく一直線にならんで向い合つ  
ているのが砲手である。ある人の説によるとこれは  
ベースボールの練習であつて、決して戦鬪準備では  
ないそうだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せ  
もんもうかんぬ文盲漢である。しかし聞くところによればこれは



米国から輸入された遊戯で、今日中学程度以上の学

校に行わるる運動のうちでもっとも流行するものだ

そうだ。米国は突飛とっぴな事ばかり考え出す国柄である

から、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊

戯を日本人に教うべくだけそれだけ親切であつたか

も知れない。また米国人はこれをもつて真に一種の

運動遊戯と心得ているのだらう。しかし純粹の遊戯

でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している  
以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼  
をもつて觀察したところでは、彼等はこの運動術を  
利用して砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思  
われない。物は云いようでもなるものだ。慈  
善の名を借りて詐偽さぎを働らき、インスピレーション  
と号して逆上をうれしがる者がある以上はベースボ

ールなる遊戯の下に戦争をなさんとも限らない。或

る人の説明は世間一般のベースボールの事であらう

。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合

に限らるるベースボール即ち攻城的砲術である。こ

すなわ

れからダムダム弾を発射する方法を紹介する。直線

に布しかれたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の

手に握って搗粉木の所有者に抛ほうりつける。ダムダム

弾は何で製造したか局外者には分らない。堅い丸い

石の団子のようなものを御鄭寧ごていねいに皮でくるんで縫い

合せたものである。前申ぜんす通りこの弾丸が砲手の一

人の手中を離れて、風を切って飛んで行くと、向う

に立った一人が例の搗粉木をやつと振り上げて、こ

れを敲たたき返す。たまには敲たたき損そこなつた弾丸が流れて

しまう事もあるが、大概はポカンと大きな音を立て

て弾<sup>は</sup>ね返る。その勢は非常に猛烈なものである。神

経性胃弱なる主人の頭を潰<sup>つぶ</sup>すくらいは容易に出来る

。砲手はこれだけで事足るのだが、その周囲附近に

は弥次馬兼援兵が雲霞<sup>うんか</sup>のごとく付き添うている。ポ

カーンと播粉木が団子に中<sup>あた</sup>るや否やわー、ぱちぱち

ぱちと、わめく、手を拍<sup>う</sup>つ、やれやれと云う。中<sup>あた</sup>つ

たろうと云う。これでも利<sup>き</sup>かねえかと云う。恐れ入

らねえかと云う。降参かと云う。これだけならまだしもであるが、たた敲き返された弾丸は三度に一度必ず臥竜窟邸内へころがり込む。これがころがり込まなければ攻撃の目的は達せられのである。ダムダム弾は近来諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かない。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である

。ポンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費する訳には

行かん。そこで彼等はたま拾ひろいと称する一部隊を設け

て落弾おちだまを拾ってくる。落ち場所がよければ拾うのに

骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそ

う容易たやすくは戻って来ない。だから平生ならなるべく

労力を避けるため、拾い易やすい所へ打ち落すはずであ

るが、この際は反対に出る。目的が遊戯にあるので

はない、戦争に存するのだから、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這入<sup>はい</sup>って拾わなければならん。邸内に這入るもつとも簡便な方法は四つ目垣を越えるにある

。四つ目垣のうちに騒動すれば主人が怒<sup>おこ</sup>り出さなければならん。しからずんば兜<sup>かぶと</sup>を脱いで降参しなければならん。苦心のあまり頭がだんだん禿げて来なけ



ればならん。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、しょうじゆあやま照準誤たず

、四つ目垣を通り越して桐の下葉をきり振り落して、第

二の城壁即ち竹垣に命中した。すなわ随分大きな音である

。ニュートンの運動律第一に曰くいわもし他の力を加う

るにあらざれば、ひとた一度び動き出したる物体は均一の

速度をもつて直線に動くものとす。もしこの律のみ

によつて物体の運動が支配せらるるならば主人の頭はこの時にイスキラスと運命を同じくしたであらう

。幸<sup>さいわい</sup>にしてニュートンは第一則を定むると同時に第

二則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の変化は、加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く直線の方角において起るものとす。これは何の事

だか少しくわかり兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣

を突き通して、障子しょうじを裂き破って主人の頭を破壊し

なかつたところをもつて見ると、ニユートンの御蔭おかげ

に相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に

乗り込んで来たものと覺しく、「ここか」「もっと

左の方か」などと棒でもって笹ささの葉を敲き廻わる音

がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダ

ム弾を拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こ  
っそり這入って、こっそり拾っては肝心かんじんの目的が達  
せられん。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人  
にからかうのはダムダム弾以上に大事である。この  
時のごときは遠くから弾の所在地は判然している

。竹垣に中あたった音も知っている。中った場所も分っ

ている、しかしてその落ちた地面も心得ている。だ

からおとなしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾える。ライプニッツの定義によると空間は出来得べき同在現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも同じ順にあらわれてくる。柳の下には必ず鱒どじょうがいる。蝙蝠こうもりに夕月はつきものである。垣根にボールは不似合かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内に抛ほうり込む者の眼に映ずる空間はたしかにこの

排列に慣<sup>な</sup>れてゐる。一眼見ればすぐ分る訳だ。それ  
をかくのごとく騒<sup>さわ</sup>ぎ立てるのは必竟<sup>ひつきよう</sup>ずるに主人に戦  
争<sup>いど</sup>を挑む策略である。

こうなつてはいかに消極的なる主人といえども応  
戦しなければならん。さつき座敷のうちから倫理の  
講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立  
ち上がった。猛然として馳<sup>か</sup>け出した。驀<sup>ばくぜん</sup>然として敵

の一人を生捕いけどった。主人にしては大出来である。大

出来には相違ないが、見ると十四五の小供である

。髯ひげの生はえている主人の敵として少し不似合だ。け

れども主人はこれで沢山だと思つたのだらう。詫わび

入るのを無理に引つ張つて椽側えんがわの前まで連れて来た

。ここにちよつと敵の策略について一言いちげんする必要が

ある、敵は主人が昨日きのうの権幕けんまくを見てこの様子では今

日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その

時万一逃げ損じて大僧がおおぞうつらまっては事面倒になる

。ここは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにや

って危険を避けるに越した事はない。よし主人が小

供をつらまえて愚ぐ図ず愚ぐ理窟りくつを捏ね廻したって、落

雲館の名誉には関係しない、こんなものを大人おとな気も

なく相手にする主人の恥辱ちじよくになるばかりだ。敵の考



はこうであつた。これが普通の人間の考で至極しごくもつともなところである。ただ敵は相手が普通の人間でないと云う事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかりである。主人にこれくらいの常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を与える者である。女だの、小供だの

車引きだの、馬子だのと、そんな見境みさかいのあるう

ちは、まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主人のご

とく相手にならぬ中学一年生を生捕いけどつて戦争の人質

とするほどの了見でなくては逆上家の仲間入りは出  
来ないのである。可哀かわいそうなのは捕虜である。単に

上級生の命令によつて玉拾ぞうひよういなる雑兵の役を勤めた

るところ、運わるく非常識の敵将、逆上の天才に追

い詰められて、垣越える間まもあらばこそ、庭前に引き据すえられた。こうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗りこして木戸口から庭中に乱れ入る。その数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上うわぎ衣もちよつ着きもつけておらん。白シャツの腕をまめくつて、腕組をしたのがある。綿めんネルの洗いざらし

を申し訳に背中だけへ乗せているのがある。そうか

と思うと白の帆木綿ほもめんに黒い縁ふちをとって胸の真中に花

文字を、同じ色に縫いつけた洒落者しやれものもある。いずれ

も一騎当千の猛将と見えて、丹波たんばの国は笹山から昨

夜着し立てでござると云わぬばかりに、黒く逞たくましく

筋肉が発達している。中学などへ入れて学問をさせ

るのは惜しいものだ。りようし漁師か船頭にしたら定めし国

家のためになるだろうと思われるくらいである。彼

等は申し合せたごとく、素足に股引ももひきを高くまくって

、近火の手伝にでも行きそうな風体ふうていに見える。彼等

は主人の前にならんだぎり默然もくねんとして一言いちごんも発しな

い。主人も口を開ひらかない。しばらくの間双方共睨にらめ

くらしをしているなかにちよつと殺気がある。

「貴様等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大気だいき

燄えんである。奥歯で嚙かみ潰つぶした癰癰玉かんしゃくだまが炎となつて鼻

の穴から抜けるので、小鼻が、いちじるしく怒いかつて

見える。越後獅子えちごじしの鼻は人間が怒おこつた時の恰好かつこうを形かた

どつて作つたものであろう。それでなくてはあんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵

入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の徽章きしやうのついている帽子を被かぶっています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

「怪<sup>け</sup>しからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入<sup>ちんにゆう</sup>

するのを、そう容易<sup>たやす</sup>く許されると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」



「三年生です」

「きつとそうか」

「ええ」

主人は奥の方を顧みながら、おいこらこらと云う

埼玉生れの御三おさんが襖ふすまをあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行って誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙

なのと、使の趣が判然おもむきしないのと、さつきからの事

件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りも

せずにやにや笑っている。主人はこれでも大戦争を

しているつもりである。逆上の敏腕を大に振おおいふるつてい

るつもりである。しかるところ自分の召し使たる当然こっちの肩を持つべきものが、真面目な態度をもつて事に臨まんのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至つて下女もやむを得んと心得たものか

「へえ」と云つて出て行つた。使の主意はやはり飲み込めのである。小使でも引張つて来はせんかと心配していると、あに計らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣

蔵のような古風な言葉を使つたが「本当に御校おんこうの生徒でしうか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前にならんでゐる勇士を一通り見廻みまわした上、もとのごとく瞳ひとみを主人の方にかえして、下しものごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事の

ないように始終訓戒を加えておきますが……どうも困ったもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もいちごんないと見えて何とも云うものはない。おとなしく庭の隅にかたまって羊の群むれが雪に逢つたようにひか控えている。

「丸が這入るのも仕方がないでしょう。こうして学

校の隣りに住んでいる以上は、時々はボールも飛んで来ましょう。しかし……あまり乱暴ですからな

。仮令垣を乗り越えるにしても知れないないよう<sup>たとい</sup>に

、そつと拾って行くなら、まだ勘弁のしようもあり  
ますが……」

「ごもつともで、よく注意は致しますが何分多人数<sup>たにんず</sup>



の事で……よくこれから注意をせんといいかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻つて、御断りをして取らなければいかん。いいか。——広い学校の事です。からどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運動は教育上必要なものでありますから、どうもこれを禁ずる訳には参りかねるので。これを許すについて御迷惑になるような事が出来ませんが、これは是非御

容赦を願いたいと思います。その代り向後こうごはきつと表門から廻つて御断りを致した上で取らせますから

「いや、そう事が分かれればよろしいです。球たまはいく

ら御投げになつても差支さしつかえはないです。表からきて

ちよつと断わつて下されば構いません。ではこの生

徒はあなたに御引き渡し申しますからお連れ歸りを

願います。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です

」と主人は例によつて例のごとく竜頭蛇尾りゅうとうだびの挨拶を

する。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落

雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれで

一とまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑う

なら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまで

だ。吾輩は主人の、大事件を写したので、そんな人の

大事件を記した<sup>しる</sup>たのではない。尻が切れて強弩<sup>きやうど</sup>の末勢<sup>ばっせい</sup>

だなどと悪口するものがあるなら、これが主人の特

色である事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材

料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰

いたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云

うなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大

町桂月は主人をつらまえて未<sup>いま</sup>だ稚<sup>ち</sup>氣<sup>き</sup>を免がれずと云

うている。

吾輩はすでに小事件を叙し了り<sup>おわ</sup>、今また大事件を

述べ了ったから、これより大事件の後に起る余瀾<sup>あと</sup>を

描き出<sup>えが</sup>だして、全篇の結びを付けるつもりである

。すべて吾輩のかく事は、口から出<sup>で</sup>任せのいい加減<sup>まか</sup>

と思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率

な猫ではない。一字一句の裏<sup>うち</sup>に宇宙の一大哲理を包

そうそう

含するは無論の事、その一字一句が層々連続すると

さだんせんわ

首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうつ

こつぜんひょうへん

かりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる

法語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出

して五行ごとに一度に読むのだなどと云う無礼を演

りゆうそうげん かんたいし

じてはいけない。柳宗元は韓退之の文を読むごとに

しょうび みず

薔薇の水で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の

文に対してもせめて自腹じばらで雑誌を買って来て、友人

の御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはな

い事に致したい。これから述べるのは、吾輩みづか自ら余

瀾と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに

極きまっている、読まんでもよからうなどと思うと飛ん

だ後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいか

ん。

大事件のあつた翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲がろう

と云う角で金田の旦那と鈴木とうの藤さんがしきりに立

ちながら話をしている。金田君は車で自宅うちへ帰ると

ころ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途

中でふたり兩人がばつたりと出逢つたのである。近来は金

田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多めったにあちら



の方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて

見ると、何となく御懷おなつかしい。鈴木にも久々ひさびさだから

余所よそながら拝顔の栄を得ておこう。こう決心しての

そのそ御両君の佇立ちよりつしておらるる傍そば近く歩み寄つて

見ると、自然両君の談話が耳に入るい。これは吾輩の

罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金

田君は探偵さえ付けて主人の動静を窺うかがうくらいにの

程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の談話を拝聴したって怒らるるおこ氣遣はきづかいあるまい。もし怒られたら君は公平と云う意味を御承知ないのである。とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちようどよい所で御目にかかりました」と藤<sup>とう</sup>さんは鄭<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>に頭をびよこつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちよつと逢いたいと思つていたがね。それはよかった」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。い  
つが宜<sup>よろ</sup>しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。――それ  
じゃせつかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか  
云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来胸糞むなくそがわる

くってね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少しは自分の社会上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。こな

いだから大分弱たいぶらしているんだが、やつぱり頑張がんばつ

ているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う觀念の乏とほしい奴ですから無暗むやみに

瘦我慢を張るんでしよう。昔からああ云う癖のある

男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんで

すから度どし難がたいです」

「あはははほんとに度どし難がたい。いろいろ手を易かえ品

を易<sup>か</sup>えてやって見るんだがね。とうとうしまいに学校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利目<sup>ききめ</sup>がございましたか」

「これにやあ、奴も大分<sup>だいぶん</sup>困ったようだ。もう遠からず落城するに極<sup>きま</sup>っている」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢<sup>たぜい</sup>に無勢<sup>ぶぜい</sup>ですからな」



「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大分弱つたようだが、まあどんな様子か君に行つて見て来てもらおうと云うのさ」

「はあ、そうですね。なに訳はありません。すぐ行つて見ましよう。容子ようすは歸りがけに御報知を致す事にして。面白いでしょう、あの頑固がんこなのが意気銷沈いきしょうちんしているところは、きつと見物みものですよ」

「ああ、それじゃ歸りに御寄り、待っているから」

「それでは御免蒙りますごめんこうむ」

おや今度もまた魂胆こんたんだ、なるほど実業家の勢力は

えらいものだ、石炭の燃殻もえがらのような主人を逆上させ

るのも、苦悶くもんの結果主人の頭が蠅滑はえすべりの難所となる

のも、その頭がイスキラスと同様の運命に陥おちいるのも

皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは

何の作用かわからないが、世の中を動かすものはた

しかに金である。この金の功力を心得て、この金の

くりき

威光を自由に発揮するものは実業家諸君をおいてほ

かに一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に

西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今まではわ

からずやの窮措大きゆうそだいの家に養なわれて実業家の御利益ごりやく

を知らなかったのは、我ながら不覚である。それに

しても冥頑不靈めいがんふれいの主人も今度は少し悟らずばなるま

い。これでも冥頑不靈で押し通す了見あぶだと危ない

。主人のもっとも貴重する命があぶない。彼は鈴木

君に逢ってどんな挨拶をするのか知らん。その模様

で彼の悟り具合も白おのずから分明ぶんみょうになる。愚図愚図して

はおられん、猫だつて主人の事だから大おおに心配にな

る。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、しきりに当り障りさわのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」  
「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いあおぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ

。心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事がある  
ぜ」

「冗談云じょうだんつちやいけない。笑う門かどには福来きたるさ」

「昔むかし希臘ギリシヤにクリシツパスと云う哲学者があつたが

君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりや昔の事だから……」

「昔しだって今だって変りがあるものか。驢馬ろばが銀

の井どんぶりから無花果いちじゆくを食うのを見て、おかしくってたま

らなくって無暗むやみに笑ったんだ。ところがどうしても

笑いがとまらない。とうとう笑い死にに死んだんだ



あね」

「はははしかしそんなに留<sup>と</sup>め度<sup>ど</sup>もなく笑わなくって  
もいいさ。少し笑う——適<sup>てき</sup>宜<sup>ぎ</sup>に、——そうするとい  
い心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると  
表の門ががらがらとあく、客<sup>きやく</sup>来<sup>らい</sup>かと思うとそうで  
ない。

「ちよつとボールが這<sup>はい</sup>入りましたから、取らして下さい  
さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ  
廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？　裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のって。碌々ろくろく勉強も出来やしない

。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分怒だいぶおこったね。何か癩しやくに障さわる事でも有るの

かい」

「あるの無いのって、朝から晩まで癩に障り続けだ

」

「そんなに癩に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね

、打ちやっておけばいいさ」

「君はよからうが僕はよくない。昨日きのうは教師を呼び

つけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また門口かどぐちをあけて「ちよつとボールが這入はいりましたから取らして下さい」と云う声がする。

「いや大分だいぶん来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そうーか、分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするったって、来るから仕方がない  
さ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固がんこにし

ていないでもよからう。人間は角かどがあると世の中を

転ころがって行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはこ

ろごろどこへでも苦くなしに行けるが四角なものはこ

ろがるに骨が折れるばかりじゃない、転がるたびに

角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じ

やなし、そう自分の思うように人はならないさ。ま

あ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突いちや損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向うは平気なものさ。坐って人を使いさえすればすむんだから。多勢たぜいに無勢ぶぜいどうせ、叶かなわないのは知れているさ。頑固もいいが、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障つたり、毎日の業務に煩はんを及ぼしたり、とどのつまり



が骨折り損の草臥くたびれ儲もうけだからね」

「ご免なさい。今ちよつとボールが飛びましたから裏口へ廻つて、取つてもいいですか」

「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

「失敬な」と主人は真赤まっかになっている。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思つたから

、それじゃ失敬ちと来きたまえと歸つて行く。

入れ代つてやつて来たのが甘木先生である。逆上

家が自分で逆上家だと名乗る者は昔むかしから例が少な

い、これは少々変だなと覺さとつた時は逆上の峠とうげはもう

越している。主人の逆上は昨日きのうの大事件の際に最高

度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たるに係かかわら

ず、どうかこうか始末がついたのでその晩書齋でつ

くづく考えて見ると少し変だと気が付いた。もっと

も落雲館が変なのか、自分が変なのか疑うたがいを存する余

地は充分あるが、何しろ変に違ない。いくら中学校

の隣に居を構えたって、かくのごとく年が年中肝癰かんしやく

を起しつづけはちと変だと気が付いた。変であって

見ればどうかしなければならん。どうするったって

仕方がない、やはり医者いしやの薬でも飲んで肝癰かんしやくの源に

賄賂わいろでも使って慰撫いぶするよりほかに道はない。こう

覺つたから平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察  
 を受けて見ようと云う量見を起したのである。賢か  
 愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆上  
 に気が付いただけは殊勝しゆしょうの志、奇特きどくの心得と云わな  
 ければならん。甘木先生は例のごとくにここにこと落  
 ちつき払つて、「どうです」と云う。医者は大抵ど  
 うですと云うに極きまつてる。吾輩は「どうです」と

云わない医者はどうも信用をおく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者の薬は利きくものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者ちやうじやだから

別段激した様子もなく、

「利かん事もないです」と穏おだやかに答えた。

「私<sup>わたし</sup>の胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事です  
ぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急には、癒<sup>なお</sup>りません、だんだん利きます。今でももとより大分<sup>だいぶ</sup>よくなっています」

「そうですかな」

「やはり肝癰かんしやくが起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝癰を起します」

「運動でも、少しなさったらいいでしょう」

「運動すると、なお肝癰が起ります」

甘木先生もあきれ返ったものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。診

察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだって催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来ると書いてあつたですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」



「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、わたし私などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやって見ましようか。誰でも懸からなけ

ればならん理窟りくつのものです。あなたさえ善よければ懸

けて見ましょう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私もとうか  
ら懸かって見たいと思つたんです。しかし懸かりき  
りで眼が覚めないと困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましょう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術  
を懸けらるる事となつた。吾輩は今までこんな事を

見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。先生はまず、主人の眼からかけ始めた。その方法を見ていると、両眼りようがん うわまぶたの上瞼を上から下へと撫なでて、主人がすでに眼を眠ねむっているにも係かかわらず、しきりに同じ方向へくせを付けたがつている。しばらくすると先生は主人に向つて「こうやつて、瞼まぶたを撫でていると、だんだん眼が重たくなるで

しょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなりますな」と答える。先生はなお同じように撫でおろし

撫でおろし「だんだん重くなりますよ、ようござんすか」と云う。主人もその気になったものか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きまあせんぜ」と云われた。可かわいそう哀想に主人の眼はとうとう

潰<sup>つぶ</sup>れてしまった。「もう開かんのですか」「ええも

うあきません」主人は默然<sup>もくねん</sup>として目を眠っている

。吾輩は主人がもう盲目<sup>めくら</sup>になつたものと思ひ込んで

しまった。しばらくして先生は「あけるなら開いて

御覧なさい。とうていあけないから」と云われる

。「そうですか」と云うが早いか主人は普通の通り

両眼<sup>りょうがん</sup>を開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸

かりませんな」と云うと甘木先生も同じく笑いながら「ええ、懸りません」と云う。催眠術はついに不成功に了る。おわ甘木先生も帰る。

その次に来たのが――主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の家にしてはまるで嘘うそのようである。しかし来たに相違ない。しかも珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を一言でもいちごん記述

するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先

刻申す通り大事件の余瀾よらんを描きえがつつある。しかして

この珍客はこの余瀾を描くに方あたつて逸すべからざる

材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い

上に、山羊やぎのような髯ひげを生はやしている四十前後の男

と云えばよからう。迷亭の美学者たるに對して、吾

輩はこの男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学

者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われるからである。これも昔むかしの同窓と見えて兩人共ふたりとも応対振りは至極しごく打ち解うけた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚きんぎょぶ麤よふのようにふわふわしているね。せんだって友人を連れて一面



識もない華族の門前を通行した時、ちよつと寄つて茶でも飲んで行こうと云つて引つ張り込んだそうだが随分呑氣のんきだね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかったが、——そうさ

、まあ天稟てんぴんの奇人だろう、その代り考も何もない全

く金魚麩だ。鈴木か、——あれがくるのかい、へえ

一、あれは理窟りくつはわからんが世間的には利口な男だ

。金時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがない

から落ちつきがなくって駄目だ。円滑えんかつ円滑と云うが

、円滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚麩

ならあれは藁わらで括くくった蒟蒻こんにやくだね。ただわるく滑なめらかで

ぶるぶる振ふるえているばかりだ」

主人はこの奇警きけいな比喩ひゆを聞いて、大おおに感心したも

のらしく、久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは——まあ自然薯じねんじよくらい

なところだろう。長くなつて泥の中に埋うまつてるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、羨うらやましいな

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ

別に羨まれるに足るほどの事もない。ただありがたい事に人を羨む気も起らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うているから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、肝癰かんしやくが起つてたまらん。どつちを

向いても不平ばかりだ」

「不平もいいさ。不平が起つたら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから

、そう自分のように人にもなれと勧めたって、なれ

るものではない。箸<sup>はし</sup>は人と同じように持たんと飯が

食いにくいが、自分の麵<sup>パン</sup>麴は自分の勝手に切るのが

一番都合がいいようだ。上手<sup>じょうず</sup>な仕立屋で着物をこし

らえれば、着たてから、からだに合つたのを持つて

くるが、下手へたの裁縫屋したてやに誂あつらえたら当分は我慢しない

と駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着て

いるうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わして

くれるから。今の世に合うように上等な両親が手際てぎわ

よく生んでくれれば、それが幸福なのさ。しかし出で

来損きそこなつたら世の中に合わないで我慢するか、ま

たは世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はなからう」

「しかし僕なんか、いつまで立っても合いそうにな  
いぜ、心細いね」

「あまり合わない背<sup>せ</sup>広<sup>び</sup>を無理にきると綻<sup>ほ</sup>び<sup>こ</sup>る。喧嘩<sup>けんか</sup>

をしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし  
君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論し

やせず、喧嘩だつてやった事はあるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくつても怒つておれば喧嘩だろう」

「なるほど一人ひとりげんか喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになつた」



「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今

まどやき たぬき

戸焼の狸から、ぴん助、きしやごそのほかあらゆる

とうとう

不平を挙げて滔々と哲学者の前に述べ立てた。哲学

者先生はだまって聞いていたが、ようやく口を開いひらて、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしやごが何を云ったって知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから

。中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だって談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると

西洋人より昔むかししの日本人の方がよほどえらいと思う

。西洋人のやり方は積極的積極的と云って近頃大分だいぶ

流行はやりるが、あれは大だいなる欠点を持っているよ。第一

積極的と云ったって際限がない話しだ。いつまで積

極的にやり通したって、満足と云う域とか完全と云

う境さかいにいけないものじゃない。向むこうに檣ひのきがあるだろう

。あれが目障めざわりになるから取り払う。とその向うの

下宿屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると

、その次の家が癩しやくに触る。どこまで行っても際限の

ない話しさ。西洋人の遣り口やぐちはみんなこれさ。ナポ

レオンでも、アレキサンダーでも勝って満足したも

のは一人もないんだよ。人が気に喰わん、喧嘩をす

る、先方が閉口しない、法庭ほうていへ訴える、法庭で勝つ

、それで落着と思うのは間違さ。心の落着は死ぬま

で焦<sup>あせ</sup>ったって片付く事があるものか。寡<sup>かじんせいじ</sup>人政治がい

かんから、代議政体<sup>だいぎせいたい</sup>にする。代議政体がいかんから

、また何かにしたくなる。川が生意気だつて橋をか

ける、山が気に喰わんと云つて隧<sup>トンネル</sup>道を掘る。交通が

面倒だと云つて鉄道を布<sup>し</sup>く。それで永久満足が出来

るものじゃない。さればと云つて人間だものどこま

で積極的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文

明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるとじゃない

。西洋と大に違<sup>おおい</sup>うところは、根本的に周囲の境遇は

動かすべからざるものと云う一大仮定の下<sup>もと</sup>に発達し

ているのだ。親子の関係が面白くないと云って歐洲

人のようにこの関係を改良して落ちつきをとろうと

するのではない。親子の關係は在來のままでどうて  
い動かす事が出来んものとして、その關係の下に安<sup>もと</sup>  
心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄も  
その通り、武士町人の區別もその通り、自然その物  
を觀<sup>み</sup>るのもその通り。——山があつて隣国へ行かれ  
なければ、山を崩すと云う考を起す代りに隣国へ行  
かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなく

とも満足だと云う心持ちを養成するのだ。それだか

ら君見給え。禅家ぜんけでも儒家じゅかでもきつと根本的にこの

問題をつらまえる。いくら自分がえらくても世の中

はとうてい意のごとくなるものではない、落日らくじつを回めぐ

らす事も、加茂川を逆さかに流す事も出来ない。ただ出

来るものは自分の心だけだからね。心さえ自由にす

る修業をしたたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平



気なものではないか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうなものだ。ぴん助なんか愚<sup>ぐ</sup>な事を云つたらこの馬鹿野郎とすましておれば仔細<sup>しさい</sup>なからう。何でも昔しの坊主は人に斬<sup>き</sup>り付けられた時電光影裏<sup>でんこうえいり</sup>に春風<sup>しゅんぷう</sup>を斬るとか、何とか洒落<sup>しや</sup>れた事を云つたと云う話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのじゃないかしらん。僕なんか

、そんなむずかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義ばかりがいいと思うのは少々誤まっているようだ。現に君がいくら積極主義に働いたつて、生徒が君をひやかしにくるのをどうする事も出来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に

出たつたて勝てつこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢たぜいに無勢ぶぜいの問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと言ふ事になる。衆を恃たのむ小供に恐れ入らなければならんと言ふ事になる。君のような貧乏人でしかもたつた一人で積極的に喧嘩をしようと云うのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分つたかい」

主人は分つたとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が歸つたあとで書齋へ這はい入つて書物も読まずに何か考えていた。

鈴木の藤とうさんは金と衆とに従えと主人に教えたの

である。甘木先生は催眠術で神経を沈めろと助言じょごんし

たのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得

ろと説法したのである。主人がいずれをえら択ぶかは主

人の随意である。ただこのままでは通されないに極きまっている。

## 九

主人は痘痕面あばたづらである。

御維新前ごいつしんまえはあばたも大分流だいぶんは

行やったものだそうだが日英同盟の今日こんにちから見ると

、こんな顔はいささか時候後れおくの感がある。あばた、

の衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全く

その迹あとを絶つに至るだろうとは医学上の統計から精

密に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫

といえども毫ちようも疑さしはさを挟む余地のないほどの名論であ

る。現今地球上にあばたつ面つらを有して生息している

人間は何人くらいあるか知らんが、吾輩が交際の区

域内において打算して見ると、猫には一匹もない

。人間にはたった一人ある。しかしてその一人が即<sup>すなわ</sup>ち主人である。はなはだ気の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果

でこんな妙な顔をして臆面<sup>おくめん</sup>なく二十世紀の空気を呼

吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利<sup>き</sup>いたか知

らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退<sup>の</sup>きを命ぜ

られた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて

頑がんとして動かないのは傲慢にならんのみか、かえつ

てあ、ば、た、の体面に関する訳だ。出来る事なら今のう

ち取り払つたらよさそうなものだ。あ、ば、た、自身だつ

て心細いに違いない。それとも党勢不振の際、誓つ

て落日を中天ちゆうてんに挽回ばんかいせずんばやまずと云う意気込み

で、あんなに横風おうふうに顔一面を占領しているのか知ら



ん。そうするとこのあばたは決して輕蔑けいべつの意をもつ

て視みるべきものでない。滔々とうとうたる流俗に抗する万古ばん

こふま不磨の穴の集合体であつて、大おおに吾人の尊敬に値す

る凸凹でこぼこと云つて宜よろしい。ただきたならしいのが欠点

である。

主人の小供のときに牛込の山伏町に浅田宗伯あさだそうはくと云

う漢法の名医があつたが、この老人が病家を見舞う

ときには必ずかごに乗ってそろりそろりと参られた  
そうだ。ところが宗伯老が亡くなられてその養子の  
代になつたら、かごがたちまち人力車に變じた。だ  
から養子が死んでそのまた養子が跡を続いだら葛根かつこん  
湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗  
って東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですら  
あまり見つともいいものでは無かつた。こんな真似

をして澄すましていたものは旧弊な亡者もうじやと、汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたもその振わざる事においては宗伯老のかごと一般で、はたから見ると気の毒なくらいだが、漢法医にも劣らざる頑固がんこな主人は依然として孤城落日のあばたを天下に曝露ばくろしつつ毎日登校してリードルを教えている。

かくのごとき前世紀の紀念を満面に刻こくして教壇に

立つ彼は、その生徒に対して授業以外に大だいなる訓戒

を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ

」を反覆するよりも「あ、あばたの顔面に及ぼす影響

」と云う大問題を造作ぞうさもなく解釈して、不言ふげんの間に

その答案を生徒に与えつつある。もし主人のような

人間が教師として存在しなくなつたあかつき暁には彼等生徒

はこの問題を研究するために図書館もしくは博物館へ馳けつけて、吾人がミイラによつて埃及人<sup>エジプトじん</sup>を髣髴<sup>ほうふつ</sup>すると同程度の労力を費<sup>つい</sup>やさねばならぬ。この点<sup>てん</sup>から見ると主人の痘痕<sup>あばた</sup>も冥々<sup>めいめい</sup>の裡<sup>うち</sup>に妙な功德<sup>くどく</sup>を施こしている。

もつとも主人はこの功德を施こすために顔一面に疱瘡<sup>ほうそう</sup>を種<sup>う</sup>え付けたのではない。これでも実は種え疱

瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思ったのが、いつの間にか顔へ伝染していたのである。その頃は小供の事で今のように色気いろけもなにもなかったものだから、痒かゆい痒かゆいと云いながら無暗むやみに顔中引き搔かいたのだそうだ。ちょうど噴火山が破裂してラヴアが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向

つて疱瘡をせぬうちは玉のような男子であつたと云

かんのんさま

っている。浅草の観音様で西洋人が振り反つて見た

かえ

くらい奇麗だつたなどと自慢する事さえある。なる

ほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないのが残念である。

いくら功德になつても訓戒になつても、きたない

ものごころ

者はやっぱりきたないものだから、物心がついて以

来と云うもの主人は大におおいあばたについて心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉み潰つぶそうとした。ところが宗伯老のかごと違って、いやになつたからと云うてそう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残っている。この歴然が多少気にかかると見えて、主人は往来をあるく度毎にあばたづら面を勘定してあるくそうだ。今日何人あばたに出逢つ



て、その主は男か女か、その場所は小川町の勸工場かんこうば

であるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日

記につけ込んである。彼はあばたに関する智識にお

いては決して誰にも譲るまいと確信している。せん

だつてある洋行歸りの友人が来た折なぞは、「君西

洋人にはあばたがあるかな」と聞いたくらいだ。す

るとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほ

ど考えたあとで「まあ滅多めったにないね」と云ったら

主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と  
念を入れて聞き返えした。友人は氣のない顔で「あ  
つても乞食たちが立ぼうん坊だよ。教育のある人にはないよ  
うだ」と答えたなら、主人は「そうかなあ、日本とは  
少し違うね」と云った。

哲学者の意見によつて落雲館との喧嘩を思い留つ

た主人はその後書齋に立て籠こもつてしきりに何か考え

ている。彼の忠告を容いれて静坐の裡うちに靈活なる精神

を消極的に修養するつもりかも知れないが、元來が

氣の小さな人間の癖に、ああ陰氣な懷手ふところばかりして

いては碌ろくな結果の出ようはずがない。それより英書

でも質に入れて芸者から喇叭節らっぱぶしでも習った方が遙はるか

にましだとまでは氣が付いたが、あんな偏屈へんくつな男は

とうてい猫の忠告などを聴くきづかい氣遣はないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせず  
に暮した。

今日はあれからちようど七日目なぬかめである。禅家など

では一七日いちしちにちを限って大悟して見せるなどと凄じすさまい勢いきおい

で結跏けっかする連中もある事だから、うちの主人もどう

かなったろう、死ぬか生きるか何とか片付いたろう

と、のそのそ縁側えんがわから書斎の入口まで来て室内の動  
静を偵察ていさつに及んだ。

書斎は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな  
机が据すえてある。ただ大きな机ではわかるまい。長  
さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大きな  
机である。無論出来合のものではない。近所の建具

屋に談判して寝台兼机けんとして製造せしめたる稀代きたいの

品物である。何の故にこんな大きな机を新調して

、また何の故にその上に寝て見ようなどという了見りようけん

を起したもののか、本人に聞いて見ない事だから頓ととん

わからない。ほんの一時の出来心で、かかる難物を

担かつぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一

種の精神病者において吾人がしばしば見出すごとくみいだ

、縁もゆかりもない二個の観念を連想して、机と寝

台を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく  
奇抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないの  
が欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼  
寝をして寝返りをする拍子に椽側へ転げ落ちたのを  
見た事がある。それ以来この机は決して寝台に転用  
されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの座布団ざぶとんがあつて

煙草たばこの火で焼けた穴が三つほどかたまつてゐる。中

から見える綿は薄黒い。この座布団の上に後ろうし向き

にかしこまっているのが主人である。鼠色によこれ

た兵児帯へこおびをこま結びにむすんだ左右がだらりと足の

裏へ垂れかかっている。この帯へじやれ付いて、い

きなり頭を張られたのはこないだの事である。滅多めった

に寄り付くべき帯ではない。



まだ考えているのか下手へたの考と云う喩たとえもあるのに

と後うしろから覗のぞき込んで見ると、机の上でいやにぴか

ぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に

二三度瞬まばたきをしたが、こいつは変だとまぶしいのを我

慢してじつと光るものを見つめてやった。するとこ

の光りは机の上で動いている鏡から出るものだと言

う事が分った。しかし主人は何のために書斎で鏡な

どを振り舞わしているのであろう。鏡と云えば風呂

場にあるに極<sup>き</sup>まっている。現に吾輩は今朝風呂場で

この鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人の  
うちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人

が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡  
を用いる。——主人のような男が髪を分けるのかと

聞く人もあるかも知れぬが、實際彼は他<sup>ほか</sup>の事に無精<sup>ぶしよう</sup>

なるだけそれだけ頭を叮嚀ていねいにする。吾輩が当家に参

つてから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日とい

えども五分刈に刈り込んだ事はない。必ずかならず二寸くら

いの長さにして、それを御大ごたいそうに左の方で分ける

のみか、右の端はじをちよつと跳ね返して澄はすすましている

。これも精神病の徴候かも知れない。こんな気取つ

た分け方はこの机と一向調和いっこうしないと思うが、あえ

て他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも云わない。本人も得意である。分け方のハイカラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くするのかと思つたら実はこう云う訳わけである。彼のあばたは単に彼の顔を侵蝕しんしょくせるのみならず、とくの昔むかしに脳天まで食い込んでいるのだそうだ。だからもし普通の人のように五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根

本から何十となくあばたがあらわれてくる。いくら

撫なでても、さすつてもほつぽつがとれない。枯野に

蛩ほたるを放ったようなもので風流かも知れないが、細君

の御意ぎよいに入らんのは勿論もちろんの事である。髪さえ長くし

ておけば露見しないですむところを、好んで自己の

非を曝あばくにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を

生やして、こっちのあばたないさいも内済にしたいくらいな

ところだから、ただで生はえる毛を銭ぜにを出して刈り込

ずがいこつ

てんねんとう

ませて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられました

ふいちよう

よと吹聴する必要はあるまい。――これが主人の髪

を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわ

ける原因で、その原因が鏡を見る訳で、その鏡が風

ゆえん

呂場にある所以で、しこうしてその鏡が一つしかな

いと云う事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が

書齋に來ている以上は鏡が離魂病りこんびょうに罹かかつたのかまた

は主人が風呂場から持つて來たに相違ない。持つて

來たとすれば何のために持つて來たのだらう。ある

いは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔むか

し或る学者が何とかいう智識とを訪うたら、和尚おしょう両肌

を抜いで瓢かわらを磨ましておられた。何をこしらえなさる

と質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思つて一生懸命にやつておるところじやと答えた。そこで学者は驚ろいて、なんぼ名僧でも瓢を磨して鏡とする事は出来まいと云うたら、和尚からからと笑いながらそうか、それじややめよ、いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものじやろと罵ののしつたと云うから、主人もそんな事を聞きかじつて風呂場から鏡でも



持つて来て、したり顔に振り廻しているのかも知れない。だいぶ大分物騒になつて来たなと、そつと窺うかがつている。

かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる容子ようすをも

つて一いっちょうらい張来の鏡を見つめている。元来鏡というもの

は気味の悪いものである。深夜ろうそく蠟燭を立てて、広い

部屋のなかで一人鏡を覗のぞき込むにはよほどの勇氣が

いるそうだ。吾輩などは始めて当家の令嬢から鏡を

顔の前へ押し付けられた時に、はっと仰天ぎょうてんして屋敷

のまわりを三度馳かけ回ったくらいである。いかに白

昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つめ

ている以上は自分で自分の顔が怖こわくなるに相違ない

。ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。やや

あつて主人は「なるほどきたない顔だ」と独り言ひとりごとを

云った。自己の醜を自白するのはなかなか見上げた

ものだ。様子から云うとたしかに氣違の所作しよさだが言

うことは真理である。これがもう一步進むと、己おのれ

の醜惡な事が怖こわくなる。人間は吾身が怖ろしい惡党

であると云う事実を徹骨徹髓に感じた者でないと苦

労人とは云えない。苦労人でないとどうてい解脫げだつは

出来ない。主人もここまで来たらついでに「おお怖こわ

い」それでも云いそうなものであるがなかなか云わない。「なるほどきたない顔だ」と云ったあとで、何を考え出したか、ぷうつと頬ほつぺたを膨ふくらました

。そうしてふくれた頬つぺたを平手ひらてで二三度叩たたいて

見る。何のまじないだか分らない。この時吾輩は何だかこの顔に似たものがあるらしいと云う感じがした。よくよく考えて見るとそれは御三おさんの顔である

。ついでだから御三の顔をちよつと紹介するが、そ

れはそれはふくれたものである。この間さる人が穴<sup>あ</sup>

<sup>なもりいなり</sup>

守稻荷から河豚<sup>ふぐ</sup>の提灯<sup>ちようちん</sup>をみやげに持って来てくれた

が、ちようどあの河豚提灯<sup>ふぐちようちん</sup>のようにふくれている

。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失して

いる。もつとも河豚のふくれるのは万遍なく真丸<sup>まんまる</sup>に

ふくれるのだが、お三とくると、元来の骨格が多角

性であつて、その骨格通りにふくれ上がるのだから

、まるで水氣すいきになやんでゐる六角時計のようなもの

だ。御三が聞いたらさぞ怒おこるだろうから、御三はこ

のくらいにしてまた主人の方に歸るが、かくのごと

くあらん限りの空氣をもつて頬ほつぺたをふくらませ

たる彼は前申ぜんす通り手のひらで頬ほぺたを叩きながら

「このくらい皮膚が緊張するとあばたも眼につかん

「とまた独り語をい<sup>ひとごと</sup>った。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大變目立つ

。やっぱりまともに日の向いてる方が平<sup>たいら</sup>に見える

。奇体な物だなあ」と大分感心<sup>だいぶん</sup>した様子であつた

。それから右の手をうんと伸<sup>のび</sup>して、出来るだけ鏡を

遠距離に持つて行つて静かに熟視している。「この

くらい離れるとそんなでもない。やはり近過ぎると  
いかん。――顔ばかりじゃない何でもそんなものだ  
」と悟ったようなことを云う。次に鏡を急に横にし  
た。そうして鼻の根を中心にして眼や額や眉まゆを一度  
にこの中心に向つてくしやくしやとあつめた。見る  
からに不愉快な容貌ようぼうが出来上ったと思つたら「いや  
これは駄目だ」と当人も気がついたと見えて早々やそうそう



めてしまった。「なぜこんなに毒々しい顔だろう

」と少々不審の体<sup>てい</sup>で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ

引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を撫<sup>な</sup>でて、撫で

た指の頭を机の上にあつた吸<sup>すい</sup>取り紙<sup>がみ</sup>の上へ、うんと

押しつける。吸い取られた鼻の膏<sup>あぶら</sup>が丸<sup>ま</sup>るく紙の上へ

浮き出した。いろいろな芸をやるものだ。それから

主人は鼻の膏を塗<sup>と</sup>抹<sup>まつ</sup>した指頭<sup>しとう</sup>を転じてぐいと右眼<sup>うがん</sup>の

したまふた

下瞼を裏返して、俗に云うべっかんこうを見事にや

つて退けた。のあばたを研究しているのか、鏡と睨めにら

競くらをしているのかその辺は少々不明である。気の多

い主人の事だから見ているうちにいろいろになると

見える。それどころではない。もし善意をもつて蒟こん

にやもんどうてき

蒟問答的に解釈してやれば主人は見性自覚けんしょうじかくの方便ほうべんと

してかように鏡を相手にいろいろな仕草しぐさを演じてい

るのかも知れない。すべて人間の研究と云うものは

自己を研究するのである。天地と云い山川さんせんと云い日じつ

月げつと云い星辰せいしんと云うも皆自己の異名いみょうに過ぎぬ。自己

を措おいて他に研究すべき事項は誰人たれびとにも見出し得ぬ

訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら

、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも

自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない

。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来な  
い相談である。それだから古来の豪傑はみんな自力  
で豪傑になった。人のお蔭で自己が分るくらいなら  
、自分の代理に牛肉を喰わして、堅いか柔かいか判  
断の出来る訳だ。<sup>あした</sup>朝に法を聴き、<sup>ゆうべ</sup>夕に道を聴き、<sup>ご</sup>梧  
<sup>せんとうか</sup>前灯下<sup>じしやう</sup>に書卷<sup>ちやうはつ</sup>を手にするのは皆この自証を挑撥する  
の<sup>ほうべん</sup>方便<sup>ぐ</sup>の具<sup>ぐ</sup>に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の弁ず

る道のうち、乃至は五車にあまる蠹紙堆裏に自己が

ゆえん

存在する所以がない。あれば自己の幽霊である。も

つともある場合において幽霊は無霊より優るかも知

むれい

れない。影を追えば本体に逢着する時がないとも限

ほうちやく

らぬ。多くの影は大抵本体を離れぬものだ。この意

だいぶ

味で主人が鏡をひねくつてゐるなら大分話せる男だ

うのみ

。エピクテタスなどを鵜呑にして学者ぶるよりも遙

はる

かにましだと思ふ。

鏡は己惚うぬぼれの醸造器であるごとく、同時に自慢の消

毒器である。もし浮華虚栄の念をもつてこれに対す

る時はこれほど愚物を煽動せんどうする道具はない。昔から

増上慢ぞうじょうまんをもつて己おのれを害し他そこのを戕じうた事蹟じせきの三分の二

はたしかに鏡の所作しよさである。仏国革命の当時物好き

な御医者さんが改良首きり器械を発明して飛んだ罪

をつくったように、始めて鏡をこしらえた人も定め

ねざめ

し寢覚のわるい事だろう。しかし自分に愛想あいその尽き

かけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど薬にな

る事はない。

けんしゅうりようぜん

妍醜瞭然だ。

こんな顔でよくまあ人で

そうろうそ

候と反りかえって

こんにち

今日まで暮らされたものだと気が

つくにきまつている。そこへ気がついた時が人間の

しょうがい

生涯しょうがい中もつともありがたい期節である。自分で自分

の馬鹿を承知しているほど尊たつとく見える事はない

。この自覚性馬鹿じかくせいばかの前にはあらゆるえらがり屋がこ

とごとく頭を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂こう

然ぜんとして吾を輕侮嘲笑けいぶちょうしやうしているつもりでも、こちら

から見るとその昂然たところが恐れ入って頭を下

げている事になる。主人は鏡を見て己おのれの愚を悟る

ほどの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せられ



る痘痕とうこんの銘めいくらいは公平に読み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の賤いやしきを会得えとくする楷梯かいていにもなろう。たのもしい男だ。これも哲学者からやり込められた結果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をうかがっていると、それとも知らぬ主人は思ふ存分あかんべえをしたあとで「大分だいぶん充血けっしゆしているようだ。やつぱり慢性結

膜炎だ」と言いながら、人さし指の横つらでぐいぐ

い充血した<sup>まぶた</sup>瞼をこすり始めた。大方<sup>おおかたかゆ</sup>痒いのだろうけ

れども、たださえあんなに赤くなっているものを

、こう<sup>こす</sup>擦ってはたまるまい。遠からぬうちに<sup>しおだい</sup>塩鯛の

眼玉のごとく<sup>ふらん</sup>腐爛するにきまつてる。やがて眼を開<sup>ひら</sup>

いて鏡に向ったところを見ると、果せるかなどんよ

りとして北国の冬空のように曇っていた。もつとも

平常ふだんからあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形

容詞を用いると混沌こんとんとして黒眼と白眼が割判ほうはんしない

くらい漠然ばくぜんとしている。彼の精神が朦朧もうろうとして不得

要領底ていに一貫しているごとく、彼の眼も曖々あいあいぜんまいまい然々

然ぜんとして長えとこしに眼窩がんかの奥に漂ただようている。これは胎毒たいどく

のためだとも云うし、あるいは疱瘡ほうそうの余波だとも解

釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介

になつた事もあるそうだが、せつかく母親の丹精も

あるにその甲斐かいあらばこそ、今日こんにちまで生れた当時

のままではんやりしている。吾輩ひそかに思うにこ

の状態は決して胎毒や疱瘡のためではない。彼の眼

玉がかように晦渋かいじゆう濁こんだくの悲境に彷徨ほうこうしているのは

とりも直さず彼の頭脳が不透明ふとうめいの實質から構成

されていて、その作用が暗澹あんたんめいもう溟濛の極に達している

から、自然とこれが形体の上にあらわれて、知らぬ  
母親にいらぬ心配を掛けたんだろう。煙たって火あ  
るを知り、まなこ濁って愚<sup>ぐ</sup>なるを証す。して見ると  
彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保<sup>てんぽう</sup>銭の<sup>せん</sup>ごとく  
穴があいているから、彼の眼もまた天保銭と同じく  
大きな割合に通用しないに違ない。

今度は髯<sup>ひげ</sup>をねじり始めた。元来から行儀のよくな

い髯でみんな思い思いの姿勢をとって生はえている

。いくら個人主義が流行はやる世の中だつて、こう町々まちまち

に我儘わがままを尽くされては持主の迷惑はさこそと思ひや

られる、主人もここに鑑かんみるところあつて近頃は大おお

に訓練を与えて、出来る限り系統的に按排あんばいするよう

に尽力している。その熱心の功果こうかは空むなしからずして

昨今ようやく歩調が少しとこのうようになつて来た

。今までは髯が生えておったのであるが、この頃は

髯を生やしているのだと自慢するくらいになつた

。熱心は成効の度に応じて鼓舞せられるものである

から、吾が髯の前途有望なりと見てとつて主人は朝

な夕な、手がすいておれば必ず髯に向つて鞭撻を加

える。彼のアムビションは独逸皇帝陛下のように

、向上の念の熾な髯を蓄えるにある。それだから毛

孔<sup>あな</sup>が横向であろうとも、下向であろうとも聊<sup>いささか</sup>か頓着

なく十把<sup>じっぱひ</sup>一とからげに握<sup>にぎ</sup>つては、上の方へ引つ張り

上げる。髯もさぞかし難儀であろう、所有主たる主

人すら時々は痛い事もある。がそこが訓練である

。否<sup>いや</sup>でも応でもさかに扱<sup>こ</sup>き上げる。門外漢から見

と気の知れない道楽のようであるが、当局者だけは

至当の事と心得ている。教育者がいたずらに生徒の



本性ほんせいを撓ためて、僕の手柄を見給えと誇るようなものでごう毫も非難すべき理由はない。

主人が満腔まんこうの熱誠をもつて髯を調練していると

、台所から多角性の御三おさんが郵便が参りましたと、例

のごとく赤い手をぬつと書斎の中うちへ出した。右手みぎに

髯をつかみ、左手ひだりに鏡を持った主人は、そのまま入

口の方を振りかえる。八の字の尾に逆さか立だちを命じ

たような髯を見るや否や御多角おたかくはいきなり台所へ引

き戻して、ハハハハと御釜おかまの蓋ふたへ身をもたして笑っ

た。主人は平気なものである。悠々ゆうゆうと鏡をおろして

郵便を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいか  
めしい文字が並べてある。読んで見ると

拝啓いよいよ愈御多祥奉賀候回顧すれば日露の戦役は連戦連

勝の勢いきおいに乗じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士

は今や過半万歳声裡りに凱歌を奏し国民の歡喜何もの

か之これに若しかん曩さきに宣戰の大詔煥発たいしやうかんぱつせらるるや義勇公

に奉じたる将士は久しく万里の異境に在ありて克よく寒

暑の苦難を忍び一意戰鬪に従事し命めいを国家に捧げた

るの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり而しして

軍隊の凱旋は本月を以て殆ほとんど終了を告げんとす依

つて本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出

征將校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱

旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉いしやせんが為め熱

誠これ之を迎え聊感謝いささかの微衷びちゆうを表し度就たくついては各位の御協

賛を仰ぎ此盛典を挙行するの幸さいわいを得ば本会の面目これ不

過にすぎず之と存候間何卒御賛成奮そろつて義捐なにとぞあらんことを只ふるひた

管希望の至に堪たえず候敬具そろ

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一

過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔をしてい

る。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東

北凶作の義捐金を二円とか三円とか出してから、逢

う人毎に義捐をとられた、ぶごととられたと吹聴ふいちやうしている

くらいである。義捐とある以上は差し出すもので

とられるものでないには極きまっている。泥棒にあつ

たのではあるまいし、とられたとは不穩当である

。しかるにも関せず、盜難にでも雇かかつたかのごとく

に思つてゐらしい主人がいかに軍隊の歡迎だと云つ

て、いかに華族様の勧誘だと云つて、強談ごうだんで持ちか

けたらいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出す

ような人間とは思われない。主人から云えば軍隊を

歓迎する前にまず自分を歓迎したいのである。自分を歓迎した後あとなら大抵のものは歓迎しそうであるが、自分が朝夕ちようせきに差し支さえる間は、歓迎は華族様に任まかせておく了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「ヤ、これも活版だ」と云った。

時下秋冷こうの候ころに候処貴家益々御隆盛の段奉賀上候陳がしあげたてまつりそのふ

れば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家

の為に妨げられ一時其極に達し候得共是れ皆不肖

そうらえども

ふしよう

しんさく

針作が足らざる所に起因すと存じ深く自ら警むる所

みずか いまし

がしんしょうたん

あり臥薪嘗胆其の苦辛の結果漸く茲に独力以て我が

くしん

ようや ここ

理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候

そろ

そ

其は別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる

そろ

しんさく

書冊出版の義に御座候本書は不肖針作が多年苦心研



究せる工芸上の原理原則に法のつとり真に肉を裂き血を

絞るの思を為なして著述せるものに御座候そろよ因よつて本書

あまね

を普く一般の家庭へ製本実費に些少さしょうの利潤を附して

まごうきゆう

御購求を願ひ一面斯道しどう発達の一助となすと同時に又

きんしょう

一面には僅少の利潤を蓄積して校舎建築費に当つる

つもり

そろ

なんとも

心算に御座候依つては近頃何共恐縮の至りに存じ候

なしくださる

おぼしめ

ここ

えども本校建築費中へ御寄附被成下と御思召し茲に

呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へな

なしくだされそろ

りとも御分与被成下候て御賛同の意を御表章被成下

なしくだされ

度伏して懇願仕候勿々敬具

そろそうそう

大日本女子裁縫最高等大学院

校長

縫田針作

九拜

ぬいだしんさく

とある。主人はこの鄭重なる書面を、冷淡に丸めて

ていちょう

ぽんと屑籠くずかごの中へ抛り込ほうんだ。せつかくの針作君の

九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかかる。第三信はすこぶる風変

りの光彩を放っている。状袋が紅白のだんだらで

、飴あめん棒ぼうの看板のごとくはなやかなる真中に珍野ちんのく苦

沙弥しやみ先生虎皮こひか下と八分体はっぶんたいで肉太したたに認めてある。中か

らお太たさんが出るかどうかどうだか受け合あわないが表おもてだけ

はすこぶる立派なものだ。

若し我を以て天地を律すれば一口ひとくちにして西江せいこうの水を

吸いつくすべく、若し天地を以て我を律すれば我は

すなわはくじょう

則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と什

んも

塵の交渉がある。……始めて海鼠なまこを食い出せる人いだは

其胆力に於て敬すべく、始めて河豚ふぐを喫せる漢きつは其

勇氣に於て重んずべし。海鼠を食えるものは親鸞の

再来にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり

。苦沙弥先生の如きに至つては只干瓢の酢味噌を知

るのみ。干瓢の酢味噌を食つて天下の士たるものは

、われ未だ之を見ず。……

親友も汝を売るべし。父母も汝に私あるべし。愛人

も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし

しやくろく いつちよう

爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する

学問には黷かびが生はえるべし。汝何を恃たのまんとするか

天地の裡うちに何をたのまんとするか。神？ 神は人

間の苦しまぎれに捏造でつぞうせる土偶どぐうのみ。人間のせつな

糞ぐその凝結せる臭骸のみ。恃たのむまじきを恃んで安しと

云う。咄々とつとつ、醉漢漫みだりに胡乱うろんの言辞を弄して、蹣跚まんさん

として墓に向う。油尽きて灯と白おのずから滅す。業尽きて何

物をか遺す。のこ 苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ

。……

人を人と思わざれば畏るる所なし。おそ 人を人と思わざ

るものが、吾を吾と思わざる世を憤るは如何。いきどお 権貴

栄達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し

ただひと

。只他の吾を吾と思わぬ時に於て怫然として色を作な

す。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、他の吾を吾と思わぬ時、不平家は発作的ほっさてきに天降る。あまくだ此発作的活動を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人參多し先生何が故に服せざる。

在巢鴨

てんどうこうへい  
天道公平

再拝



針作君は九拝であつたが、この男は単に再拝だけ

である。寄附金の依頼でないだけに七拝ほど横風おうふうに

構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこ

ぶる分りにくいものだ。どこの雑誌へ出しても没書

になる価値は充分あるのだから、頭脳の不透明をも

つて鳴る主人は必ず寸断ずたずたに引き裂いてしまふだ

ろうと思おもひのほか、打ち返し打ち返し読み直している

。こんな手紙に意味があると考えて、あくまでその意味を究め<sup>きわ</sup>ようという決心かも知れない。およそ天地の間<sup>かん</sup>にわからんものは沢山あるが意味をつけてつかないものは一つもない。どんなむずかしい文章でも解釈しようとするれば容易に解釈の出来るものだ

。人間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる事だ。それどころではな

い。人間は犬であると言つても豚であると言つても別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと言つても構わん、宇宙は狭いと云つても差し支<sup>さ</sup>え<sup>つか</sup>はない。烏が白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊<sup>か</sup>とか理窟<sup>りくつ</sup>さえつけられようと意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ

附けて説明し通して来た男はなおさら意味をつけた  
がるのである。天氣の悪るいになぜグード・モー  
ニングですかと生徒に問われて七日間<sup>なぬかかん</sup>考えたり、コ  
ロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞か  
れて三日三晩かかって答を工夫するくらいな男には  
、干瓢<sup>かんぴょう</sup>の酢味噌<sup>すみそ</sup>が天下の士であろうと、朝鮮の仁参<sup>にんじん</sup>  
を食って革命を起そうと随意的意味は随処に湧<sup>わ</sup>き出

る訳である。主人はしばらくしてグード・モーニング流にこの難解な言句を呑み込んだと見えて「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人になか意味深長だ。天晴あっぱれな見識だ」と大變賞賛した。この一言いちげんでもない。でも主人の愚ぐなところはよく分るが、翻ひるがえって考えて見るといささかもつともな点もある。主人は何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している

。これはあながち主人に限った事でもなかろう。分  
らぬところには馬鹿に出来ないものが潜伏して、測  
るべからざる辺には何だか気高い<sup>けだか</sup>心持が起るものだ  
。それだから俗人はわからぬ事をわかったように吹<sup>ふい</sup>  
聴<sup>ちよう</sup>するにも係<sup>かかわ</sup>らず、学者はわかった事をわからぬよ  
うに講釈する。大学の講義でもわからん事を喋<sup>しゃべ</sup>舌る  
人は評判がよくってわかる事を説明する者は人望が

ないのでよく知れる。主人がこの手紙に敬服した  
のも意義が明瞭であるからではない。その主旨が那  
辺へんに存するかほとんど捕とらえ難いからである。急に海  
鼠まこが出て来たり、せつな糞ぐそが出てくるからである

。だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は

道家どうけで道德経を尊敬し、儒家じゅかで易経を尊敬し、禅ぜ

家で臨済録りんざいろくを尊敬すると一般で全く分らんからであ

る。ただ但し全然分らんでは気がすまんから勝手な註釈

をつけてわかつた顔だけはする。わからんものをわ

かつたつもりで尊敬するのは昔から愉快なものであ

る。——主人は恭しくうやうや八分体はつぶんたいの名筆を巻き納めて

、これを机上に置いたままふところ懷手をして冥想めいそうに沈んで

いる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内



を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に似合  
わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書斎  
のうちでその声を聞いているのだが懐手のまま毫も  
動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でない  
という主義か、この主人は決して書斎から挨拶をし  
た事がない。下女は先刻洗濯石鹼さつきせんたくシャボンを買いに出た。細  
君は憚りはばかである。すると取次に出べきものは吾輩だ

けになる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人

くつぬぎ

は沓脱から敷台へ飛び上がつて障子を開け放つてつ

かつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ

。座敷の方へ行つたなと思ふと襖を二三度あけたり

ふすま

閉てたりして、今度は書斎の方へやつてくる。

じょうだん

「おい冗談じゃない。何をしているんだ、御客さん

だよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこにいるなら何とか云え  
ばいいのに、まるで空家あきやのようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れ、くらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を力<sup>つと</sup>めているんだもの

」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなっ

た日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ

困るんだぜ。実は僕一人来たんじゃないよ。大変な

御客さんを連れて来たんだよ。ちよつと出て逢つて

くれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちよつと出て逢つてくれたまえ

。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懷手ふところのままぬつと立ちながら「また人を担かつ

ぐつもりだろう」と椽側えんがわへ出て何の気もつかずに客

間へ這<sup>はい</sup>入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の

老人が肅然<sup>しゆくぜん</sup>と端坐<sup>たんざ</sup>して控<sup>ひか</sup>えている。主人は思わず懷

から両手を出してぺたりと唐紙<sup>からかみ</sup>の傍<sup>そば</sup>へ尻を片づけて

しまった。これでは老人と同じく西向きであるから

双方共挨拶のしようがない。昔<sup>むかし</sup>堅<sup>かた</sup>氣<sup>ぎ</sup>の人は礼義はや

かましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を

促<sup>うな</sup>がす。主人は両三年前までは座敷はどこへ坐つて

も構わんものと心得ていたのだが、その後<sup>ご</sup>ある人か

ら床の間の講釈を聞いて、あれは上段の間<sup>ま</sup>の変化し

たもので、上使<sup>じょうし</sup>が坐わる所だと悟つて以来決して床

の間へは寄りつかない男である。ことに見<sup>み</sup>ず知らず

の年長者が頑<sup>がん</sup>と構えているのだから上座<sup>じょうざ</sup>どころでは

ない。挨拶<sup>あいさつ</sup>さえ碌<sup>ろく</sup>には出来ない。一応頭をさげて

「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、御謙遜ごけんそんでは恐れ入る。かえって手前



が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は

真赤になつて口をもごもご云わせている。まっか精神修養

もあまり効果がないようである。迷亭君は襖の影かふすま

ら笑いながら立見をしていたが、もういい時分だと

思つて、後ろうしろから主人の尻を押しやりながら

「まあ出たまえ。そう唐紙からかみへくつつついては僕が坐る

所がない。遠慮せず前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い今日こんにちは御近所

を通行致したもので、御礼かたがた旁伺った訳で、どうぞ御

見知りおかれまして今後共宜よろしく」と昔むかし風な口上

を淀よどみなく述べたてる。主人は交際の狭い、無口な

人間である上に、こんな古風な爺じいさんとはほとんど

出会った事がないのだから、最初から多少場ばうての

気味で辟易へきえきしていたところへ、滔とう々と浴びせかけら

れたのだから、朝鮮仁参ちようせんじんじんも飴あめん棒の状袋もすっきり

忘れてしまつてただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちよつと伺がうはずでありまして  
たところ……何分よろしく」と云い終つて頭を少々  
畳から上げて見ると老人は未だいまに平伏しているので  
、はつと恐縮してまた頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私ももとは  
こちらに屋敷も在あつて、永らく御膝元でくらししたも

のですが、瓦解がかいの折にあちらへ参つてからとんと

出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らん

くらいで、——迷亭にでも伴つれてあるいてもらわん

と、とても用達ようたしも出来ません。滄桑そうそうの変へんとは申しな

がら、御入国ごにゆうこく以来三百年も、あの通り將軍家の……

」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが

明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかったでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の御代でなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り今日の総会にも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。  
苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会があるの  
でわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上  
野へ出掛けたんだが今その帰りがけなんだよ。それ  
だからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロック  
コートを着ているのさ」と注意する。なるほどフロ  
ックコートを着ている。フロックコートは着ている

がすこしもからだに合わない。袖そでが長過ぎて、襟えりが

おっ開ひらいて、背中せなかへ池が出来て、腋わきの下が釣るし上

がっている。いくら不恰好ぶかつこうに作ろうと云ったって

、こうまで念を入れて形を崩くずす訳にはゆかないだろ

う。その上白シャツと白襟しろえりが離れ離れになって、仰あお

むくと間から咽喉のどぼとけ仏が見える。第一黒い襟飾りが襟

に属しているのか、シャツに属しているのか判然はんぜんし



ない。フロックはまだ我慢が出来るが白髪しらがのチヨン

鬚まげははなはだ奇観である。評判の鉄扇てっせんはどうかと目

を注つけると膝の横にちゃんと引きつけている。主人

はこの時ようやく本心に立ち返って、精神修養の結

果を存分に老人の服装に応用して少々驚いた。まさ

か迷亭の話ほどではなかろうと思っていたが、逢っ

て見ると話以上である。もし自分のあ、ば、た、が歴史的

研究の材料になるならば、この老人のチョンまげ鬚や鉄

扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思ったが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云って話を途切らすのも礼に欠けると思つて

「だいぶ人が出ましたろう」と極きわめて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので——どうも近来は人間が物見高くなつたようだがすな。昔むかしはあんなではなかつたが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかつたですな

」と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知しつ高たか振ふりをした訳ではない。ただ朦朧もうろうたる頭脳から

好い加減に流れ出す言語と見れば差さし支つかえない。

「それにな。皆この甲割りかぶとわへ目を着けるので」

「その鉄扇は大分だいぶん重いものでございましょう」

「苦沙弥君、ちよつと持つて見たまえ。なかなか重

いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と

主人に渡す。京都の黒谷で参詣人くろだにさんけいにんが蓮生坊れんしょうぼうの太刀たちを

戴いたくようなかたで、苦沙弥先生しばらく持つていた

が「なるほど」と云つたまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは甲割とかぶとわりとな  
称なえて鉄扇とはまるで別物で……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

「兜を割るので、——敵の目がくらむ所を撃うちとつ

たものでがす。くすのきまさしげ楠正成時代から用いたようで……」

「伯父さん、そりや正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。  
けんむじだい  
建武時代の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱っていました  
たぜ。苦沙弥君、今日歸りにちようどいい機会だから  
ら大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、物理の  
実験室を見せて貰ったところがね。この甲割が鉄だ  
ものだから、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で

しょう

性のいい鉄だから決してそんな虞おそれはない」

「いくら性のいい鉄だってそうはいきませんよ。現

に寒月がそう云ったから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラス球だまを磨すっている男か

い。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事

がありそうなものだ」

かわいそう

「可愛想に、あれだって研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨<sup>す</sup>りあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢土<sup>かんど</sup>では玉人<sup>きゆうじん</sup>と称したもので至って身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求めゐる。



「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆形而下けいじかの学でちよつと結

構なようだが、いざとなるとすこしも役には立ちま

せてな。昔はそれと違って侍は皆命懸けいのちがの商買だしょうばい

から、いざと云う時に狼狽ろうばいせぬように心の修業を致

したもので、御承知でもあらつしやろうがなかなか

玉を磨つたり針金を縋よつたりするような容易たやすいもの

ではなかったのがすよ」

「なるほど」とやはりかしこまっている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懷ふところでころで手をして坐り込んでるんでしよう」

「それだから困る。決してそんな造作ぞうさのないもので

はない。孟子もうしは求放心きゅうしんと云われたくらいだ。邵康節しょうこうせつ

は心要放しんようほうと説いた事もある。また仏家ぶつかでは中峯和尚ちゅうおうおしょう

と云うのが具不退ぐふたいてん転と云う事を教えている。なかなか

か容易には分らん」

「どうてい分りっこありませんね。全体どうすれば

いいんです」

「御前は沢菴たくあんぜんじ禪師の不動智神妙録ふどうちしんみょうろくというものを読ん

だ事があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こうぞ。敵の身の働はたらきに心を置けば

、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀たちに心を

置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らん

と思うところに心を置けば、敵を切らんと思うところ

ろに心を取らるるなり。わが太刀に心を置けば、我

太刀に心を取らるるなり。われ切られじと思うところ

ろに心を置けば、切られじと思うところに心を取ら

るるなり。人の構に心を置けば、人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きどころはないとある」

あんしょう

「よく忘れずに暗誦したものですな。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじやありませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりしているんですから。客があつても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだから大丈夫ですよ」

「や、それは御奇特な事で——御前などもちとごい  
つしよにやったらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分  
が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思って  
いらつしやるんでしよう」

「實際遊んでるじゃないかの」

「ところが閑中かんちゆう自おのから忙ぼうありでね」

「そう、そこつ粗忽だから修業をせんといかないと云うの

よ、忙中おのずか自かんら閑ありと云う成句せいくはあるが、閑中自かんら

忙ありと云うのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん

」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「ハハハハそうなっちやかなあ敵うなぎわない。時に伯父さん

どうです。久し振りで東京の鰻うなぎでも食ちくつちやあ。竹



葉でも奢よこりましょう。これから電車で行くとすぐで

す」

「鰻も結構だが、今日はこれからすい原はらへ行く約束

があるから、わしはこれで御免ごうむを蒙ろう」

「ああ杉原すぎはらですか、あの爺じいさんも達者ですね」

「杉原すぎはらではない、すい原はらさ。御前はよく間違ばかり

云って困る。他人の姓名を取り違えるのは失礼だ

。よく気をつけんといけない」

「だって杉原すぎはらとかいてあるじやありませんか」

「杉原すぎはらと書いてすい原はらと読むのさ」

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。名目みょうもく読みと云つて昔か

らある事さ。蚯蚓きゅういんを和名わみょうでみみずと云う。あれは目、

見ずの名目よみで。蝦蟆がまの事をかいると云うのと同

じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟆を打ち殺すと仰向きにかゝる。あおむそれを名目読

みにかゝると云う。透垣をすい垣、すぎがき茎立をくく立

、皆同じ事だ。すいはら杉原をすぎ原などと云うのは田舎も

のの言葉さ。少し気を付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい原へこれから行くんですか。困

つたな」

「なに厭いやなら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇って頂いて、ここから乗って行こう」

主人は畏かしこまって直ちに御三おさんを車屋へ走らせる。老

人は長々と挨拶をしてチヨンまげあたま髷頭へ山高帽をいただ  
いて帰って行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び座蒲団ざぶとんの上に坐つたなりふところ懐手を

して考え込んでいる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持つ

て仕合せなものさ。どこへ連れて行つてもあの通り  
なんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろ  
かしたつもりで大に喜おおんでいる。

「なにそんなに驚きやしない」

「あれで驚かなけりや、胆力の据すわつたもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあ  
るようだ。精神の修養を主張するところなぞは大におお

敬服していい」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになるとやっぱりあの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しっかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利きかないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今

の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行つたつて際限はありやしない。とうてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に味あじわいがある。心そのものの修業をするのだから」とせんだつて哲学者から承わつた通りを自説のように述べ立てる。

「えらい事になつて来たぜ。何だか八木独やぎどく仙君せんのよ



うな事を云つてゐるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははっと驚ろいた

。実はせんだって臥竜窟がりようくつを訪問して主人を説服に及

んで悠然ゆうぜんと立ち歸つた哲学者と云うのが取も直さず

この八木独仙君であつて、今主人が鹿爪しかつめらしく述べ

立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なので

あるから、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を問か

んふようはつ

不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの

かりばな

仮鼻を挫くじいた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣

のん

呑のんだから念を推おして見る。

「聞いたの、聞かないのって、あの男の説ときたら

こんにち

十年前学校にいた時分と今日と少しも変りやしな

い」

「真理はそう変るものじゃないから、変らないところがたのもしいかも知れない」

「まあそんなひいき鼻負があるから独仙もあれで立ち行く

んだね。第一八木と云う名からして、よく出来てる

よ。あの髯ひげが君全く山羊やぎだからね。そうしてあれも

寄宿舎時代からあの通りのかつこう恰好で生えていたんだ

。名前の独仙なども振ふるったものさ。昔むかし僕のところ

へ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。いつまで立っても同じ事を繰り返してやめないから、僕が君もう寝ねようじやないかと云うと、先生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切つて、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから君は眠くなかろうけれども、僕の方は大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むよう

にして寝かしたまではよかつたが——その晩鼠ねずみが出

て独仙君の鼻のあたまを噛かじつてね。夜なかに大騒ぎ

さ。先生悟つたような事を云うけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。鼠

の毒が総身そうしんにまわると大変だ、君どうかしてくれと

責めるには閉口したね。それから仕方がないから台

所へ行つて紙片かみぎれへ飯粒を貼はつてごまかしてやつたあ

ね」

「どうして」

「これは舶来こうやくの膏藥こうやくで、近來ドイツ獨逸ドイツの名医が發明した

ので、印度人インドじんなどの毒蛇に噛かまれた時に用いると即

効があるんだから、これさえ貼っておけば大丈夫だと云ってね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだ

ね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまつたのさ。あ

くる日起きて見ると膏藥の下から糸屑いとくずがぶらさがつ

て例の山羊髯やぎひげに引つかかつていたのは滑稽こっけいだつたよ

」

「しかしあの時分より大分だいぶんえらくなつたようだよ」

「君近頃逢ったのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行つた

」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時大に感心おおいしてしまつたから、僕も大に

奮発して修養をやるうと思つてるところなんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真まに受



けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざとなると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知ってるだろう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人<sup>だいぶ</sup>大分説があるようじゃないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいも

のさ。禅の機鋒きほうは峻峭しゅんしょうなもので、いわゆる石火せつかの機き

となると怖こわいくらい早く物に応ずる事が出来る。ほ

かのものが地震だと云って狼狽うろたえているところを自

分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効

があらわれて嬉しいと云って、跛びつこを引きながらうれ

しがっていた。負惜みの強い男だ。一体ぜん禅とか仏ぶつと

か云つて騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはいぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の寝言ねご見たような事を何か云つてつたろう」

「うん電光影裏でんこうえいりに春風しゅんぷうをきるとか云う句を教えて行つたよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱おはこなんだから

おかしいよ。無覺禪師むかくぜんじの電光ときたら寄宿舍中誰も

知らないものはないくらいだった。それに先生時々

せき込むと間違えて電光影裏を逆さかさまに春風影裏に

電光をきると云うから面白い。今度ためして見たま

え。向むこうで落ちつき払って述べたてているところを

こつちでいろいろ反対するんだね。するとすぐ顛てん

倒とうして妙な事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢つちや叶<sup>かな</sup>わない」

「どつちがいたずら者だか分りやしない。僕は禅坊

主だの、悟つたのは大嫌だ。僕の近所に南蔵院と云<sup>なんぞういん</sup>

う寺があるが、あすここに八十ばかりの隠居がいる

。それでこの間の白雨<sup>ゆうだち</sup>の時寺内<sup>じない</sup>へ雷<sup>らい</sup>が落ちて隠居の

いる庭先の松の木を割<sup>さ</sup>いてしまった。ところが和尚<sup>おしょう</sup>

泰然として平気だと云うから、よく聞き合わせて見

るとから聾つんぼなんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そんなものさ。独仙も一人で悟っていればいいのだが、ややともすると人を誘い出すから悪い。現に独仙の御蔭で二人ばかり気狂きちがいにされているからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野陶然りのとうぜんさ。独仙の御蔭で大おおに禅学に凝こり固まって鎌倉へ出掛けて行って、とうと

う出先で氣狂になつてしまった。 円覺寺えんがくじの前に汽車

の踏切りがあるだろう、あの踏切り内うちへ飛び込んで

レールの上で座禪をするんだね。それで向うから来

る汽車をとめて見せると云う大氣焰だいきえんさ。もつとも汽

車の方で留つてくれたから一命だけはとりとめたが

、その代り今度は火に入いつて焼けず、水に入いつて溺おぼ

れぬ金剛不壞こんごうふえのからだだと号して寺内じないの蓮池はすいけへ這入はい

つてぶくぶくあるき廻ったもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸さいわい、道場の坊主が通りかかって助けてく

れたが、その後東京へ帰かえってから、とうとう腹膜炎

で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎

になった原因は僧堂で麦飯や万年漬まんねんづけを食ったせいだ

から、つまるところは間接に独仙が殺したようなも



のさ」

「むやみに熱中するのも善<sup>よ</sup>し悪<sup>あ</sup>ししだね」と主人はちよつと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

「立町<sup>たちまちろうばいくん</sup>老梅君さ。あの男も全く独仙にそそのかされ

て鰻が天上するような事ばかり言っていたが、とう

とう君本物になつてしまった」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が独仙なら、立町は豚仙ぶたせんさ、あのくらい食

意地のきたない男はなかったが、あの食意地と禅坊

主のわる意地が併発へいはつしたのだから助からない。始め

は僕らも気がつかなかったが今から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松

の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国

では蒲鉾かまぼこが板へ乗って泳いでいますのって、しきり

に警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよか

ったが君表のどぶきんへ金とんを掘りに行きましよう

促<sup>うな</sup>がすに至っては僕も降参したね。それから二三日<sup>にさんち</sup>

するとついに豚仙になって巢鴨へ収容されてしまっ

た。元来豚なんぞが気狂になる資格はないんだが

、全く独仙の御蔭であすこまで漕ぎ付けたんだね

。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

「いるだんじやない。<sup>じだいきよう</sup>自大狂で<sup>だいきえん</sup>大気焰を吐いている

。近頃は立町老梅なんて名はつまらないと云うので、みずか自てんどうこうへいら天道公平と号して、天道の権化ごんげをもつて任じている。すさまじいものだよ。まあちよつと行つて見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。氣狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々こうへいは孔平とも書く事がある。それで何でも

世人が迷つてゐるからぜひ救つてやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四五通貰つたが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりとられたよ」

「それじゃ僕の所<sup>ところ</sup>へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やつぱり赤い状袋だろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変った状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在<sup>あ</sup>って赤しと云う豚仙の格言を示したんだって：

…」

「なかなか因縁<sup>いんねん</sup>のある状袋だね」

「氣狂だけに大に凝おおいこったものさ。そうして氣狂にな

つても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ

。君の所へも何とか云つて来たろう」

「うん、海鼠なまこの事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。それから？」



「それから河豚ふぐと朝鮮仁参ちようせんか何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨うまいね。おおかた河

豚を食って中あたつたら朝鮮仁参せんを煎じて飲めとでも云

うつもりなんだろう」

「それでもないようだ」

「そうでなくとも構わないさ。どうせ気狂だもの

。それっきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がれはきびし過ぎる。それで大に君をやり込めたつもりに違ない。大出来だ。天

おおい

道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がって、大に笑

い出す。主人は少からざる尊敬をもつて反覆読誦し

どくしやう

た書翰しょかんの差出人が金箔きんぱくつきの狂人であると知ってか

ら、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気が

して腹立たしくもあり、また瘋癲病者の文章をさほ

ふうてんびよう

ど心勞して翫味がんみしたかと思うと恥ずかしくもあり

、最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も

多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので

、立腹と、慚愧ざんきと、心配の合併した状態で何だか落

ちつかない顔付ひかをして控えている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が

二た足ほど沓脱くつぬぎに響いたと思つたら「ちよつと頼み

ます、ちよつと頼みます」と大きな声がする。主人

の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男で

あるから、御三おさんの取次に出るのも待たず、通れと云

いながら隔ての中の間まを二た足ばかりに飛び越えて

玄関おとに躍り出した。人のうちへ案内も乞わずにつか

つか這<sup>はい</sup>入り込むところは迷惑のようだが、人のうち

へ這入った以上は書生同様取次を務<sup>つと</sup>めるからはなは

だ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違な

い、その御客さんが玄関へ出張するのに主人たる苦

沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通

の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずである

が、そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ

尻を落ちつけている。但し落ちつけているのと、落ちついているのとは、その趣は大分だいぶん似ているが、その実質はよほど違う。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちよつと御足労だが出てくれたまえ。君でなくっちゃ、間に合わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ずふところ懐手

のままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握ったまましやがんで挨拶をしている

。すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には

警視庁刑事巡查吉田虎蔵とある。虎蔵君と並んで立

よしだとらぞう

っているのは二十五六の背せいの高い、いなせな唐棧とうざんず

くめの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懐

手をしたまま、無言で突立つったっている。何だか見たよ

うな顔だと思つてよくよく観察すると、見たような  
どころじゃない。この間深夜御来訪になつて山の芋やま いも  
を持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公  
然と玄関からおいでになつたな。

「おいこの方かたは刑事巡査でせんだつての泥棒をつら  
まえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざお  
いでになつたんだよ」



主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと

見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭寧ていねいに御辞儀

をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので

、こつちが刑事だと早合点はやがてんをしたのだらう。泥棒も

驚ろいたに相違ないが、まさか私わたしが泥棒ですよと断

わる訳にも行かなかつたと見えて、すまして立って

いる。やはり懷手のままである。もつとも手錠てじょうをは

めているのだから、出そうと云つても出る氣遣きづかいはな

い。通例のものならこの様子でたいはいはわかるは

ずだが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみ

に役人や警察をありがたがる癖がある。御上おかみの御威

光となると非常に恐しいものと心得ている。もっと

も理論上から云うと、巡査なぞは自分達が金を出し

て番人に雇つておくのだくらいの事は心得ているの

だが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にぴよこぴよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬<sup>むく</sup>つたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

巡査はおかしかったと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時までに日本堤<sup>にほんづつみ</sup>の分署まで来

て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生た  
いがい忘れている。ただ覚えているのは多々良三平たたらさんぺい  
の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わん  
と思つたが、盗難品は……と云いかけてあとが出な  
いのはいかにも与太郎よたろうのようで体裁ていさいがわるい。人が  
盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきな

がら、明瞭の答が出来んのは一人前ではない証拠だいちにんまえと、思い切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかつたと見えて、下を向いて着物の襟えりへあごを入れた。迷亭はアハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかつたと見えるね」と云つた。巡查だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻ったようです。——まあ来て見たら分るでしょう

。それでね、下げ渡したら請書うけしよが入るから、印形いんぎようを

忘れずに持っておいでなさい。——九時までに来な

くってはいかん。にほんづつみぶんしよ日本堤分署です。——浅草警察署

の管轄かんかつない内の日本堤分署です。——それじゃ、さよう

なら」と独りひとで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて

門を出る。手が出せないの、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行ってしまった。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらし、ぴしやりと立て切った。

「アハハハ君は刑事を大変尊敬するね。つねにああ云う恭謙きょうけんな態度を持つてるといい男だが、君は巡査だけに鄭寧ていねいなんだから困る」

「だってせっかく知らせて来てくれたんじゃないか

」

「知らせに来るったって、先は商売だよ。当り前に

あしらってりや沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかな

い商売さ。あたり前の商売より下等だね」



「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口わるくちはやめにしよう。しか

し刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至っては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たった今平身低頭へいしんていとうしたじゃないか」

「馬鹿あ云ってら、あれは刑事だね」

「刑事があんななり、をするものか」

「刑事だからあんななり、をするんじゃないか」

「頑固がんこだな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなにふところ懐手なにかして、突立つったっているものかね」

「刑事だつて懐手をしないとは限るまい」

「そう猛烈にやって来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間あいつは始終あのまま立っていたのだ

ぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云

つてるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた

訳じゃないんだから。ただそう思つて独りひとで強情を

張つてゐるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい濟度さいどすべからざる男

と断念したものと見えて、例に似ず黙ってしまった

。主人は久し振りで迷亭を凹へこましたと思つて大得意

である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張つた

だけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情

を張つただけ迷亭よりえらくなつたのである。世の

中にはこんな頓珍漢とんちんかんな事はまゝある。強情さえ張り

通せば勝った氣でいるうちに、当人の人物としての

相場は遥はるかに下落してしまう。不思議な事に頑固の

本人は死ぬまで自分は面目めんぼくを施かけこしたつもりかなに

かで、その時以後人が輕蔑けいべつして相手にしてくれない

のだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こ

んな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲たたきつけるように云ったのは壮さかんなものだった。

「えらい勢いきおいだね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる気きづ

遣<sup>かい</sup>はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった

ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう

」とぶんぶんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」



「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じやないよ。よしわら吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね

。どうだ、行つて見る氣かい」と迷亭君またからか  
いかける。

主人は吉原と聞いて、そい、つはと少々しゅんじゅん逡巡の体で  
あつたが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊  
廓だろうが、いったん行くと云つた以上はきつと行  
く」と入らざるところに力味りきんで見せた。愚人は得て  
こんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白かろう、見て来たまえ」と云

ったのみである。一波瀾ひとはらんを生じた刑事事件はこれで

一先ひとまず落着らくちやくを告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁

を弄ろうして日暮れ方、あまり遅くなると伯父おこに怒られ

ると云って帰って行つた。

迷亭が帰ってから、そこそこに晩飯をすまして

、また書齋へ引き揚げた主人は再び拱手きやうしゆして下しものよ

うに考え始めた。

「自分が感服して、大おおに見習おうとした八木独仙君

も迷亭の話しによつて見ると、別段見習うにも及ば

ない人間のようなのである。のみならず彼の唱道すると

ころの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少瘋ふう

癲てんてき的系統に属してもおりそうだ。いわんや彼は歴れつき乎

とした二人の氣きちがい狂の子分を有している。はなはだ危

険である。滅多めったに近寄ると同系統内に引き摺ずり込ま

れそうである。自分が文章の上において驚嘆の余よ

、これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思

い込んだ天道公平事實名立町老梅は純然たる狂人で

てんどうこうへいことじつみよたちまちろうばい

あつて、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記

述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中ふうてんいんに盛名を

擅ほしいままにして天道の主宰をもつて自みづから任ずるは恐ら

く事実であろう。こう云う自分もことによると少々  
ござっているかも知れない。同気相求め、同類相集  
まると云うから、氣狂の説に感服する以上は——少  
なくともその文章言辞に同情を表する以上は——自  
分もまた氣狂に縁の近い者であるだろう。よし同型  
中に鑄化せられんでも軒を比べて狂人と隣り合せに  
居をきよ卜するとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつ

の間にか同室内に膝を突き合せて談笑する事がない

とも限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見る

とこのほどじゆうから自分の腦の作用は我ながら驚

くくらい奇上きじょうに妙みょうを点じ変傍へんぼうに珍ちんを添えている。腦のう

漿しょう一い勺せきの化学的變化はとにかく意志の動いて行為と

なるところ、発して言辞と化する辺あたりには不思議にも

中庸を失した点が多い。舌上ぜつじょうに竜泉りゅうせんなく、腋下えきかに清せい

ふうしょう  
風を生ぜざるも、  
しこん  
齒根に狂臭あり、  
きんとう  
筋頭に瘋味ある

をいかんせん。いよいよ大變だ。ことによるともう

すでに立派な患者になっているのではないかしらん

。まだ幸に人<sup>さいわい</sup>を傷<sup>きず</sup>けたり、世間の邪魔になる事をし

出かさんからやはり町内を追払われずに、東京市民

として存在しているのではなかろうか。こいつは消

極の積極のと云う段じやない。まず脈搏<sup>みやくはく</sup>からして検



査しなくてはならん。しかし脈には変りはないよう  
だ。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の気味でも  
ない。しかしどうも心配だ。」

「こう自分と気狂きちがいばかりを比較して類似の点ばかり  
勘定しては、どうしても気狂の領分を脱する事  
は出来そうにもない。これは方法がわるかった。気  
狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈する

からこんな結論が出るのである。もし健康な人を本

位にしてその傍へ自分そばを置いて考えて見たらあるい

は反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手

近から始めなくてはいいかん。第一に今日来たフロツ

クコートコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ

……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ

。朝から晩まで弁当持参で球たまばかり磨いている。こ

れも棒組だ。ぼうぐみ 第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻

るのを天職のように心得ている。全く陽性の氣狂に

相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒惡な根こん

性しょうは全く常識をはずれている。純然たる氣じるしに

極きまつてゐる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に

懸った事はないが、まずあの細君を恭うやうやしくおっ立て

て、きんしつ琴瑟調和しているところを見ると非凡の人間と

見立てて差支えさしつかあるまい。非凡は氣狂の異名いみょうである

から、まずこれも同類にしておいて構わない。それ

からと、——まだあるある。落雲館の諸君子だ、年

齢から云うとまだ芽生えだが、躁狂そうきようの点においては

一世を空むなしゆうするに足る天晴あっぱれな豪ごうのものである

。こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようで

ある。案外心丈夫になつて来た。ことによると社会

はみんな氣狂の寄り合かも知れない。氣狂が集合し

て鎬しのぎを削けずってつかみ合い、いがみ合い、罵ののり合い

、奪い合つて、その全体が団体として細胞のように

崩くずれたり、持ち上つたり、持ち上つたり、崩れたり

して暮して行くのを社会と云うのではないか知らん

。その中で多少理窟りくつがわかつて、分別のある奴はか

えって邪魔になるから、瘋癲院ふうてんいんというものを作つて

、ここへ押し込めて出られないようにするのではな  
いかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは  
普通の人で、院外にあばれているものはかえって気  
狂である。気狂も孤立している間はどこまでも気狂  
にされてしまいが、団体となつて勢力が出ると、健  
全の人間になつてしまふのかも知れない。大きな気  
狂が金力や威力を濫用して多くの小気狂しょうきちがいを使役して

乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている例は少なくない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が当夜<sup>けいけい</sup>瑩々たる孤灯の下で<sup>もと</sup>沈思熟慮し

た時の心的作用をありのままに描き出した<sup>えが</sup>ものである。

彼の頭脳の不透明なる事はここにも著るしくあ

らわれている。彼はカイゼルに似た<sup>はちじひげ</sup>八字髯を<sup>たくわ</sup>蓄うる

にもかかわらず狂人と常人の差別さえなし得ぬくら

いの凡倉<sup>ぼんくら</sup>である。のみならず彼はせつかくこの問題

を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず

彼は徹底的に考える脳力のない男である。彼の結論

の茫漠<sup>ぼうばく</sup>として、彼の鼻孔から迸出<sup>ほうしゅつ</sup>する朝日の煙のご

とく、捕捉<sup>ほそく</sup>しがたきは、彼の議論における唯一の特

色として記憶すべき事実である。



吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。人間の膝ひざの上へ乗って眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣けごろもをそっと人間の腹にこす

り付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中の  
いきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。せ  
んだつてなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫なで廻し  
ながら、突然この猫の皮を剥はいでちや、んちや、んにし  
たらさぞあたたかであらうと飛んでもない了見りようけんを  
むらむらと起したのを即座に気取けどつて覚えずひやつ  
とした事さえある。怖こわい事だ。当夜主人の頭のなか

に起つた以上の思想もそんな訳合わけあいで幸にも諸君にご

報道する事が出来るように相成つたのは吾輩の大おおに

榮譽とするところである。但ただし主人は「何が何だか

分らなくなつた」まで考えてそのあとはぐうぐう寝

てしまつたのである、あすになれば何をどこまで考

えたかまるで忘れてしまふに違ない。向後こうごもし主人

が氣狂きちがいについて考える事があるとすれば、もう一返ぺん

出直して頭から考え始めなければならぬ。そうする

と果してこんな<sup>けいろ</sup>径路を取って、こんな風に「何が何

だか分らなくなる」かどうか保証出来ない。しか

し何返考え直しても、何条の<sup>なんじよう</sup>径路をとって進もうと

も、ついに「何が何だか分らなくなる」だけはたし

かである。

「あなた、もう七時ですよ」と襖越ふすまごししに細君が声を

掛けた。主人は眼がさめているのだから、寝ているのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はうん、と云う。このうんも容易

な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるく

ぶしよう

らい無精になると、どことなく趣おもむきがあるが、こんな

人に限って女に好かれた試しがない。現在連れ添う

細君ですら、あまり珍重しておらんようだから、そ

お

の他は推して知るべしと云つても大した間違はなか

けいせい

ろう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城に、可

愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさ

え持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露する必要もないのだが、本人において存外ばくろな考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれ  
ないのだなどと理窟をつけていると、迷まよひの種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても

先方がその注意を無にする以上は、向をむいてう、

ん、さえ発せざる以上は、その曲は夫にきよくあつて、妻に

あらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませ

んよと云う姿勢で箒とはたきほうきを担いかつで書斎の方へ行

つてしまった。やがてぱたぱた書斎中を叩き散らすたた

音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたの



である。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差し支<sup>さ</sup>えな<sup>つか</sup>いようなもの、ここの細君の掃除法のごときに至つてはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のため  
に掃除をしているからである。は、た、き、を一通り障子<sup>しょうじ</sup>

へかけて、箒を一応畳の上へ滑<sup>すべ</sup>らせる。それで掃除

は完成した者と解釈している。掃除の原因及び結果

に至つては微塵<sup>みじん</sup>の責任だに背負つておらん。かるが

故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこ

りの積っている所はいつでもごみが溜<sup>たま</sup>つてほこりが

積っている。告朔<sup>こくさく</sup>の餼羊<sup>きやう</sup>と云う故事<sup>こじ</sup>もある事だから

、これでもやらんよりはましかも知れない。しかし

やつても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦勞にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくって頑がんとして結びつけられているにもかかわらず、掃除の實じつに至っては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が發明せられざる昔のごとく、毫ごうも挙あげておらん。思うに

この両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかんにかかわらず結合せられたものである。

吾輩は主人と違って、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になって参った。とうていうちのもののさえ膳ぜんに向わぬさきから、猫の身分をもつて朝めしに有りつける訳のものではないが、そこが猫の浅

ましさに、もしや煙の立つた汁の香が鮑貝にいいあわびがいの中から

、うまそうに立ち上っておりはすまいかと思うと

、じつとしていられなくなつた。はかない事を、は

かないと知りながら頼みにするときには、ただその頼

みだけを頭の中に描いて、動かずに落ちついている

方が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願

と實際が、合うか合わぬかは是非とも試験して見たく

なる。試験して見れば必ず失望するにきまつてる事

ですら、最後の失望を自ら<sup>みずか</sup>事実の上に受取るまでは

承知出来んものである。吾輩はたまらなくなつて台

所へ<sup>はいだ</sup>這出した。まずへっ、つ、いの影にある<sup>あわびがい</sup>鮑貝の中を

覗いて見ると案に<sup>たが</sup>違わず、夕べ<sup>ゆう</sup>舐め<sup>な</sup>尽したまま、<sup>げき</sup>閨

然として、怪しき光が引窓を洩る<sup>も</sup>初秋の日影にかが

やいている。御三<sup>おさん</sup>はすでに炊き立<sup>た</sup>の飯を、御櫃<sup>おはち</sup>に移

して、今や七輪しちりんにかけた鍋なべの中をかきまぜつつある

釜かまの周囲には沸わき上がって流れだした米の汁が

かさかさいくすじに幾条となくこびりついて、あるものは

吉野紙を貼はりつけたごとくに見える。もう飯も汁も

出来ているのだから食わせてもよさそうなものだ

と思った。こんな時に遠慮するのはつまらない話だ

、よしんば自分の望通りにならなくたって元々で

損は行かないのだから、思い切つて朝飯の催促をし

てやろう、いくら居候いそうろうの身分だつてひもじいに変り

はない。と考え定めた吾輩はにやあにやあと甘える

ごとく、訴うるがごとく、あるいはまた怨えんずるがご

とく泣いて見た。御三はいつこう顧みる景色けしきがない

。生れついでのお多角たかくだから人情に疎うといのはとうか

ら承知の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起



させるのが、こつちの手際てぎわである。今度はにやごに

やごとやって見た。その泣き声は吾ながら悲壯の音おん

を帯びて天涯てんがいの遊子ゆうしをして断腸の思あらしむるに足

ると信ずる。御三は恬てんとして顧みないかえり。この女は聾つんぼ

なのかも知れない。聾では下女が勤まる訳わけがないが

、ことによると猫の声だけには聾なのだろう。世の

中には色盲しきもうというのがあって、当人は完全な視力を

具えているつもりでも、医者から云わせると片輪かたわだ

せいもう

そうだが、この御三は声盲なのだろう。声盲だつて

おうふう

片輪に違いない。片輪のくせにいやに横風なものだ

。夜中なぞでも、いくらこつちが用があるから開け

てくれろと云つても決して開けてくれた事がない

。たまに出してくれたと思うと今度はどうしても入

れてくれない。夏だつて夜露は毒だ。いわんや霜しもに

おいてをやで、軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、どんなに辛いつらかとうてい想像が出来るものではない。この間しめ出しを食った時なぞは野良犬の襲撃を蒙こうむって、すでに危うく見えたところを、ようやくの事で物置の家根やねへかけ上あがって、終夜顫ふるえつづけた事さえある。これ等は皆御三の不人情から胚胎はいたいした不都合である。こんなものを相手にして鳴いて

見せたって、感応かんのうのあるはずはないのだが、そこが

、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいていの事ならやる気になる

。にやごおうにやごおうと三度目には、注意を喚起するためにとさらに複雑なる泣き方をして見た

。自分ではベトヴェンのシンフォニーにも劣らざる

美妙の音おんと確信しているのだが御三には何等の影響

も生じないようだ。御三は突然膝をついて、揚げ板

を一枚はね除<sup>の</sup>けて、中から堅炭の四寸ばかり長い

を一本つかみ出した。それからその長い奴を七輪<sup>しちりん</sup>の

角でぽんぽんと敲<sup>たた</sup>いたら、長いのが三つほどに砕け

て近所は炭の粉で真黒くなつた。少々は汁の中へも

這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つたらしい。御三はそんな事に頓着する女では

ない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋<sup>なべ</sup>の尻から七輪

の中へ押し込んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそうにもない。仕方がないから悄然しょうぜんと茶の間の方へ引きかえそうとして風呂場の横を通り過ぎると、ここは今女の子が三人で顔を洗つてる最中で、なかなか繁昌はんじょうしている。

顔を洗うと云ったところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないく

らい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雑巾ぬぞうきんを引きずり出してしきりに顔中撫なで廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちがわるかろうけれども、地震がゆるたびにおも、ちろい、わと云う子だからこのくらいの事はあつても驚ろくに足らん。ことによると八木独仙君より悟っている

かも知れない。さすがに長女は長女だけに、姉をも

みずか

って自ら任じているから、うがい茶碗をからからか

ほうりだ

んと抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾

をとりにかかる。坊やちゃんもなかなか自信家だか

ら容易に姉の云う事なんか聞きそうにしない。「い

やーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引っ張り返した

。このばぶなる語はいかなる意義で、いかなる語源



を有しているか、誰も知ってるものがない。ただこ

の坊やちゃんがかんしゃく癪癪を起した時に折々ご使用になる

ばかりだ。雑巾はこの時姉の手と、坊やちゃんの手

で左右に引っ張られるから、水を含んだ真中からぽ

たぽたしずく雫が垂たれて、容赦なく坊やの足にかかる、足

だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる

。坊やはこれでも元げんろく禄を着ているのである。元禄と

は何の事だとだんだん聞いて見ると、ちゆうがた中形の模様な

ら何でも元禄だそうだ。一体だれに教わって来たも

のか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れるから御

よしなさい、ね」と姉が洒落しやれた事を云う。その癖くせ

この姉はついこの間まで元禄と双六すゝろくとを間違えてい

た物識ものしりである。

元禄で思い出したからついでに喋舌しやべってしまうが

この子供の言葉ちがいをやる事は夥おびただしいもので

折々人を馬鹿にしたような間違を云つてゐる。火事

で茸きのこが飛んで来たり、御茶おちやの味噌みその女学校へ行つた

り、恵比寿えびす、台所だいどころと並べたり、或る時などは「わた

しや藁店わらだなの子じやないわ」と云うから、よくよく聞

き糺ただして見ると裏店うらだなと藁店を混同していたりする

。主人はこんな間違を聞かたびに笑っているが、自

分が学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽な誤謬ごびゅうを真面目になつて、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——当人は坊やとは云わない。いつでも坊、ばと云う——元禄が濡れたのを見て「元げんどこがべた、い」と云つて泣き出した。元禄が冷たくては大変だから、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上

げて着物を拭ふいてやる。この騒動中比較的静かであ  
ったのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向う  
むきになつて棚の上からころがり落ちた、お白粉しろいの  
瓶びんをあけて、しきりに御化粧ほどこしを施している。第一に  
突っ込んだ指をもつて鼻の頭をキューと撫なでたから  
豎たてに一本白い筋が通つて、鼻のありかがいささか分ぶん  
明みょうになつて来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上

を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白いかたまりが出来上った。これだけ装飾がととのつたところへ、下女がはいって来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寢室まで来てもう起きたかとひそかに様子をうかがつ

て見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り

ともんはん

十文半の甲の高い足が、夜具の裾すそから一本食はみ出し

ている。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思

って、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のよう

な男である。ところへ書斎の掃除をしてしまった妻

ほうき

君がまた箒ほうきとはたきを担かついでやってくる。最前さいぜんのよ

ふすま

うに襖ふすまの入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立って、首の出ない夜具を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から二歩ふたあしばかり進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚さめている。覚さめているから、細君の襲撃にそなうるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも



立て籠こもったのである。首さえ出さなければ、見逃みのがし

てくれる事もあるうかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があったから、まず安心と腹のうちで思っていると、とんと突いた箒が何でも三尺くらいの距離に追っていたにはちよつと驚ろいた。のみならず第二の「

まだなんですか、あなた」が距離においても音量に  
おいても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで  
聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな  
声でうんと返事をした。

「九時までにはいらっしやるのでしよう。早くなさらないと間に合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着よぎの袖口そでぐちか

ら答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食つて、起きるかと思つて安心していると、また寝込まれつけているから、油断は出来ないと「さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、なお起きろと責めるのは氣に食わんものだ。主人のごとき我儘者にはわがままものなお氣に食わん。ここにおいてか主人は今まで頭から被かぶつていた夜着を一度に跳はねのけ

た。見ると大きな眼を二つとも開あいている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおっしゃっててもお起きなさらんじやあり

ませんか」

「誰がいつ、そんな嘘うそをついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どっちが馬鹿だか分りやしない」と妻君ぷんとして箒を突いて枕元に立っているところは勇ましかつた。この時裏の車屋の子供、八っちゃんが急に大きな声をしてワーと泣き出す。八っちゃんは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八っちゃんを泣かして小遣こづかいになるかも知れ

んが、八っちゃんこそいい迷惑だ。こんな御袋おふくろを持

ったが最後朝から晩まで泣き通しに泣いていなくて

はならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少

々怒るのを差し控ひかえてやったら、八っちゃんの寿命

が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれ

たって、こんな愚ぐな事をするのは、天道公平君より

もはげしくおいでになっている方だと鑑定してもよ

かろう。怒るたんびに泣かせられるだけなら、まだ

余裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを傭やと

つて今戸焼いまどやきをきめ込むたびに、八っちゃんは泣かね

ばならんのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判

然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して

、早手廻しに八っちゃんは泣いているのである。こ

うなると主人が八っちゃんだか、八っちゃんが主人

だか判然しなくなる。主人にあてつけるに手数てすうは掛

らない、ちよつと八つちゃんに劍突けんつくを食わせれば何

の苦もなく、主人の横よこつ面つらを張つた訳になる。昔むかし

西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃

亡して、捕とらえられん時は、偶像をつくつて人間の代

りに火ひあぶりひにしたと云うが、彼等のうちにも西洋

の故事つうぎに通曉する軍師があると見えて、うまい計略



を授けたものである。落雲館と云い、八っちゃんの御袋と云い、腕のきかぬ主人にとっては定めし苦手にがてであろう。そのほか苦手はいろいろある。あるいは町内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八っちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝っぱらか

らよほど癩癧かんしゃくが起つたと見えて、たちまちがばと布ふ

団どんの上に起き直った。こうなると精神修養も八木独

仙も何もあつたものじゃない。起き直りながら両方

の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き

掻かき廻す。一カ月も溜かつてゐるフケは遠慮なく、頸くび

筋すじやら、寝卷すじの襟えりへ飛んでくる。非常な壯観である

。髯ひげはどうだを見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん

然とおっ立っている。持主が怒おこっているのに髯だけ

落ちついていてはすまないとでも心得たものか、一

本一本に癰癰かんしやくを起して、勝手次第の方角へ猛烈なる

勢をもつて突進している。これとてもなかなかの見み

物ものである。昨日きのうは鏡の手前もある事だから、おとな

しく独ドイツ乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが

、一晩寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに

本来の面目に歸つて思い思いの出で立たちに戻るのである。

あたかも主人の一夜作りの精神修養が、あくる

日になると拭ぬぐうがごとく奇麗に消え去つて、生れつ

いての野猪やちよてき的本領が直ちに全面を暴露し来るきたのと一

般である。こんな乱暴な髯をもっている、こんな乱

暴な男が、よくまあ今まで免職にもならずならずに教師が

勤まつたものだと思つと、始めて日本の広い事がわ

かる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのもあろう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信しているらしい。いざとなれば巢鴨へ端書はがきを飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

この時主人は、昨日きのう紹介した混沌こんとんたる太古の眼を精一杯に見張って、向うの戸棚をきつと見た。これ

は高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸をは  
めたものである。下の方の戸棚は、布団ふとんの裾すそとすれ  
すれの距離にあるから、起き直つた主人が眼をあき  
さえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来  
ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れ  
て妙な腸はらわたがあからさまに見える。腸にはいろいろな  
のがある。あるものは活版摺かっぱんずりで、あるものは肉筆で

ある。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなつた。今までは車屋のかみさんでも捕つらまえて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらいにまで怒つておこいた主人が、突然この反古紙ほごがみを読んで見たくなるのは不思議のようであるが、こう云う陽性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くと

きに最中もなかの一つもあてがえばすぐ笑うと一般である

。主人が昔むかし去る所の御寺に下宿していた時、襖ふすま一

と重えを隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは

元来意地のわるい女のうちでもつとも意地のわるい

ものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたもの

と見えて自炊の鍋なべをたたきながら、今泣いた鳥がも

う笑った、今泣いた鳥がもう笑ったと拍子を取って



歌つたそうだ、主人が尼が大嫌になつたのはこの時からだと云うが、尼は嫌きらいにせよ全くそれに違ない

。主人は泣いたり、笑つたり、嬉しがつたり、悲し

がつたり人一倍もする代りにいづれも長く続いた事

がない。よく云えば執着がなく、心機しんきがむやみに

転ずるのだろうが、これを俗語に翻訳してやさしく

云えば奥行のない、薄うすっ片ぺらの、鼻はなっ張ぱりだけ強いだだ

っ子である。すでにだだっ子である以上は、喧嘩を

する勢で、むつくと刎<sup>は</sup>ね起きた主人が急に気をかえ

て袋戸<sup>ふくろど</sup>の腸を読みにかかるのももつともと云わねば

なるまい。第一に眼にとまったのが伊藤博文の逆<sup>さ</sup>か

立<sup>だ</sup>ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とあ

る。韓<sup>かん</sup>国統監<sup>こくとうかん</sup>もこの時代から御<sup>お</sup>布令<sup>ふれ</sup>の尻尾<sup>しっぽ</sup>を追っ懸

けてあるいていたと見える。大将この時分は何をし

ていたんだらうと、読めそうにないところを無理に

おおくらきよう

よむと大蔵卿とある。なるほどれいものだ、いく

ら逆か立ちしても大蔵卿である。少し左の方を見る

と今度は大蔵卿横になつて昼寝をしている。もつと

もだ。逆か立ちではそう長く続くきづかい気遣はない。下の

もくばん

方に大きな木板で汝はと二字だけ見える、あとが見

たいがあいにく露出しておらん。次の行には早くの

二字だけ出ている。こいつも読みたいがそれぎれで  
手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら  
、人のものでも構わずに引つpegがすかも知れない

。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがな  
いから事実を挙げるためには何でもする。あれは始

末に行か<sup>ゆ</sup>ないものだ。願<sup>ねが</sup>くばもう少し遠慮をしても

らいたい。遠慮をしなければ事實は決して挙げさせ

ない事にしたらよからう。聞くところによると彼等

らしききよこう

は羅織虚構をもつて良民を罪におとし陥れる事さえあるそ

うだ。良民が金を出して雇つておく者が、雇主を罪

にするなどときてはこれまた立派なきちがい氣狂である。次

に眼を転じて真中を見ると真中には大分県がおおいたけん宙返り

をしている。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらい

だから、大分県が宙返りをするのは当然である。主

人はここまで読んで来て、双方へ握り拳をこしらえて、これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

このあくびがまた鯨くじらの遠吠とおぼえのようにすこぶる変調を極きわめた者であつたが、それが一段落を告げると

主人はそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり布ふ

団とんをまくつて夜着よぎを畳んで、例の通り掃除をはじめ

る。掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い

方も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介を

したごとく依然としてがーがー、げーげーを持続し

ている。やがて頭を分け終つて、西洋手拭てぬぐいを肩へか

けて、茶の間へ出御しゅつぎよになると、超然として長火鉢の

横に座を占めた。長火鉢と云うと櫂けやきの如輪木じよりんもくか、銅あか

の総落しで、洗髪そうおとの姉御あらいがみが立膝で、長煙管ながぎせるを黒柿くろがきの

縁ふちへ叩きつける様を想見する諸君もないとも限らな

いが、わが苦沙弥くしゃみ先生の長火鉢に至つては決して

、そんな意気なものではない、何で造つたものか素しろ

人ひとには見当けんとうのつかんくらい古雅なものである。長火

鉢は拭き込んでてらてら光るところが身上しんしょうなのだが

、この代物しろものは櫨きりか桜か桐か元来不明瞭な上に、ほと



ふきん

んど布巾をかけた事がないのだから陰気で引き立た

おびただ

ざる事夥しい。こんなものをどこから買つて来たか

おぼえ

と云うと、決して買った覚はない。そんなら貰つた

かと聞くと、誰もくれた人はないそうだ。しからば

ただ

盗んだのかと糺して見ると、何だかその辺が曖昧で

あいまい

ある。昔し親類に隠居がおつて、その隠居が死んだ

時、当分留守番を頼まれた事がある。ところがその

後一戸を構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分のもののように使っていた火鉢を何の気もなく

、つい持って来てしまったのだそうだ。少々たちが悪いようだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事は世間に往々ある事だと思う。銀行家などは毎日人の金をあつかいつけているうちに人の金が、自分の金のように見えてくるそうだ。役人は人民の召使で

ある。用事を弁じさせるために、ある権限を委托した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を笠かさに着て毎日事務を処理していると、これは自分が所有している権力で、人民などはこれについて何らの喙くちばしを容るる理由がないものだなどと狂ってくる

。こんな人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をもって主人に泥棒根性があると断定する訳には

行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍そばに陣取つて、食卓を前に控ひかえたる主人

の三面には、先刻さつきぞうきん雑巾で顔を洗つた坊ぼばと御茶おちやの味、

噌そうの学校へ行くとん子と、お白粉しろいびん鑊くわくに指を突き込ん

だすん子が、すでに勢揃せいぞろいをして朝飯を食っている

。主人は一応この三女子の顔を公平に見渡した。と

ん子の顔は南蛮鉄なんばんてつの刀の鰐つばのような輪廓りんかくを有してい

る。すん子も妹だけに多少姉おもかげの面影を存して琉球塗りゅうきゅうぬり

の朱盆しゅぼんくらいな資格はある。ただ坊ぼくばに至いたっては独ひと

り異彩を放はなつて、面長おもながに出来上あがりっている。但ただし豎たてに

長いのなら世間にその例もすくなくないが、この子

のは横に長いのである。いかに流行が変化し易やすくつ

たつて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は

自分の子ながらも、つくづく考える事がある。これでも生長しなければならぬ。生長するところではない、その生長の速すみやかなる事は禅寺ぜんでらの筍たけのこが若竹に變化する勢で大きくなる。主人はまた大きくなつたなと思うたんに、後ろうしから追手おってにせまられるような氣がしてひやひやする。いかに空漠くうばくなる主人でもこの三令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以

上はどうにか片付けなくてはならんくらいも承知している。承知しているだけで片付ける手腕のない事も自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て余しているところである。持て余すくらいなら製造しなければいいのだが、そこが人間である。人間の定義を云うとほかに何にもない。ただ入<sup>い</sup>らざる事を捏造<sup>ねつぞう</sup>して自ら苦しんでいる者だと云えば、それで

ねつぞう

みずか

充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をたべる。ところが始末におえないのは坊ばである。坊ばは当年とって三歳であるから、細君が気を利かし、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をはしあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉



の茶碗を奪い、姉の箸を引ったくつて、持ちあつか  
い悪い奴を無理に持ちあつかっている。世の中を見  
渡すと無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄  
にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全  
くこの坊ば時代から萌芽ほうがしているのである。その因よ  
つて来るところはかくのごとく深いのだから、決し  
て教育や薰陶くんとうで癒なおせる者ではないと、早くあきらめ

てしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕ぶんどった偉大なる茶碗と、長大な

箸を専有して、しきりに暴威ほしいままを擅しにしている。使

いこなせない者をむやみに使おうとするのだから

勢いきおい暴威たぐまを逞たくましくせざるを得ない。坊ばはまず箸の

根元を二本いっしょに握ったままうんと茶碗の底へ

突込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて

その上に味噌汁が一面に漲みなぎっている。箸の力が茶

碗へ伝わるやいなや、今までどうか、こうか、平均

を保っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ば

かり傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸

のあたりへこぼれだす。坊ばはそのくらいな事で辟へき

易えきする訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込

んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から刎はね上げた

。同時に小さな口を縁<sup>ふち</sup>まで持つて行つて、刎<sup>は</sup>ね上げ

られた米粒を這<sup>はい</sup>入るだけ口の中へ受納した。打ち洩<sup>も</sup>

らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬<sup>ほ</sup>

つぺたと顚<sup>あご</sup>とへ、やつと掛声をして飛びついた。飛

びつき損じて畳の上へこぼれたものは打算<sup>ださん</sup>の限りで

ない。随分無分別な飯の食い方である。吾輩は謹<sup>つつし</sup>ん

で有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公<sup>こ</sup>

等うらの他をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうが

ごとくんば、公等こうらの口へ飛び込む米粒は極めて僅少きんしょう

のものである。必然の勢をもつて飛び込むにあらず

戸迷とまどいをして飛び込むのである。どうか御再考わざらを煩

わしたい。世故せこにたけた敏腕家にも似合しからぬ事

だ。

姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪りやくだつされ

て、不相応に小さな奴をもつてさつきから我慢して  
いたが、もともと小さ過ぎるのだから、一杯にもつ  
た積りでも、あんとあけると三口ほどで食つてしま  
う。したがって頻<sup>ひんぱん</sup>に御はちの方へ手が出る。もう  
四膳かえて、今度は五杯目である。とん子は御はち  
の蓋<sup>ふた</sup>をあけて大きなしやもじを取り上げて、しばら  
く眺<sup>なが</sup>めていた。これは食おうか、よそうかと迷つて

いたものらしいが、ついに決心したものと見えて

、焦<sup>こ</sup>げのなさそうなところを見計<sup>ひ</sup>つて一掬<sup>ひとしやく</sup>いしやも

じの上へ乗せたまでは無難<sup>ぶなん</sup>であつたが、それを裏返

して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に<sup>はい</sup>入りきら

ん飯は塊<sup>かた</sup>まつたまま畳の上へ転<sup>ころ</sup>がり出した。とん子

は驚<sup>け</sup>ろく景色<sup>しき</sup>もなく、こぼれた飯を鄭寧<sup>ていねい</sup>に拾<sup>ひろ</sup>い始め

た。拾<sup>ひろ</sup>つて何にするかと思つたら、みんな御はちの

中へ入れてしまった。少しきたないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を<sup>は</sup>刎ね上げた時は、ちようどとん子が飯をよそい<sup>おわ</sup>了った時である。さすが

に姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御<sup>ご</sup>ぜん粒だらけよ」と云いながら、早速<sup>さつそく</sup>坊ばの顔の掃除にとりかかる。第一に鼻のあたまに寄<sup>きぐう</sup>寓していたのを取払



う。取払って捨てると思のほか、すぐ自分の口のなかへ入れてしまったのには驚ろいた。それから頬ほつぺたにかかる。ここには大分群だいぶんぐんをなして数かずにしたなら、両方を合せて約二十粒もあつたろう。姉は丹念に一粒ずつ取っては食い、取っては食い、とうとう妹の顔中にある奴を一つ残らず食ってしまった。この時ただ今まではおとなしく沢庵たくあんをかじっていたすん

子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくずさつまいも

れたのをしやくい出して、勢よく口の内へ抛り込ほうん

だ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱

したのほど口こう中ちゆうにこたえる者はない。大人おとなですら注

意しないと火傷やけどをしたような心持ちがする。まして

すん子のごとき、薩摩芋に経験の乏とほしい者は無論狼ろう

狽ばいする訳である。すん子はワツと云いながら口こう中ちゆうの

芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片<sup>ぺん</sup>がどう云う拍子か、坊ばの前まですべって来て、ちようどいい加減な距離でとまる。坊ばは固<sup>もと</sup>より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸<sup>ほし</sup>を抛<sup>な</sup>り出して、手攫<sup>てづか</sup>みにしてむしやむしや食ってしまった。

先刻<sup>さつき</sup>からこの体<sup>てい</sup>たらくを目撃していた主人は、一<sup>いち</sup>

専心自分の飯を食い、自分の汁を飲

んで、この時はすでに楊枝ようじを使っている最中であつ

た。主人は娘の教育に関して絶体的放任主義を執とる

つもりと見える。今に三人が海老茶式部えびちやしきぶか鼠式部ねずみしきぶか

になつて、三人とも申し合せたように情夫じょうふをこしら

えて出奔しゅっぱんしても、やはり自分の飯を食つて、自分の

汁を飲んで澄まして見ているだろう。働きのない事

だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかさず事と、鎌かまをかけて人を陥おとしれる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩までが見様見真似みようみまねに、こうした面してしかるべきのを得々とくとくと履行りこうして未来の紳士だ

。くては幅が利きかないと心得違ちがいをして、本来なら赤

と思つてゐる。これは働き手と云うのではない。ご  
ろつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多  
少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに撲なぐつ  
てやりたくなる。こんなものが一人でも殖ふえれば国  
家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒のいる学  
校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる国家  
は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろ

ごろ世間にごろついているのは心得がたいと思う

。日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情ななさけ

い事だ。こんなごろつき手に比べると主人などは遙はる

かに上等な人間と云わなくてはならん。意気地のな

いところが上等なのである。無能なところが上等な

のである。猪口才ちよこざいでないところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもつて、無事に

朝食を済ましたる主人は、やがて洋服を着て、車へ乗って、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子こうしをあけた時、車夫に日本堤という所を知ってるかと聞いたら、車夫はへへと笑った。あの遊廓のある吉原の近辺の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽こっけいであつた。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、妻



君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで。  
遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なも  
ので「あら、でも今日は御休みよ」と支度したくをする景け  
色しきがない。「御休みなもんですか、早くなさい」と  
叱しかるように言つて聞かせると「それでも昨日きのう、先生  
が御休だつて、おっしやつてよ」と姉はなかなか動  
じない。妻君もここに至つて多少変に思つたものか

戸棚から曆こよみを出して繰り返して見ると、赤い字でちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ欠勤届を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱へ抛ほうり込んだのだらう。ただし迷亭に至っては實際知らなかったのか、知って知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びな

さいと平生いっしょの通り針箱を出して仕事に取りかかる。

その後ご三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料にな

るような事件も起らなかったが、突然妙な人が御客

に來た。十七八の女学生である。踵かかとのまがった靴を

履はいて、紫色の袴はかまを引きずって、髪を算盤珠そろばんたまのよう

にふくらまして勝手口から案内も乞こわずに上あつて來

た。これは主人の姪めいである。学校の生徒だそうだが

折々日曜にやって来て、よく叔父さんと喧嘩をして歸って行く雪江ゆきえとか云う奇麗な名のお嬢さんである。もつとも顔は名前ほどでもない、ちよつと表へ出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入はいつて来て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちよつと上がろうと思つて、八時半頃から家<sup>うち</sup>を出て急いで来たの

」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちよつと上がったの」

「ちよつとでなくつていいから、緩<sup>ゆっ</sup>くり遊んでいら

つしやい。今に叔父さんが帰って来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍らしいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ行つたの、妙でしょう」

「あら、何で？」

「この春這<sup>はい</sup>入った泥棒がつらま<sup>は</sup>ったんだって」

「それで引き合に出されるの？　いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに來いって、昨日きのう巡査がわざわざ來たもんですから」

「おや、そう、それでなくっちゃ、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらっしやるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……そうして起こすとぶんぶん怒るおこのよ。今朝なんか七時までに是非おこせと云うから、起こしたんでしよう

。すると夜具の中へ潜もぐって返事もしないんですもの

。こっちは心配だから二度目にまたおこすと、夜着よぎ

の袖そでから何か云うのよ。本当にあきれ返ってしまふ

の」



「なぜそんなに眠いんでしょう。きつと神経衰弱なんでしょう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒る方かたね。あれでよく学校が勤まるのね」

「なに学校じゃおとなしいんですって」

「じやなとお悪るいわ。まるで蒟蒻こんにやくえんま閻魔ね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だって蒟蒻閻魔のようじやありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりや強情ですよ」

「天探女あまのじやくでしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ

。だから何かさせようと思つたら、うら<sup>、</sup>を云うと

、こつちの思い通りになるのよ。こないだ蝙蝠傘<sup>こうちもり</sup>を

買つてもらう時にも、いらない、いらないって、わざと云つたら、いらない事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」

「ホホホ旨い<sup>うま</sup>のね。わたしもこれからそうしよう

「そうなさいよ。それではなくっちや損だわ」

「こないだ保険会社の人が来て、是非御這入おはいんなさ

いって、勧めているんでしょう、——いろいろ訳わけを

言って、こう云う利益があるの、ああ云う利益があ

るのって、何でも一時間も話をしたんですが、どう

しても這入らないの。うちだって貯蓄はなし、こう

して小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入っ

てくれるとよっぽど心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構わないんですもの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しからん世帯染しよたいじみたことを云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存在しているのだらう。しかし死

なない以上は保険に這<sup>はい</sup>入る必要はないじやないかつ  
て強情を張っているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無  
論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うも  
のは丈夫なよう<sup>もろ</sup>で脆いもので、知らないうちに、い  
つ危険が逼<sup>せま</sup>っているか分りませんと云うとね、叔父

さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているつて、まあ無法な事を云うんですよ」

「決心したつて、死ぬわねえ。わたしなんか是非及<sup>きゆう</sup>第<sup>うだい</sup>するつもりだったけれども、とうとう落第してし

まったわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長<sup>なが</sup>が生<sup>い</sup>きが出来るものなら、誰

も死ぬものはございませんって」

「保険会社の方が至当しとうですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓って死なないって威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、おおみよう大妙ですわ。保険の掛金を出すくら

いなら銀行へ貯金する方が遥はるかにましだってすまし



切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構う考なんかないんですよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらっしやる方<sup>かた</sup>だって、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちつと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰うといいんですよ。ああ云うおだ穏やかな人だとよっぽどらく楽しいですねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじや評判がわるいのよ

「みんな逆さかなのね。それじや、あの方かたがいいでしょ

う——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには大分だいぶん閉口びくしているんですがね。昨日きのう

迷亭さんが来て悪口あくぐちをいったものだから、思つたほ

ど利きかないかも知れない」

「だっていいじゃないですか。あんな風ふうに鷹揚おうように

落ちついていれば、——こないだ学校で演説をなす  
ったわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、しゆくとかふじんかい淑徳婦人会のとき

に招待して、演説をして頂いたの」

「面白かった？」

「そうね、そんなに面白くもなかったわ。だけれどもあの先生が、あんな長い顔ひげなんでしょう。そうして天神様のような髯ひげを生やしているもんだから、みんな感心して聞いていてよ」

「御話しって、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると、えんがわ椽側の方から、雪江さんの話し声をきき

つけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の外の空地あきちへ出て遊んでいたものであろう。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今

面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付

ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云ったのはとん子で「やっぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち

」と云い出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に

出す。ただしこれは御話を承うけたまわると云うのではない

、坊ばもまた御話を仕つかまつると云う意味である。「あら

「また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑うと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と賺<sup>す</sup>かして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「お、お、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの？」と雪江さんは謙遜<sup>けんそん</sup>した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのって」



「面白いのね。それから？」

「私たちは田圃<sup>たんぼ</sup>へ稲刈いに」

「そう、よく知ってる事」

「御前がくうと邪魔<sup>だま</sup>になる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」ととん

子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」と一喝<sup>いっかつ</sup>して

直ちに姉を辟易<sup>へきえき</sup>させる。しかし途中で口を出された

ものだから、続きを忘れてしまつて、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは御免ごめんだよ。ぷう、ぷうぷうって」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わつたの？」

「御三に」  
おたん

「わるい御三ね、  
おさん そんな事を教えて」と妻君は苦笑

をしていたが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊やは  
おとなしく聞いているのですよ」と云うと、さすが  
の暴君も納得したと見えて、  
なっとく それぎり当分の間は沈  
黙した。

「八木先生の演説はこんなだよ」と雪江さんがとう

とう口を切った。「昔ある辻つじの真中に大きな石地藏があつたんですってね。ところがそこがあいにく馬や車が通る大變賑にぎやかな場所だもんだから邪魔になつて仕様がないうでね、町内のものが大勢寄つて相談をして、どうしてこの石地藏を隅の方へ片づけたらよからうって考えたんですって」

「そりや本当にあつた話なの？」

「どうですか、そんな事は何ともおっしやらなくつてよ。——でみんながいろいろ相談をしたら、その町内で一番強い男が、そりや訳はありません、わたしがきつと片づけて見せますって、一人でその辻へ行つて、もろはだ両肌を抜いで汗を流して引っ張ったけれど、どうしても動かないんですって」

「よっぽど重い石地藏なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまつて、うちへ歸つて寢てしまつたから、町内のものはまた相談をしたんですね。すると今度は町内で一番利口な男が

わたし私に任せて御覧なさい、一番やつて見ますからつ

て、重箱のなかへ牡丹餅ぼたもちを一杯入れて、地蔵の前へ

来て、『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見

せびらかしたんだつて、地蔵だつて食意くいじ地が張つて

るから牡丹餅で釣れるだろうと思つたら、少しも動かないんだつて。利口な男はこれではいけないと思つてね。今度は瓢箪<sup>ひょうたん</sup>へお酒を入れて、その瓢箪を片手へぶら下げて、片手へ猪口<sup>ちよこ</sup>を持ってまた地藏さんの前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければここまでおいでと三時間ばかり、からかつて見たがやはり動かないんですつて」

「雪江さん、地蔵様は御腹おなかが減へらないの」ととん子

がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云った

。

「利口な人は二度共しくじったから、その次には贖にせ

さつ

札を沢山こしらえて、さあ欲しいだろう、欲しけれ

ば取りにおいでと札を出したり引っ込ましたりした

がこれもまるで益やくに立たないんですって。よっぽど



頑固がんこな地藏様なのよ」

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ」

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想あいそ

をつかしてやめてしまったんですとさ。それでその

あとからね、大きな法螺ほらを吹く人が出て、私わたしならき

つと片づけて見せますからご安心なさいとさも容易たやす

い事のように受合ったそうです」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて

、付け髯ひげをして、地蔵様の前へきて、こらこら、動

かんとその方のためにならんぞ、警察で棄てておか  
んぞと威張って見せたんですとさ。今の世に警察の

仮声こわいろなんか使ったって誰も聞きやしないわね」

「本当ね、それで地蔵様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入っているのよ

」

「あらそう、あんな顔をして？　それじゃ、そんな

に怖こわい事はないわね。けれども地藏様は動かないん

ですって、平気でいるんですとさ。それで法螺吹は

大変怒おこって、巡査の服を脱いで、付け髯かみくずを紙屑籠かごへ

抛り込んで、今度は大金持ちの服装なりをして出て来た  
そうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をす  
るんですとさ。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もし  
ないで、また何も云わないで地蔵まわの周りを、大きな

まきたばこ  
巻煙草をふかしながら歩行あるしているんですとさ」

「それが何になるの？」

「地蔵様を煙けむに捲まくんです」

「まるで噺はなし家かの洒落しやれのようね。首尾よく煙けむに捲まい

たの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしもたいていにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしよう。八木先生はそうおっしゃってよ。  
たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い事だ  
が化けて来たって——第一不敬じゃありませんか

、法螺吹きの分際ほらふぶんざいで」

「殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬で

すわ」

「そうね」

「殿下さまでも利きかないでしょう。法螺吹きもしよ

うがないから、とても私わたしの手際では、あの地蔵はど

うする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついでに懲役ちようえきにやればいいのに。――でも

町内のものは大層氣を揉もんで、また相談を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱った  
そうです」

「それでおしまい？」

「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを大勢雇って、地蔵様の周りをわいわい騒まわいであるいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないよ



うにすればいいと云つて、夜昼交替こうたいで騒ぐんだつて

」

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとさ。地蔵様の方も

随分強情ね」

「それから、どうして？」と、とん子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも、げん験が見えな

いので、大分<sup>たいぶん</sup>みんなが厭<sup>いや</sup>になつて来たんですが、車夫やゴロツキは幾日<sup>いくんち</sup>でも日当<sup>にっとう</sup>になる事だから喜んで騒いでいましたとさ」

「雪江さん、日当つてなに？」とすん、子が質問をする。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらつて何にするの？」

「御金を貰ってね。……ホホホいやなすん子さんだ。——それで叔母さん、毎日毎晩から騒ぎをしていきますとね。その時町内に馬鹿竹と云つて、何も知らない、誰も相手にしない馬鹿がいたんですってね。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方おまえがたは何でそんなに騒ぐんだ、何年かかっても地蔵一つ動かす事が出来ないのか、可哀想かわいそうなものだ、と云ったそうですって

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹ばかたけの云

う事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だろうが

、まあ竹にやらして見ようじゃないかとそれから竹

に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな

邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロ

ツキを引き込まして飄然ひょうぜんと地藏様の前へ出て来ました」

「雪江さん飄然ひょうぜんて、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心かんじんなところで奇問を放ったので、細君と雪江さんはどつと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。——云いようがないわ」  
「飄然て、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

「そら多々良三平さんたたらさんぺいを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそうよ。——それで馬鹿竹が地蔵様の

ふとろで

前へ来て懷手をして、地蔵様、町内のものが、あな

たに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云つ

たら、地蔵様はたちまちそうか、そんなら早くそう

云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、今日は御婦人の会こんにち

であります、私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえって遠方から廻



りくどい手段をとる弊へいがある。もつともこれは御婦人に限った事でない。明治の代よは男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になつてゐるから、よくいらざる手数てすうと労力を費ついやして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解しているものが多いようだが、これ等は開化の業に束縛された畸形児きけいじである。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人

に在<sup>あ</sup>つてはなるべくただいま申した昔話を御記憶に

なつて、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような

正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた

方が馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑<sup>よめしゅうと</sup>の間に起<sup>いま</sup>る忌わ

しき葛藤<sup>かつとう</sup>の三分一<sup>さんぷいち</sup>はたしかに減ぜられるに相違ない

人間は魂胆<sup>こんたん</sup>があればあるほど、その魂胆が崇<sup>たた</sup>つて

不幸<sup>みなもと</sup>の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不

幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである

。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたく

はないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつて大變

怒おこつてよ」

「金田の富子さんて、あの向横町むこうよこちょうの？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だって云うじやありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじやありませんよ。あんなに御化粧をすればたいいの人にはよく見えるわ」

「それじゃ雪江さんなんぞはそのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう

」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど

あの方は全<sup>かた</sup>くつくり過ぎるのね。なんぼ御金があ

ったって――」

「つくり過ぎてても御金のある方がいいじゃありません

んか」

「それもそうだけれども——あの方こそ、少し馬鹿  
かた  
竹になった方がいいでしよう。無暗に威張るんです  
むやみ

もの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げ  
たって、みんなに吹聴ふいちようしているんですもの」

「東風さんでしよう」

「あら、あの方が捧げたの、よっぽど物数奇ものずきね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じや  
あんな事をするのがあたりまえ当前だとまで思ってるんです  
もの」

「そんな人があるから、いけないですよ。——そ  
れからまだ面白い事があるの。此間こないだだれか、あの方  
の所へとこ艶書えんしよを送ったものがあるんだって」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけども聞いた事もない人だって、そうしてそれが長い長い一間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんですとさ。わたし私があなたを恋おもっているのは、ちよう



ど宗教家が神にあこがれているようなものなの、あなたのためならば祭壇に供える小羊となつて屠<sup>ほふ</sup>られるのが無上の名誉であるの、心臓の形<sup>かた</sup>ちが三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立って、吹き矢なら大当りであるの……」

「そりや真面目なの？」

「真面目なんですとさ。現にわたしの御友達のうち

でその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんのところへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るところですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らしてあげたらいいでしょう。寒月さんはまるで御存じないんでしょう」

「どうですか、あの方は学校へ行つて球たまばかり磨いていらつしやるから、大方知らないでしょう」

「寒月さんは本当にあの方を御貫おもらいになる気なんでしょうかね。御気の毒だわね」

「なぜ？　御金があつて、いざつて時に力になつて、いいじやありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金つて品ひんがわるいのね

。金より愛の方が大事じゃありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立しやしないわ」

「そう、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何も無いんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論

を逞しくしている、さつきから、分らないなりに  
謹聴していると、ん子が突然口を開いて「わたしも御  
嫁に行きたいな」と云いだした。この無鉄砲な希望  
には、さすが青春の氣に満ちて、大に同情を寄すべ  
き雪江さんもちよつと毒氣を抜かれた体であつたが  
、細君の方は比較的平氣に構えて「どこへ行きたい  
の」と笑ながら聞いて見た。

「わたしねえ、本当はね、招魂社<sup>しょうこんしゃ</sup>へ御嫁に行きたい  
んだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どう  
しようかと思ってるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に  
問い返す勇氣もなく、どっと笑い崩れた時に、次女  
のすん子が姉さんに向ってかような相談を持ちかけ  
た。

「御ねえ様も招魂社がすき？　わたし也大すき。い

っしよに招魂社へ御嫁に行きましよう。ね？　いや

？　いやなら好いいわ。わたし一人で車へ乗ってさっ

さに行っちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃そろえて

招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ樂であらう。

ところへ車の音ががらがらと門前に留ったと思つたら、たちまち威勢のいい御歸りと云う声がした

。主人は日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差

出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は

悠然と茶の間へ這入はいつて来る。「やあ、来たね」と

雪江さんに挨拶しながら、例の有名なる長火鉢の傍そば

へ、ぽかりと手に携たずさえた徳利様のものを抛ほうり出した



。徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云つて花活はないけとも思われない、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰つていらしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見

ながら、「どうだ、いい恰好かつこうだろう」と自慢する。

「いい恰好なの？　それが？　あんまりよかあない

わ？　油壺あぶらつぼなんか何で持っていていらつしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

「花活はないけさ」

「花活にしちや、口が小さいさ過ぎて、いやに胴が張  
ってるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔  
母さんとえら忤ぶところなしだ。困ったものだな」と独  
りで油壺を取り上げて、障子しょうじの方へ向けて眺ながめてい  
る。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってくる

ような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんはそれどころではない、風呂敷包を解いて皿眼とさらまなこになつて、盗難品を検しらべている。「おや驚ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗い張をしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待ってるのが退屈だから、あすこいらを散歩しているうちに

掘り出して来たんだ。御前なんぞには分るまいがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの

」

「どこって日本堤界隈にほんづつみかいわいさ。吉原へも這入はいって見た

。なかなか盛さかんな所だ。あの鉄の門を觀みた事があるか

い。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦せんぎようふのいる

所へ行く因縁いんねんがありませんわ。叔父さんは教師の身

で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当

に驚ろいてしまいわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも品数しなかずが足りないようだ事

。これでみんな戻ったんでしうか」

「戻らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭しろ

と云いながら十一時まで待たせる法があるものか

、これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちやな  
おいけないわ。そんな事が知れると免職になつてよ  
ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の片側がな  
かたかわ  
いんです。何だか足りないと思つたら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こっちは三時間も待たされて、大切な時間を半日潰つぶしてしまった」と日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油壺を眺ながめている。細君も仕方がないと諦あきらめて、戻った品をそのまま戸棚へしまい込こんで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとさ。きたないじやありませんか」



「それを吉原で買つていらしたの？　まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだつてあるじやありませんか」

「ところがないんだよ。滅多めったに有る品ではないんだ

よ」

「叔父さんは随分石地蔵いしじぞうね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女学生は口が悪くついていかん。ちと女大学でも読むがいい」

「叔父さんは保険が嫌きらいでしょう。女学生と保険とどっちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の考のあるものは、誰でも這はい入る。女学生は無用の長

物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入ってもいいない癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きつと？」

「きつとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸かけ

金で何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母

さんはにやにや笑っている。主人は真面目になつて

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑<sup>の</sup>

気な事<sup>んき</sup>を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ

、保険の必要を感じずるに至るのは当前だ。<sup>あたりまえ</sup>ぜひ来月

から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのよ

うに蝙蝠傘こうもりを買つて下さる御金があるなら、保険に

這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません、  
いりませんと云うのを無理に買つて下さるんです  
もの」

「そんなにいらなかつたのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還かえすがいい。ち、よ、う、ど、とん子が欲しがつ

てるから、あれをこっちへ廻してやろう。今日持つて来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だって苛ひどいじやありませんか、せつかく買つて下すつておきながら、還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちつとも苛くはない」

「いらない事はいらないんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらないと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だって」

「だって、どうしたんだ」

「だって苛いわ」

「愚<sup>ぐ</sup>だな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだって同じ事ばかり繰り返しているじゃないですか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらないと云ったじゃないか」

「そりや云いましたわ。いらぬ事はいらぬんですけれども、還すのは厭いやですもの」

「驚ろいたな。わからずや没分曉で強情なんだから仕方がない



。御前の学校じや論理学を教えないのか」

「よくってよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおっしやい。人のものを還せだなんて、他人だつてそんな不人情な事は云やしない。ちつと馬鹿竹のばかたけ真似でもなさい」

「何の真似をしろ？」

「ちと正直に淡泊たんぱくになさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したって叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは言<sup>げん</sup>ここに至<sup>いた</sup>って感に堪<sup>た</sup>えざるもののご

とく、<sup>さんぜん</sup>濟然として一掬<sup>いっきく</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を紫の袴<sup>はかま</sup>の上に落した

。主人は茫<sup>ぼう</sup>乎<sup>うこ</sup>として、その涙がいかなる心理作用に

起因するかを研究するものごとく、袴の上と、俯うつつ向いた雪江さんの顔を見つめていた。ところへ御お三が台所から赤い手を敷居越そろに揃そろえて「お客さまがいらっしやいました」と云う。「誰が来たんだ」と主人が聞くと「学校の生徒さんでございます」と御三は雪江さんの泣顔を横目に睨にらめながら答えた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼けん人間研究のた

め、主人に尾<sup>び</sup>して忍びやかに椽<sup>えん</sup>へ廻<sup>まわ</sup>つた。人間を研究するには何か波瀾がある時を択<sup>えら</sup>ばないと一向<sup>いつこう</sup>結果が出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。

。しかしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる神秘的作用のためにむくむくと持ち上がって奇なもの、変なもの、妙なものの、異<sup>い</sup>なもの、一と口に云えば

吾輩猫共から見てすこぶる後学になるような事件が

至るところに横風おうふうにあらわれてくる。雪江さんの紅こう

涙るいのごときはまさしくその現象の一つである。かく

のごとく不可思議、不可測ふかそくの心を有している雪江さ

んも、細君と話をしていゝうちはさほどとも思わな

かったが、主人が帰つてきて油壺ほうを抛り出すやいな

や、たちまち死竜しりゆうに蒸気唧筒じょうきポンプを注ぎかけたるごとく

勃然<sup>ぼつぜん</sup>としてその深奥<sup>しんおう</sup>にして窺知<sup>きち</sup>すべからざる、巧

妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を

惜気もなく発揚<sup>おわ</sup>し了った。しかしてその麗質は天

下<sup>によしう</sup>の女性に共通なる麗質である。ただ惜しい事には

容易にあらわれて来ない。否<sup>いや</sup>あらわれる事は二六時

中間断なくあらわれているが、かくのごとく顕著に

灼然<sup>しゃくぜん</sup>炳<sup>へい</sup>乎<sup>こ</sup>として遠慮なくはあらわれて来ない。幸に

して主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに

な撫でたがる旋毛曲りつむじまがの奇特家きどくかがおったから、かかる

狂言も拝見が出来たのであろう。主人のあとさえつ

いてあるけば、どこへ行っても舞台の役者は吾知ら

ず動くに相違ない。面白い男を旦那様に戴いたいて、短

かい猫の命のうちにも、大分だいぶん多くの経験が出来る

。ありがたい事だ。今度のお客は何者であらう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追おつ、返かつ

の書生である。大きな頭を地じの隙すいて見えるほど刈

り込んで団だんご子こつ鼻ばなを顔の真中にかためて、座敷の隅

の方に控ひかえている。別にこれと云う特徴もないが頭ず

蓋がいこつ骨こつだけはすこぶる大きい。青坊主に刈きつてさえ

、ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延

ばしたら定めし人目を惹ひく事だろう。こんな顔にか



ぎつて學問はあまり出来ない者だとは、かねてより  
主人の持説である。事實はそうかも知れないがちよ  
つと見るとナポレオンのようですこぶる偉觀である  
。着物は通例の書生のごとく、薩摩<sup>さつまがすり</sup>絣か、久留米<sup>くるめ</sup>が  
すりかまた伊予<sup>いよ</sup>絣か分らないが、ともかくも絣<sup>かすり</sup>と名  
づけられたる<sup>あわせ</sup>袷を袖短かに着こなして、下には襯衣<sup>シャツ</sup>  
も<sup>じゅばん</sup>襦袢もないようだ。素袷<sup>すあわせ</sup>や素足<sup>すあし</sup>は意気なものだそ

うだが、この男のはなはだむさ苦しい感じを与える。  
ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つま  
で印いんしているのは全く素足の責任に相違ない。彼は  
四つ目の足跡の上へちゃんと坐つて、さも窮屈そう  
に畏かしこまっている。一体かしこまるべきものがお  
となしく控ひかえるのは別段気にするにも及ばんが、毬いが  
栗頭ぐりあたまのつんつるてんの乱暴者が恐縮しているところ

は何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つてさえ礼をしないのを自慢にするくらいの連中が、たとい三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。とこ

ろを生れ得て恭謙きょうけんの君子、盛徳ちようしやの長者であるかのご

とく構えるのだから、当人の苦しいにかかわらず傍はた

から見ると大分だいぶんおかしいのである。教場もしくは運

動場であんなに騒々しいものが、どうしてかように

自己を箝束かんそくする力を具そなえているかと思うと、憐れに

もあるが滑稽こっけいでもある。こうやって一人ずつ相対あいたいに

なると、いかに愚駭ぐがいなる主人といえども生徒に対し

て幾分かの重みがあるように思われる。主人も定め

し得意であろう。塵積ちりつて山をなすと云うから、微

々たる一生徒も多勢たぜいが聚合しゅうごうすると侮あなどるべからざる団

体となつて、排斥運動はいせきやストライキをしでかすかも

知れない。これはちょうど臆病者が酒を飲んで大胆になるような現象であらう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の氣に酔つ払つた結果、正氣を取り落したるものと認めて差支えあるまい。さしつかそれでなければかように恐れ入ると云わんよりむしろ悄然しょうぜんとして、自らみづか襖ふすまに押し付けられているくらいな薩摩絣が、いかに老朽だと云つて、かりそ苟めにも先生と名のつく主人を輕けい

蔑べつしようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は座布団ざぶとんを押しやりながら、「さあお敷き

」と云ったが毬栗先生はかたくなったまま「へえ

」と云って動かない。鼻の先に剥はげかかった更紗さらさの

座布団が「御乗んなさい」とも何とも云わずに着席

している後うしろに、生きた大頭がつくねんと着席して

いるのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰

めるために細君が勧工場から仕入れて来たのではない。  
い。布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその  
名誉を毀損せられたるもので、これを勧めたる主人  
もまた幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰  
してまで、布団と睨めくらをしている毬栗君は決して  
布団その物が嫌なのではない。実を云うと、正式  
に坐った事は祖父さんの法事の時のほかは生れてか

ら滅多めったにないので、先さつきからすでにしびれが切れ

かかつて少々足の先は困難を訴えているのである

。それにもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰に控ひかえているにもかかわらず敷かない。主人がさあ

お敷きと云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。こ

のくらい遠慮するなら多人数集たにんずまった時もう少し遠

慮すればいいのに、学校でもう少し遠慮すればいい



のに、下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すま

じきところへ気兼きがねをして、すべき時には謙遜けんそんしない

、否大おおいに狼藉ろうぜきを働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろうしの襖ふすまをすうと開けて、雪江さんが一

碗うやうやの茶を恭しく坊主に供した。平生なら、そらサヴ

エジ・チーが出たと冷ひやかすのだが、主人一人に対

してすら痛み入いっている上へ、妙齡によしょうの女性が学校で

覚え立ての小笠原流で、乙おつに氣取った手つきをして

茶碗を突きつけたのだから、坊主は大おおに苦悶くもんの体ていに

見える。雪江さんは襖ふすまをしめる時に後ろからにやに

やと笑った。して見ると女は同年輩でもなかなかえ

らいものだ。坊主に比すれば遙はるかに度胸すが据すわって

いる。ことに先刻さつきの無念にはらはらと流した一滴の

紅涙こうなみのあとだから、このにやにやがさらに目立って

見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま

、しばらくの間は辛防しんぼうしていたが、これでは業ぎょうをす

るようなものだど気がついた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

「古井ふるい……」

「古井？　古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門<sup>ぶえもん</sup>」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな

。今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気のんきな主人はこの頭とこの古風

な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかつたのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそうかと心の裏で手を拍つたのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何のために今頃やって来たのか頓と推諒出来ない。元来不人望な主人の事だ

から、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武右衛門君をもつて嚙矢こうしとするくらいな珍客であるが、その来訪の主意がわからんには主人もおおいに閉口しているらしい。こんな面白くない人の家うちへただ遊びにくる訳もなかろうし、また辞職勧告ならもう少し昂然こうぜんと構え込みそうだし、と云つて武右衛門君など

が一身上の用事相談があるはずがないし、どっちから、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここまです参ったのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」



「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと

武右衛門君下を向いたぎり何なんにも言わない。元来武

右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁ずる方で

頭の大きい割に脳力は発達しておらんが、喋しゃべ舌る

そうそう

事においては乙組中鏘々たるものである。現にせん

おおい

だってコロンバスの日本訳を教えろと云って大に主

人を困らしたはまさにこの武右衛門君である。その

さいぜん

どもり

鏘々たる先生が、最前から吃どもりの御姫様のようにもじ

もじしているのは、何か云いわくのある事でなくては

ならん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない

。主人も少々不審に思った。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか

」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云いながら主人は武右衛門君の

顔を見たが、先方は依然として俯向うつむきになつてゐるから

、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢

を変えて「いいさ。何でも話すがいい。ほかに誰も聞いていやしない。わたしも他言たごんはしないから」と  
穏おだやかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷っている。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、毬栗頭いかりあたまをむくり

と持ち上げて主人の方をちよつとまぼしそうに見た。  
その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝  
日の煙を吹き出しながらちよつと横を向いた。

「実はその……困った事になつちまつて……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るもんですから、来たんで

す」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかったんですけれども、浜<sup>は</sup>

田<sup>まだ</sup>が借せ借せと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田平助<sup>へいすけ</sup>かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじやありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「えんしよ艶書を送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は廃よして、  
投函とうかんやく役になると云ったん

です」

「何だか要領を得んじゃないか。一体誰が何をしたんだい」

「艶書えんしよを送ったんです」

「艶書を送った？　誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じゃないんです」



「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちつとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だつて、何の事だかちつとも分らんじやないか。もつと条理を立てて話すがいい

。元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田つて向横丁むこうよちようにいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。——浜田が名前がなくちやいけないって云いますから、君の名前をかけって云ったら、僕のじやつまらない。古井武右衛門の方がいいって——それで、とうとう僕の名を借してしまったんです」

「で、君はあすこの娘を知ってるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありません。顔なんか見た事もありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云うから、からかってやったんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送

ったんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行つて投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思つて、非常に

心配して二三日は寝られないんで、何だか茫ぼんやりしてしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学

校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんつかが継母ままですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃうです。本当に退校にな

るでしようか」

「だから滅多めったな真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしまっ  
たんです。退校にならないように出来ないでしょう  
か」と武右衛門君は泣き出しそうな声をしてしきり  
に哀願に及んでいる。襖ふすまの蔭では最前さいぜんから細君と雪  
江さんがくすくす笑っている。主人は飽あくまでもも



つたいぶつて「そうさな」を繰り返している。なか  
なか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞  
く人があるかも知れない。聞くのはもつともだ。人

間にせよ、動物にせよ、己おのれを知るのは生涯しょうがいの大事で

ある。己おのれを知る事が出来さえすれば人間も人間とし

て猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこ

んないたずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめてしまうつもりである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らないと同じように、自己の何物かはなかなか見当がつき悪くいと見えて、平生から輕蔑してゐる猫に向つてさえかのような質問をかけるのである。人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けてゐる。万物の靈だなどどこへでも万物の靈を担いで

あるくかと思うと、これしきの事実が理解出来ない

。しかも恬<sup>てん</sup>として平然たるに至ってはちと一噓<sup>いっきやく</sup>を催

したくなる。彼は万物の霊を背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>へ担<sup>かつ</sup>いで、おれの

鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立

てている。それなら万物の霊を辞職するかと思うと

、どう致して死んでも放しそうにしない。このくら

い公然と矛盾をして平気でいられば愛嬌<sup>あいぎょう</sup>になる

。愛嬌になる代りには馬鹿をもつて甘じなくてはな  
あまん  
らん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江

嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せはちあわをして

、その鉢合せが波動を乙おつなところに伝えるからでは

ない。実はその鉢合の反響が人間の心に個々別々の

ねいろ音色を起すからである。第一主人はこの事件に対し

てむしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがいかにやかましくって、おつかさんがいかに君を継子ままこあつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのとは大に趣おもむきが違う。千人近くの生徒がみんな退校になったら、教師も衣食みちの途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人いちにんの運命がどう

ちようせき

変化しようと、主人の朝夕にはほとんど関係がない

おのず

。関係の薄いところには同情も自から薄い訳である

まゆ

。見ず知らずの人のために眉をひそめたり、鼻をか

んだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではな

なさけぶか

い。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物で

あるとははなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生

ふぜい

れて来た賦税として、時々交際のために涙を流して

見たり、気の毒な顔を作つて見せたりするばかりである。云わばごまかし<sup>せい</sup>性表情で、実を云うと大分骨<sup>だいぶ</sup>が折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、これは世間から大變珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしろ拙<sup>せつ</sup>な部類に属すると云つてよ

ろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。彼が武右衛門君に対して「そうさな」を繰り返しているのでも這裏しやりの消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、けっして主人のような善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本来の性質であつて、その性質をかくそうと力つとめないのは正直な人である。



。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それ

こそ人間を買い被<sup>かぶ</sup>つたと云わなければならない。正

直ですら払<sup>ふ</sup>底<sup>てい</sup>な世にそれ以上を予期するのは、馬<sup>ば</sup>琴<sup>きん</sup>

の小説から志<sup>し</sup>乃<sup>の</sup>や小文<sup>こぶん</sup>吾<sup>ご</sup>が抜けだして、向う三軒両

隣<sup>はっけん</sup>へ八犬伝<sup>でん</sup>が引き越した時でなくては、あてになら

ない無理な注文である。主人はまずこのくらいにし

て、次には茶の間で笑<sup>おん</sup>つて<sup>なれん</sup>る女連<sup>おんなれん</sup>に取りかかるが

これは主人の冷淡を一步向むこうへ跨またいで、滑稽こっけいの領分

に躍おどり込んで嬉しがっている。この女連には武右衛

門君が頭痛に病んでいる艶書事件が、仏陀ぶつだの福音ふくいんの

ごとくありがたく思われる。理由はないただありが

たい。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがあり

がたいのである。諸君女に向って聞いて御覧、「あ

なたは人が困るのを面白がって笑いますか」と。聞

かれた人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう  
、馬鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけて淑  
女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思う  
のは事実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事  
実である。であるとすれば、これから私<sup>わたし</sup>の品性を侮  
辱するような事を自分でしてお目にかけますから  
、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である

。僕は泥棒をする。しかしけっして不道德と云つてはならん。もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗ったものである。僕を侮辱したものである。と主張するようなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立っている。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり、蹴<sup>け</sup>たり、どやされたりして、しかも人が振りむきもせぬ時、平気でいる覚悟が必用であるの

みならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。それではなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちよつとしたはずみから、とんだ間違をして大に恐れ入つおおいてはいるようなものの、かように恐れ入ってるものを蔭で笑うのは失敬だとくらいは思ふかも知れない

が、それは年が行かない稚氣ちぎというもので、人が失

礼をした時に怒おこるのを気が小さいと先方では名づけ

るそうだから、そう云われるのがいやならおとなし

くするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをち

よつと紹介する。君は心配の権化ごんげである。かの偉大

なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもつて充満

せるがごとく、まさに心配をもつてはちきれんとし

ている。時々その団子つ鼻がぴくぴく動くのは心配

が顔面神経に伝つたわつて、反射作用のごとく無意識に活

動するのである。彼は大きな鉄砲丸を飲てっぽうだまみ下くだしたご

とく、腹の中にいかんともすべからざる塊かたまりを抱いだ

いて、この両三日処置に窮りようさんちしている。その切なさの

余り、別に分別の出所でどころもないから監督と名のつく先

生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろ

うと思つて、いやな人の家へ大きな頭を下げにまか

り越したのである。彼は平生学校で主人にからかつ

たり、同級生を煽動せんどうして、主人を困らしたりした事

はまるで忘れてゐる。いかにからかおうとも困らせ

ようとも監督と名のつく以上は心配してくれるに相

違ないと信じてゐるらしい。随分単純なものだ。監

督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によ



つてやむを得ずいただいている、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。ただ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪江さんは名前だけで見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに我儘わがままなるのみならず、他人は己おのれに向つて必ず親切でなくてはならんと云う、人間を買い被かぶつた仮定から出立してい

る。笑われるなどとは思も寄らなかつたろう。武右

衛門君は監督の家へ来て、うちきつと人間について、一

の真理を發明したに相違ない。彼はこの真理のため

に将来ますます本当の人間になるだろう。人の心配

には冷淡になるだろう、人の困る時には大きな声で

笑うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右

衛門君をもつて充みたされるであろう。金田君及び金

田令夫人をもつて充たされるであらう。吾輩は切に

武右衛門君のために瞬時も早く自覚して真人間まにんげんにな

られん事を希望するのである。しからずんばいかに

心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移

るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成

功は得られのである。いな社会は遠からずして君

を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中学

の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思つていると、格子こうしが  
がらがらとあいて、玄関の障子しょうじの蔭から顔が半分ぬ  
うと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返してい  
たところへ、先生と玄関から呼ばれたので、誰だろ

うとそつちを見ると半分ほど筋違すじかいに障子から食はみ出している顔はまさしく寒月君である。「おい、御お這は入いり」と云ったぎり坐まっている。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

「なに構わん、まあ御お上あがり」

「実はちよつと先生を誘いに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては無闇むやみにあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行つて虎の鳴き声を聞こうと思ふんです」

「つまらんじやないか、それよりちよつと御上り」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思つたもの

か、靴を脱いでそのそ上がつて来た。例のごとく

鼠色ねずみいろの、尻あにつぎの中あたつたずぼんを穿はいているが

、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れ

たのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽

古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからで

ある。未来の細君をもつてしよくもく矚目された本人へ文ふみをつ

けた恋の仇あだとは夢にも知らず、「やあ」と云つて武  
右衛門君に軽く会釈えしやくをして椽側えんがわへ近い所へ座をしめ  
た。

「虎の鳴き声を聞いたつて詰らないじゃないか」

「ええ、今じやいけません、これから方々散歩して  
夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」

「へえ」



「すると公園内の老木は森々しんしんとして物凄ものすごいでしょう

」

「そうさな、昼間より少しは淋さみしいだろう」

「それで何でもなるべく樹きの茂った、昼でも人の通らない所を択よつてあるいていると、いつの間まにか紅こう

じんばんじょう

塵万丈の都会に住んでる気はなくなつて、山の中へ

迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになってどうするんだい」

「そんな心持ちになって、しばらくたたず佇んでいるとた

ちまち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「そう旨うまく鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ

聞えるくらいなんですから、深夜げきせき閑寂として、四望しぼう

人なく、鬼気はだえ肌せまに逼って、魑魅ちみ鼻を衝つく際さいに……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじやありませんか、怖い時に」こわ

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉ろうさんの葉をことごとく振り落す

ような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりや物凄いだろう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きっと愉快だろ

うと思うんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれなだらうと思  
うんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であるごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで默然<sup>もくねん</sup>として虎の話を羨<sup>うらや</sup>ましそうに聞い

ていた武右衛門君は主人の「そうさな」で再び自分

の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんですが、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を見た。吾輩は思う仔細しさいあつてちよつと失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々なみなみと注ついで、アンチモニ―の茶托ちやたくの

上へ載せて、

「雪江さん、はばか憚りさま、これを出して来て下さい」

「わたし、いやよ」

「どうしても」と細君は少々驚ろいた体でてい笑いはたと留める。

「どうしても」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、そば傍にあつた読売新聞の上にのしか

かるように眼を落した。細君はもう一応きょうしょう協商を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」  
「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだろう。

「ちつとも恥かしい事はないじやありませんか」と  
今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上  
へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞  
を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托に引きか  
ちやたく  
かって、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ  
込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さ  
んは「あら大変だ」と台所へ馳<sup>か</sup>け出して行つた。雑<sup>ぞう</sup>



巾きんでも持つてくる了りよう見けんだろう。吾輩にはこの狂言が  
ちよつと面白かつた。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話してい  
る。

「先生障子しょうじを張り易かえましたね。誰が張つたんです

」  
「女が張つたんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになつたんですか」

「うんあれも手伝つたのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云つて威張つてゐるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめてゐる。

「こつちの方は平たいらですが、右の端はじは紙が余つて波が

出来ていますね」

「あそこが張りたてのところで、もつとも経験の乏<sup>とぼ</sup>しい時に出来上ったところさ」

「なるほど、少し御手際<sup>おてぎわ</sup>が落ちますね。あの表面は

ちようぜつてきまくせん

超絶的曲線<sup>ちようぜつてきまくせん</sup>でとうてい普通のフアンクションではあ

らわせないです」と、理学者だけにむずかしい事を

云うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしていても、とうて

い見込がないと思い切った武右衛門君は突然かの偉

大なる頭蓋骨ずがいこつを畳の上にお圧しつけて、無言の裡うちに暗

けつべつに訣別の意を表した。主人は「帰るか」と云った

。武右衛門君は悄然しょうぜんとして薩摩下駄を引きずって門

を出た。可愛想かわいそうに。打ちやっがって置くと巖頭がんとうの吟ぎんでも

けごんのたき

書いて華嚴滝から飛び込むかも知れない。元を糺せ

ただ

ば金田令嬢のハイカラと生意気から起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ

。こないだコロンバスを訳して下さいって大に弱っ  
おおい

た」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をする  
んでしょう。先生何とおっしゃいました」

「ええ？　なあに好い加減な事を云つて訳してやつた」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりやえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくって、先生を

困らせるようには見えないじやありませんか」

「今日は少し弱ってるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちよつと見たばかりで非

常に可哀想かわいそうになりました。全体どうしたんです」

「なに愚ぐな事さ。金田の娘に艶書えんしよを送ったんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなか

えらいもんですね。どうも驚ろいた」



「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえって面白い  
です。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいっこう構いません。しかし  
あの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきま  
すね」

「それがさ。じょうだん冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかってやろうって、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやったんですか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく

、一人が投函とうかんする、一人が名前を借す。で今来たの

が名前を借した奴なんだがね。これが一番愚ぐだね

。しかも金田の娘の顔も見た事がないって云うんだ  
ぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりや、近来の大出来ですよ。傑作ですね。どう

もあの大頭が、女に文ふみをやるなんて面白いじゃあり

ませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに

、金田なんか、構やしません」

「君は構わなくつても……」

「なに金田だつて構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになつて急に良心に責められて、恐ろしくなつたものだから、

大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」  
おおい

「へえ、それであんなに悄悄しおしおとしているんですか

、気の小さい子と見えますね。先生何とか云つてお

やんなすつたんでしよう」

「本人は退校になるでしようかって、それを一番心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云うほどでもありませんやね。構や

しません。金田じや名誉に思つてきつと吹聴ふいちようしてい

ますよ」

「まさか」

「とにかく可愛想かわいそうですよ。そんな事をするのがわる

いとしても、あんなに心配させちや、若い男を一人殺してしまえますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかぴくぴくさせて

可愛いです」

「君も大分迷亭見だいぶたように吞気のんきな事を云うね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔むかし風ふうだから、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚ぐじやないか、知りもしないところへ、いたずらに艶書えんしよを送るなんて、まるで常識をかいでるじやないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいでいまさあ。救つておやんなさい。功德くどくになりますよ。あの容子ようすじ



や華嚴けごんの滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もつと大きな、もつと分別のある大おお

僧共ぞうがそれどころじゃない、わるいいたずらをして

知らん面かおをしていますよ。あんな子を退校させるく

らいなら、そんな奴らを片かたっ端はしから放逐でもしなく

つちや不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中にさんちうちにちよ

つと帰国しなければならぬ事が出来ましたから

、当分どこへも御伴おともは出来ませんから、今日は是非

いっしょに散歩をしようと思つて来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちよつと用事が出来たんです。——ともかく

も出ようじやありませんか」

「そう。それじや出ようか」

「さあ行きましょう。今日は私が晩餐ばんさんを奢おごりますか

ら、——それから運動をして上野へ行くとちようど

好い刻限です」としきりに促<sup>うな</sup>がすものだから、主人もその気になって、いっしよに出掛けて行つた。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけらけらからからと笑っていた。

床の間の前に碁盤を中に据<sup>す</sup>えて迷亭君と独仙君が  
対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か奢<sup>おご</sup>るんだぜ。い  
いかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごと  
く山羊髯<sup>やぎひげ</sup>を引つ張りながら、こう云<sup>い</sup>った。

「そんな事をする、せつかくの清戯<sup>せいぎ</sup>を俗了<sup>ぞくりよう</sup>してしま  
う。かけなどで勝負に心を奪われては面白くない

。成敗せいはいを度外どがいにおいて、白雲しやくうんの自然しぜんに岫しゅうを出でて冉ぜん

々ぜんたるぜんごとき心持ちで一局いちくを了りやうしてこそ、個中こちゆうの味あじわい

はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨せんこつを相手にしちや少々骨が折れ過ぎる。宛然えんぜんたる列仙伝中の人物だね」

「無絃むげんの素琴そきんを弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあつて鷹揚だ。おうよう君が白なら自然

の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからば謙遜<sup>けんそん</sup>して、定石<sup>じょうせき</sup>にここいらから行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくっても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になつて始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角



に仕切つて、目が眩くらむほどごたごたと黒白こくびやくの石をな

らべる。そうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる

。高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻かき散

らしても滅茶滅茶になる。引き寄せて結べば草の庵いおり

にて、解くればもとの野原なりけり。入らざるいた

ずらだ。ふところ懐手をして盤を眺めている方が遥はるかに気楽

である。それも最初の三四十目は、石の並べ方では

めざわ

別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云う

まぎわ  
のぞ

間際に覗いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ

。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合つて

、御互にギューギュー云っている。窮屈だからと云

つて、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だ

と申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命

とあきらめて、じつとして身動きもせず、すくんで  
いるよりほかに、どうする事も出来ない。碁を発明  
したものは人間で、人間の嗜好しこうが局面にあらわれる  
ものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせせこましい  
人間の性質を代表していると云つても差支さしつかえない  
。人間の性質が碁石の運命で推知すいちする事が出来るも  
のとするれば、人間とは天空海潤てんくうかいかつの世界を、我からと

縮めて、己おのれの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せぬように、小刀細工で自分の領分に縄張りを  
こがたなざいく  
するのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とは  
いちごん  
しいて苦痛を求めるものであると一言に評しても  
よからう。

のんき  
呑気なる迷亭君と、  
ぜんき  
禅機ある独仙君とは、どう云

う了見か、今日に限って戸棚から古碁盤を引きずり

出して、この暑苦しいいたずらを始めたのである

。さすがに御兩人御揃いおそろの事だから、最初のうちは

各自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が自

由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りが

あって、横よこ縦たての目盛りは一手ひとてごとに埋うまって行くのだ

から、いかに呑気でも、いかに禅機があっても、苦

しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這入はいつてくる法はない」

「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが  
ほんいんぼう  
本因坊の流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんやていけん屍肩をやと、一つ  
、  
こう行くかな」

「そうおいでになつたと、よろしい。薰風南より来

みんなみ

つて、殿閣微涼びりようを生ず。こう、ついでおけば大丈夫

なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つ

ぐ気遣きづかいはなからうと思つた。ついで、くりやるな八

はち

幡鐘まんがねをと、こうやったら、どうするかね」

「どうするも、こうするもないさ。一剣天に倚よつて

寒し——ええ、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ

」

「やや、大變大變。そこを切られちや死んでしまふ

。おい冗談じょうだんじゃない。ちよつと待つた」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こうなつてるところへは這はい入れるものじゃないんだ」

「這入つて失敬つかまつ仕り候。ちよつとこの白をとつてく



れたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ

」

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。――

――なに君と僕の間柄じゃないか。そんな水臭い事を

言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合だ。しばらく、しばらくつて花道はなみちから馳かけ出してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいいから、ちよつとどけたまえ」

「君さつきから、六返ぺん待ったをしたじゃないか」

「記憶のいい男だな。向後こうごは旧に倍し待ったを仕つかまつり

候。だからちよつとどけたまえと云うのだあね。君もよツぽど強情だね。座禅なんかしたら、もう少し捌さばけそうなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じやないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくない

「飛んだ悟道だ。相変らず春風影裏しゅんぷうえいりに電光でんこうをきつて  
るね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは逆さかだ」

「ハハハハもうたいてい逆さかになっていい時分だと思つたら、やはりたしかなところがあるね。それじや仕方がないあきらめるかな」

「生死事大、無常迅速、あきらめるさ」  
しょうじじたい　むじょうじんそく

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へぴしやりと一石をいっせき下くだした。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に輸贏しゅえいを

争っている、座敷の入口には、寒月君と東風君が

相ならんでその傍そばに主人が黄色い顔をして坐ってい

る。寒月君の前に鰹節かつぶしが三本、裸のまま畳の上に行

儀よく排列してあるのは奇観である。

しゅっしよ

ふところ

この鰹節の出処は寒月君の懷で、取り出した時は

暖<sup>あつ</sup>たかく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬく

もっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹

節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた

。

「実は四日ばかり前に国から帰って来たのですが

、いろいろ用事があつて、方々馳<sup>か</sup>けあるいていたものですから、つい上がられなかつたのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のごとく無愛嬌<sup>ぶあいぎょう</sup>な事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみやげを早く献上<sup>けんじょう</sup>しないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りそうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭いにおをかいで見ろ。

「かいだつて、鰹節の善悪よしあしはわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以ゆえんかね」

「まあ食べて御覧なさい」



「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が欠けてるじゃないか」

「それだから早く持つて来ないと心配だと云うのです」

「なぜ？」

「なぜって、そりや鼠ねずみが食ったのです」

「そいつは危険だ。滅多めったに食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったって害はありません」

「全体どこで噛かったんだい」

「船の中です」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっしよに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、その晩にや

られました。鰹節かつぶしだけなら、いいのですけれども

、大切なヴァイオリンの胴を鰹節と間違えてやはり  
少々かじ噛りました」

「そそっかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう  
見境みさかいがなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事  
を云って依然として鰹節を眺ながめている。

「なに鼠だから、どこに住んでもそそっかしいの

でしよう。だから下宿へ持つて来てもまたやられそう  
うでね。劍吞<sup>けんのん</sup>だから夜<sup>よ</sup>るは寢床の中へ入れて寢まし  
た」

「少しきたないようだぜ」

「だから食べる時にはちよつとお洗いなさい」

「ちよつとくらいじや奇麗にやなりそうもない」

「それじや灰汁<sup>あく</sup>でもつけて、ごしごし磨いたらいい

でしよう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると

「なんだって？　ヴァイオリンを抱いて寝たって？

それは風流だ。行く春や重たき琵琶びわのだき心と云

う句もあるが、それは遠きかみその上の事だ。明治の秀

才はヴァイオリンを抱いて寝なくつちや古人を凌ぐしの

訳には行かないよ。かい巻まきに長き夜守よもるやヴァイオ

リンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこっちの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違ってそう急には出来ません。しかし出来た暁にはもう少し生靈せいれい

の機微きびに触れた妙音が出ます」

「そうかね、生霊しょうりょうはおがらを焚たいて迎え奉るものと思つてたが、やっぱり新体詩の力でも御来臨からかつになるかい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戲からかつている。

「そんな無駄口を叩たたくとまた負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中ふちゆうの章魚たこ

同然手も足も出せないのだから、僕も無聊ぶりようでやむを

得ずヴァイオリンの御仲間を仕つかまつるのさ」と云うと

、相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こっちで待ってるんだ」と云  
い放った。

「え？　もう打ったのかい」



「打ったとも、とうに打ったさ」

「どこへ」

「この白をはすに延ばした」

「なあるほど。この白をはすに延ばして負けにけり

か、そんならこっちはと——こっちは——こっちは

こっちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね

。君もう一返打たしてやるから勝手なところへ一目

いちもく

打ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。——それじゃこのかど地面へちよつと曲がつて置くかな

——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして噛かじるんだよ、もう少しいいのを奮

発して買うさ、僕が以イ太タ利リ亜アから三百年前の古物こぶつを

取り寄せてやろうか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人は一喝<sup>いっかつ</sup>にして迷亭君を極<sup>き</sup>めつけた。

「君は人間の古物<sup>こぶつ</sup>とヴァイオリンの古物<sup>こぶつ</sup>と同一視しているんだろう。人間の古物でも金田某のごときも

のは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのさ。——さあ、独仙君どうか御早く願おう。けいまさのせりふじやないが秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありません。仕方がないから

、ここへ一目いちもく入れて目めにしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、いささか駄弁を振ふるつて肝胆かんたんを砕いていたが、やツぱり駄目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。——お

い苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行つて万年漬を食つただけあつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまずいが、度胸は据すわつてる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人が後ろ向うしむきのまままで答えるやいなや、迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。独仙君は毫ちようも関せざるもののごとく、「さあ君の番だ」と

また相手を促した。うなが

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思うのだが、よっぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから詩歌しいかの趣味のあるものはやはり音

楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃たのむところ

ろがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきつと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。――先生わたく私のヴァイオリンを

習い出した顛末てんまつをお話しした事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあつてやり出したのかい



「なあに先生も何もありません。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限った事もなかろう」と寒月君はつんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりや、どうでもいいが、どう云う風に独習した

のかちよつと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく往来などがあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやったものはほとんどなかつたのです。ことに私のおつた学校は田舎いなかの田舎で

麻裏草履さえないと云うくらいな質朴な所でしたから、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾くものはもちろん一人もありません。……」

「何だか面白い話が向うで始まったようだ。独仙君いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あつてもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云ったって、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わんきちようめん几帳面な男だ。それじゃ一いっき気

呵かせい成にやつちまおう。——寒月君何だかよつぽど面

白そうだね。——あの高等学校だろう、生徒が裸足はだし

で登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、皆みんななはだしで兵式体操をして、廻れ右をや

るんで足の皮が大変厚くなつてると云う話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握り

飯を一個、夏蜜柑なつみかんのように腰へぶら下げて来て、そ

れを食うんだって云うじゃないか。食うと云うより

むしろ食いつくんだね。すると中心から梅干が一個

出て来るそうだ。この梅干が出るのを楽しみに塩気

のない周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと云うが、なるほど元氣旺盛おうせいなものだね。独仙君、君の氣に入りそうな話だぜ」

「質朴剛健でたのもしいい氣風だ」

「まだたのもしいい事がある。あすこには灰吹きはいふがな

いそうだ。僕の友人があすこへ奉職をしている頃吐と

月峰げっほうの印いんのある灰吹きを買いに出たところが、吐月

峰どころか、灰吹と名づくべきものが一個もない

。不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の藪やぶへ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、売

る必要はないと澄まして答えたそうだ。これも質朴

剛健の気風をあらわす美譚びだんだろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりやそれでいいが、ここへ駄目を一つ入  
れなくちやいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた

。——僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんな

ところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げた

ものだ。惇独<sup>けいどく</sup>にして不羣<sup>ふぐん</sup>なりと楚辞<sup>そし</sup>にあるが寒月君

は全く明治の屈原<sup>くつげん</sup>だよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウェルテルさ。——なに石を上



げて勘定をしろ？　やに物堅い性質だね。ものがた勘定しな

くつても僕は負けてるからたしかだ」

「しかし極きまりがつかないから……」

「それじゃ君やってくれたまえ。僕は勘定所じやない。一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出し

て来た。独仙君は丹念に白石を取っては白の穴を埋<sup>う</sup>め、黒石を取っては黒の穴を埋めて、しきりに口の内<sup>うち</sup>で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固<sup>がんこ</sup>なので、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来

何だって、紺こんの無地の袴はかまなんぞ穿はくんだい。第一だいちあ

れからして乙おつだね。そうして塩風に吹かれつけてい

るせいか、どうも、色が黒いね。男だからあれで済

むが女があれじゃさぞかし困るだろう」と迷亭君が

一人這入はいると肝心かんじんの話はどっかへ飛んで行ってしま

う。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

「だって一国中ことごとく黒いのだから仕方があり  
いつくじゅう

ません」

「因果いんがだね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろう。生なまじ白いと鏡を見るたんび

に己惚おのぼれが出ていけない。女と云うものは始末におえ

ない物件だからなあ」と主人は喟然<sup>きぜん</sup>として大息<sup>たいそく</sup>を洩<sup>も</sup>らした。

「だって一国中ことごとく黒ければ、黒い方で己惚<sup>うぬぼ</sup>れはしませんか」と東風君がもつともな質問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云うと、

「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるいぜ」と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さっき出掛けた」

「どうれで静かだと思った。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰ってくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと笑う。  
迷亭君は

「妻さいを持つとみんなそう云う気になるのさ。ねえ独仙君、君なども妻君難の方だろう」

「ええ？　ちよつと待った。四六二十四、二十五

二十六、二十七と。狭いと思ったら、四十六目もくあるか。もう少し勝ったつもりだったが、こしらえて見ると、たった十八目の差か。――何だって？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハハ別段難でもないさ。僕の妻は元来さい僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」



「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代ってちよつと弁護の労を取った。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の域いきに入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸

福を完まっうしななければ天意に背そむく訳だと思ふんだ。――

――がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の境きょうに這入はいれそうもない」

「妻さいを貰えばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて  
向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からな  
いですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おう  
と思つて寒月君にさつきからけいけんたん経験譚をきいているの  
です」

「そうそう、ウェルテル君のヴァイオリン物語を拝  
聴するはずだったね。さあ話し給え。もう邪魔はし

ないから」と迷亭君がようやく鋒鋦ほうくを収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな遊戯ゆうぎ三昧で宇宙の真理が知れては大変だ

い。しやり這裡の消息を知ろうと思えばやはり懸崖けんがいに手を撒さつ

して、絶後ぜつごに再び蘇よみがえる底の気魄きはくがなければ駄目だ

」と独仙君はもったい振って、東風君に訓戒じみた  
説教をしたのはよかったが、東風君は禅宗のぜの字

も知らない男だから頓とんと感心したようすもなく

「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間かつごうの渴仰の極致を表わしたものだと思いますから、ど

うしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめるま

では大分苦心だいぶんをしたよ。第一買うのに困りましたよ先生」

「そうだろう麻裏草履あさうらぞうりがない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜さしつかめたから差支えないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。  
見つければ、すぐ生意気だと云うので制裁を加え  
られます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と  
東風君は大におおい同情を表した。

「また天才か、どうか天才呼ばわりだけはごめんこうむ御免蒙り

たいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのあ  
る店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれ  
を手に抱<sup>か</sup>えた心持ちはどんなだろう、ああ欲しい

ああ欲しいと思わない日は一<sup>いちんち</sup>日もなかったのです

」

「もつともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝<sup>こ</sup>った  
ものだね」と解<sup>げ</sup>しかねたのが主人で、「やはり君



「天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独  
仙君ばかりは超然として髯ひげを撚ねんしている。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一  
ご不審かも知れないですが、これは考えて見ると当  
り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校が  
あつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリ  
ンを稽古しなければならぬのですから、あるはず

です。無論いいのではありません。ただヴァイオリンと云う名が辛<sup>かろ</sup>うじてつくくらしいのものであります

。だから店でもあまり重きをおいていないので、二三挺いっしょに店頭へ吊<sup>つ</sup>るしておくのです。それがね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり、小僧の手が障<sup>さわ</sup>ったりして、そら音<sup>ね</sup>を出す事があります。その音<sup>ね</sup>を聞くと急に心臓が破裂しそうな心

持で、いても立つてもいらなくなるんです」

「危険だね。水癲癇、みずてんかん人癲癇と癲癇にもいろいろ種

類があるが君のはウエルテルだけあつて、ヴァイオリン癲癇だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ、實際癲癇てんかんかも知れませんが、しかしあの音色ねいろ

だけは奇体ですよ。その後今日まで随分ひきましたごこんにち

があのかくらい美しい音ねが出た事があります。そう

さ何と形容していいでしょう。とうてい言いあらわせないです」

りんろうきゆうそう

「琳琅璆鏘として鳴るじゃないか」とむずかしい事

を持ち出したのは独仙君であつたが、誰も取り合わ

なかつたのは氣の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとうこの靈異な音ねを三度ききました。三度目にどうあつてもこれは買わなければならぬと決心しました

。仮令たとひ国のものから譴責けんせきされても、他県のものから

輕蔑けいべつされても——よし鉄拳制裁てつけんのために絶息ぜつそくしても

——まかり間違つて退校の処分を受けても——、こ

ればかりは買わずにいられないと思いました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思い込める訳のものじゃない。うらやま羨しい。僕もどうかして

、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けて  
いるが、どうもいけないね。音楽会などへ行つて

出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに  
感興が乗らない」と東風君はしきりにうら羨やましがつ

ている。

「乗らない方が合わせだよ。今でこそ平気で話すよ  
うなもののその時の苦しみはとうてい想像が出来る  
ような種類のものではなかった。——それから先生  
とうとう奮発して買いました」

「ふむ、どうして」

「ちょうど十一月の天長節の前の晩でした。国のも

のは揃そろって泊りがけに温泉に行きましたから、一人

もいません。私は病気だと云って、その日は学校も

休んで寝ていました。今晚こそ一つ出て行かって兼ねて

望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でそ

の事ばかり考えていました」

けびよう

「偽病をつかつて学校まで休んだのかい」

「全くそうです」



「なるほど少し天才だね、こりや」と迷亭君も少々恐れ入った様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠でまちどお

たまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで

、眼を眠ねむって待って見ましたが、やはり駄目です

。首を出すと烈しい秋の日が、六尺の障子しょうじへ一面に

あたって、かんかんするには癩癩かんしゃくが起りました。上

の方に細長い影がかたまつて、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

「渋柿の皮を剥むいて、軒へ吊つるしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床とこを出て障子をあけて椽側えんがわへ出

て、渋柿の甘干あまぼしを一つ取つて食いました」

「うまかったかい」と主人は小供みたような事を聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が暮

ればいいがと、ひそかに神仏に念じて見た。約三四時間も立ったと思う頃、もうよかろうと、首を出すにあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわする」

「そりや、聞いたよ」

「何返なんべんもあるんだよ。それから床を出て、障子をあ

けて、甘干しの柿を一つ食つて、また寢床へ這入はいつて、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やっぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦せかずに聞いて下さい。それから約

三四時間夜具の中で辛抱しんぼうして、今度こそもうよかろ

うとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然

として六尺の障子へ一面にあたつて、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわしている」

「いつまで行つても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、えんがわ椽側へ出て甘干

しの柿を一つ食つて……」

「また柿を食つたのかい。どうもいつまで行つても柿ばかり食つてて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いてる方がよっぽどじれったいぜ」

「先生はどうも性急せっかちだから、話がしにくくって困り

ます」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗あんに不平を洩もらした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たい

ていにして切り上げましょう。要するに私は甘干しの柿を食つてはもぐり、もぐつては食い、とうとう軒端のきばに吊つるした奴をみんな食つてしまいました」

「みんな食つたら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食つて、もうよかろうと首を出して見ると、相変らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたつて……



「僕あ、もう御免だ。いつまで行っても果<sup>は</sup>てしがない」

「話す私も飽<sup>あ</sup>き飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいいの事業は成就<sup>じょうじゆ</sup>するよ。だまってたら、あしたの朝まで秋の日がかんかんするんだろう。全体いつ頃にヴァイオリ

ンを買う気なんだい」とさすがの迷亭君も少し辛抱しんぼう

し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然

として、あしたの朝までも、あさつての朝までで

も、いくら秋の日がかんかんしても動ずる気色はさけしき

らにない。寒月君も落ちつき払つたもので

「いつ買う気だとおっしゃるが、晩になりさえすれ

ば、すぐ買いに出掛けるつもりなのです。ただ残念

な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかん

しているものですから——いえその時の私わたくしの苦し

みと云ったら、とうてい今あなた方の御じれになる

どころの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干を食つ

ても、まだ日が暮れないのを見て、げんぜん泫然として思わ

ず泣きました。東風君、僕は実に情なさけなくって泣い

たよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話はもっと早く進行させたいものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で滑稽こっけいな挨拶をしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「そう日が暮れなくちや聞く方も困るからやめよう

「と主人がとうとう我慢がし切れなくなつたと見え  
て云い出した。

「やめちやなお困ります。これからがいよいよ佳境  
に入<sup>い</sup>るところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよ  
かろう」

「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事です

から、枉まげて、ここは日が暮れた事に致しましょう

」

「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどつと噴き出した。

「いよいよ夜よに入ったので、まず安心とほっと一息

ついて鞍懸村くらかけむらの下宿を出ました。私は性来騷しょうらいそうぞう々しい

所きらいが嫌ですから、わざと便利な市内を避けて、人迹じんせき

まれ  
稀な寒村の百姓家にしばらく蝸牛かぎゅうの庵いおりを結んでいた

のです……」

「人迹ひとあとの稀まれなはあんまり大袈裟おおげさだね」と主人が抗議

を申し込むと「蝸牛かぎゅうの庵いおりも仰山ぎょうさんだよ。床の間なしの

四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷

亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事実はどう

うでも言語が詩的で感じがいい」と褒ほめた。独仙君

は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとってるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。



「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰くらわせる

。

「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。：

…で当夜の服装と云うと、手織ており木綿もめんの綿入きんの上へ金

釦ボタンの制服外套がいとうを着て、外套の頭巾ずきんをすぽりと被かぶって

なるべく人の目につかないような注意をしました

おりから

なんぐうかいどう

。折柄柿落葉の時節で宿から南郷街道へ出るまでは

こ

木の葉で路が一杯です。 ひとあし 一步運ぶごとにがさがさす

るのが気にかかります。誰かあとをつけて来そうで

たまりません。振り向いて見ると東嶺寺とうれいじの森がこん

もりと黒く、暗い中に暗く写っています。この東嶺

まつだいらけ

ぼだいしよ

こうしんやま

ふもと

寺と云うのは松平家の菩提所で、庚申山の麓にあつ

て、私の宿とは一丁くらいしか隔へだたっていない、すこ

ぶる幽邃ゆうすいな梵刹ぼんせつです。森から上はのべつ幕なしの星

月夜で、例の天の河が長瀬川を筋違すじかいに横切つて末は

——末は、そうですね、まず布哇ハワイの方へ流れていま

す……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云った。

「南郷街道をついに二丁来て、たかのだいまち鷹台町から市内に這

入って、古城町を通つて、仙石町を曲つて、喰代町

こじようまち

せんごくまち

くいしろちよう

とおりちよう

を横に見て、通町を一丁目、二丁目、三丁目と順に

おわりちよう

なごやちよう

しやちほちよう

通り越して、それから尾張町、名古屋町、鯉鉾町

かまぼこちよう

、蒲鉾町……」

「そんないろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と  
主人がじれったそうに聞く。

「楽器のある店は金善かねぜん即ち金子善兵衛方ですから

まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると

店にはランプがかんかんともって……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済

まないんだから難なんじゅう渋するよ」と今度は迷亭が予防線

を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びません。……灯<sup>ほ</sup>

影<sup>かげ</sup>にすかして見ると例のヴァイオリンが、ほのかに

秋の灯<sup>ひ</sup>を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光

を帯びています。つよく張った琴線<sup>きんせん</sup>の一部だけがき

らきらと白く眼に映<sup>うつ</sup>ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に動悸どうきがして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず馳かけ込んで、隠袋かくしから蝦蟇口がまぐちを出して、蝦

蟇口の中から五円札を二枚出して……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、まてしばし、ここが肝心<sup>かんじん</sup>

のところだ。滅多<sup>めった</sup>な事をしては失敗する。まあよそ

うと、際<sup>きわ</sup>どいところで思い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺でなかなか人を引っ張るじゃないか」

「引っ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんですから仕方がありません」



「なぜ」

「なぜって、まだ宵よいの口で人が大勢通るんですもの

」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって

、君はよっぽど妙な男だ」と主人はぷんぷんしている。  
る。

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校

の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って

はいかい

徘徊しているんだから容易に手を出せませんよ。中

ちんでんとう

には沈黙党などと号して、いつまでもクラスの底に

溜まって喜んでるのがありますからね。そんなのに

限って柔道は強いのですよ。

めった

滅多にヴァイオリンな

どに手出しは出来ません。どんな目に逢あうかわかり

ません。私だってヴァイオリンは欲しいに相違ない

ですけれども、命はこれでも惜しいですからね。ヴ  
アイオリンを弾<sup>ひ</sup>いて殺されるよりも、弾かずに生き  
てる方が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と主  
人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買うさ。いやな

らいやでいいから、早くかたをつけたらよさそうなものだ」

「えへへへへ、世の中の事はそう、こっちの思うように埒らちがあくもんじやありませんよ」と云いながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になったと見えて、ついと立って書斎

へ這入はいったと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊

持ち出して来て、ごろりと腹這はらばいになつて読み始めた

。独仙君はいつの間まにやら、床の間の前へ退去して

、独りひとで碁石を並べて一人相撲ひとりずもうをとっている。せつ

かくの逸話もあり長くかかるので聴手が一人減り

二人減つて、残るは芸術に忠実なる東風君と、長い

事にかつて辟易へきえきした事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月

君は、やがて前同様の速度をもつて談話をつづける

ぜんどうよう

。

「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこり

や宵の口は駄目だ、と云つて真夜中に来れば金善は寝てしまふからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散

歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時

を見計らつて来なければ、せつかくの計画が水泡に  
歸する。けれどもその時間をうまく見計うのがむず  
かしい」

「なるほどこりやむずかしからう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積つたね。それ  
で今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ  
。うちへ歸つて出直すのは大変だ。友達のうちへ話

しに行くのは何だか気が咎<sup>とが</sup>めるように面白くなし

、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩

する事にした。ところが平生ならば二時間や三時間

はぶらぶらあるいているうちに、いつの間<sup>ま</sup>にか経つ

てしまうのだがその夜<sup>よ</sup>に限って、時間のたつのが遅

いの何のって、——千秋<sup>せんしゅう</sup>の思とはあんな事を云うの

だろうと、しみじみ感じました」とさも感じたらし



い風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人を待つ身につらき置炬燵おきごたつと云われた事がある

からね、また待たる身より待つ身はつらいともあって軒に吊られたヴァイオリンもつらかったろうが

、あてのない探偵のようにうろろ、まごついてい

る君はなおさらつらいだろう。累々るいるいとして喪家そうかの犬

のごとし。いや宿のない犬ほど気の毒なものは実際

ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔むかしの芸術家の伝を読むような気持ちがして同情の念に堪たえない。犬に比較したのは先生の冗談じょうだんだから気に掛けずに話を進行了たまえ」と東風君は慰藉いしやした。慰藉されなくても

寒月君は無論話をつづけるつもりである。

おかちまち

ひやつきまち

りようがえちよう

たか

「それから徒町から百騎町を通つて、両替町から鷹

じようまち

匠町へ出て、県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の

横で窓の灯<sup>ひ</sup>を計算して、紺屋橋<sup>こんやばし</sup>の上で巻煙草<sup>まきたばこ</sup>を二本

ふかして、そうして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切つて

川添に東へ上のぼつて行くと、按摩あんまに三人あつた。そう

して犬がしきりに吠ほえましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちよつと芝

居がかりだね。君は落人おちゆうどと云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと思つたところさ」

かわいそう

「可哀相にヴァイオリンをかうのが悪い事じゃ、音

樂学校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないい事をしても罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならないものはない。耶蘇ヤソもあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオリンを買えば罪人さ

」  
「それじゃ負けて罪人としておきましょう。罪人は

いいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返<sup>ぺん</sup>、町の名を勘定するさ。それで足りなけ

ればまた秋の日をかんかんさせるさ。それでもおつ

つかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ

。いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑った。

「そう先<sup>せん</sup>を越されては降参するよりほかはありません

ん。それじゃ一足飛びに十時にしてしましましょう

。さて御約束の十時になって金善かねぜんの前へ来て見ると

、夜寒の頃ですから、さすが目貫めぬきの両替町りようがえちようもほとん

ど人通りが絶えて、向むこうからくる下駄の音さえ淋さみしい

心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに

潜くぐり戸とだけを障子しょうじにしています。私は何となく犬に

尾つけられたような心持で、障子をあけて這はい入るのに

少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をは  
ずして、「おいもうヴァイオリンを買ったかい」と  
聞いた。「これから買うところです」と東風君が答  
えると「まだ買わないのか、実に永いな」と独り言<sup>ひとごと</sup>  
のように云つてまた本を読み出した。独仙君は無言  
のまま、白と黒で碁盤を大半埋<sup>うず</sup>めてしまった。



「思い切つて飛び込んで、頭巾ずきんを被かぶつたままヴァイ

オリンをくれと云いますと、火鉢の周圍に四五人小僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれと二度目に云うと、一番前にいて、私の顔を覗のぞき込むようにしていた小僧がへえと

覚束ない返事をして、立ち上がって例の店先に吊るおぼつか

してあつたのを三四挺一度に卸おろして来ました。いく

らかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おも  
ちやじゃないか」

「みんな同価どうねかと聞くと、へえ、どれでも変りはご

ざいません。みんな丈夫に念を入れて拵こしらえてござ

いますと云いますから、がまぐち蝦蟇口のなかから五円札と

銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイ

オリンを包みました。この間、あいだ店のものは話を中止

してじっと私の顔を見ています。顔は頭巾でかくし

てあるから分るきづかい気遣はないのですけれども何だか気

がせいて一刻も早く往来へ出たくて堪りたまません。よ

うやくの事風呂敷包を外套がいとうの下へ入れて、店を出た

ら、番頭が声を揃そろえてありがとうと大きな声を出し

たのにはひやつとしました。往来へ出てちよつと見

廻して見ると、幸誰さいわいもないようですが、一丁ばか

り向むこうから二三人して町内中に響けとばかり詩吟をし

て来ます。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて

濠端ほりばたを薬王師道やくおうじみちへ出て、はんの木村から庚申山こうしんやまの裾すそ

へ出てようやく下宿へ歸りました。下宿へ歸つて見

たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が  
気の毒そうに云うと「やっと上がった。やれやれ長

い道中双六だどうちゆうすゐろく」と迷亭君はほっと一と息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕  
です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。た

いていのは君に逢っちや根氣負けをするね」

「根氣はとにかく、ここでやめちや仏作って魂入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買つてしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売ると

ころなんか聞かなくつてもいい」

「まだ売るどこじやありません」

「そんならなお聞かなくともいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざつと話してしまおう」

「ざつとでなくともいいから緩ゆっくり話したまえ。大

変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、まず第一に困ったのは置き所だね。僕の所へは大分人が遊びにくるから滅多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。穴を掘って埋めちや掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気



楽な事を云う。

「天井はないさ。百姓家だもの」  
ひやくしやうや

「そりや困ったろう。どこへ入れたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠<sup>かく</sup>れ家<sup>が</sup>について  
かくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君  
も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だって？」

「Quid aliud est

mulier nisi amicitia e&

inimica」……こりや君ラテンご羅匈語じゃないか」

「羅匈語は分ってるが、何と読むのだい」

「だって君は平生羅匈語が読めると云ってるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取って、ちよつと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりや何だ  
い」

「読める事は読めるが、こりや何だは手ひどいね」

「何でもいいからちよつと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅匈語などはあとにして、ちよつと寒月君の

ご高話を拝聴つかまつ仕ろうじやないか。今大変なところだ

よ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う

安宅あたくの関せきへかかつてるんだ。――ねえ寒月君それか

らどうしたい」と急に乗気になつて、またヴァイオ

リンの仲間入りをする。主人は情けなさなくも取り残さ

れた。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづら

は国を出る時御祖母さんおばあが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持つて来たものだと思います」

「そいつは古物こぶつだね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だつて調和しないじゃないか」と寒月君は

東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給え。秋<sup>あき</sup>。

淋<sup>さび</sup>しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君

」

「先生今日は<sup>だいぶ</sup>大分俳句が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来  
てるのさ。僕の俳句における<sup>ぞうけい</sup>造詣と云ったら、故子<sup>こし</sup>

規子も舌を捲いて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率な質問をかける。

「なにつき合わなくつても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。



「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すの  
に困った。ただ出すだけなら人目を掠かすめて眺ながめるく  
らいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にも  
ならない。弾ひかなければ役に立たない。弾けば音が  
出る。出ればすぐ露見する。ちようど木槿垣むくげがきを一重  
隔へてて南隣りは沈澱組ちんでんぐみの頭領が下宿しているんだか  
ら剣呑けんのんだあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりや困る。論より証拠音が出るんだ

から、小督こくうの局つぼねも全くこれでしくじったんだからね

。これがぬすみ食をするとか、贗札にせざつを造るとか云う

なら、まだ始末がいいが、音曲おんぎよくは人に隠しちや出来

ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちよつと待った。音さえ出なけりやと云うが、音が出なくても隠かくし了おおせないのがあるよ。昔むかし僕等が

小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木とうの藤さん

と云う人がいてね、この藤さんが大変味淋みりんがすきで

、ビールとっくりの徳利へ味淋を買つて来ては一人で楽しみ

に飲んでいたのさ。ある日藤さんとうが散歩に出たあと

で、よせばいいのに苦沙弥君がちよつと盗んで飲んだところが……」

「おれが鈴木の意味淋などをのむものか、飲んだのは君だぜ」と主人は突然大きな声を出した。

「おや本を読んでるから大丈夫かと思つたら、やはり聞いてるね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も

飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚したのは君の方だよ。――両君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。ところを人の味淋だと思つて一生懸命に飲んだものだから、さあ大變、顔中真赤まっかにはれ上つてね。いやもう二目ふためとは見られないありさまさ……」

「黙っている。羅甸語ラテンゴも読めない癖に」

「ハハハハ、それで藤さんとうが帰つて来てビールの徳  
利をふつて見ると、半分以上足りない。何でも誰か  
飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将  
隅の方に朱泥しゅでいを練りかためた人形のようにかたくな  
つていらあね……」

三人は思わず哄然こうぜんと笑い出した。主人も本をよみ  
ながら、くすくすと笑った。独ひとり独仙君に至つては

機外きがいの機きを弄ろうし過ぎて、少々疲労したと見えて、碁盤の上へのしかかって、いつの間まにやら、ぐうぐう寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔うばこし姥子の温泉に行つて、一人のじじいと相宿になつた事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつたがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だ

ろうが構う事はないが、ただ困った事が一つ出来て

しまった。と云うのは僕は姥子うばこへ着いてから三日目

に煙草たばこを切らしてしまったのさ。諸君も知ってるだ

ろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ

温泉に這入はいって飯を食うよりほかにどうもこうも仕

様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから

御難だね。物はないとなるとなのお欲しくなるもの



で、煙草がないなと思うやいなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前で胡坐あぐらをかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁のしようもあるが、しまいには煙を輪に吹いて見た

り、たて豎に吹いたり、横に吹いたり、乃至は邯鄲夢の

まくらぎやく

枕と逆に吹いたり、または鼻から獅子の洞入り、洞ほらい

がえ返りに吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

いしやうどうぐ

「衣装道具なら見せびらかすのだが、煙草だから呑

みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰ったらい

いでしょう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで偷ぬすんだ」

「おやおや」

「奴さん手拭てぬぐいをぶらさげて湯に出掛けたから、呑む

ならここだと思つて一心不乱立てつづけに呑んで

、ああ愉快だと思ふ間まもなく、障子しょうじがからりとあい

たから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」

「湯には這入らなかつたのですか」

「這入ろうと思つたら巾着きんちやくを忘れたのに気がついて

、廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりやし

まいし第一それからが失敬さ」

「何とも云えませんね。煙草の御手際おてぎわじゃ」

「ハハハハじじいもなかなか眼識があるよ。巾着はとにかくだが、じいさんが障子をあけると二日間の溜め呑みをやった煙草の煙りがむつとするほど室へやのなかに籠こもってるじゃないか、悪事千里とはよく云つたものだね。たちまち露見してしまった」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草まきたばこを五六

十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉そはでよ

ろしければどうぞお呑み下さいましと云つて、また

湯壺ゆっぼへ下りて行つたよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それ

から僕は爺さんとおおい かんたんあいて 大に肝胆相照らして、二週間の間

面白く逗留とうりゆうして帰って来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になつたんですか

」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はよう

やく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し

込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちょうどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちや、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」



「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。  
起きるんだよ。そう寝ちや毒だとさ。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯やぎひげを伝  
わつて垂涎よだれが一筋長々と流れて、蝸牛かたつむりの這あとった迹の  
ように歴然と光っている。

「ああ、眠かった。山上の白雲わが懶ものうきに似たりか

。ああ、いい心持ちに寝たよ<sup>ね</sup>」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちっと起きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするんだったかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと見当けんとうがつかない」

「これからいよいよ弾くところです」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ

。こつちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃むげんの素琴そきんを弾ずる連中だから困らない方な

んだが、寒月君のは、きいきいびいきんじよがっぺき近所合壁へ

聞えるのだから大に困おおいつてるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾く方ほうを知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺うかがいたいもので」

「伺わなくても露地ろじの白牛びやくぎゅうを見ればすぐ分るはずだ

が」と、何だか通じない事を云う。寒月君はねぼけてあんな珍語ろくごを弄するのだろうと鑑定したから、わ

ざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は  
天長節だから、朝からうちにいて、つづらの蓋ふたをと  
って見たり、かぶせて見たり一日いちんちそわそわして暮ら  
してしまいましたがいよいよ日が暮れて、つづらの  
底で蟬こおろぎが鳴き出した時思い切って例のヴァイオリン  
と弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾く  
とあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、切先から鰐元までしらべて見る  
……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評した

「実際これが自分の魂だと思つと、侍が研ぎ澄した

名刀を、ちようや長夜の灯影ほかげで鞘さや払ばをする時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶるとふるえました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く癲癇てんかんだ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかる」と云う。独仙君は困ったものだと云う顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくランプの傍そばへ引き付けて、裏表共よくしらべて見る。この間あいだ約五分間、つづらの底では始終こおろぎ蟬が鳴いていると思つて下さい。……」

「何とでも思つてやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きやしません。——幸いヴァイオリンも疵きずがない。これなら大丈夫とぬつくと立ち上がる……」



「どっかへ行くのかい」

「まあ少し黙って聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとさ。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に抱い込んで、草履ぞうりを突かけ

たまま二三歩草の戸を出たが、まてしばし……」

「そらおいでなすった。何でも、どっかで停電するに違ないと思った」

「もう帰ったって甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御まぜ返しになつてははなはだ遺憾いかん

の至りだが、東風君一人を相手にするより致し方が

ない。——いいかね東風君、二三步出たがまた引き

返して、国を出るとき三円二十銭で買った赤毛布を

あかげつと

頭から被<sup>かぶ</sup>つてね、ふつとランプを消すと君真暗闇に

まつくらやみ

なつて今度は草履<sup>ぞうり</sup>の所在地<sup>ありか</sup>が判然しなくなつた」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけて

表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイオリ

つまさきあが

こうしんやま

ン。右へ右へと爪先上りに庚申山へ差しかかつてく

とうれいじ

けつと

ると、東嶺寺の鐘がボーンと毛布を通して、耳を通

して、頭の中へ響き渡った。何時だなんじと思う、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山道

おおだいら

八丁を大平と云う所まで登るのだが、平生なら臆病

な僕の事だから、恐しくってたまらないところだけ

れども、一心不乱となると不思議なもので、怖いこわに

も怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起  
らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸  
が一杯になつてゐるんだから妙なものさ。この大平と  
云う所は庚申山の南側で天氣のいい日に登つて見る  
と赤松の間から城下が一目に見下みおろせる眺望佳絶の平  
地で——そうさ広さはまあ百坪もあるうかね、真中

に八畳敷ほどな一枚岩があつて、北側は鵜うの沼ぬまと云

う池つづきで、池のまわりは三抱えもあらうと云う

樟くすのきばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は樟しよ

脳うのうとを採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でも

あまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習

のため道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折

れない。ようやく一枚岩の上へ来て、毛布けっとを敷いて

ともかくもその上へ坐つた。こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋しささみが次第次第に腹の底へ沁しみ渡る。こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖いと云う感じばかりだから、この感じさえ引き抜くと、余るところは皎々冽々こうこうれつれつたる空靈の気だけになる。二十分ほど茫然ぼうぜんとしているうちに何だか水晶で造

った御殿のなかに、たった一人住んでるような氣になつた。しかもその一人住んでる僕のからだがいやからだばかりじゃない、心も魂もことごとく寒天か何かで製造されたごとく、不思議に透すき徹とおつてしまつて、自分が水晶の御殿の中にいるのだから、自分の腹の中に水晶の御殿があるのだから、わからなくなつて来た……」



「飛んだ事になって来たね」と迷亭君が真面目にか  
らかうあとに付いて、独仙君が「面白い境界だ」と  
少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝ま  
で、せつかくのヴァイオリンも弾かずに、茫ぼんやり一  
枚岩の上に坐ってたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなつて、生きているか死んでいるか方角のつかない時に、突然後うしろの古沼の奥でギヤーと云う声がした。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の梢を、野分のわきと共に渡つたと思つたら、はつと我に歸つた……」

「やっと安心した」と迷亭君が胸を撫なでおろす真似

をする。

たいしいちばげんこんあらた

「大死一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする

。寒月君にはちつとも通じない。

「それから、我に帰ってあたりを見廻わすと、庚申こうしん

やま

山一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。は

てな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭

すぎるし、鳥の声にしては大き過ぎるし、猿の声に

しては——この辺によもや猿はおるまい。何だろう

？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これ

を解釈しようとするので今まで静まり返っていたや

からが、ふんぜんざつぜんしゅうぜん紛然雜然糅然としてあたかもコンノート殿

下歓迎の当時における都人士狂乱の態度を以てもつ脳裏

をかけ廻る。そのうちにそうしん総身の毛穴が急にあいて

しょうちゅう焼酎を吹きかけた毛脛けずねのように、勇氣、胆力、分

別、沈着などと号するお客様がすうすうと蒸発して行く。心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足が紙鳶たこのうなりのように震動をはじめめる。これはたまらん。いきなり、毛布けつとを頭からかぶって、ヴァイオリンを小脇に掻かい込んでひよろひよると一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁を麓ふもとの方へかけ下りて、宿へ帰って布団ふとんへくるまって寝てしまった。今

考えてもあんな気味のわるかつた事はないよ、東風君」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくつても、弾かれないじゃないか。ギャーだもの。君だつてきつと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようすである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持つて行くにはだいぶ苦心慘憺たるものがあつたのだらう。僕は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の邦くにに出現するところかと思つて、今が今まで真面目に拝聴していた

んだよ」と云った迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの

講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ないの

で「サンドラ・ベロニが月下にたてごと豎琴を弾いて、以太イタ

リアふう利亜風の歌を森の中でうたつてるところは、君の庚こう

しんやま申山へヴァイオリンをかかえて上るところと同曲に

して異巧なるものだね。惜しい事に向うは月中の嫦げっちゅう じょ

うが娥を驚ろかし、君は古沼の怪狸ふるぬま かいりにおどろかされたの



で、際きわどいいところで滑稽こっけいと崇高の大差を来たした

。さぞ遺憾いかんだろう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかさるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

「好漢こうかんこの鬼窟きくつ裏に向つて生計を営む。惜しい事だ

」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかつたためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだろう。

「そりや、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行つて珠たまばかり磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんで  
すから、暫時<sup>ざんじ</sup>中止の姿です。珠ももうあきましたか  
ら、実はよそうかと思ってるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人  
は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エヘヘヘ。博士ならもうならなく  
つてもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありやしません、そんな事を言い触<sup>ふ</sup>らすなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知<sup>し</sup>つてゐるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知<sup>し</sup>つてゐるばかりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡<sup>わた</sup>つてゐる。現に万朝<sup>まんちよう</sup>なぞでは花聾<sup>はなろう</sup>花嫁と

云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの栄はいつだ  
ろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞き  
にくるくらいだ。東風君なぞはすでにえんおうか鴛鴦歌と云う  
一大長篇を作って、三箇月前ぜんから待ってるんだが  
、寒月君が博士にならないばかりで、せつかくの傑  
作も宝の持ち腐れになりそううで心配でたまらないそ  
うだ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかってはいませんが、とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少しばかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへへいろいろ御心配をかけて済みませんが

もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴然<sup>れっき</sup>とした女房があるんです」

「いや、こりやえらい。いつの間に秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるん



だとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたたないうちに子供が生れちゃ事でさあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待つてたのです。今日先生の所へ持って来た、この鰹節かつぶし

は結婚祝に親類から貰ったんです」

「たった三本祝うのはけちだな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりや少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないでもすむところをわざわざ鉢合せるんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのはえんおうか鴛鴦歌を作った東風君くらいなものさ

」

「なに鴛鴦歌は都合によつて、こちらへ向け易<sup>か</sup>えてもよろしゅうございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあつて自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙っていれば沢山です。――なあに黙つても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかつて一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語を聞いた、主人は、急に苦い顔を  
して

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、それでも飽き足らなかつたと見えて、なお探偵についても飽き足らなかつたと見えて、なお探偵について下しものような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懷中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間まに雨戸をはずして人の所有品を偷ぬすむのが泥棒で、知らぬ間に口を滑すべらして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラ

を畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強<sup>し</sup>うるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとうてい人の風上<sup>かざかみ</sup>に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊

伍を整えて襲撃したって怖くはありませぬ。珠磨たますり

の名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあ

って元気旺盛おうせいなものだね。しかし苦沙弥さん。探偵

がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金

田君のごときものは何の同類だろう」

くまさかちようはん

「熊坂長範くらいなものだろう」



「熊坂はよかったね。一つと見えたる長範が二つになつてぞ失せ<sup>う</sup>にけりと云うが、あんな烏金<sup>からすがね</sup>で身代<sup>しんだい</sup>をつくつた向横丁<sup>むこうよこちよう</sup>の長範<sup>ごう</sup>なんかは業<sup>ごう</sup>つく張りの、慾張り屋だから、いくつになつても失せる氣遣<sup>きづかい</sup>はないぜ。あんな奴につかまったら因果だよ。生涯<sup>しょうがい</sup>たたるよ、寒月君用心したまえ」

「なあに、いいですよ。ああら物々し盗人<sup>ぬすびと</sup>よ。手並

はさきにも知りつらん。それにも懲りず打ち入るか  
つて、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒月君は自  
若として宝生流ほうしょうりゅうに気燄きえんを吐はいて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵のよ  
うになる傾向があるが、どう云う訳だろう」と独仙  
君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる  
質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が答える。

「人間に文明の角つのが生えて、金米糖こんぺいとうのようにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもったい振ぶった口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分だいぶん考えた事だ。僕の解釈によると当

世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるの  
が原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独

仙君の方で云う、けんしょうじょうぶつ見性成仏とか、自己は天地と同一

体だとか云う悟道の類たぐいではない。……」

「おや大分だいぶんむずかしくなつて来たようだ。苦沙弥君

、君にしてそんな大議論を舌頭ぜつとうに弄ろうする以上は、か

く申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがある。大おおにある。君なぞはせんだつては

刑事巡査を神のごとく敬うやまい、また今日は探偵をスリ

泥棒に比し、まるで矛盾の変怪へんげだが、僕などは終始

一貫ふもみしようにぜん父母未生以前からただ今に至るまで、かつて自

説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだってではせんだってで今日は今日だ。自説が変らないのは発達しない証拠だ。下愚は移らずと云うのは君の事だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可愛  
いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝聴しよう」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然せつぜんたる利害の鴻溝こうこうがあると云う事を知り過ぎていると云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進

むにしたがつて一日一日と鋭敏になつて行くから

、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ない

ようになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを

評して彼は鏡のかかった部屋に入はいつて、鏡の前を通

る毎ごとに自己の影を写して見なければ気が済まぬほど

瞬時も自己を忘るる事の出来ない人だと評したのは

、よく今日こんにちの趨すう勢せいを言いあらわしている。寝てもお



れ、覚<sup>さ</sup>めてもおれ、このおれが至るところにつけま

つわっているから、人間の行為言動が人工的にコセ  
つくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦  
しくなるばかり、ちようど見合をする若い男女の心  
持ちで朝から晩までくらさなければならぬ。悠々<sup>ゆうゆう</sup>

とか従容<sup>しょうよう</sup>とか云う字は劃<sup>かく</sup>があつて意味のない言葉に

なってしまう。この点において今代<sup>きんだい</sup>の人は探偵的で

ある。泥棒的である。探偵は人の目を掠<sup>かす</sup>めて自分だ

けうまい事をしようと言う商売だから、勢自覚心<sup>いきおい</sup>が

強くならなくては出来ん。泥棒も捕<sup>つか</sup>まるか、見つか

るかと言う心配が念頭を離れる事がないから、勢自

覚心が強くならざるを得ない。今の人はどうしたら

己<sup>おの</sup>れの利になるか、損になるかと寝ても醒<sup>さ</sup>めても考

えつづけだから、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強く

ならざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソして墓に入る<sup>い</sup>まで一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の咒詛<sup>じゆそ</sup>だ。馬鹿馬鹿しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した

。こんな問題になると独仙君はなかなか引込<sup>ひっこ</sup>んでい

ない男である。「苦沙弥君の説明はよく我意<sup>わがい</sup>を得て

いる。昔<sup>むか</sup>しの人<sup>ひと</sup>は己れを忘れろと教えたものだ。今

の人は己れを忘れるなと教えるからまるで違う。二  
六時中己れと云う意識をもつて充滿している。それ  
だから二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄  
だ。天下に何が薬だと云つて己れを忘れるより薬な  
事はない。さんこうげつかむがにいる三更月下入無我とはこの至境を咏えいじたも  
のさ。今の人は親切をしても自然をイかいている。英イ  
吉利ギリスのナイスなどと自慢する行為も存外自覚心が張

り切れそうになっている。英国の天子が印度<sup>インド</sup>へ遊び

に行つて、印度の王族と食卓を共にした時に、その

王族が天子の前とも心づかずに、つい自国の我流を

出して馬鈴薯<sup>じゃがいも</sup>を手攫<sup>てづか</sup>みで皿へとつて、あとから真赤<sup>まっか</sup>

になつて愧<sup>は</sup>じ入つたら、天子は知らん顔をしてやは

り二本指で馬鈴薯を皿へとつたそうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問で

あつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後あとをつける。「

やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手

を洗う水を硝子鉢ガラスばちへ入れて出したら、この下士官は

宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士

官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒンガー・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並なみいる士官も我劣らじと水盃を挙みずさかずきげて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんな噺はなしもあるよ」とだまつてる事の嫌きらいな迷亭君が云った。「カーライルが始めて女皇じょこうに謁した時

、宮廷の礼に嫻ならわぬ変物へんぶつの事だから、先生突然どう

ですと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした

。ところが女皇の後ろうしに立っていた大勢の侍従や官

女がみんなくすくす笑い出した――出したのではな

い、出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて

、ちよつと何か相図おおぜいをしたたら、多勢おおぜいの侍従官女がい

つの間まにかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは

面目を失わなかったと云うんだが随分御念の入った



親切もあつたもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立ってても平気だつたかも知れませんか」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従つて殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやか

になるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚心が強くって、どうしておだやかになれるものか

。なるほどちよつと見るとごくしずかで無事なよう

だが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちようと相撲

が土俵の真中で四つよに組んで動かないようなものだ

ろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を

打っているじゃないか」

「喧嘩けんかも昔むかしの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえ

って罪はなかったが、近頃じゃなかなか巧妙になっ

てるからなおなお自覚心が増してくるんだね」と番

が迷亭先生の頭の上に廻って来る。「ベーコンの言

葉に自然の力に従って始めて自然に勝つとあるが

、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上って

るから不思議だ。ちょうど柔術のようなものさ。敵

の力を利用して敵を斃たおす事を考える……」

「または水力電気のようなものです。水の力に逆らわないでかえってこれを電力に変化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取った。「だから貧時ひんじには貧ひんに縛ばくせられ、富時ふじには富ふに縛ばくせられ、憂時ゆうじには憂ゆうに縛ばくせられ、喜時きじには喜きに縛ばくせられるのさ。才人は才

に斃<sup>たお</sup>れ、智者は智に敗れ、苦沙弥君のような癩癩<sup>かんしゃくも</sup>持

ちは癩癩を利用さえすればすぐに飛び出して敵のペ

てんに罹<sup>かか</sup>る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君は

にやにや笑いながら「これでなかなかそう甘<sup>うま</sup>くは行

かないのだよ」と答えたら、みんな一度に笑い出し

た。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

「女房は鼻で斃れ、主人は因業いんごうで斃れ、子分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云えないが——まず着倒れか、食い倒れ、もしくは呑んだくれの類たぐいだろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことに

よると卒塔婆そとばこまち小町のように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だから応無所住おうむしよじゆう而生其心にしょうごしんと云うのは大事な言葉だ

、そう云う境界きょうがいに至らんと人間は苦しくてならん

」と独仙君ひとしきりに独り悟ったような事を云う。

「そう威張るもんじやないよ。君などはことによる

でんこうえいり

と電光影裏にさか倒れをやるかも知れないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が言下ごんかに道破どうは

する。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張



る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませ  
んが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒  
月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す  
時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時に  
すぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と独仙君は超然として出世間的しゅつせけんてきである。

「君のように云うとつまりずぶと凶太いのが悟ったのだね」

「そうさ、禅語に鉄牛面てつぎゅうめんの鉄牛心てつぎゅうしん、牛鉄面の牛鉄心と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱と云う病気が発明されてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な掛合かけあいをのべつにやっていると

主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちやなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞くがいい。どう

して借りた金を返さずに済ますかが問題であるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であつた。れんきんじゅつ錬金術はこれである。すべての錬金術は失敗した。人間はどうしても死ななければならん事がぶんみよう分明になつた」

「錬金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いい

かい。どうしても死ななければならん事が分明になつた時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神経衰弱の国民には生きている事が死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが厭いやだから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配するのである。ただたいていのものは智慧ちえが足りないから自然のままに放擲ほうてきしておくうちに、世間がいじめ殺してくれる

。しかし一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずや死に方かならに付いて種々考究の結果、ざんしん斬新な名案を呈出するに違こうごない。だからして世界向後の趨勢すうせいは自殺者が増加して、その自殺者が皆独創的な方法をもつてこの世を去るに違ない」

「大分物騒だいぶぶっそうな事になりますね」



「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンズと云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年の<sup>のち</sup>後には死と云えば自殺よりほかに存在しないもの

のように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になって、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷

亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御名論を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野蛮の遺風を墨ぼく守しゅしてはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかしおのて己れの好むところはこれを人に施ほどこして可なる訳だから、自

殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。ことに表

きゆうそだい

の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござる

のが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早

く殺して進ぜるのが諸君の義務である。もつとも昔

と違って今日は開明の時節であるから槍やり、薙刀なぎなたもし

たぐい

ひきよう

くは飛道具の類を用いるような卑怯な振舞をしては

なりません。ただあてこすりの高尚なる技術によつ

て、からかい殺すのが本人のため功德くどくにもなり、また諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としている。ところがその時分になると巡査が犬殺しのような棍棒こんぼうをもって天下の公民を撲殺ぼくさつしてあるく。……」

「なぜです」

「なぜって今の人間は生命いのちが大事だから警察で保護するんだが、その時分の国民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲のために打ち殺ぶしてくれるのさ

。もっとも少し気の利きいたものは大概自殺してしま  
うから、巡査に打殺ぶちころされるような奴はよくよく意気

地なしに、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に

限るのさ。それで殺されたい人間は門口へ張札をし  
ておくのだね。なにただ、殺されたい男ありとか女  
ありとか、はりつけておけば巡査が都合のいい時に  
巡<sup>まわ</sup>つてきて、すぐ志望通り取計ってくれるのさ。死  
骸かね。死骸はやっぱり巡査が車を引いて拾ってあ  
るくのさ。まだ面白い事が出来てくる。……」

じょうだん

「どうも先生の冗談は際限がありませんね」と東風

君は大に感心おおいしている。すると独仙君は例の通り山や

羊髯ぎひげを気にしながら、のそのそ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも知れない。真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫ほうまつの夢幻むげんを永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」



えんじやいずく  
たいほうこころざし

「燕雀焉んぞ大鵬の志を知らんやですな」と寒月君

が恐れ入ると、独仙君はそうさと云わぬばかりの顔  
付で話を進める。

むか

「昔しスペインにコルドヴァと云う所があつた……」

「今でもありやしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、そこ

の風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々の女  
がことごとく出て来て河へ這はい入って水泳をやる……

」

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若きせんろううにやくの

別なく河へ飛び込む。但し男子は一人も交らないただ

。ただ遠くから見ている。遠くから見ていると暮ぼしよく色

蒼然<sup>そうぜん</sup>たる波の上に、白い肌<sup>はだえ</sup>が模糊<sup>もこ</sup>として動いている

……」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は裸体<sup>らたい</sup>が出さえすれば前へ乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といつしよに泳ぐ事も出来ず、さればと云って遠くから

判然その姿を見る事も許されないのを残念に思つて、ちよつといたずらをした……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は大におおい嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に賄賂わいろを使つて、日没を合図に撞つく鐘を一時間前に鳴らした。すると女などは浅墓あさはかなものだから、そら鐘が鳴つたと云うので、めいめい

河岸<sup>かし</sup>へあつまつて半襦袢<sup>はんじゅばん</sup>、半股引<sup>はんももひき</sup>の服装でざぶりざ

ぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはしたものの

、いつもと違って日が暮れない」

「烈<sup>はげ</sup>しい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立って眺<sup>なが</sup>めている。恥ず

かしいがどうする事も出来ない。大に赤面したそう

だ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて

根本の原理を忘れるものだから気をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師さぎしの小説があつた。僕が

まあここで書画骨董店を開くとする。で店頭に大家

の幅ふくや、名人の道具類を並べておく。無論贗物にせものじゃ

ない、正直しょうじき正銘しょうめい、うそいつわりのない上等品ばかり

並べておく。上等品だからみんな高価にきまつてる

。そこへ物数ものずき奇な御客さんが来て、この元信もとのぶの幅は

いくらだねと聞く。六百円なら六百円と僕が云うと

、その客が欲しい事はほしいが、六百円では手元に

持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

「そう云うときまつてるかい」と主人は相変らず芝し居ばい氣ぎのない事を云う。迷亭君はぬからぬ顔で、

「まあさ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで

僕がなに代だいは構いませんから、お氣に入ったら持つ

ていらつしやいと云う。客はそうも行かないからと

躊躇ちゆうちよする。それじゃ月賦げつぷでいただきますよう、月賦



も細く、長く、どうせこれから御鼻<sup>ごひいき</sup>肩になるんです

から——いえ、ちつとも御遠慮には及びません。ど

うです月に十円くらいじゃ。何なら月に五円でも構

いませんと僕が極<sup>ごく</sup>きさくに云うんだ。それから僕と

客の間に二三の問答があつて、とど僕が狩野法眼<sup>かのうほうげん</sup>元

信の幅を六百円ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥ふたしかだよ

。これからがいよいよ巧妙なる詐偽に取りかかるのだぜ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百円なら何年で皆済かいさいになると思う、寒月君」

「無論五年でしょう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思うか短かいと思うか、独仙君」

「一念万年、いちねんばんねん万年一念。ばんねんいちねん

短かくもあり、短かくもな

しだ」

「何だそりや道歌どうかか、常識のない道歌だね。そこで

五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方で  
は六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろ  
しいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返してい  
ると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十

二回にも十円払う気になる。六十二回六十三回、回を重ねるにしたがつてどうしても期日がくれば十円払わなくては気が済まないようになる。人間は利口のようにだが、習慣に迷って、根本を忘れると云う大弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ずつ毎月得をするのさ」

「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならない

でしよう」と寒月君が笑うと、主人はいささか真面目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の貸費たいひを

毎月毎月勘定せずに返して、しまいに向むこうから断わら

れた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしかな

ものだ。だから僕の先刻述<sup>さつき</sup>べた文明の未来記を聞い

て冗談だなどと笑うものは、六十回でいい月賦を生<sup>しよ</sup>

涯<sup>うがい</sup>払<sup>い</sup>って正当だと考える連中だ。ことに寒月君や

東風君のような経験の乏<sup>とぼ</sup>しい青年諸君は、よく僕

らの云う事を聞いてだまされないようにしなくっち

やいけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に

致します」

「いや冗談のようだが、實際参考になる話ですよ

、寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たと

えばですね。今苦沙弥君か迷亭君が、君が無断で結

婚したのが穩当おんとうでないから、金田とか云う人に謝罪

しろと忠告したら君どうです。謝罪する見ですか

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「なおな<sup>ごめんこうむ</sup>お御免蒙ります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変って



る。昔は御上おかみの御威光なら、何でも出来た時代です

。その次には御上の御威光でも、出来ないものが出来てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも

、ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかれるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔むか

しと違って、御上の御威光だから出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、昔しのものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか味あじわいがあるじゃないですか」

「そう云う知己ちぎが出てくると是非未来記の続きが述

べたくなるね。独仙君の御説のごとく今の世に御上

の御威光を笠かさにきたり、竹槍の二三百本を恃たのみにして

無理を押し通そうとするのは、ちようどカゴへ乗つ

て何でも蚊かでも汽車と競争しようとおせる、時代後

れの頑物がんぶつ——まあわからずやの張本ちようほん、烏金からすがねの長範先ちようはんせん

生んせいくらいのもものだから、黙もくつて御手際おてぎわを拝見してい

ればいいが——僕の未来記はそんな当座間に合せの小問題じゃない。人間全体の運命に関する社会的現象だからね。つらつら目下文明の傾向を達観して

、遠き将来の趨勢すうせいを卜ぼくすると結婚が不可能の事にな

る。驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前ぜん

申す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表

した時分には、代表者以外の人間には人格はまるで  
なかった。あつても認められなかった。それががら  
りと変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主  
張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だと云  
わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途  
中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心の  
中で喧嘩けんかを買いながら行き違ちがう。それだけ個人が強

くなつた。個人が平等に強くなつたから、個人が平等に弱くなつた訳になる。人がおのれを害する事が出来にくくなつた点において、たしかに自分は強くなつたのだが、滅多めったに人の身の上に手出しがならなくなつた点においては、明かに昔より弱くなつたんだらう。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰も  
ありがたくないから、人から一毫いちごうも犯おかされまいと

強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛

はんもう

でも人を侵<sup>おか</sup>してやろうと、弱いところは無理にも拡<sup>ひろ</sup>

げたくなる。こうなると人と人の間に空間がなくな

って、生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を

張りつめて、はち切れるばかりにふくれ返って苦し

がって生存している。苦しいから色々な方法で個人

と個人との間に余裕を求める。かくのごとく人間が

自業自得で苦しんで、その苦し紛れまぎに案出した第一

の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ這入っ

て見給え。一家いっけいちもん一門ことごとく一軒のうちにごろご

ろしている。主張すべき個性もなく、あつても主張

しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親

子の間でもお互わがままに我儘を張れるだけ張らなければ損

になるからいきお勢い両者の安全を保持するためには別居



しなければならぬ。歐洲は文明が進んでいるから日本より早くこの制度が行われている。たまたま親子同居するものがあつても、息子<sup>むすこ</sup>がおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払ったりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晩日本へも是非輸入しなければならぬ。親類はとくに

離れ、親子は今日に離れて、やっと我慢しているよ  
うなものの個性の発展と、発展につれてこれに対す  
る尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れな  
くては楽が出来ない。しかし親子兄弟の離れたる今  
日、もう離れるものはない訳だから、最後の方案と  
して夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいっし  
よににいるから夫婦だと思ってる。それが大きな了見

違いさ。いっしょにいるためにはいっしょにいるに充分なるだけ個性が合わなければならぬだろう

。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云つて、目

には夫婦二人に見えるが、内実は一人前いちにんまえなんだから

ね。それだから偕老同穴かいろうどうけつとか号して、死んでも一つ

穴の狸に化ける。野蛮なものさ。今はそうは行かな

いやね。夫はあくまでも夫で妻はどうしたって妻だ

あんどんばかま

は

ろうこ

からね。その妻が女学校で行灯袴あんどんばかまを穿はいて牢乎ろうこたる

個性を鍛きたえ上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだか

ら、とても夫の思う通りになる訳がない。また夫の

思い通りになるような妻なら妻じゃない人形だから

ね。賢夫人になればなるほど個性は凄すごいほど発達す

る。発達すればするほど夫と合わなくなる。合わな

ければ自然いきおいの勢夫いきおいと衝突する。だから賢妻と名がつ

く以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦しみの程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截然たるしきりがあつて、それも落ちついて

せつぜん

しきりが水平線を保っていればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大震災のように上がったり下がったりする。ここにお

いて夫婦雑居はお互の損だと云う事が次第に人間に分ってくる。……」

「それで夫婦がわかれるんですか。心配だな」と寒月君が云った。

「わかれる。きつとわかれる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいっしょにいたのが夫婦であつたが、これからは同棲どうせいしているものは夫婦の資格がな

いように世間から目もくされてくる」

「すると私なぞは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は際きわどいところでのろけを云った。

「明治の御代みよに生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ているからちやんと今から独身でいるんだよ。人は失恋の結果だなどと騒ぐが、近眼者の視みるところは実に

憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記

の続きを話すところさ。その時一人の哲学者が天降あまくだ

はてんこう

って破天荒の真理を唱道する。その説に曰いわくさ。人

間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅す

ると同結果に陥る。おちい

いやしくも人間の意義を完まったから

しめんためには、いかなる価あたいを払うとも構わないか

らこの個性を保持すると同時に発達せしめなければ



ならん。かの陋習ろうしゅうに縛せられて、いやいやながら結

婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であ

って、個性の発達せざる蒙昧もうまいの時代はいざ知らず

、文明の今日こんにちなおこの弊竇へいとうに陥おちいつて恬てんとして顧かえりみな

いのははなはだしき謬見びゅうけんである。開化の高潮度に達

せる今代きんだいにおいて二個の個性が普通以上に親密の程

度をもつて連結され得べき理由のあるべきはずがな

い。この觀易みやすき理由はあるにも関らず無教育の青年

男女が一時の劣情に駆られて、漫みだりに合ごう登きんの式を挙ぐ

るは悖德はいとく没倫ぼつりんのはなはだしき所為である。吾人は人

道のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護の  
ため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざるべからず：

…」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこ

の時思い切った調子でぴたりと平手で膝頭を叩いた

ひらて ひざがしら

。「私の考では世の中に何が尊いと云つて愛と美ほ

ど尊いものはないと思います。吾々を慰藉し、吾々

いしや

を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭

であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔に

し、同情を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります

。だから吾人はいつの世いづくに生れてもこの二つ

のものを忘れることが出来ません。この二つの者が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係になります。美は詩歌<sup>しいか</sup>、音楽の形式に分れます。それだからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなかろうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲学者が云った通りちゃん

と滅してしまふから仕方がないと、あきらめるさ

。なに芸術だ？　芸術だって夫婦と同じ運命に帰着

するのさ。個性の発展というのは個性の自由と云う

意味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ

、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出

来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術

家と享受者の間に個性の一致があるからだろう。君

がいくら新体詩家だって踏張ふんばつても、君の詩を読ん

で面白いと云うものが一人もなくっちゃ、君の新体

詩も御気の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳

だろう。鴛鴦えんおう歌をいく篇作つたつて始まらないやね

。幸いに明治の今日こんにちに生れたから、天下が挙こぞつて愛

読するのだろうが……」

「いえそれほどありません」

「今でさえそれほどでなければ、人文じんぶんの発達した未

すなわ

来即ち例の一大哲学者が出て非結婚論を主張する時

分には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから読

まないのじゃない。

にんにんここ

人々個々おのおの特別の個性を

もってるから、人の作つた詩文などは一向面白くな

いっこう

いのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃん

とあらわれている。現今英国の小説家中でもっとも

個性のいちじるしい作品にあらわれた、メレジスを  
見給え、ジェームスを見給え。読み手は極<sup>きわ</sup>めて少な  
いじゃないか。少ない訳<sup>わけ</sup>さ。あんな作品はあんな個  
性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕  
方がない。この傾向がだんだん発達して婚姻が不道  
徳になる時分には芸術も完<sup>ま</sup>く滅亡さ。そうだろう君  
のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたも



のは君にわからなくなつた日にや、君と僕の間には  
芸術も糞もないじゃないか」

「そりやそうですけれども私はどうも直覺的にそう  
思われないんです」

「君が直覺的にそう思わなければ、僕は曲覺的きよつかくてきに  
そう思うまでさ」

「曲覺的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出

す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか担<sup>かつ</sup>ぎ出すのも全くこの窮屈のやりどころがなくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちよつと見るとあれがあゝの男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平さ。個性の發展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅<sup>め</sup>

多に寝返りも打てないから、大将少しやけになつて

あんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮

快と云うよりむしろ気の毒になる。あの声は勇猛精

進の声じゃない、うじんどうしても怨恨痛憤の音だ。えんこんつうふんそれ

もそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下翕然と

してその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ

。こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見た

ように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だからホーマーでもチェヴィ・チエーズでも同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違うからね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから、苦味にがみはないはずだ。ニーチェの時代はそうは行かないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて

誰も英雄と立てやしない。昔は孔子こうしがたった一人だ

ったから、孔子も幅を利きかしたのだが、今は孔子が

幾人もいる。ことによると天下がことごとく孔子か

も知れない。だからおれは孔子だよと威張おしつても圧

が利かない。利かないから不平だ。不平だから超人

などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を

欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて

困っている。それだから西洋の文明などはちよつと  
いいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東  
洋じゃ昔しから心の修行をした。その方が正しいの  
さ。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して  
、始末がつかなくなつた時、王者おうしやの民たみ蕩々とうとうたりと云  
う句の価値を始めて発見するから。無為むいにして化かす  
と云う語の馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟

つたつてその時はもうしようがない。アルコール中毒に罹<sup>かか</sup>つて、ああ酒を飲まなければよかつたと考え  
るようなものさ」

「先生方は大分厭<sup>だいぶ</sup>世的な御説のようだが、私は妙で  
すね。いろいろ伺つても何とも感じません。どう云  
うものでしょう」と寒月君が云う。

「そりや妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ

解釈した。すると主人が突然こんな事を云い出した。

「妻さいを持つて、女はいいものだなどと思うと飛んだ

間違になる。参考のためだから、おれが面白い物を

読んで聞かせる。よく聴くがいい」と最前さいぜん書齋から

持つて来た古い本を取り上げて「この本は古い本だ

が、この時代から女のわるい事は歴然と分ってる



」と云うと、寒月君が

「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞く。「タマス・ナツシと云つて十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻さいの悪口を云つたものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻さいも這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いているかね」

「みんな聞いているよ。独身の僕まで聞いているよ」

「アリストートルいわ曰く女はどうせ碌ろくでなしなれば

嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし

大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災少わざわい

なし……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりや面白い本だ。さああとを読んだ

」

「或る人問う、いかなるかこれ最大奇蹟。さいだいきせき賢者答え

て曰く、貞婦……」

「賢者ってだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人問う、妻

を娶るめといずれの時においてすべきか。ダイオジニス

答えて曰く青年は未いまだし、老年はすでに遅し。とあ

る」

「先生たる樽の中で考えたね」

「ピサゴラスいわ曰く天下に三の恐るべきものあり曰く

火、曰く水、曰く女」

「希臘ギリシヤの哲学者などは存外うかつ迂濶な事を云うものだね

。僕に云わせると天下に恐るべきものなし。火に入い

って焼けず、水に入つて溺れず……」だけで独仙君

ちよつと行き詰る。

「女に逢つてとろけずだらう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさつさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦

女と無学をもつて世界における二大厄とし、マーカ  
ス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船  
舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅きらを飾る  
の性癖をもつてその天稟てんぴんの醜おおを蔽おほうの陋策ろうさくにもとづ  
くものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某に  
おくつて告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし  
得ざるものあらず。願わくは皇天あわれみ憐を垂れて、君を

して彼等の術中に陥らしむるなかれと。彼また曰く

女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざ

る苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の

誘惑にあらずや、蜜みつに似たる毒にあらずや。もし女

子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の

呵責かしやくと云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を



拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」  
「ウフフフ」と主人は笑いながら「構うものか」  
と云った。

「奥さん、奥さん。いつの間に御<sup>ま</sup>帰りですか」  
茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナツシ君の説ですから御安心なさい」

「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした

。寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハハ」と迷

亭君は遠慮なく笑つてると、門口をかどぐちあらあらしくあ

けて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がし

たと思つたら、座敷の唐紙が乱暴にあいて、たたらさ多々良

んぺい三平君の顔がその間からあらわれた。

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツにおろした卸立て

のフロックを着て、すでに幾分か相場をそうば狂わせてる

上へ、右の手へ重そうに下げた四本の麦酒をビール縄ぐる

み、かつぶし鯉節の傍へ置くと同時に挨拶もせず、どつかと

腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚ましいめざま武者振むしやぶり

である。

「先生胃病は近来いいですか。こうやって、うちにばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばってんが、顔色はよかなかごたる。先生

顔色が黄きいですばい。近頃は釣がいいです。品川から

舟を一艘雇うて——私はこの前の日曜に行きました

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくっても面白いのかい」

「こうぜん浩然の気を養うたい、あなた。どうですあなたが

た。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は

。大きな海の上を小舟で乗り廻わしてあるくのです

からね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、鯨くじらか人魚でも釣らなくっちゃ詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないです  
ね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先生私は近来よっぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいと、はた傍が傍だから、おのずから、そうなってしまうです」

「どうなってしまうのだ」



「煙草たばこでもですね、朝日や、敷島しきしまをふかしていては

幅きが利かんです」と云いながら、吸口に金箔きんぱくのつい

た埃エジプト及煙草を出して、すばすば吸い出した、

「そんな贅沢ぜいたくをする金があるのかい」

「金はなかばってんが、今にどうかなるたい。この煙草を吸つてると、大變信用が違います」

「寒月君が珠を磨くよりも樂な信用でいい、手数てすうが

かからない。軽便信用だね」と迷亭が寒月にいうと、寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御気の毒と思

うたですたい。しかし先方で是非貰うてくれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極きめました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思つて心配しています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は「貰いたければ貰つたら、いいだろう」と曖昧あいまいな返事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持っても心配するがものはないんだよ。だれか貰うと、さつき僕が云った通り、ちゃんとこんな立派な紳士の御<sup>むこ</sup>聳さんが出来たじゃないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作ってく

れませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ頃ごろ御入用ですか」

「いつでもいいです。今まで作ったうちでもいいで

す。その代りです。披露ひろうのとき呼んで御馳走ごちそうするで

す。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲

んだ事がありますか。シャンパンは旨うまいです。――

先生披露会のとくに楽隊を呼ぶつもりですが、東風君の作を譜にして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にしておさらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんですか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ

。しつかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらいじゃ承知しそうな男だ」

「シャンパンもですね。一瓶ひとつびん四円や五円のじゃよく

ないです。私の御馳走するのはそんな安いものじゃないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも

作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シヤンパン  
がいやなら、こう云う御礼はどうです」と云いなが  
ら上着の隠袋かくしのなかから七八枚の写真を出してばら  
ばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立  
ってるのがある。坐ってるのがある。袴はかまを穿はいてる  
のがある。ふりそで振袖がある。高島田がある。ことごとく妙



齡の女子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあるです。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりやどうぞです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願いましよう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の姪めいです」

「そうか」

「この方は性質が極ごくいいです。年も若いです。これで十七です。——これなら持参金が千円あります

〇  
——こつちのは知事の娘です」と一人で弁じ立てる。

「それをみんな貰う訳にやいかないでしようか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君一夫いっふ

たさいしゆぎ  
多妻主義ですか」

「多妻主義じゃないですが、肉食論者にくしよくろんしやです」

「何でもいいから、そんなものは早くしまつたら

「よかろう」と主人は叱りつけるように言い放ったので、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。まえいいわい前祝に角かどの酒屋で買うて来ました。一つ飲んで下さい」

主人は手を拍うつて下女を呼んで栓せんを抜かせる。主人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君は恭うやうやしくコップを捧げて、三平君の艶福えんぷくを祝した。三平君は大おおに愉快な様子で

「ここにゐる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の大礼たいれいですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がないですか。羽織と袴はかまくらいどうでもしま

すたい。ちと人中ひとなかへも出るがよかたい先生。有名な

人に紹介して上げます」

「真平まっぴらご免めんだ」

「胃病が癒なおりますばい」

「癒さしつからんでも差支えない」

「そげん頑固がんこ張りなさるならやむを得ません。あな

たはどうです来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るなら媒酌人ばいしやくにんたるの栄

を得たいくらいのものだ。シャンパンの三々九度や

春の宵。――なに仲人なこうどは鈴木とうの藤さんだつて？ な

るほどそこいらだろうと思つた。これは残念だが仕方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、ただの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうぞです」

「僕ですか、いっかんのふうげつかんせいけい一竿風月閑生計、ひとはつはすひんこうりようのかん人釣白蘋紅蓼間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」



「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きつと出る事にします、僕の作った曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですね。君はどうです東風君」

「そうですね。出て御両人ごりょうにんの前で新体詩を朗読したいです」

「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲んで真赤まっかになった。

短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の死骸しがいが算を乱す火鉢のなかを見れば火はとくの昔に消えている。さすが呑氣のんきの連中も少しく興が尽きたと見え

て、「大分だいぶん遅くなつた。もう帰ろうか」とまず独仙君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々に玄関に出る。寄席よせがはねたあとのように座敷は淋しくなつた。

主人は夕飯ゆうはんをすまして書斎に入る。妻君は肌寒はださむの襦袢じゆばんの襟えりをかき合せて、洗い晒あらざらしの不断着を縫う。小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行つた。

呑氣のんきと見える人々も、心の底を叩いて見ると、ど

こか悲しい音がする。悟ったようでも独仙君の足は

やはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れないが迷

亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君

は珠磨たますりをやめてとうとうお国から奥さんを連れて

来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定め

し退屈だろう。東風君も今十年したら、無暗に新体

詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至っては

水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい

。生涯しょうがい三鞭酒さんぺんを御馳走して得意と思う事が出来れば

結構だ。鈴木とうの藤さんはどこまでも転ころがって行く

。転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものよ

りも幅が利きく。猫と生れて人の世に住む事もはや二

年越しになる。自分ではこれほどの見識家はまたと

あるまいと思うていたが、先達せんだつてカーテル・ムルと

云う見ず知らずの同族が突然大気燄だいきえんを揚げたので

、ちよつと吃驚びっくりした。よくよく聞いて見たら、実は

百年前ぜんに死んだのだが、ふとした好奇心からわざと

幽霊になつて吾輩を驚かせるために、遠い冥土めいどから

出張したのだそうだ。この猫は母と対面をするとき

、挨拶のしるしとして、一匹の肴さかなを啣くわえて出掛けた

ところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなつて

、自分で食つてしまつたと云うほどの不孝ものだけ

あつて、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある

時などは詩を作つて主人を驚かした事もあるそうだ

。こんな豪傑がすでに一世紀も前に出現しているな

ら、吾輩のような碌ろくでなしはとうに御暇おいとまを頂戴して

無何有郷むかうのきょうに歸臥きがしてもいいはずであつた。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでいる。秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業じやうぎやうで、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさ



して来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コツプが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。硝子ガラスの中のものゝ湯でも冷た

い気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静か

ひけしつぽ

に火消壺とならんでいるこの液体の事だから、唇を

つけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかし

ものは試しだ。三平などはあれを飲んでから、真赤まっか

になつて、あつくる熱苦しい息遣いいきづかをした。猫だつて飲めば

陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れ

ぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。死ん

でからああ残念だと墓場の影から悔<sup>く</sup>やんでもおっつかない。思い切って飲んで見ろと、勢よく舌を入れてぴちやぴちややって見ると驚いた。何だか舌の先を針でさされたようにぴりりとした。人間は何の酔<sup>すい</sup>興<sup>きよう</sup>でこんな腐ったものを飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは性が合<sup>しょう</sup>わない。これは大変だと一度は出した舌を引<sup>ひ</sup>

つこ  
込めて見たが、また考え直した。人間は口癖のよう

に良薬口に苦しにがと言つて風邪かぜなどをひくと、顔をし

かめて変なものを飲む。飲むから癒なおるのか、癒るの

に飲むのか、今まで疑問であつたがちようどいい幸さいわい

だ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹

の中までになくなつたらそれまでの事、もし三平の

ように前後を忘れるほど愉快になれば空前もうの儲け者もの

で、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やっつけると決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しつかり眠って、またぴちやぴちや始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦

しかつたのが、飲むに従つてようやく楽になつて

一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なくやつつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも拭ぬぐうがごとく腹内ふくないに収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺うため、じつとすくんでいた。次第にからだが暖かに

なる。眼のふちがぼうつとする。耳がほてる。歌が  
うたいたくなる。猫じや猫じやが踊りたくなる。主  
人も迷亭も独仙も糞を食くらえと云う気になる。金田の  
じいさんを引搔ひっかいてやりたくなる。妻君の鼻を食い  
欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと  
立ちたくなる。起たつたらよたよたあるきたくなる  
。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月

様今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだろうと思ひながら

、あてもなく、そこかしこと散歩するような、しな

いような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせ

てゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだか

、あるいてるのだか判然しない。眼はあけるつもり

だが重い事<sup>おびただ</sup>夥しい。こうなればそれまでだ。海だろ



うが、山だろぅが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思う途端ぼちやんと音がして、はつと云ううち、――やられた。どうやられたのか考える間まがない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になってしまった。

我に帰ったときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもって矢鱈やたらに搔かいたが、搔けるものは水ばかり

りで、搔くとすぐもぐつてしまう。仕方がないから

あとあし

後足で飛び上つておいて、前足で搔いたら、がりり

と音がしてわずかに手応がてごたえあつた。ようやく頭だけ

浮くからどこだろうと見廻わすと、吾輩は大きな甕かめ

の中に落ちている。この甕は夏まで水葵みずあおいと称する水みず

くさ

草が茂っていたがその後鳥の勘公が来て葵を食い尽

ぎょうずい

した上に行水を使う。行水を使えば水が減る。減れ

ば来なくなる。近来は大分減だいぶんつて鳥が見えないなと

さつき

先刻思さつきつたが、吾輩自身が鳥の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁ふちまでは四寸余よもある。足をのばしても届

かない。飛び上つても出られない。呑のんき氣きにしていれ

ば沈むばかりだ。もがけばがりがりと甕に爪があたるのみで、あたたつた時は、少し浮く気味だが、すべ

ればたちまちぐっともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりがりやる。そのうちからだが疲れてくる。気は焦る<sup>あせ</sup>が、足はさほど利<sup>き</sup>なくなる。ついにはもぐるために甕を搔くのか、搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責<sup>かしやく</sup>に逢うのはつまり甕から上へあがりた**い**ばかりの願で

ある。あがりたいのは山々であるが上がれないのは  
知れ切っている。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水  
の面おもてにからだが浮いて、浮いた所から思う存分前足  
をのばしたって五寸にあまる甕の縁に爪のかかりよ  
うがない。甕のふちに爪のかかりようがなければい  
くらか搔がいても、あせつても、百年の間身を粉こにし  
ても出られっこない。出られないと分り切っている

ものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問ごうもんに罹かっているのは馬鹿氣ている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙めんこうむるよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自

然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になつてくる。苦しいのだかありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだか、座敷の上にいるのだか、判然しない。どこにどうしていても差支えさしつかはない。ただ樂である。否樂いなそのものすらも感じ得ない。日月じつげつを切り落し、天地を粉塵ふんせいして不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥なむあみ

陀<sup>だ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

底本：「夏目漱石全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年9月29日第1刷発

行



底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩  
書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭

和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）

、田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十

一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999年9月17日公開

2013年10月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文

庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）

で作られました。入力、校正、制作にあた

ったのは、ボランティアの皆さんです。